
盛夏妖艶

地球儀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盛夏妖艶

【コード】

N1972N

【作者名】

地球儀

【あらすじ】

現世で学生生活を謳歌するか、聖域で妖魔封印士として生きるか。かつて聖域の窮地を救った女神の血を引く佐久間馨は夏休み初日、瀕死の祖母の姿を目の当たりにする。激昂し、衝動のままに聖域に渡った彼女は妖魔との戦闘直後、漆黒の美青年・月刻と遭遇した。力の格差に愕然とする馨に対し、彼がとった行動は……。現世に戻る旅をしながら妖魔を封じることが目的とした少女と、彼女を快楽で落とそうとする青年妖魔の、異世界恋愛ファンタジー。

砂の国（巻）

昔、誰かが言った。

『予期せぬ事態というのは何の前触れもなく、唐突にやってくる』
と

半分ほど開いた窓から生温い風がそよぐ。それと共に届く、蝉の音と運動部員による掛け声。空は雲一つない晴天とあって、如何にも夏らしい雰囲気を増長させてくれる。

そういったものの中てられてまた一つ、玉の汗がこめかみに滲み出てきた。

「はっ……んう……っ」

整頓された机と椅子。ウエットモップで磨かれた床。消し跡一つ残さず水拭きされた黒板。タッセルで纏められた白いカーテン。……何の変哲もない教室。

「ふ……んっ……うん……」

そこで佐久間馨さくま かのるはクラスメイトである月宮榊つきみやまのかきとの逢引に耽っていた。二人から程近い窓一つだけを除いた開口部と、前方、後方の扉が閉ざされた一室で、男女は深い口付けを交わす。

左脚だけ椅子に乗り上げた少女は相手の首の後ろに両手を回してキスをせがみ、片や少年の方は机に腰掛けた状態で上半身を屈め、右手を彼女の頬に這わせ、左手でその長い髪を弄んでいる。

いつ、誰がやって来るかも分からない、普段は勉学を乞っている学び舎という場所で舌を絡み合わせている現状。そんな非道德的なシチュエーションがより一層、気分を高揚させているのかもしれない。

（気持ち良い……）

相手がどんな表情で自分と事を興じているのか、薄っすら瞼を持ち上げて確認してみれば、少年の長く伸ばされた前髪を介して視線が

かち合った。髪と同じ、漆黒の瞳がニツと細められる。笑う余裕があることに、不服の意を込めてムツと眉間に皺を寄せてみるものの、舌を吸われ、その快感に陥落してしまう。汗ばんだ肌にブラウスが張り付く。

梅雨が明けると熱気は紫外線と共に日に日に強さを増して、暑さによる不快指数もそれに伴い比例していた。けれども榊とこうして触れ合っているときだけは何故か、滲む汗さえ感情を盛り上げさせる為の潤滑油と化してしまう。

髻のしなやかな髪に指を絡ませていた榊の左手が、やがて彼女の肩に触れ、肩甲骨から脇腹、そして腰へと回される。強引に腰を引き寄せられて、唇の重なりがより深くなる。

鼻呼吸だけでは酸素の供給が追いつかず、より多くの息を吸い込もうと口を広げてみるものの、相手はまるで貪るようにして覆い被さるうとしてくる。あまりの息苦しさに舌の動きが鈍ってしまい、その隙を逃がすまいとばかりに、彼は執拗に追ってきた。

自身のものなのか、或いは二人のものが混じり合ったのか、口角から溢れた唾液が顎へと伝う。

（あ、ヤバイ）

ブラウスと一緒にキャミソールの裾を捲られ、素肌が外気に晒される。じっとり湿った皮膚の感触を確かめるかの如く、榊は長い指先で髻の腰のラインを上から下へと辿っていく。

頭の中で危険信号を点滅させているにも拘わらず、本能はこのまま情事に溺れたいと訴えている。

相手の首に回していた手を下ろし、その胸に縋り付くか。それとも突き放すべきか。

上唇を吸われながら、うっとりとお眸を眇めて逡巡していたそのとき、スカートのポケットに入っていた携帯電話が振動した。彼もバイブレーションに気付いたらしく、咎めるようにして重ねていた下唇を軽く噛み、髻から体を離す。

「タイムリミット？」

「……うん」

長い間隔での振動から、メールではなく電話だと判別できた。時間にしてコール音三回分。委員会に出席していた親友からだ。

「じゃあ私、もう行くね」

先程までの陶酔などあっさり打ち消した様子で、傍の机に置いていた通学鞆を持つと彼女は再び櫛に近寄り、リップ音を立てて触れるだけのキスをした。

「それじゃ、良い夏休みを！あ、悪いけど窓閉めといてね」

そう言つて少女は一足先に教室を後にした。だから、人を待たせているということに気を取られ、足早に玄関へと向かっていた彼女は知らない。

一人教室に残した少年が長い前髪を掻き上げて、普段潜ませている漆黒の瞳を露にし、双眸を眇めながらその薄い唇に弧を描いていたことを……。

「お待たせ委員長！」

「おお。俺も待たせてもーて悪いな」

簀の子の上で胡坐を掻いてお手玉をしていた少年は馨に気付くと、手を休めることなく立ち上がった。

馨のクラスの学級委員長を務める彼の本名は相良勝彦さからかつひこというのだが、彼が本名で呼ばれているところを、馨は一度として見たことがない。クラスメイトも、同じ学年の同級生も、教師、下級生、果ては校外の人間まで、人は皆、彼を“委員長”いいんちようと呼ぶ。

「小一の頃から今までずっと、委員長の役職以外したことないからなあ」というのが本人の談だが、彼を幼少の頃から知る人物によれば、小学校に入学する以前から“委員長”と呼称されていたとか。素性や行動。地味なのか洒落ているのかイマイチよく分からない、けれども平々凡々とした容姿。知名度、信頼の高さ……得体の知れないこの同級生と馨の関係性は、男と女という性こそ異なれど、互

いに親友と自負している。

上靴からローファーに靴を履き替えると、二人は揃って歩き出した。「今まで月君と一緒にあったんか？」

自身の腰に手を回してカッターシャツの裾から取り出した団扇を左手で仰ぎながら、委員長はさほど背丈の変わらない隣りを歩く少女を見遣る。逆の手は未だに休むことなく、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色のお手玉を代わる代わる放っている。

意識せずに左右別の手で複雑な行動をしてみせるといふ大道芸人さながらの技を披露する親友に、おざなりの拍手を送りながら馨は「ご名答」と首肯した。

「まったく、ほんま……。誰にも見られんかったやろな？ どうせ二人きりで濃厚なキスシーン繰り広げとったんやろ？」

「見られたところで今更でしょ。“ビッチ”なんだし」

何てことはないと言わんばかりに肩を竦めた自分に、あまり良い顔をしない親友。それを鼻で一笑し、ツンと顎を上向けてあしらう。

(だってホントに今更でしょ)

相手が男であれば見境なしに誘惑してキスをする。男子生徒だけでなく教師や保護者、女子にまで餌食になった者がいるらしい。……

それが佐久間馨に纏わる、校内で囁かれている噂。

故に影では、ふしだら、雌犬、尻軽女の意味を持つ“ビッチ”と呼ばれていた。

けれどもそれは、あくまで一部の間にだけだ。

砂色の、肩甲骨の辺りまで伸びたストレートヘア。右は朱、左は薄い紫という左右違った色を持つオッドアイ。高い鼻筋に、左右均一的位置にある口角。それらのパーツが理想の位置に整えられている小さな顔。肢体も、引き締まった二の腕に加えて、スラリと伸びた脚。おまけに、百六十七センチという中学三年生にしては平均を優に上回る長身。

要約すれば、華やかな容貌と体軀をしているのだ。

だから、実際現場を目撃していない者にとって噂など、馨の容姿を

やつかむ女子による性質の悪い風評と捉えられている。

流されているそれが真実でないことを、彼女の親友は当然存じてはいるが、だからといって火のないところに煙が立たないこともまた、彼は知っている。

「それにしても、あつついなあ。これ以上雀斑増えたらどうしてくれんねん」

「委員長、夏休みどうすんの？」

「あゝ……殆どバイト。やけど盆は実家帰んで。彼女とランデブーや」

「喫茶店の方ならともかく、バーは気をつけなよ。大人はどこで酒飲むか分かんないし。つーか、彼女こっちに連れてきて紹介してよ。委員長の彼女、メチャクチャ気になる！」

「ハハハ。あいつ、メツチャ恥ずかしがりの出不精やから多分無理」
人通りの多い商店街から道を逸れて、人気の少ない裏通りを二人は突き進む。こじんまりとした居酒屋の提灯やショーパブの看板などが並ぶ、夜更けてから商売が始まる店ばかりが脇を貫いている。学生服を着た中学生がうろつくには、かなり不釣り合いな場所だ。

そんな界限に昼間から開いている唯一の店こそ、委員長がアルバイトをしている“World cross”である。この店は昼は喫茶店、夜はバーという二つの顔を持っている。

「うーす」

「こんにちは」

扉を開いた拍子に鳴ったウィンドチャイムの音に歓迎されながら足を踏み入れると、客は顔見知りの女性一人しかおらず、店内はガランとしていた。店員も、今はカウンターを挟んだキッチンで煙草を啜えている店主のみ。

「あれ？ “B”さんは？」

「“N”^{エヌ}が来たからポールドダンスの練習見てもらってる」

Bは“World cross”の新人従業員で、昼はウエイトレス、夜は給仕に加え、ショーガールとして店に貢献している。そん

な彼女と入れ替わりで店を辞めたのがNだ。彼はたまに店に顔を出してはBにポールドダンスを指導している。

紫煙を吐き出しながら不機嫌そうに答えた店主に、相良と二人、顔を合わせ苦笑した。

“World cross”のマスター、南雲なぐもが“魔女まじ”と呼ばれる女性客のことを好いているのは、頻繁に通い詰めている者達の間では周知のことだ。普段は従業員であるBとそのペットがいる為、店主と客、昔馴染みの知人という間柄以上の接触を謀ることはないが、滅多にない二人きりの場だ。これを機に口説こうとしていたのかもれない。

(タイミングの悪いときに来ちゃったかな)

機嫌が良いとき、南雲はコーヒーなど何かとサービスしてくれるのだが、どうやら今日は期待できそうにない。

「さてと、今日中に理科の宿題終わらせるとしましょうか」

一度更衣室で着替える親友と別れてテーブル席に着いた馨は、早速鞆から問題集を取り出して夏休みの課題に取り掛かる。

これが終われば先が見えていた。各教科、長期休暇用課題を出されたその日から相良と分担して問題を解いていたおかげで、終業式を迎えた今日までに全体の三分の二が終わっている。後は委員長が担当していた国語と英語を写すのと、読書感想文、それと日記ぐらいだ。

(もういつそのこと、適当に日記も書いてしまっところかな)

どうせこちらの世界で遠出する予定もなければ、ボランティアやイベントに出席する予定もないのだ。虚偽を書くことに罪悪感を覚えないわけではなかったが、紛れもない真実を記せるほど、馨は従順にも愚直にもなれない。

「俺ももうちょっとやし、やってまっわ」

顔を上げばTシャツ、ジーンズの上にエプロンを掛けた親友が自分同様に文房具と冊子を広げ始めた。

愛用の黒縁眼鏡のブリッジを中指で押し上げながらニヤリと笑う彼

に、こちらも口角を吊り上げて同じ笑いを返す。実に頼もしい。

「あ、オイコラてめえ。今は勤務中だろうが」

「ええやん別に。客も魔女さんしかおらんのやし。心配せんでもどうせ客こーへんて」

「そうだよ、総長。今日までは見逃してあげて」

太く凛々しい眉を顰めて不機嫌な表情をより露にする店主を、魔女が両手を開いて宥める。

媚びているわけではないだろうが、小首を傾げて上目遣いをされ、南雲はグツと閉口した。“総長”^{じゆうちやう}という、他の誰かが呼べば噛み付く勢いで吼える呼称を許容していることといい、骨の髄まで彼女に惚れているのかもしれない。

そう呼ばれる所以に興味がないといえは嘘になるが、好奇心は猫をも殺すらしいので今のところ静観することになっている。

因みに魔女の方も、南雲だけが“杏子”^{あんす}という本名で呼んでいる。但しこれは彼ら二人が旧知の仲だということに限らず、自分以外の者に名を呼ばせたくない南雲が周りを牽制しているからだ。

(……魔女さんの言う「今日まで」って、どういうことなんだろう?)
馨は元々、面倒なことは後手に回す性分だ。去年も一昨年も盆を過ぎてから慌てて課題に取り掛かり、夏休みが終わる間際になっても委員長に泣き付いていた。

思い返してみれば、今回先手を打って取り組んだ切欠は「今年は早めに宿題やつといた方がよいよ」という魔女の言葉があつたからだ。委員長からも「毎度馨の所為で終盤の休み、潰れるからなあ。おまけに今年は受験生つてこともあるし」と仰々しく腕を組まれ、釘を刺された馨自身、毎度迷惑はかけられないと、早期の課題取り組みに同意した。

(とはいっても、魔女さんが言い出さなかつたらこんな早くやつてなかつただろうなあ。もし今年も夏休み間際までに終わらなかつたら、何だかんだ文句言いつつ、委員長は手伝ってくれた気がするし)

そもそも今回は課題を分担して答えを見せ合っているのだから。言葉巧みに乗せられた気がしないでもなかったが、後で楽できるのならこれでいいかと、再びシャープペンシルを持ち直した。

その日、夜も更けて両親と三人で夕食をとりながら他愛無い会話をしていたときだった。

ドスンッ！

天井から物音がした。二階には馨と両親の部屋がそれぞれあるが、今は無人だ。考えられるのはその上にある屋根裏部屋しかない。

「あ、お祖母ちゃん帰ってきた？」

「それにしても随分大きな音したな。何か持って帰ってきたのかも知らないぞ」

「馨。ちよつと様子見てきてくれる？」

テレビに夢中であり着が進んでいない父親と後片付けを始めた母親に促され、馨は生返事して指定された一室へと向かう。……その足取りは随分と重い。

祖母の楓と最後に会ったのは彼此三ヶ月前だったろうか。長袖シャツを着ていた時期であったのは記憶している。武器と防具、食料にアイテムなど、旅に必要な装備を一緒に確認し、旅立つ祖母を見送った。

その際、あちらの世界に渡ろうとしていた彼女に、今まで目を背けていた逡巡を突き付けられたのだ。

「こちらの世界で平穩に生きていくか、あちらで持て余している力を存分に発揮して戦いに身を任せるか、そろそろ選びなさい」と

はあ、と無意識に溜息が零れた。延ばし延ばしにしていた選択を迫られ、未だに決めかねている。考える時間は何ヶ月も……いや、こちら側に渡ってからの月日も考慮すれば、年単位の頃おいはあったというのに。

懐中電灯を片手に、足場である格を踏んで一段一段を慎重に登っていく。大した高さではないが、以前足を踏み外して頭から落ちたことがあるので、中途半端に高いところが苦手なのだ。そもそも危ないから階段に造り直そうという話をしていたのに、あれは一体どうなったんだと胸中で悪態を吐く。

天井に手が届くと、引き戸の窪みに指を掛けて開き、腕を伸ばしてよじ登った。

「お祖母ちゃん、おかえり〜。さっき大きな落としたけど一体何〜？」

祖母がいるはずであるう正面に懐中電灯の光を翳し、刹那、息を呑んだ。

「っ！お祖母ちゃん?!」

横たわった小さな体から流れる大量の赤。それは止むことを知らず、徐々に広がりを見せている。うつ伏せった顔からは、引き攣りながらも弱い呼吸音が漏れていた。

「お祖母ちゃん、しっかりして！お祖母ちゃんっ！」
体を仰向けにしようと肩を掴んで、そしてあまりに悲惨な状態に思わず顔を顰めた。

まず目についたのが左の二の腕。肘上から先がなくなっていた。食い千切られたような跡を残すそこからは、止め処なく鮮血が零れ落ちている。逆の右手は出血こそないものの、指が何本か歪な方向に曲がっていた。折れた肋骨が皮膚を突き破っている右脇腹も、見るからに痛々しい。そして、どの傷口よりも赤を強調している箇所、腹部の中心。そこには拳ほどの大きさの穴が空いていた。

「【微睡む白乳の癒しよ、我に力を】！」
とにかく出血だけでも防ごうと治癒の術を唱えるが、傷が深く、気休め程度にしかない。

悶絶する老婆に纏わり付く濃厚な死の気配。一刻でも早くそれを拭おうと奮闘するが、それ以上の勢いで祖母の体は体力を消耗していた。

(どうしよう……どうしよう……このままだとお祖母ちゃんが……
っ)
じわじわと目の縁に涙が溜まり、眦から溢れ頬に幾つもの筋を作り出す。回復が間に合わない。集中しようにも焦りばかりが先立って空回りしてしまう。

……瀕死の家族を救えない、無力な己を痛感する。

「【微睡む白乳の癒しよ、我に力を】！」

「お、お父さん！」

背後から伸びた手が、馨が放つものより圧倒的に勝る白乳色の光で楓の体を包み込む。

「今、伊代いよが治癒薬を取りに行ってる。できる限り傷口塞ぐぞ」

「うん……！」

父親に頷き返して祖母の顔色を確かめようとそちらを見遣ると、閉じていた瞼が震え、ゆっくりと持ち上がった。

「お祖母ちゃん、大丈夫？！」

「か、おる……健統けんとう……」

「喋るな、おふくる！傷口開くぞっ」

漸く左腕からの出血が止まり、右手の骨折も元に戻ったが、如何せん、腹部と脇腹の傷がなかなか塞がらない。

「も……いいか、ら……」

「いいわけあるかよ、畜生！諦めんな！」

「聖域せいいきが……危な……。っ。馨……今すぐ……」

小さく呻き声を上げて、再び楓は双眸を閉じた。父親と二人して息を呑むが、僅かに開いた唇から微かではあるが、呼吸する様子が窺えた。どうやら気を失ったらしい。

「傷薬と回復薬あったわ！お義母さん、大丈夫なの？！」

息を切らした母親が梯子を登って屋根裏部屋へと降り立った。

久しぶりに一家四人揃ったというのに、室内は殺伐としている。呼吸をしているとはいえ、祖母は未だ瀕死の状態だ。

傷の具合から、そして祖母が気絶する直前に口走った言葉から、彼

女をこんな目に合わせたのが人間の仕業でないことは明らかだ。紛れもなく、人外の仕業。

(妖魔……！)

ギリツと齒軋りし、倒れた祖母の向こう側に佇む大きな姿見を睨み付ける。

滑らかな銀面のスタンドミラー。しかしそこには馨達はおるか、薄暗い部屋の情景さえ映っていない。映し出されているのは、星が瞬く夜の砂漠。

「よし、これで血は止まった。伊代、確かそっちの薬、増血剤の代わりになるんだよね？」

「ええ。あとこっちの薬もそうだけど、これはさすがにお義母さんが起きてからじゃないと……」

回復術こそ楓と健統に劣るが、他の術においては殆ど、馨の右に出る者はいない。だからこそ、祖母は自分にあちらの世界……聖域の救済を求めたのだろう。

それも「今すぐ」と。

「お父さん、お母さん。……お祖母ちゃんをお願い」

両手を固く握り締めて、少女は立ち上がる。

「おい、馨！」

焦燥感に駆られ、慌てて父親が手を伸ばすよりも先に、馨は一目散に鏡の中へと飛び込んだ。

「へえ〜。あの子も身内を傷付けられたらさすがに頭に血が上るんだなあ。ククツ、かぁーわいい」

遠く離れた、闇に埋もれた場所。その空間を支配するは一人の若き青年。

クツクツと喉を鳴らし、閉じていた瞼を持ち上げて黒曜石の如きその漆黒の瞳を煌めかせた男は、至極愉しげに唇の端に笑みを刷いた。

砂の国（貳）

昔、誰かが言った。

『理性を持つ生き物は自分にはないものを嫌悪し、或いは惹かれるものだ』と

靴下越しに伝わる固い砂の感触。巨大な月明かりの下で、右往左往と容赦なく突風が荒れ狂う。それに紛れて、錆びた鉄のような臭いが鼻をついた。視界が悪い為に、どこから臭っているのか定かではないが、ちよつとやそつとの量でないのは明らかだ。

「【囁く緑の風よ、我に力を】」
自分の周囲にだけ風の影響が及ばぬよう防御壁を創り、臭いの元を辿る。

よくよく目を凝らせば、少し離れた場所に大きな血溜まりの跡が見えた。砂が水分を吸ったようで、液体としての痕跡はもはやなかったが、赤く湿った跡が色濃く残っている。

ぐるりと辺り一面を見渡すが、目の前に広がるは砂ばかり。日の沈んだ今でこそ輝きを失っているが、昼間は光を含んで、自分の髪と同じような、金にも紛う輝きを放つ場所に違いない。

聖域と称されるこの世界で砂漠が存在し、しかも地平線の向こうまで同じ風景が続いている地帯は一つしか思い当たらなかった。

（砂の国……。お祖母ちゃんはここでやられたんだ……）

人が住まない地の一つに数えられ、確か火の国と地の国に挟まれた位置にあったと記憶している。面積も他の国と比べて一際小さく、三日もあれば徒歩で砂漠を抜けることは可能らしい。

（ベテランの妖魔封印士として名を馳せてるお祖母ちゃんが雑魚なんかにはやられるはずない。これは十中八九、旧世代の妖魔の仕業！）
刹那、背後の砂が唐突に盛り上がった。パラパラと頭上から粒子が

降り注ぎ、それらを避けながら振り返れば、砂の中から岩に覆われた巨体の生物が姿を現した。ごつごつとした岩石がまるで数珠の如く連なったその姿態は、人でもなければ、昆虫でも、ましてや植物でもない。そうなる導き出される答えはただ一つ。

聖域に住む民を脅かす、妖魔と呼ばれる異形

「見つけたぞ、ババア！」

「誰がババアよ！このデカブツ！」

どうやら祖母と勘違いしている敵に罵声を飛ばしながら、向かってくる攻撃をかわず。

バシッ！バシン！

轟音と共に、シールドを張り巡らせていた空間内が揺れ動く。かなり重い衝撃だ。予め風の術を張り巡らせていなければ、風圧で吹っ飛ばされていただろう。

「ああ？！お前、誰だ？」

（人語を喋る……やっぱり旧世代の妖魔）

響は返事する代わりに顔を顰めて舌打ちした。

妖魔は大きく分けて二種類に分けられる。旧時代のモノと、新時代のそれ。後者はここ数百年のうちに突発的に出現した異形で、知能や理性を持たず、本能のままに人を甚振るが、聖域にいる通常の妖魔封印士、ならびに妖魔殺戮士と呼ばれる者達の手に負える。けれども前者に至っては対峙できる者が限られているのだ。

旧時代の妖魔……それは遠い昔、女神と崇められた一人の女性、筒姫が封印した、妖魔の中でも特に強力な禍。それらは赤子の手を捻るほどの軽い力で人間を物言わぬ肉塊にすることができ、中には国一つを滅ぼすほどの力を持っているものさえいるという。

だから、楓は早く聖域に向かうよう促したのだ。もはや筒姫の血筋でその力を持つ者は楓をはじめ、息子の健統、そして孫の響しかないのだから……。

脳裏に過ぎる、血に濡れそぼった祖母の肢体。目を背けたくなくなるような痛々しい様。例え完治しても、何らかの障害が残るかもしれないな

い。確かなのは、穴の空いた腹部にはその痕が生々しく残り、左腕に至っては一生失われたままだということ。

(よくもお祖母ちゃんを……！)

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」
前に突き出した掌から生じるは、猛々しい炎。まるで馨の胸中に渦巻く衝動を具現したかの如く、轟々と揺らめくそれは真つ直ぐに敵へとぶつかっていった。

「ぐっ！」

頭に直撃するが、致命傷というにはまだまだ威力は弱そうだ。

(的がでかいぶん、頑丈にできてるってこと?)

苛立つて舌打ちしたそのとき、敵が咆哮しながら突進してきた。大きく裂けた口から覗く鋭い牙。あれが楓の左腕を噛み千切ったに違いない。

(ヤバイ！)

襲い掛かる衝撃に備えて後方に跳び、何とか？み付かれずには済んだが、先程以上の猛攻とあつてか風の防御壁が破壊された。しかし直後、尾の部分が腹部を直撃し、その衝撃によって体が吹っ飛び砂の地面に叩きつけられる。

「うぐっ！」

柔らかい砂地であった為、何とか二次被害は受けずに済んだ。けれども思いの外、食らったダメージは大きい。青痣か、内出血か……下手をすれば骨に罫が入っているかもしれない。腹部がじくじくと痛みを訴える。

「【清き青の水よ、我に力を】！」

水の術を用いて再び攻撃を仕掛けるが、今度は何故か嬉々と敵が飛び込んできた。

「馬鹿め、俺は砂の妖魔なんだよ。水は俺の栄養分だ」

ゲラゲラと哄笑しながら妖魔は突撃してくる。周囲の砂を撒き散らして向かってくるそれを間一髪でかわし、馨は水を除く攻撃術で対抗するが、なかなか致命傷を負わせることができない。

(つていうか、こいつの攻撃……最初に比べて確実に上がってるけど、同時に動きが鈍くなってる)

原因として考えられるのは、先程馨が放った水。
(水の効能を火で蒸発させようにも時間がかかるし……ジリ貧に持ち越すには勝算は低い……)

ならば、一か八かの方法をとってやろうではないか。

「【清き青の水よ、我に力を】！」

出来る限り広い範囲を濡らそうと、大量の水を敵に浴びせれば、案の定瞬く間に吸収されてしまう。

「自暴自棄になったか？！水はこの砂の国じゃ恵みの雨だ！渴いた俺の体に蓄積されればつまり、俺の力もそのぶん強くなる。もはやお前に勝ち目はない！」

咆哮しながら鼓舞するように振られた尾を見遣ればなるほど、言うだけあって勢いが倍増している。いとも簡単に砂の地面が抉れてしまった。

つまり馨が放った水は敵の体内で妖魔の栄養として変換してしまっただことを意味する。

(さて、もう一丁行きますか)

「【清き青の水よ、我に力を】！」

水の術を放った直後で、馨は再度術を紡いだ。……但し、水のそれではない。

「【怒りの黄の雷よ、我に力を】！」

馨によつて生み出された水は高純度の真水ではあるが、それが妖魔のものとして転換されたのなら、もはや純水とは違う。つまり電流に触れたなら、引き起こされる事象は……感電。

「ぎああああああああ！」

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」

饑別とばかりに放った炎は瞬く間に妖魔の体を燃え上がらせ、やがて灰となって消え散った。

「……やった」

息を吐いてふと遠くに目を向ける。いつの間にか吹き荒れていた風は鳴りを潜め、地平線の向こうが見えた。

（あれって地の国？）

どうやらここは国境間際だったらしい。楓が本当に懸念していたのは、地の国の民の安否なのだろう。大概妖魔は生を持った自国に留まる習性があるらしいが、隣国に被害を及ぼさないとはいい切れない。

何せ妖魔も性質、実力は多種多様……それも旧時代のそれに至っては危険の度合いは増すばかり。

ズキツと腹が痛む。幸い服は破れず血も出ていなかったが、恐る恐る状態を確認して、すぐさま回復術を唱える。

（これはうら若い乙女がつけられて良いものじゃない……）

あの岩石め、と封印した妖魔に悪態を吐きながら、腹部をはじめ他の掠り傷にも治療を施す。

そう、馨が妖魔に対し行ったのは殺戮ではなく封印。旧時代の妖魔を如何に残酷な方法で倒しても、筒姫の血を引く馨達は何故か封印しかできない。そして封印された妖魔はかつて筒姫が封印したという古書に囚われる。

恐らくその古書に先程の妖魔の姿が新たに記載されたはずだ。

「……さて、妖魔も片付けられたことだし、戻るとしますか」

傷が癒えたのを確かめながら、ふと気付く。

馨が普段暮らす現世げんせから聖域に渡るには、聖幻鏡という姿見を用いるのだが、聖域から現世に戻る場合は精現鏡という手鏡が必要になる。

（精現鏡、お祖母ちゃんが持ったままだ……）
事態の重要性にサツと顔が青褪める。

両親のどちらかが気付いてこちらに来てくれればそれでいいが、すっかりしているようで二人揃って実はうっかり者だ。しかも夏休みは始まったばかり。全校登校日になるまで気付かない可能性が物凄く高い。

(ちよつとお)……マジですか?!)

改めて身なりを確認してみる。

上はキャミソールに薄手の半袖カーディガン。下はショートパンツ。足元に至ってはレースのパンプスインソックスだけで靴は履いていない。備品は胸ポケットに入っていた携帯電話のみ。

(財布もない……。てか、聖域のお金なんて一銭も持ってないけどさあ)

聖域に足を運ぶ際はいつも楓に支払ってもらっていたので、馨個人の資産は持ち合わせていない。

「あーも〜！私の馬鹿〜！」

砂漠の一角で、少女の悲痛の叫びが轟いた。

頭を抱えて今にも砂の地面に突っ伏して転び回りかねない、そんな少女を嘲笑うような声が突如、上空より降り注いだ。

「ハハハッ！だいぶ困ってるみたいだねえ」

「！」

双眸を見開き、息を呑んで声の方へと振り返る。

満天の星が煌めく夜景をバックにした、あまりにも巨大な円い月。

それを背後に従えるようにして浮かぶ一つの影。逆光の所為で判別できないが、シルエットと声音からして、若い男のものだと推測できる。

けれども、その人物が人間であるはずがなかった。何故なら、種も仕掛けもなく人が宙に浮けるわけないのだから。

その事実から導き出される答えはただ一つ。

「妖魔……！」

(まさか今日の内に二回も対峙することになるなんて……っ)

足の裏の砂を踏み蹴り、眉間に皺を作って端正な容貌を歪める少女。そんな彼女を見下ろして、妖魔の青年は赤く妖艶なその唇に下弦を描いた。

赤、青、緑、黄、紫、黒……数多のライトが目まぐるしく行き交い、ヒップホップ調の曲と共に舞台の袖から現れたのは、金の長い髪を靡かせた一人の少女。スポットライトの当たる、天井から垂直に突き刺さったポールに肢体を絡ませ、艶美な笑みを浮かべて彼女は踊る。

あつと驚かせるそのアクロバティックな所作に、また幼さを残す面立ちに浮かべた妖艶な微笑みに、或いは露出の激しい服装から剥き出しになった肌に滲む汗に、客は忽ち魅入り、舞台から目を逸らすことができなくなる。

バーの営業開始から今まで特に忙しなかったというわけではないが、とりあえず委員長と店主は暫し手を休める暇ができた。この店唯一の女性従業員、Bによるポールダンスショーの間だけ、客は何も注文してこないからだ。

「はあ……」

カウンターに寄りかかりながら舞台を眺めていた委員長がふと、大きな溜息を漏らした。唇をへの字に歪ませ、むうと頬を膨らましたその様子は如何にも子供らしい愛らしさを感じさせてくれるものだが、不機嫌の度合いはかなりのものだ。顎に寄った皺の深さがその証拠といえる。

「何だ？随分ご機嫌斜めじゃねえか」

色香を感じさせる厚めの唇から嗜好品を離し、紫煙を吐き出しながら南雲は従業員の横顔を見遣る。

頭部から伸びているのは殆ど黒髪ながらも、前髪の左半分が何故か瞳と同じ鳶色。しかも黒の部分と同じく地毛。大きな黒縁眼鏡に頬と鼻の頭に散らばる雀斑。丸みを帯びた輪郭。

南雲が“World cross”の店主を任され、前店主から従業員として紹介された彼は当時四歳だった。あの頃の面影をそのまま成長させた姿がそこにある。

彼此十年来の付き合いとなるが、ここまで不機嫌な様子を見るのは実に久方ぶりだった。

「そりゃあ暫く親友と会えへんくて、しかも危険な目に合うつて分かつときながら何もできひんちゆうんは……やっぱへこむで。魔女さんから前もつて言われて覚悟はしとつたけど、やっぱなあ……。」
馨、大丈夫やるか？」

「聖域つつたっけ？言つてないのか？暫くそこにいなくちゃいけなくなるって」

「言つてへん。魔女さんに口止めされたつてもあるけど、楓ばあちゃんが大怪我するなんて脅しみたいな忠告したら、あいつのこつちや、逆上すんで」

「……ま、早めに宿題に手をつけさせてたのは不幸中の幸いだろ」
短くなつた煙草を灰皿に押し付け、スポットライトに当てられている汗に濡れた少女を見遣る。休憩が終わるのももつ少しだ。

「早うここが聖域と繋がつて、馨が上手いことここを見つけてくれたらええなあ……」

「繋がつたとしても、ここから帰ることはできねえぞ。ここは入つたところと同じ場所にしか出れねえんだからな」

「分かつとる。無事な姿が見たい、ただそれだけや」

再度大きな溜息を吐いて、少年は親友の無事をただただ祈つた。

ゴクツ、と口腔内に溜まつた唾液を飲み干す。

これまで長期休暇を用いて聖域で妖魔と闘つたことは何度かある。

両手の指の数にも満たない程度ではあつたが、それでも未経験というわけではない。

数少ない、本気で命を懸けた緊張感を味わつた中でも、今ヒシヒシと感じていることがある。

（こいつ……今までやりあつてきた妖魔の中でもずば抜けてる）

人語を喋つたことも勿論ではあるが、知能云々関係なく、旧時代の妖魔だと確信できた。それも、先程の妖魔など足元にも及ばぬ力量だと直感する。

視線を逸らしたら最後、喉笛を噛み切られそうな、まるでピンと張られた一本の釣り糸の上に立たされているようなスリルが纏わりつく。

瞬く間に喉の渴きを覚えて、再び唾を飲み込んだ。

勝てる気がしない。自分はおるか、妖魔封印士としてずば抜けた実力を持つ祖母でさえ傷一つ負わすことが叶わないのではないか……そんな愚考が脳裏を掠める。

「かわいいな。俺のこと怖がってるくせに、目を逸らそうとしない。いや、怖いから余計にできないのかな？」

宙に浮いていたはずの男が、瞬く間に目と鼻の先に移動していた。咄嗟に悲鳴を上げて後方に下がろうとしたのだが、肩を掴まれより一層距離を縮められる。

「は、離して！」

「やーだ。ククツ、怯えた顔もホントに可愛いな」

じろじろと髻の顔を覗き込む妖魔の容貌は今まで目にしたことのないほどに整っていた。しかしそれに見惚れる余裕などあるわけがない。身を抜って抗っているにも拘らず、肩に掴まれた手は一向に緩もうとしない。寧ろ頑なになる一方で、徐々に痛くなってきた。

黒曜石と見紛う、吸い込まれそうなまでに澄んだ瞳に怯えた自分の姿が映し出され、その滑稽な様子に羞恥を覚える。顔が熱い。

「じゃ、【灼熱の】」

攻撃術を紡ごうとしたその瞬間、髻の薄い唇は相手のそれによって覆われた。

(！)

口を半ば開いていたこともあって、すぐさま妖魔に舌の侵入を許してしまう。慌てて閉じようにも既に遅く、己のものを絡め取られ、上顎、歯根、頬肉の裏、舌の付け根などをなぞられ、吸われ、口内を良いように味わわれた。

間近で立てられる水音に耳を弄られ、頬だけでなく耳朶まで顔を紅潮させながらも何とか抵抗しようと試みる。けれども相手の胸を叩

いていた手はやがて、しがみつく様に服を掴んでしまっていた。目尻にジワリと生理的な涙が滲む。

これまで味わってきたキスに勝る舌技に、完膚無きまで凌辱されてしまった。

「ふぁう……ん……」

軽く下唇を？まれたのを最後に、ゆっくりと妖魔が上半身を起こし、二人の間に距離ができた。しかし名残惜しむかの如く、唇と唇の間に銀糸が繋がれ、やがてそれはぷつりと切れる。

「は……あ……」

膝ががくがくと笑い、下半身の力が抜ける。そんな響にこれ見よがしとばかりに舌舐めずりをして余裕の表情を浮かべながら、妖魔は彼女の腰を掴んでグツと自分の方へと引き寄せた。

「ハハハッ！腰抜けちゃった？」

愉しそうに晒う妖魔の声が遠い。意識がぼんやりして脳が正常に働かない。酸欠の所為か……或いは認めたくないものの、与えられた快楽に屈してしまっただらうか。

胸を上下させながら酸素を求める響をニヤニヤ笑いながら、彼は親指で彼女の目尻に浮かんだ涙を拭い、濡れたその箇所を見せつけるかのように赤い舌で舐め取った。

「キスでここまで腰砕けになるなんて、思ってたより快楽に弱いみたいだなあ。見た目以上に中身もますます俺好み。新鮮な魚は自由に泳がせとくのが一番だと思ってたけど……お気に入りを入りを四六時中傍に置いとく奴の気持ちも、今ならちよつと分かるかも」

ぼんやりとした意識の中、漆黒の妖魔の言葉を胸中にて反芻する。

（四六時中傍に置いとくって……）

「冗談じゃないわよ！」

両手を突っぱねて相手の胸を押せば、今度は簡単に拘束は解けたが、二、三步後退するのが限界で、再び膝が崩れ落ちた。

（たかがキスで……ディープキスくらい、これまで何回もしてきたのに）

今までも快感を覚えるものは幾度と経験してきたつもりだが、ここまで腰砕けになるようなものは初めてだった。

自分が骨抜きにしたりやったり、例えやられる側になっても、相手が真正正銘の人間ならまだ良い。けれども

漆黒の短髪に切れ長の双眸。真っ直ぐ筋の通った鼻梁。薄い唇。長い手足に、無駄な脂肪などなさそうな細身の筋肉質。喉仏の形さえも麗しい。

しかしどれだけ美しく、人の形状を成していたとしても、紛れも無く人外の　脅かし、私利私欲の為に人間を蹂躪する存在である妖魔がその正体。

「……殺すの？私を」

砂を掻き、手の内にあるそれを力いっぱい握り締める。痛くはないが、確かに感触がある。紛れも無く、これが現実であると訴えていた。

「殺す？まさか！そんな勿体ないことしないって」

「勿体ない……？」

「馨は俺の……妖王、月刻つきくわくだけのものだよ」

若い青年の姿を模った妖魔がニイと唇に弧を描いたのを最後に、馨の瞼が重く閉じられた。

「色々あって疲れたでしょ？今日のところはもう寝なよ」

おやすみ、と囁かれたその声は、随分と優しく鼓膜を震わせた。

地の国（巻）

昔、誰かが言った。

『招かれざる者と疎まれても、自身を強く主張すれば、良し悪しの印象はあれど、存在は認められる』と

瞼越しに朝日の眩さを感じた。堪らず眉根を顰め、唸りながら掛け布団の中に顔を隠す。そろそろ起きなければいけない時間なのだろうが、ふかふかとした寝心地から離れ難い。このまま延々と惰眠を貪れたらどんなに幸せだろうか。

（もう朝かあ。まだ眠いのに……。あ、でも今日から夏休み）

だからまだ寝ても大丈夫だと気を緩ませれば、どこからかクスクスと笑う声が鼓膜を震わせた。軽やかではあるが低いその音から、相手は男だと直感する。

（お父さん？滅多に私の部屋には来ないのに）

そこでふと、身を包む布団の感触が慣れ親しんだものと違うことに気付く。梅雨が明けてから熱帯夜が続いた為、掛け布団を羽毛からタオルケットに取り変えたのだ。

ここが自室でないことを悟って漸く、昨晚の記憶が鮮明に蘇った。瀕死の状態で帰還した祖母。怒りに駆られ何の準備もなしに聖幻鏡に飛び込んだ自分。砂の国に住まう妖魔。そして、漆黒の青年の姿を模った旧時代の妖魔が姿を現し、不埒な真似をして未だに名を語っていた。それが

「月刻っ」

「呼んだ？」

思わず勢いづいて上半身を起こせば、すぐ傍らでかの妖魔が髻の顔を覗き込んでいた。ニコニコと、邪気など一切含んでなさそうな天真爛漫な笑みを刷き、髪と同じ漆黒の瞳に茶目っ気な色を滲ませて

いる。

「俺の名前を呼びながら起きるなんて、俺の夢でも見てた？嬉しいなあ」

「見てないし……っーか、近い！近い！離れてっ」

鼻と鼻がぶつかりそうな距離まで顔を近付けられ、慌てて腕を伸ばして押し退ける。唯一無二の美顔が髻の手により歪められるが、そんなのは知ったことではない。

「ところでここ、どこ？」

首を回して見渡せば、机と椅子と寝台しかない質素な一室。非常にシンプルで、所狭しと家具が並べられている。壁や床の傷み具合から、だいぶ年期が感じられた。ふと天井の隅に目を凝らせば、薄っすら蜘蛛の巣が張っている。

今でこそ日の当たる時間帯とあつて幽霊や物の怪の類とは縁がなさそうに思えるが、夜一人で過ごさなければならぬと言われれば怖じ気づきそうだ。何せ天井には照明器具がなく、その代わりに置き行燈が机上に用意されているのだが……サイズがかなり小さい。

（こんな中途半端にしか明るくならなさそうな点けたら、ますます幽霊でも出てきそうな雰囲気じゃんか）

はたして術で幽霊は追い払うことはできるのか。

「ホントはこんな辺鄙なところで休ませたくなかったんだけど、一応これでも地の国の首都にある宿屋だよ。火の国よりもこっちの方が近かったしね。首都にしか宿場がない上に、何処も彼処もボロくてさあ。これでもまだマシな部屋なんだよ」

確かにあのまま砂の上に放置されていれば、今頃干乾びていたかもしれない。術で水を出すことはできても、日陰のない場所を靴も履いてない状態で移動するのはあまりに無防備だ。

そう考えれば、例えば救済者が妖魔といえど素直に礼を言うべきか。

「あゝ……とりあえず、ここまで運んでくれてありがと」

「どういたしまして。お礼はキスがいいなあ」

「しない！しない！近づくな〜！」

ズイズイ顔を近づけてくる月刻を、馨は再びグイグイと押し返す。

（ここが首都……ってことは、ギルドがあるってことだよな？）

聖域というギルドとは一つしか指さない。妖魔に対抗できる妖魔殺戮士、妖魔封印士達が集う組合だ。もしかすれば楓を知っている者がいるかもしれない。

「ところで、この宿泊費ってどうなってるの？」

「後払いでも大丈夫だったさ。それより靴はどうしようか？お金ないけど、とりあえず靴屋まで俺が抱いて行こうか？」

「だ……！」

刹那、月刻に横抱きされた己を想像し、顔を赤らめた。周囲の注目を浴びること間違いなし。相手が美形の妖魔であることなど関係なく、例え人間相手だろうとそんな真似されたら……馨にとっては末代までの恥だ。

「そんなの絶対に嫌ー！」

宿の主人と交渉し、明日の晩までに二日分の宿泊費を払うことを約束して、とりあえず外に出ることはできた。

靴を履いてないことを訝しまれたが、「街外れで妖魔に襲われたときどこかにやっちゃったみたい」という月刻の虚言のおかげで、店の突っ掛けを貸してもらえたのは本当に助かった。ここに連れてこられた際に馨が気絶していたことが、信憑性を深めてくれたらしい。申し訳なく表情を曇らせれば、気を案じる言葉までかけてくれた。

嘘を吐いたことに良心が痛まないわけではなかったが、裸足で歩くか、百歩譲って月刻におんぶしてもらうか、本気で悩んでいたのだ。抱きかかえられて移動などとてもない。

走り辛いことこの上ないが、腹は背に変えられなかった。

「あーあ。馨は俺のだって見せびらかしながら歩いて優越感に浸りたかったのに」

「馬鹿言わないで。ふざけんな。寝言は寝て言え」

(妖魔が睡眠取るのかなんて知らないけど)

妖魔の中には人を餌と認識するモノもいるし、性欲があることも確認されている。人間の三大欲求のうち二つが当て嵌まるのだから、睡眠欲を持つ妖魔がいてもおかしくない。

しかも月刻に至っては完全な人型だ。

「でも俺達ってまさしく美男美女カップルだよ。譬一人だったら今頃ナンパされまくりだよ。俺がいて良かったでしょ？」

「あんたとカップルなんて冗談じゃないし、ナンパのかわし方なんてもう慣れっこ。というか、あんたと並ぶといつも以上に注目されるから、いい加減どっか行ってくれと助かるんだけど」

軽口を叩き合いながらギルドに辿り着いたはいいが、平然と隣りを歩く男はいつまでついてくる気なのだろうか。胡乱な眼差しで頭一つ高い人型妖魔を見上げ、おもむろに嘆息する。

「やだなあ。人の顔見て溜息吐かないでよ」

「あのだ、助けてくれたのは本当に感謝してる。けど……さすがにここはまずいでしょ」

ここには妖魔を狩る為の猛者が集まっているのだ。そんなところに自ら飛び込もうという餌の気持ちが出来ない。

「大丈夫だって。どっから見ても俺、人間にしか見えないでしょ？」

(人間にしちゃ規格外の美形だったの！)

どれだけ言い付けても聞かなそうだと、今度は諦念の吐息を漏らす。しかしそんな気の緩みも束の間。月刻の発した次の言葉に、譬は纏う雰囲気が強張らせた。

「どちらかと言えば、譬の方が用心するべきだと思うよ。容姿端麗って点を除けば、俺以上に目立ってる」

言外に何を指し示しているのか、瞬時に悟る。ギツと擬音が鳴りそうなほど強い眼差しで、少女は妖魔を睨み付けた。右の朱と左の薄い紫の瞳が獐猛な憤怒を宿す。

このまま縊り殺してやりたい。左右異なる双眸が同じ訴え

を物語る。

しかし薄く開いた唇の奥からはギリツと、歯軋りする音が鳴っただけだった。

「……これ以上、私に関わらないで」

すぐさま月刻から視線を逸らした馨はその存在を無視して、ギルドの扉を開けた。

重い開口部を潜り抜けると、多種多様の不躰な視線が一斉に向けられる。ざっと十人ほどだろうか。見るからに誰も彼もが筋骨隆々とした敵つい肉体をしている。彼らの腰や背には使い古した得物が携わっていた。

怪訝、嘲り、不快、剣呑……向けられる千差万別の眼差しに一瞬顔を顰めるも、気を取り直して奥の受付へと足を進める。

「訊きたいことがあるんだけど」

「へへへ……デートの誘いかい？」

（誰があんたみたいなの脂ぎったオヤジ、相手にすんのよ）

「私、ある妖魔封印士の孫なんだけど、その人がギルドに預けてるお金って引き出すことできる？」

頼杖を付いてニヤニヤと、不躰に自分を眺める受付人に生理的嫌悪を覚えながら、本心を隠して意図的にニツコリ微笑む。

「例え肉親でも、引き出すにはギルド発行の本人手形と暗証番号、それにキーワードが必要だ」

「つーか、お金が欲しいなら色里行った方が早いんじゃないかねえの？」

「お姐ちゃんみたいな別嬪、すぐに一番の売女になるぜ」

「そしたら是非お相手願いてえなあ」

ギャハハハ、と男達による嘲笑が空間を包む。場違いだと、同業者の親族ということをしり引いても、細い体躯に華やかな美貌を兼ね備えた小娘が足を踏み入れるにはギルドはお門違いなのだと、あしらわれる。

だがしかし、この程度のヤジや侮辱でへこたれるほど、馨は柔らかな神経をしていない。

「引き出せないなら仕方ないや。それなら妖魔封印士の登録手続きがしたいんだけど。これは別にお金いらないんだよね？」

騒がしい中で馨の発言を正確に聞きとつたのは、正面にいた受付人のみ。大きな目玉をしたその男はポカンと一瞬呆けるが、すぐさまニヤリと双眸を眇め、ますます卑下た笑みを深めた。

「おい、聞いたかよ！このお姐ちゃん、妖魔封印士になるんだとよ」声を張り上げた男に便乗するようにして、哄笑は一層膨れ上がる。そんな周囲を徐に冷めた目で一瞥すると、馨は小さく首を傾げ蔑むような色を唇に乗せ、そして鼻で晒つた。

「別に可笑しいことないでしょ。ここにいるあんた達無能より、私の方が遥かに実力あるんだから」

「ああ?!」

「何だと、このアマ！」

いきり立つ者半分、単なる強がりだと見縊る者半分。誰一人として馨の言葉が真実だとは思っていない。

「無能を無能と言って何が悪いわけ？あんた達、昨日砂の国との国境付近で妖魔が出たとき何してたの？ベテランとはいえ、旧時代の妖魔を年老いた封印士一人だけで対処させるなんて」

冷やかに眇めた色違いの双眸。その奥が瞋恚に燃える。

妖魔が出現すれば、その報せはすぐにギルドへ通達される。新時代のモノであれば一人でも処理に走る場合が殆どだが、旧時代のそれとなるとギルドにいるメンバーでグループをつくり戦闘、もしくは住民避難の先導を担う手筈となっていたはずだ。

旧時代の妖魔と分かっているながら楓一人に封印を任せるなど、普通はあり得ない。

馨が聖域に渡つたとき、あの砂の地に人の姿はなかった。圧倒的な力の差に退避したのだとしても、楓を置き去りにしたのは事実。それを思えば、獰猛な憤怒が沸々と湧き上がり、内側から食い破って出てきそうだった。

もしかすれば何らかのトラブルがあり、妖魔出現の連絡がギルドに

入らなかったのかもしれないという考えが浮かばなかったわけでもないが……受付人やこの場にいる職人の顔色を見る限り、やはり聞き及んでいたことは間違いない。

気まずそうに馨から視線を逸らす男達の中で、どこからかボソリと呟かれた。

「ここにいる奴らは皆、新時代の妖魔相手しか経験がねえ。あの婆さん、誰かは知らねえけど“隻腕”と組んでたのを前に見たことあるから、俺達より腕が立つのは明らかだったし……」

「そ、そうだ！お前みたいに得体の知れない半妖ってわけじゃない。俺らは普通よりちよつと身体能力が高い人間なんだよ！」

(こいつら……)

怒りを通り越し、もはや呆然としてしまう。

肉体能力が優れている。現状の力量に満足している。命が惜しい。

……ならばどうして彼らはここにいるのだろうか。

体力に自信があるなら他にも活かせる職はある。戦闘経験を積み、そのぶん敵に対する危機的能力も高まり、倒せる妖魔の幅も広がって救いを求める人達に貢献できる。妖魔を倒すことを専門職にしているのだから、当然接触率は高いわけで、奴らの手にかかる可能性など格段に跳ね上がるというのに……。

(ここにいる人達、本当に口先だけの腰抜けばっかだ……)

どんなに傷付こうと、何十年と渡って勇敢に妖魔と闘っていた祖母の背中を見てきただけに、妖魔を退治する封印士、殺戮士には尊敬と敬意、憧憬を抱いていたのだが……このような本音を耳にして愕然としないわけがない。

いっそのこと登録を諦め、別の方法で金を稼ぐべきかと逡巡し始めたそのとき、受付人が一枚の紙を差し出した。

「ここから北に少し行った先、森がある。そこに妖魔が住み着いたって話だ。そいつを倒したら登録してやるよ」

下卑た笑みを浮かべていた受付人の思惑は窺い知れないが、とりあえず妖魔がいるのならということと場所を森に移して早二時間。一向にその気配は感じられない。それどころか人と擦れ違うことさえなかった。

乾いた土の感触からしてここ数日の間に雨が降った気配はない。とりあえず人が往還していたらしき上を歩いているのだが、響以外の足跡はない一向に見当たらない。つまりそれは、ここが滅多に人が通らない場所だという証明。

(まさかガセネタじゃないでしょうね)

受付人に渡された紙には『形状：中型犬ほどの体格。鋭く尖った犬歯。四本足。黄土色の毛並み』と記されている。被害者は四人。

(あれ？ちよつと待てよ)

左隅に印字された手配日。今朝宿泊部屋に掲げられていたカレンダーの年月日を思い出し、そこから記載された日付を照らし合わせれば

(一年と二ヶ月前……)

「ふざけんな、あのオヤジっ！」

ついに憤懣を爆発させ、両手を上げて紙を放り投げた響に同調するかのように、どこからか獣の咆哮が轟いた。それほど犬の遠吠えのような響きで、音の発生源はそれほど離れていない。

「今のつて……」

驚愕したのも束の間。何か猛スピードで近付いてくる。

「【揺るがす茶の大地よ、我に力を】」

大きく開いた両掌を地面に叩き付け、術を唱える。するとそこから地割れが起き、向かってくる何かへと直進していった。

「ギヤイイーン！」

(これ、探してた妖魔だよな?)

中型犬のような体格で黄土色の毛並み。見るからに四本足。そして唇からはみ出した鋭い牙。まさしく手配書に記されていた妖魔と同じ形態。

「妖魔って言うよりは犬とか狸に似てるけど」

体の半分が土に埋まり、必死に前足をばたつかせているその姿は、愛くるしさを誘ってどこか微笑ましい。

「そこから離れな、嬢ちゃん。見かけがどうであれ、そいつは間違いないく人に危害を加える妖魔だ」

低く掠れた野太い男声にハッとそちらを見遣れば、随分と厳つい体格をした中年の男が馨の方へと足を運んできていた。ギルドにいた腰抜け達の誰かかと推測するが、彼らの中にピリッと張り詰めた緊張感を持つような者はいなかった。

猛禽類を連想させる鋭い眼光を携えた、眦の吊り上がった双眸。色の濃い眉。短く刈り上げた白髪混じりの髪。太い首。右肩の後ろから伸びる剣の柄。

何より目を引いたのが、馨の腿よりも一回りありそうな筋肉質の腕。……しかしそれは右側だけにしか存在してなかった。

「そいつの爪、変色してるだろ」

見下ろしてみれば確かに茶色いものがごびり付いていた。土の色とは違う。褐色……血が乾いた色だ。

被害者は四人となっていたが、もしかすればギルドに知らせていないだけで、実際にはもつといるのかもしれない。

「そいつを殺すから、嬢ちゃん」

「【囁く緑の風よ、我に力を】」

背中に差した大剣を抜こうとしていた男の言葉を遮り、伸ばした人差し指を妖魔目がけてスイと薙ぐ。同時に妖魔の首が切れ、そこから血が噴き出した。

瞠目する妖魔殺戮士らしき男性に困ったように小首を傾げながら、殊勝を心掛けて馨は頼みごとをした。

「あ……すみません。ちょっと事情がありました、おじさんにギルドまで来て頂きたいんですが、いいですか？」

（あのオヤジの意図に気付いてム力つくあまり首チヨンパにしちゃったけど……これはマズツたわ）

証拠をあのギルドの連中に見せつけようにも、それを抱きかかえて街を歩く勇氣は誓にはなかった。

恐らくこの妖魔退治を仕向けた受付人は、誓を妖魔封印士にさせるつもりなど最初からなかったのだろう。だからこそ見つけにくい標的を指定し、仮に倒したとしても死体を持ち運べる神経は小娘にはないだろうと高を括ったに違いない。

森で出会った男に事情を説明しながら再びギルドへ戻ると、そこにいた者達は一様に動揺をはしらせた。それは目の前に死骸を突き付けられた受付人も同じで、両眼を限界まで見開き唇を戦慄かせている。

「おい、この嬢ちゃんから聞いたぜ。妖魔退治を買ってくれる奴に性別、血筋なんか関係ないだろ。年も問題ない。どうしてそんな試すような真似しやがった？」

辟易と困惑、そして若干の怒りを含んだ表情で中年の妖魔殺戮士は壁に背を預けた。

「どうしてって……こんな若い娘、どう見てもただの命知らずだろ！だから妖魔に関わるとどうなるかってことをだ……！」

「というか、その妖魔倒したのはお前じゃねえのかよ！“隻腕の志雄”！」

どうやら隻腕の大剣使いは通り名が付くほどの実力者らしい。

(志雄って名前、どこかで聞いたことあるような……？)

「俺じゃない。助ける前にこの嬢ちゃんが一人で片付けた」

「マジかよ……」と絶句する受付人に誓はニヤリとほくそ笑みながら身を乗り出した。

「それじゃ、約束通り妖魔封印士としての登録をお願いしますね」

「実力は俺も保証する。何せ“楓壊”の孫娘だ」

「ザワツ、と喧騒はより一層広がった。「もしかしてあの婆さんが楓壊……」などという声も聞こえてくる。」

そして馨もまた、息を呑んで志雄の方へと振り返った。

「私、お祖母ちゃんのことなんて一言も……」

「妖魔を殺す時に紡いだ術、あれは楓の得意技だ。それにその朱色と藤色の瞳……昔、一度会ったことがあるだろ」

楓の同業者で過去に一度会ったことがある。それはつまり、馨がまだ幼少時、この聖域で暮らしていた時期のこと。

森林や草原といった緑に囲まれた、あの穏やかな暮らしをしていた頃

「……あーっ！思い出した、塩だ！」

当時五歳だった馨は上手く発音できず、読み方が同じである“塩”と呼んでいた。

「塩じゃない！志雄だっ」

「十年も前のことだからすっかり忘れてた。あの頃から左腕なかったけど、今より日焼けしてて、筋肉はここまでムキムキじゃなかったから全然分かんなかった。うわー、元氣そうで何より」

「お前は見た目だけ磨きがかかったけど、中身はそう変わってなさそうだな。……ところで楓は？この国で合流するはずだったんだが改めてギルドの中を見渡す志雄から顔を背け、馨は小さく首を振った。

「……旧時代の妖魔にやられた」

「なっ?!」

「瀕死の状態だったけど、何とか失血を止めて傷は塞いだ。志雄と同じで片腕なくなっちゃったけどね。だから私が代わりに来たんだけど……今無一文で」

困り果てた様子でヘラリと情けなく笑う馨に呆れた様子で溜息を吐きながら、志雄はまず受付人に馨の妖魔封印士としての登録を促し、そして手配書が回っていた妖魔を倒した報酬金を渡すと言った。

「とりあえず場所を移すぞ。詳しいことを聞かせてくれ」

厳つい顔を更に引き締め、真剣な表情で告げる年輩の同業者に、馨は大きく頷いた。

地の国（式）

昔、誰かが言った。

『過去のない人間はいない。今の自分があるのは過去あってこそなのだ』と

場所をギルドから人が賑わう飲食店へと移した二人は、改めて状況を語り合った。

昨夜から何も口にしていなかった馨は喋るよりも先に食事に気を取られてしまったが、だからといって志雄が目くじら立てることはなかった。かくいう大剣使いとて、見るからに重量のある得物を縦横無尽に扱うとあってか、持ち歩くだけでも多大なエネルギーを必要とするらしく、馨以上の食料を摂取していた。

幅のあるテーブルを二人だけで占めているにも関わらず、盛りつけられた皿が所狭しと並べられている。

「まあ、あの楓がそう簡単にくたばるはずないし、大丈夫だろ。それよりお前、これからどうする気だ？」

「あゝ……多分お父さんかお母さんが迎えに来てくれると思うから、それまで妖魔倒しながら他に帰る手段あるか探してみるよ。……因みに塩は現世とか聖幻鏡なんて言葉は聞いたことある？」

「だから俺の名前は志雄だ！……楓とは付き合いが長いからな。俺は現世に渡ったことないが、行き来には二つの鏡が必要なのは聞いた覚えがある。とはいえ、この聖域で現世の存在を知ってるのは、俺と楓を含めて数人だろうけどな」

「え？志雄以外にもいるの？知ってる人」

「ああ。その鏡を造った子孫とかな。五十嵐いからし姉弟だったか。確かお前と同じ年頃の双子で……もしかしたらそいつらなら、同じような発明品、持ってるかもしれないぞ」

「マジで?!」
バンツ、と両手をテーブルに叩き立ち上がる。

(ここから真反対にある雷の国ならさすがに間に合わないけど、最悪花の国までなら……もしかしたら全校登校日までに現世に帰れる……?)

予想外の収穫だ。現世からの迎えが来ない最悪の場合、少なからず自力で帰れる可能性が生まれた。

「そ、それで?!その人達は今どこに?」

「とりあえず座れ。風の国が開発してた何かがもうすぐ完成間近とかで、近々式典をやるらしい。そいつらも企画に参加してたはずだから、上手くいけば会えるだろ」

風の国は地の国と隣接する聖域最大の面積を誇る大国と聞いたことがある。現世と同じように機器を用いて情報を扱い、それを武器として他国と渡り合っているという。そして人口が多い分、妖魔と渡り合う力を持つ者も多く、おかげで妖魔からの被害が比較的少ない、誰もが憧れる大都市らしい。

「どのみち地の国を出るなら気をつけた方がいい。風の国も逆隣りの氷の国も、半妖やその血筋の奴らには手厳しい。……片目のどちらかを挟むならともかくな」

「ちよつと、恐いこと言わないでよ」

あからさまに肩を抱いて震える仕草をしてみせたが、志雄の忠告が単なる脅しでないことは重々承知していた。

生まれながらにして左右非対称の特色を持つ アシメトリ それはつまり、

妖魔の血を引く証。半妖は例外なしにその特徴が現れるが、半妖の子どもにも稀にそれが出現する。

妖魔と交わり出生した者を毛嫌いする地は、決して少なくない。

「まあ風の国は、五年前に皇帝が代替わりしてから差別は減ってきてるがな」

歯と歯の間に挟まった食べかすを爪楊枝で取り除こうとする志雄の仕草を「おっさんくさい」と揶揄しながらふと、本来ならあるべき

はずの彼の左腕が視界に映った。

妖魔を殺戮するという仕事上、危険は付きものだ。しかしそう思い過ぎすには何となく、違和感という琴線が胸の内側で震えた。根拠のない、ただの直感でしかないというのに……つい口に出して訊ねていた。

「あのさ、もしかしてその腕……」

思い返してみれば、十年前に初めて出会ったときから腕は存在していなかった。そのときから彼は大剣を使いこなしていたのだ。いくら筋骨隆々の体格で熟練の剣豪だとしても、自身の背丈の半分以上はあるつかという大きさの武器を片手で振り回すのは、さすがに人間離れしている。

妖魔の血を濃く受け継ぐ者は、外見だけでなく身体能力にも影響を及ぼす。

中年の妖魔殺戮士は臍脂の双眸を微かに眇めて暫く宙を睨みつけていたが、瞼を閉じると同時に深く溜息を吐いた。そして馨の朱と藤のオッドアイを真つすぐに見据える。

「……お前の想像どおり、俺も半妖だ。肩から生えてたのは爪の鋭い、鱗だらけの醜い腕だった。おかげで悲惨な幼少期だったな。妖魔に凌辱された母親はその事実を否定して、出産まで無意識に記憶を消していたらしいが、俺の出産を切欠に思い出して発狂。今以上に半妖を蔑ろにする時代とあって、俺の周りに半妖を擁護する奴なんていなかった。……だからだろうな、俺が妖魔殺戮士になろうとしたのは」

その決意を証明する為に、妖魔の血を流す象徴である腕を切り落としたのだと語る。

今更とばかりに志雄は肩を竦めて見せたが、その痛みは想像を絶するものであったろう。馨は堪らず顔を引き攣らせた。

脳裏に、目の前の彼と同じく腕を失った祖母の姿が蘇る。あの場景を目の当たりにしたときは無我夢中で怪我を治すことにしか集中できなかったが、改めて思い返してみれば胃が縮こまりそうだ。思わ

ず胸の上で拳を握り締める。

「いくら半妖といえど妖魔じゃない。だからって人間でもない。いや、人でもあつて妖魔でもあるが、それでも……やはりどちらにもなることはできないんだ。俺達は」

「……代償を払ったのに？」

自分の一部を肉体から切り離すという、代償という名の犠牲。例えその箇所が人とは異なれど、間違いなくそこも自身と繋がっていたというのに。その部分を放棄しても尚、人にはなれないというのか……今から三十年くらい前か。捨てた左腕と酷くよく似た妖魔と会った。知性も理性もない、本能のままに暴れ回る醜い龍だ」

そこまで聞けば、自ずと想像するに容易い。志雄がこうして生きていくということはつまり、殺したのだ。

妖魔である父親を。

「念願を果たしたというのに、胸の内から湧き上がる歓喜なんて本当に微々たるものだった。倒した直後、俺は茫然と立ち尽くして……気付けば頬を濡らしていた。あれほど……この世に生まれ落ちたことさえ恨んだときもあつたというのに、まるで心の一部を削り取られたような虚無感に襲われた。……そのときだな。例え異端の部分を削り除いても、自分の中に流れる妖魔としての己は、死ぬまで息衝いているんだと悟ったのは」

ほろ苦く微笑を浮かべる志雄から視線を逸らし、馨は臉を伏せた。妖魔である片親を心の底から憎んでいても、いざ失うと悲しみ満ち溢れるジレンマ。幼少時、馨はその想いを体験した者を目撃し、そして自身も彼女を通して体感している。

(心の一部を削り取られたような虚無感……)

聖域から現世へと住居を移る切欠となつたあのときから、馨はその感情……存在を求めてやまない。

失われた半身である彼女を

靴屋で動き易い履物を購入し、宿に戻って昨日と今日の二泊分の宿泊代を支払えば、残った所持金は雀の涙程度しか残らなかった。

給仕や客の呼び込みといった仕事と比べれば妖魔退治は破格の支給額ではあるが、高確率で危険が伴い、尚且つ狙った敵とそう都合良く鉢合わせするとは限らない。おまけに手配書に載っているいないに関わらず、妖魔を倒しても証拠や証言を提示しなければ最低限の金額は貰えない上に、例え手配されていたものだとしても中には低価格のものだって勿論ある。

昏間倒した妖魔はまさしく凶暴性の低い、低賃金のものであった。

（こんなことなら志雄にお金、借りとくべきだったな〜）

馨と別れた志雄はその足で氷の国へと旅立っていった。本来なら楓とこの国で合流した後二人で向かう予定だったらしいが、“楓壊”の負傷を一刻も早く先方へ伝えなくてはならなかったらしい。

（人様のビジネスと違ってあまり深く訊かなかったけど……お祖母ちゃん達、個人契約でもしてたのかな？もしそうならギルドとはまた違う組織だよな）

ベテランの封印士と殺戮士を雇ったのだから、間違いなく大手のクライアント。つまり名の知れた実力者でないと倒せないような妖魔が出現しているのではないか。

……この十年のうちに聖域も色々変わってしまったのかもしれない。（とりあえず風の国までの旅費を稼いで、一刻も早く五十嵐姉弟を見つけないと……）

グツと拳を固めて覚悟を決めたその刹那、激しい爆発音とともに建物が揺らいだ。小さく悲鳴を上げて床に転ぶも、慌てて窓から外の様子を眺める。音の出所からして、発生地はそれほど離れていないはずだ。

「な、何？！何？！何事？！」

日が沈もうとしている茜色の空とは反対に、暗くなり始めた東の空を背景に一つの建物から煙が昇っている。悲鳴を上げながら逃げ惑う人の尋常でない様子に嫌な予感を覚えながら部屋を出たそのとき、

再び大きな爆発音がした。

「逃げるー！妖魔だっ、妖魔が出やがった！」

(やっぱり！)

足早に階段を下りて外に出れば、昼間あつたはずの高層の建物が幾つかなくなっていた。耳を研ぎ澄ませば、民衆の悲鳴に紛れて動物の雄叫びらしき音が轟いている。

「おい、お嬢さん！早く逃げな！ギルドの連中の話によると、ありや旧時代のモノの仕業らしい」

妖魔の魔手から逃げていた誰かに早くここから立ち去るよう促されるも、駆け出した響が向かった先は騒ぎが起きている方角だ。

「お嬢さん?!」

「私も妖魔封印士よ！」

旧時代の、と言われて尚更住民達と同じように逃げるわけにはいかなくなる。新時代の妖魔ならギルドの猛者に譲ってやってもよかったが、旧時代のそれとなると相手にできる者は限られてくる。

(あの人達、自分の力量を見誤ってなきやいいけど……)

たおやかな姿態にしか目を向けられず響の本質を全く歯牙にも掛けないとしない、見かけ倒しの実力を伴わない烏合の衆に、旧時代の妖魔を倒すのはまず不可能だ。もしかしたら彼らにも致命傷を負わすことくらいはできるかもしれないが、それに至るまでに自身が深い傷を負ってしまう可能性の方が断然高い。下手をすれば、傷一つ付けることなく死亡することも充分有り得るのではないか。

逃げる民衆の波に逆らい騒ぎの中心となっている広場に辿り着けば、既に数人の男が地に伏せていた。得物を手に取り立ち向かおうと姿勢を保つ者もいたが、全員が満身創痍。分が悪いのは火を見るより明らかだ。

「おおおおおお！」

咆哮を迸りながら、妖魔らしき四足の生き物が槍使いに向かって突進しようとしていた。

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」

咄嗟に放った炎は妖魔を転倒させることに成功し、おかげで立つものやっとなんか様子や槍使いに害はなかったが、大して敵にダメージはなさそう。いと簡単に体を起き上がらせ、こちらを睨んできた。

「痛えな、姐ちゃん。俺の毛がちよつと焦げちまつただろ」

頭から首にかけて生えた鬚。長い四肢の先には蹄。そして額には大きな角。これだけを挙げれば、ユニコーンと謳われる容姿ではあるが、見るからにその伝説上の生き物と異なるのは、角の真下には大きな一つ目と顔の半分の高さまで裂けた口。

（こんな口が悪くて随分な形相の一角獣、何か嫌だ……）

現世で伝えられているユニコーンは処女の懐に抱かれて大人しくなるらしいが、さすがにこんなのを抱くのは勘弁願いたいと、馨は頬を引き攣らせる。

「さつきからむさ苦しいオッサンばつかで、いい加減飽き飽きしてたんだよ。相手にするならやっぱ姐ちゃんみたいな美人が良いよなあ」

「妖魔に褒められたって全然嬉しくないんだけど」

「俺のテクで昇天させてやるよ」

「あんた如きじゃ力不足だつての。【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」

掌に炎を生み出すまでは先程と同じ手順だが、今度はそれを留まらせ勢いづけて投げる。こうすれば命中力は若干下がるものの、速度は上がる。

「おおつと！危ねえ、危ねえ」

臀部どころか尻尾にさえかすり損ねる。炎が当たった先は妖魔に潰された建物で、更にボロボロと瓦礫の山が積み重ねられた。

そしてその傍には妖魔討伐に派遣されたらしき男が倒れていた。

小さく舌打ちした馨は茫然と立ちつくす殺戮士や封印士を見渡した。

「こいつは私が倒すから、おっさん達は怪我人連れてとつと逃げて！」

「なっ?!」

「お前一人に任せられるわけないだろ、小娘!」

「【囁く緑の風よ、我に力を】!」

広げた掌こそ妖魔に向けていたが、攻撃の範囲は全方向にやっていた。その為、切り傷は敵味方関係なく負わされる。

「足手纏いだったの。同業者に殺されるような間抜けになりたいわけ?」

冷やかな目で文句を垂れた男達を睨みつけければ、彼らは羞恥で顔を赤らめた。

「お前ら、倒れてる奴担いで一旦退避するぞ!小娘、てめえ覚えてる!」

(やなこった)

内心舌を出して再び風の術を唱えるが、これはこれ以上建物が壊れないようにする為の防波堤だ。とりあえず強い衝撃を与えない限り、半径百メートル外は安全なはずだ。

「邪魔な奴らは行っちゃったし、楽しむか。姐ちゃん」

「あんたと楽しむ暇があるなら、イケメンと濃厚なキスを堪能する方がよっぽど有意義だったの」

妖魔を封印する為の術を紡ぎながら、警は敵に向かって地を蹴った。

地の国の妖魔とあって地面を抉って足元を掬わせたり、石礫を飛ばしてきたりなどして攻撃を仕掛けてきたが、どうにか急所を避けつつ封印することに成功した。それでも出血や打撲を負わなかったわけではなく、回復術で治せるものは自力で処置を施したが、さすがに大きな傷は医療に携わっている一般人に手当てをしてもらった。治癒に専念できるほどの気力がもはや残っていなかったのだ。

(とりあえずギルドには明日行こう。お金支給されるはずだし、それでポロポロになった服を買い替えないと……)

診療所を出た途端、首都の窮地を救った英雄として民衆に揉みくち

やにされたが、とにかく休みたいと訴えてよるめきながら宿に戻ると、今度は宿泊客から奢りだと食事を勧められ、疲れ切ってはいたが腹が減っていたのも事実なのでそれに招致されてようやっと部屋に着けば、既に深夜に近い時間帯となっていた。

「疲れた〜」

倒れ込むようにベッドに沈み、このまま寝てしまおうと瞼を閉じかけたその瞬間、聞き覚えのある声が頭上から降り注いだ。

「うん。お疲れ、お疲れ〜」

「！」

ハッと目を睨って上半身を起こす。そのまま横を見遣れば、漆黒に身を包んだ美青年がベッドに腰掛けニコニコと髻を眺めていた。

行燈を灯していない暗い室内ではあったが、窓から入ってくる月明かりが男の右半身を照らしている。青味がかつたその光は端麗な彼の容姿を幻想的に浮かび上がらせ、少女はその神秘的光景に思わず頬に朱を散らせた。

けれども即座に動揺した自分を叱咤して、絞り出すように男の名を呼ぶ。

「つ、月刻……」

「さ、今日はもう遅いし寝ようか。大丈夫。俺が添い寝してあげるから」

「そのどこが大丈夫なわけ?!」

グイグイと肩を押されてベッドに倒されかけるが、髻も月刻の二の腕を掴んで応戦する。

「子どもじゃないんだから一人で寝れるし、よくよく考えればお風呂もまだだし」

「それって俺に洗ってほしいってこと?」

「今すぐ消えて。この変態!」

「変態って……こうして口説くのは髻にだけだよ?」

「そんなの私以外の人……ていうか、妖魔にしてよね!それでもって二度と私の前に姿を見せないで!」

「ハハハ。いくら馨のお願いでもそれはやだ」

愉しげに喉をクツクツと鳴らすと、漸く月刻は馨の肩から手を離れた。

干渉が止んだことにホッと胸を撫で下ろして、少女は訝しげに美形の妖魔を仰いだ。

「……同胞を封印する私のこと、あんたは憎んでないの？」

目の前の男がどこの国を拠点としているのかは分からないが、恐らく砂の国でもなければこの地の国でもないだろう。それでも馨が封印した二つの妖魔と同じく、かつて筒姫に封じられた旧時代の妖魔であることに間違いはない。

妖魔を倒す職に就く自分を恨まないわけがないのだ。それに加えてかの女神と同じ術を使っていることから、自分が彼女の子孫であることは既に気付いているはず。

だから分からない。どうして天敵である自分を手につけようとせず、友好的に接してこようとするのか。

「ん〜……寧ろ、全部封印しちゃってくれないかなって思ってるよ」「は？」

「俺が全部始末しちゃっても勿論いいけどさあ、それじゃ闘ってる勇ましい馨の姿は見れないし。……それに俺と馨の仲を引き裂こうとしてる邪魔者なんて、全部消されるべきだよ」

ニイ、と薄い唇に残忍な笑みを浮かべる青年から何となく黒い雰囲気を感じ取り、咄嗟に目を逸らす。

（こいつ、変態つてのとはまた別の意味で、結構危ないかも……）
改めて、厄介なモノに目をつけられてしまったと溜息を吐きながら
瞼を閉じれば、段々と意識が遠ざかっていく。

「馨？」

「……眠い」

（だから早く出て行って……）

明瞭を得ない言葉を呟きながら、少女はベッドに横たわった。

あどけない寝顔を晒しながら夢の世界に旅立った少女を、青年は静

かに見下ろす。その口元には先程までとは違う、優しい微笑みが滲んでいた。彼女の細く、サラサラとした砂色の髪を梳きながら、彼は彼女の耳元にそっと顔を近づける。

「疲れてるからって危機感足りないよ。あの頃みたいに俺に対して絶対的信頼を抱いてるわけじゃないんだろ? ……十年がこんなに長いなんて、今まで思ってもみなかった。でも、君は帰ってきてくれた。これからはずっと一緒だ」

柔らかな頬に口づけを落とす、再び馨の寝顔を眺めて破顔すると、月刻は音もなく姿を消した。

地の国（参）

昔、誰かが言った。

『人、景色、音、匂い、温度……新たな己の一面。生きている限り、出逢いは必然にあるのだ』と

手配されているか否かはともかくとして、同業者の目の前で旧時代の妖魔と対峙し、そして倒したのだから、その功績として報酬が貰えるのは予測していた。

しかし、いざ差し出された紙幣と硬貨の山を目の当たりにして、馨は呆気にとられた。

「ほらよ。これがお前さんの昨日の報酬だ」

「マ、マジで……？」

妖魔封印士の登録と称して倒すよう課せられた、雑魚の妖魔の手配金とは雲泥の差だ。想像以上の金額に喜ばないわけではなかったが、それ以上に気になることが一つ。

（この寂れた国にこんな資金あつたんだ……）

戦闘時は風の術で周囲に防波堤を張っていたとはいえ、馨が妖魔と接触するまでの間にも物や建物は破壊されていた。また戦いにおいても少なからずその被害を広げてしまったのだから、被害総額はかなりのものと推測でき、そのぶん報酬金から差し引かれると考えていたのだが……それとも、それを省いてこの金額なのだろうか。

「農作物の生産に関しちや、この国は聖域随一だからな。意外に金は持ってたんだ。んでその金は、妖魔が街中で暴れた場合の修理費用なんかに適用される」

胸中の想いが表情に出ていたらしい。ギルドの受付人が呆れ混じりの嘆息を漏らす。

何れにせよ、この報酬金が自分に宛がわれたのならありがたく受け

取ることにする。

「とりあえず手持ちにこれだけ貰うよ。あとは貯蓄という形で」
風の国までの旅費。それに必要な備品、防具、アイテムの購入費。
それから昨日の戦闘でボロボロになってしまった服の買い替え。そ
れらを差し引いても結構な額が残った。

「そんだけ金が入ったんだ。奢ってくれや、姐ちゃん」

「私に集る暇があるなら未熟な腕を磨いたらどうよ？」

(この国の同業者はお山の大将ばっかだったなあ)

背後で息巻く連中の罵声をBGMに、今後聖域全てのギルドにて預
金を引き出す為に必要な書類を書く。

「お嬢ちゃん。このキーワードに書かれているの、彼氏の名前かい
？」

「……お金の預かり、よろしく」

剣呑な眼差しを向けてくる同業者の間を掻い潜り、響はギルドを後
にした。

風の国へ渡るには、境目となっている山を一つ越えなければならな
い。人が通る為それなりの路が成されているが、如何せん標高がか
なりある。おまけに山の天気は変わりやすいと言われるだけあって、
登る前は雲一つない晴天だったにも関わらず、今やすぐにでも泣き
出しそうなまでに暗雲が立ち込めていた。

(一旦休んだ方が良いんだろうけど……)

雨宿りできそうな場所が見つからない。三十分ほど前に一人一人入れ
そうな洞穴を見つけたのを最後に、後は上り坂と、それを囲むよう
に縦に伸びた木々ばかりだ。

雨合羽を着て程なくすれば、案の定空が泣き出した。瞬く間にぬか
るむ地面に苦戦しながら歩を進めるが、焦る響の気持ちとは裏腹に、
雨足は強まってゆく。

「しかも山賊に注意って……」

道脇に掲げられた立て看板が休憩所案内でなかったことに落ち込むが、気を取り直して周囲を見渡したそのとき、どこからか雨とは違う音を鼓膜が捉えた。

「……………！」

「……………！」

「……………！！……………！」

複数の男の声。そして一人の女のそれ。鮮明な言葉は聞き取れないが、緊迫した様子なのは遠くにいても感じられた。

しかも眼前には忠告板。……………導き出される想像は、自ずと嫌な予感のもの。

（山岳サークルの単なる小競り合いならいいけど）

小さく舌打ちを落とす、声のした道外れへと足を踏み入れる。突き出た枝や滑りやすい草の上に注意を払いながら突き進めば、多少拓けた場所に出ると同時に、初めて自分以外の人間と出くわした。

継ぎ接ぎの着物に身を包んだ、卑下た形相の男が三人。そして服を半ば脱がされた若い女性が一人。まさしく予想通りの事態だ。

「おお！またしても獲物が一匹」

「それもまた若い女だぜ！」

舌舐めずりする男達を余所に、被害者の女性を見分すれば、濡れた前髪の奥から覗く紅い瞳は混乱と恐慌に震えていた。屈強そうな……………例えば志雄のような体付きの男ならすぐに助けを求めていたのだろうが、実際現れた第三者は長身瘦躯な若い娘。

絶望に陰つていく双眸に、響は大丈夫だと語りかけるように小さく微笑を浮かべた。

その笑顔を、山賊は自分達を誘っているかと勘違いしたらしい。ニヤニヤと卑しい笑みを浮かべながら男が一人、近付いてくる。

「姐ちゃん、俺達の相手してくれや」

「【清き青の水よ、我に力を】」

雨水を凝縮させて硬丸を創り、それを手を伸ばしてきた男に向かって思い切り投げつけた。

「ぐわっ！」

「ア、アニキッ！」

泥に塗れ斜面を滑り落ちていく男と、それに慌てふためく山賊一味に嘲笑を送りながら、居丈高に告げてやる。

「いい大人が追い剥ぎとか馬鹿じゃないの？」

「ちくしょー！覚えてやがれ！」

（何か似たような台詞、昨日も聞いた気がする）

この周辺の男共は短気で横暴で自分本位なタイプばかりなのかと溜息を吐いて、被害に遭っていた女性を見遣る。

髻を見上げるその目に先程までの怯えはなくなっていたが、何が起きたか分からないとばかりに茫然としていた。前で留めていたボタンを引き千切られ、中の肌着は肩紐を解かれ、そこから下着と白い肌が見出ししている。そんな無残な格好をしているにも拘わらず取繕う様子が無い。それほどシヨックだったのだろう。

か弱い女性に非道な真似をしていた男達にむかつ腹を立てながら、髻は彼女の服の乱れをできる限り直してやる。

「大丈夫？」

額に掛かる濡れた前髪を横に払い、表情を露にする。改めてその面立ちを見遣れば、想像以上に若い。やや幼く見えるが、髻よりも二つ、三つ上といったところだろうか。少女といって差し支えない年頃だ。

やや下がり気味の眉に二重の大きな紅眼。小さな鼻梁に形の良いふつくらとした唇。ただ長い間雨に打たれている所為か、顔が青褪めている。

「立てる？とにかく雨の当たらない場所に……」

雨合羽の前を広げて女性に寄り添い、これ以上濡れないようにと気を遣いながらなるべく平坦な場所を進む。すると程なくして洞窟のような場所を見つけることができた。さほど奥行きのないところではあったが、女性二人が留まるには充分だ。

休憩できる場所に辿り着くや否や、彼女はよろめきながら膝を折り、

地面の汚れなど気にすることなく座り込んだ。山賊に襲われた動揺も勿論あるのだろうが、すっかり体が冷え切ってしまったらしく、体を震わせている。

馨は羽織っていた雨合羽を脱ぐと、風に吹かれ舞い込んだらしい枯葉や枝を掻き集め、炎の術を唱えてそこに暖を造った。

（夕暮れにはまだ時間あるけど、この人このまま放っておくわけにもいかないし、今日はここで寝泊まりするしかないか）

何せ涙こそ見せないものの、言葉一つ出してない。

「これで体拭いて着替えて。サイズ、ちょっと大きいかもしれないけど……」

タオルと着替えを差し出せば、ノロノロとした動作で少女は動き始める。まず顔や毛先を拭いそれから静かに立ち上がると、着ていた衣類全てを脱ぎ出した。下着までもだ。

下着の用意まではしておらず、馨は慌てて鞆の中を漁り着替えの上置き。

（恩人で同性つてこともあってだろうけど、恥ずかしがる仕事すらなく一糸纏わぬ姿になるのはどうかと思うんですけど……）

チラリと横目で見遣れば、炎の揺らめきに照らされた裸体が網膜に焼き付く。

細い首筋。僅かに膨らんだ乳房。丸みを帯びた臀部。肉付きの良い太腿。加えて、括れた腰のラインに沿って雫が垂れているのが、更に扇情的に映る。

（ここに月刻がいなくて良かった）

昨晚と同じように今朝も自分の寝顔を見ていたらしい男に罵詈雑言を浴びせ、朝食で一時宿泊部屋を後にすれば、帰ってきたときには既に姿を消していた。今のところ馨以外の誰かに睦言を囁いているのを目にしたことはないが、人だろうが妖魔だろうが、男が女の裸に胸を騒がせないわけがない。

（あいつが誰かに見惚れる想像するだけでも腹が立つ。いや、別に見惚れるのはいいんだけど……ああでも、やっぱり良くない！何か

ム力つく！というか、そもそも何で私に構うんだか。それもよりに
もよって自分を封印した相手の子孫だなんて……）

妖魔の考えていることは分からない、と一向に弱まる様子を見せな
い雨足をぼんやり眺めていれば、女性が歩み寄ってきていた。

「あ、りがとう……」

「どういたしまして」

山賊から助け出してくれてありがとうなのか、着替えを貸したこと
による礼なのか分からないが、どちらでもいいやと湿ったタオルを
受け取る。

「まだ顔色悪いし、火に当たって暖まって。今何か作るから」

リュックサックには衣類の他、傷薬をはじめとする救急セットや最
低限の日常生活用品を詰めていたが、中でも非常食だけは比較的多
く買い込んでいた。風の国までの距離にしては充分過ぎるほどかと
慢心していたくらいのだが、もしかすれば足りなくなるかもしれない。
ない。

それにしても、と燃え盛る炎を見つめる横顔を一瞥し、先程まで彼
女が着ていた服に目を向ける。

泥に塗れてしまっているが、辛うじて汚れていない部分に着目すれ
ば上等な洋服であると窺えた。薄桃色のジャケットに膝丈のスカ―
トといったフォーマルな礼服。履いている靴もヒールのあるパンプ
ス。山登りには実に相応しくない風体をしていた。

（一体何者？）

飲み水を創り、煮込んだ干し肉と共に差し出せばあつという間に胃
袋へと収められてしまった。よほど腹が減っていたらしい。自分用
にと分けていた肉さえも物欲しそうに見つめられ、馨は泣く泣く彼
女に分けてしまった。

「……えーと、ところで名前は？私は馨」

「名前……」

口の中のものを飲み干した少女はポツリと呟き、手を止める。その
眉間には僅かながら皺が寄っていた。

「あゝ……別に言いたくなければ構わないけど」

「ごめんなさい。そうじゃなくて……名前は華蘭^{からん}。でも……それ以外のことが思い出せなくて」

「えっ?!」

目を丸くする馨に対し申し訳なさそうに目を伏せながら少女、華蘭はポツリポツリと語り始める。

「三日前、気が付いたらこの山の中にいたの。下山しようにも道が分からなくて、雨水や山菜で飢えを凌ぎながら人を捜してたら、あの男の人達と出くわして……私が何も持っていないって分かったら、体で楽しませろって……!」

男達に襲われた状況を思い出したのか、華蘭は再び体を震わせる。

胸の前で固く両手を握り締める彼女に「思い出させてごめん」と詫び、馨は彼女の肩にそつと触れた。

「またあいつらが来ても大丈夫だから。さつきみたいに私が追い返すし。だから今日はもう、ゆっくり休んで」

安心させるようにその背を撫でていけば、漸く気が緩んだのだろう。華蘭は大粒の涙を眦に溜め、それを丸い頬に滑らせながら馨にしがみ付いてきた。

抱き付かれた救世主は彼女が泣き疲れて眠りにつくまで、震える背中を擦っていた。

さほど経験のない山登りと山賊から記憶喪失の少女を救うという類い稀なことをしたからだろう。いつの間にやら馨も眠りに誘われていたらしい。背中に石の冷たくてごつごつとした感触を覚える反面、腕の中には人肌の温もりがあった。そしてすぐ近くでパチパチと燃える炎の爆ぜる音が耳朶を打つ。

(今何時……?)

空はもう明るいだろうか。少し肌寒い気もするが、雨が止んで、霧も出ていなければ出発したい。

（雨が降っててもここを出たいけど、雨合羽は一人分しかないのでなあ。傘の用意までしてないし。風の国は場所によっちゃ半妖の風当たりが強いところもあるって志雄が言ってたから、一応顔の隠れるローブと帽子は買ったけど、防水じゃないしなあ……）

寝起きとあつて瞼を閉じながらまどろんでいたからだろう。自分達以外の気配に気付くのに遅れてしまった。

地面を踏み躪る音を察して即座に華蘭の体を引き離すが、それと同時に自身の体を引き寄せられる。

「へへへ。さすがに寝込みを襲われるとは思ってなかったようだなあ」

耳にかかる吐息とその臭いに顔を顰めながら横目で睨みつければ、昼間見た山賊だった。ニヤニヤと下賤な笑みで口元を歪め、獲物を甚振る獣のような眼差しで髻を見下ろしている。

術を唱えようとした刹那「きゃあ！」と短い悲鳴を聞き入れ、慌てて前方を見遣れば華蘭もまた、別の男によって拘束されようとしていた。

「から

！」

叫ぼうとしたその瞬間、もう一人いた男に猿轡を？まされてしまった。

（ヤバッ！）

思いもよらなかつた窮地に身の毛がよだつ。言葉を封じられては術が使えない。体術はからつきしなうえ、護身用にと持っていた食用ナイフは肉を切った際に後で洗おうと放ったままだ。身を振って抗うが、そんな獲物の扱いに慣れているのだろう。山賊は難なく少女二人の手首を頭の後ろに纏め上げた。

「昼間はよくもやってくれたな、姐ちゃんよお。ボコボコにぶん殴ってやりたいところだが……こうして明るいところで見ると、かなりの別嬪じゃねえか」

「こっちの金髪の姐ちゃんといい、結構な額で売れそうだな」

身ぐるみや金品強奪だけでなく、女、子どもの人身売買にまで手を

出しているらしい。昼間、相手が人間だったということもあって、徹底的に懲らしめなかったのを本気で悔やむ。

再度恐怖に貶められる状況下とあって、華蘭は嗚咽を上げながら大粒の涙を零している。

「商品として売る前に……俺達で味見するか」

「反抗できないよう大人しく調教すれば、値も上がるしな」

肩を押されて仰向けに倒され、短くて太い男の指が襟首に掛かる。

（どうしよう！ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイッ！）

助けを呼びたい。けれどもその手段をとる為の口は封じられている。そもそもこんな山奥で叫んだとしても、誰が助けに来てくれるというのか

ふと一瞬、脳裏に過った漆黒の影。端麗な容貌をした、絶大なる力を持つだろう天敵。

（月刻……っ！）

固く瞼を閉じて胸中でかの者の名を紡いだ瞬間、周囲の音が完全に消え去った。

爆ぜる火の粉の音。華蘭の嗚咽。男達の衣擦れ。身動き。声。息遣い。……それらが一切聞こえてこない。

恐る恐る目を開くと、洞窟内は闇に包まれていた。暗闇ではなく、灯りとしていた炎が消えた状態。朝はまだ遠いらしく、けれども外から零れ落ちる月明かりのおかげで、薄っすらと周りを見渡せる。燻りどころか煙さえ上がっていない燃え尽きた跡。ポツンと置かれたリュックサック。肉を盛っていた器とナイフ。そして横たわる一人の少女。

「華蘭っ」

慌てて駆け寄ろうとしたそのとき、腕を引かれ何者かの胸に抱きすくめられた。

山賊の一人かと身を強張らせるが、囁かれた自分の名を呼ぶ声に僅かながら緊張の糸を解した。

「ったく、もっと早く俺の助けを呼んでよ」

「あの山賊達は……？」

「あいつらならもういないよ。どこにもね」

どこにも、というのはどこまでを指すのか。普段と変わらぬ声色に若干怯むが、相手は妖魔。今更処遇を聞いたところでどうしようもない。どうにかする気も、正直起こらなかつたが。

「私、口塞がれてたからあんたのこと呼べなかつたけど」

「心の中で呼んでたでしょ。月刻、助けてーって」

擲揄混じりに言われてカツと頬を赤らめるが、相手の胸に顔を押し付けられているおかげで見られずには済んだ。それに否定できないのは確かだ。

貞操の危機を覚え胸中で叫んだのは、両親でも祖母でも親友でも先輩の大剣使いでもない、敵であるはずの彼だった。

(ホントに心の中を読んだわけじゃないんだらうけど……)

寧ろどこからか絶体絶命のピンチに陥るまで静観していた可能性の方が大いにあり得るが、助けてくれたのは事実だ。

「……………助けてくれて、その……………ありがとう」

不本意な気持ちはさすがに隠しきれなかったが、それでも礼を言わないわけにはいかない。

「言葉よりも態度で示してほしいな」

「はあ？」

「キスしよう」

満面の笑みでそう口にするや、彼は馨の唇に自らのそれを押し付けた。そして動揺した馨の一瞬を突き、素早く舌を差し入れる。

「んう……………！」

力いっぱい月刻の胸を叩き離れるよう訴えるが、まるで効果はない。それどころか早くこの快樂に堕ちるとばかりにキスを深めてくる。

舌を絡め、音を鳴らし、吸い、柔く食み、尖らせた舌先で歯列をなぞる。

誘うように、舐めるように、強く、弱く、交ざり合つ……………。

「……………ふ、はあ……………」

漸く唇を離されたときは、相手に腰を支えられていないと立てなくなっていた。いつの間にもやうに両手は縋るように漆黒の服を掴んでいる。そこで漸く、後頭部の後ろで纏められていた手が解かれていることに気付いた。

眇めながら見上げた黒曜石の瞳には余裕が見られたが、その奥では快楽の色が滲んでいる。

その眼差しにゾクツと胸が震えた。

「馨はホントに可愛いなあ」

前髪を長い指先で払われ、露になった額に口付けが落とされる。

クスクスと笑う男の笑声に鼓膜を震わせ、彼の腕の中で憔悴した様子で息を吐き出しながら、馨は静かに瞼を伏せた。

地の国（肆）

昔、誰かが言った。

『心に負った傷は己を誤魔化し、時に忘れたふりさえ遣って退けるが、それでも一度脳裏に焼き付けば、本当に忘れてしまうことなどもはや不可能なのだ』と

優しく、慈しむように頭を撫でられている。こうして触れられるのは何年振りだろうか。随分と懐かしい気がする。父親だったか、母親だったか、祖母だったか、それとも……最後に撫でてくれた者を思い出そうとするが、記憶にない。

ただ、その頃も今と同じように穏やかな気持ちでまどろんでいたに違いない。髪を梳く長い指先と触れる掌が酷く心地良い。ねだるようにその手に擦り寄れば、頭上から小気味良さそうにクスクスと笑声が聞こえてくる。誰かは分からないが、随分とご機嫌なようだ。

そんな相手の様子を察し、馨もほんのり微笑を浮かべる。

このままいつまでも優しく触れられていたい。そう胸の内でも和んでいれば、撫でる手がピタリと止んでしまった。

(……………?)

触れられてこそいるものの、撫でる動作が繰り返されることはなく、もう終わりかと弧を描いていた唇を戻し、名残惜しみながら仕方なく意識を浮上させる。

瞼を薄っすら開いたその瞬間、黒い何かに力いっぱい抱き着かれた。

「馨、可愛いーっ!」

「のわああああ!」

(何っ?何?!一体何?!)

肩にぐりぐりと押し付けてくるそれに視線を落とせば、漆黒の後頭部が見えた。そして身を包んでいる服装もまた黒づくめ。

「つつつ月刻っ！」

離してほしいと男の服を引っ張るが、馨の心情に気付く様子はない。

「馨、可愛い！食べちゃいたいくらい超可愛い！」

食べちゃいたいというフレーズに、抱き締められていた少女は目に見えるほど大きく全身を震わせた。

(殺らなきや殺られる……！)

目を覚ましたとはいえ、寝起きということもあってまともに思考が働かないらしく、そんな物騒な考えが脳裏を過る。

けれども例えまともに起きていたとしても、どのみち彼女はこの行動を取っていたかもしれない。

「【灼熱の赤き　　】」

「え、ちょ……タンマ、タンマっ！離すっ、もう離すからー！」

耳元で術を唱える馨から、月刻は勢いよく飛び退いた。地を這うような低い声音だったのが、彼女の本気の顕れだったのかもしれない。

(こいつに頭撫でられて気持ち良いつて思うとか……一生の不覚だわ)

額に手を当て深く溜息を吐いていれば、ふと月刻とは別の方向から視線を向けられていることに気付いた。

金髪に紅玉の如き瞳を持った少女。山賊に襲われていた、華蘭と名乗る彼女がキョトンとした面持ちでこちらを見つめていた。

(もしかしてさっきの、見られてた……?)

馨本人は本気で嫌がっていたのだが、傍から見れば先程の光景はかなり幼稚で陳腐……言い換えれば、所謂バカツプルのようなやり取りだったのでないだろうか。少なくとも第三者視点で目にすれば、馨は生暖かい目で一瞥、或いは鼻で一笑するだろう。気分次第では余所でやれと、あからさまに溜息を漏らすか、舌打ちの一つくらいしていたかもしれない。

そう考えれば、みるみる内に首筋から頬にかけて熱が込み上げてきた。

「かかか華蘭っ！この人、昨日の夜に私達を助けてくれた月刻！強

くて顔も良いけど、でも変態だからっ。下手に近付いちゃ駄目！」
「その言い草ひどーい」

批難を口にされながらも、ケラケラと陽気に笑っている様子からして、大して堪えていないのは明らか。寧ろ羞恥で顔を真っ赤にする馨を面白そうに眺めている。

「……………あの」

相手が異性とあつてか、警戒心を露に月刻を注視していた華蘭がふと呟く。

「月刻……………さん。私、以前あなたとお会いしたことありますか？」

「何か名前以外の記憶は全然覚えてないみたい。月刻、華蘭に会ったことあるの？」

過去に人間の女を誑したことでもあるのかと、剣呑な眼差しで睨み付ければ、男は「さあ？」と首を傾げる。

「会ったことあるかもしれないけど、俺は全く覚えてないよ。あ、でも例え俺が記憶失くしても、馨のことだけは忘れないから」

「有り得ないでしょ、あんたに限って。あつたとしても、その場合は忘れてくれて一向に構わないから」

見向きもせずにぞんざいに扱えば、背中へばり付かれた。

「冷たいなあ。こんなに馨のこと愛してるのに」

「ウザつたい。暑苦しい。離れる」

地の国での宿泊といい、助けてもらったのはこれで二度目ではあるが、そろそろ本気で攻撃してもいいのではないか。寧ろ術を唱えるのを何故止めてしまったのだと、先程の己を悔いる。

不穏な空気を醸し出しながら思索していたそのとき、華蘭から衝撃的な発言が飛び出した。

「夫婦なんだし、別に恥ずかしがることないんじゃないか……………？」

「……………は？」

「馨が起きる前、そう言つてたけど」

彼女が見上げる視線の先は、背後から馨に抱き着いている美形の妖魔。

戦々恐々と振り返れば、まばゆいばかりの破顔を向けられた。

「……月刻……っ！」

狭い洞窟の中で男の名を口にした絶叫は、思いの外盛大に轟いた。

未だ自分達の後を追ってくる漆黒の美青年に辟易しながら、馨は華蘭の手を引き川を下る。

昨晚の雨で水が増水しているが、ぬかるんだ地面を歩けば足跡が残り、それを辿った山賊に再び襲われる可能性があった。立て看板をしてまで注意を促しているのだ。恐らくこの山に出没する輩は三人だけではないだろう。

自然災害も勿論怖い。けれども山賊に遭遇する方がもっと耐え難いという華蘭の意見を踏まえ、鉄砲水に気をつけながら転石の上を進むことにしたのだ。

ムスツと頬を膨らませる馨と、そんな彼女から数歩離れて続く月刻を、華蘭が交互に見つめている。わざわざ確認せずとも困惑しているのが繋いだ手と雰囲気から伝わってきたが、自分達が夫婦どころか顔見知り程度の間柄ではないことは口を酸っぱくして唱えたのだし、これ以上は説明しようがない。

(そりゃ同じ年の女子と比べたら背は高いし、街歩いてて二十歳以上に見られることなんてしょっちゅうだけど、私はまだ十五だつての！酒も煙草もご法度で、親の承認があつても結婚できないつてのに！それどころか妖魔と夫婦なんて……いくら顔が良かつたつて絶対するか！)

「馨っ！手、痛いっ」

「あ、ごめん」

怒り任せに華蘭の手を思いきり握り締めていたようだ。慌てて手を放す。

「あの……月刻、さんは確かに格好良いけど、私、何とも思っていないからね？」

(……うん?)

「その……ヤキモチとか、そんなの焼く必要ないから」

「だから！夫婦でも恋人でも、ましてや友達でもないってのに……
……ってそこ、爆笑するな！」

腹を抱えて哄笑する男に噛み付くような勢いで振り返りつつ、少女の発言に脱力を隠せない。

どうやら二人が出逢って間もないということは理解しつつも、月刻が熱烈に馨を口説こうとしていることもあって、馨も口では月刻を拒絶しながらも、照れ隠しから憎まれ口を叩いているだけだと勘違いしたらしい。そこに自分が現れたものだから、馨の胸中は穏やかではないとでも考えたのだろうか。

何という冗談にしても笑えない勘違いなのだ、砂色の髪 of 妖魔封印土は肩を落とす。

「虫の居所が悪くて華蘭の手を強く握り締めちゃったのは悪かったけど、ヤキモチとか有り得ないから」

マジ勘弁して、と大きく溜息を吐いた馨は止めていた足を再び前進させた。

「あの……ところで一体どこに向かっているの？」

「風の国。聖域で一番文明開化を遂げている国なんだけど……分かる？」

「花の国の隣りにある国……っていうのは覚えてる、かも」

「うん。地の国と花の国に隣接した聖域最大の領土。私はその首都に向かっているんだけど、華蘭も一緒に行こう。大きな国の首都なら警吏団があるはずだから、華蘭に家族や恋人がいたら失踪届が出てる可能性もあるし、尋ね人の情報も集まりやすいと思う。出身国が風の国じゃなくても、情報流通が発達してるところらしいし、もしかしたら他国の行方不明者も含めて捜してくれるかもしれない」

「うん……！」

自分がどの誰なのか分かるかもしれないという高揚感で頬を紅潮させる華蘭に、馨も表情を綻ばせる。

山賊に襲われ、しかも記憶喪失というのだから、警吏団は全面的に協力してくれるだろう。どれだけ時間がかかるか分からないが、早く華蘭の記憶が戻ってくれたら良いと思う。

警吏団に立ち寄ることですら少し時間をくらすかもしれないが、志雄が言っていた式典も首都で行われるはずなので、大した口スにはならないはずだ。聖域で最も賑わっている地とあって目新しいものに移りしてしまう恐れもあるが、目下一番重要視すべき点を忘れてはならない。

（五十嵐姉弟の搜索。一刻も早く現世に戻らないと……）

大怪我を負った祖母の状態。親友との遊興。夏休みの宿題。そして、近い自分の将来

成さねばならぬこと。考えなければならぬこと。選択せねばならないこと。篩分けによっては、すぐに取り掛からなければならぬことだ。ことだ。ことだ。ことだ。

上空を高く仰げば、日は真上の上っていた。そろそろ昼時だ。お昼にしようかと呼びかけたそのとき、得体の知れない何か近づく気配を感じた。

「……馨？」

「華蘭、私からなるべく離れないでね」

周囲を警戒しながら左から右へ、前から後ろへと首を巡らせる。

音を聞いたわけでもなく、異臭を嗅ぎ取ったり、視界の隅に何かチラついたわけでもない。強いて言うならば、嫌な予感という第六感。

けれども強ち間違いではなさそうだ。ふと横目で月刻を見遣れば、彼は先程からある一点だけをジッと見つめていた。馨もその方角に目を凝らす。

（鬼が出るか蛇が出るか……というか、この場合出てくるのって

）

「妖魔だよ、やっぱり」

激しく流れる山川水の向こうの茂みから姿を見せたのは、二足歩行

の生物。一首二腕と体軀は人間のそれと酷似しているが、額から角が生え、皮膚も土色であることから、明らかに人外の存在。白い目玉を宙に向け、上向いた鼻をひくつかせて、明瞭を得ない音を吐き出しながら唇の両端から涎をぼたぼたと零している。

馨達の存在に気付いている様子はなかったが、「ヒツ！」と華蘭が漏らした小さな悲鳴を耳聡く拾い上げ、二つの眼球を三人の方へ動かした。そして獲物と判断したのか膝を折り曲げると短く助走し、水流の上空を高く跳んだ。

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」

広げた掌を妖魔に向けて攻撃を放つ。恐らく馨達のすぐ傍に着地しようとしていたのだろうが、火の玉に直撃して妖魔は川の中に落ちた。しかしすぐさま立ち上がって今度は疾走し近付こうとする。

「【怒りの黄の雷よ、我に力を】！」

水に濡れているのならばと、砂の国で妖魔を倒したときのように感電させればいいと雷の術を唱えるが、今度は避けられてしまった。しかしその間に風の術を唱えて防御壁をつくる。

「オアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

見えない壁に遮られ転倒した妖魔は、それから幾度とぶつかってこようとするが、思うように獲物に近付けないことに苛立ち、今度は転石を掴み放ってきた。まるで子どもが癩癩を起したかの如く咆哮しながら大小関係なく次々投げつけてくるが、そのスピードがかなり速い。小さいものなら大した打撃にならないが、大きなものならば話は別。一度ぶつかって壊れるほど柔ではないとはいえ、何度も剛速球で暴投されれば、いつか破られてしまう。

「走って！」

震える華蘭の手を引いて馨は駆け出した。足場が悪い所為で速力は大きく出ないが、このままジツとしていれば闘う術を持たない彼女にまで被害が及びかねなかった。おまけにいつ気絶してもおかしくない顔色。昨日から散々な目に遭っているだけに、すぐにでも緊張の糸が切れてしまいそうだ。

(反撃するにしても、一度華蘭を安全な場所に隠してからじゃないと……)
そう思案していたのも束の間、思いの外早く防御壁が壊されてしまった。

そしてタイミング悪く破れた箇所に向こうに華蘭はおり、そこを目掛けて石が投げられる。

「危ないっ」

術を唱える余裕はなく、少女を庇い押し倒した直後に小さな投石が下顎に直撃した。

痛みと共に熱がはしる。当たったときに頬肉を噛み切ったらしく、口いっぱい血の味が広がる。

ぺっ、と赤色混じりの唾液を吐き出し、当たったことにはしゃいでいる様子の敵を見据えながら、馨は男の名を呼ぶ。

「……月刻」

「うん？」

「華蘭をお願い」

本当ならば決して頼みたくはない相手。けれども誰かを守りながら闘うには、自身の現段階の能力では力不足。華蘭を無傷で匿うには、自分の力を上回る実力者に彼女の守護を任せなければならない。

「え〜。馨なら喜んで守ってあげるけど」

この状況で文句を言う彼の胸倉を掴み、顔を近付けさせる。そして馨はぶつけるようにして月刻の薄い唇に自らのそれを重ね、次の瞬間には乱暴に突き放した。

「安くないわよ。私からするキスは」

「……上等」

交渉成立。

月刻と華蘭に背を向け妖魔と向き合えば、敵は再び転石を掴み振りかぶっていた。

「【囁く緑の風よ、我に力を】」

今度は攻撃する為に風の術を紡ぐ。鎌鼬の如く素早く真空を走る刃

が放られた石を真つ二つにし、スピードを落とさず敵へと向かっていく。

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】」

風の術を避けた妖魔だが、そちらに気を取られていたようで炎を顔面で受け止めて身悶える。そして身近に流れる川の存在を思い出し、たらしく、駆け出した。

(させるか！)

「【揺るがす茶の大地よ、我に力を】」

地面に手を付いて川との間に岩石の壁を造る。盛り上がった高さは妖魔の背丈を優に越え、幅も視界に入る箇所まで覆ってしまう。激昂したらしい妖魔は怒声を迸りながら馨へと突進していった。

「そんなに火傷が嫌なら凍らせてあげる。【冷却の瑠璃の氷よ、我に力を】」

振り下ろされた拳を避け、代わりに妖魔の腕に触れる。するとそこから見る見るうちに土色の肌は凍りついた。そして最後に風の術を唱え、再生不可能なまでに四肢を切り砕く。

(新時代の妖魔でも、かなり力があつたかも……)

暫く聖域を離れていた為、もしかすれば年々妖魔の力量は上がってきているのかもしれない。

もしそうならば厄介だと、眦を眇めて嘆息し、気を取り直して月刻と華蘭の方へ振り返った。

「……華蘭？」

離れていても判別できるほどに彼女は震えていた。服が汚れるのも厭わず膝を着き、胸の前で左右の腕を交差させてそれぞれの肩を抱き締めている。

「華蘭、大丈夫っ？」

足早に駆け寄って少女の顔を覗き込めば、金の髪越しに赤い瞳に見つめ返される。瞳孔が開いたそこは、恐怖に揺れていた。

怯えた表情に馨は胸を痛める。そしてふと、こう思った。

(華蘭が記憶を失くしたのは、妖魔に襲われたからかもしれない)

妖魔の被害に遭った者は数知れない。それこそ何百年という大昔から、人は妖魔の脅威に脅かされてきたのだから。

事態に妖魔が絡んでいるのなら、記憶を失うほど壮絶な目を味わわされたと推測できないことはない。

「怖い……」

大粒の涙を零す華蘭を抱き寄せ、馨は一刻も早く少女が泣き止むよう優しくその背を撫でた。

そんな二人の傍らに佇む月刻は、慰める砂色の髪の少女を無表情で眺めていたが、やがて小さく微笑んだ。

吊り上がった口角に滲むは慈しみか、嘲笑か。

……振り返らない馨はそんな彼の胸中など、知る由もない。

何者かが領域テリトリーに足を踏み入れた。わざわざ誰何せずとも、ここに侵入できる者は限られている。いや、正確にはこうなってしまった自分を保護という名目の捕虜にした女と、ここまでの自由を広げてくれたあの姉弟。そして姉弟の指示でメンテナンスを行う作業者達。聞こえてくる足音は一つ。ならば考えられるのは一人しかない。

『何の用だ？』

「せっかく退屈じゃろうと思うて妾が来てやったというのに、冷たい反応じゃのう」

『さつきまで侍女を部屋に連れ込んでいた奴が元気なもんだ。この国を統べる女王陛下が夜な夜な女と情事に耽ってるなんて、国民に知れたらどうなるだろうな』

『せっかくの美貌なのに宝の持ち腐れだ』と首を振れば、女王陛下と呼ばれた美女は紅を引いた唇を弓形に吊り上げた。

「勿論この麗しい見目もあるが、国民は妾の采配を崇めておる。そんな妾の性癖など、大した意味を持たぬわ」

この国の民は宗教や戒律に囚われる性分ではないので彼女の言う通りなのかもしれないが、それでも他国にはそんな戯言通用しないの

ではないかと鼻白む。

「そなたが実態化した姿こそが妾の理想の相手なのだがなあ」

『冗談じゃない』

「……強いて言うなら、少しきつい言葉遣いも直してくれたら良いのじゃが」

『馬鹿も休み休み言え。もしあたしが実在する人間になれたとしても、お前の伽など死んでもお断りだ』

「それは残念じゃ。……それより、式典はもうすぐじゃが、問題はないな」

表情を引き締めた女王に『問題が出たらすぐに知らせている』と憎まれ口を叩き、彼女は女王を領域から追い出した。

小さく嘆息を吐き、先程揶揄して告げられた言葉を呟く。

『あたしが実体化した姿、か……』

脳裏に過ぎるは、自分と同じ……否、自分であって自分の半身でもある幼い幼女。

十年前の事件を境に自分達は切り離され、違う道を、世界を歩まざるを得なくなってしまったが、唯一無二である少女を無事あの悲惨な状況から守り抜けたことは、今でも彼女の誇りだ。

『馨……』

右は朱、左は藤。左右色の異なる、現世からやってきた妖魔封印士と同じ瞳を持つ彼女は、寂寥に声を震わせながらかの少女の名を紡ぐ。

逢いたい。けれどもここに来られては十年前の願いが水の泡と化してしまふ。

胸に渦巻くジレンマに唇を噛み締め、彼女はそっと瞼を伏せた。

風の国（巻）

昔、誰かが言った。

『他人にない特異を持つ者は、それ故に孤独を抱えているのだ』と
地のを後にして丸一週間。山に登り、木々の間を掻い潜って川沿いに突き進み、非常食と山菜で飢えをしのぎながら無事、国境を越えることができた。

登山必需品を購入した際に店の主人から、山越えにはおおよそ一週間はかかるかと聞いていたので憶測どおりといえればそれまでなのだが、欲を言えば一日二日短縮したかったのが本音だ。その原因が主に雨による天災だったわけだが、山賊や妖魔に足止めを食らわされたのも要因の一部ではあるので、それを思い返せば実に腹立たしい。けれどもそれらはまだ、想像の範疇ではあった。

予想外で、そして衝撃的でもあったのは、記憶喪失の少女との出会い。予め多めに食料を用意していたとはいえ、連れができたことにより、山越えした今日になってついに鞆の中の食料は尽きてしまった。水の術で喉を潤し、干し肉や乾パンといったものに加えて自生食物のおかげで空腹感に苛まれることは免れたが、これ以上山の中を進むなら動物狩りをしなくてはいけないかもしれないと密かに危惧していたことは、誓の胸の内だけに閉まっておく。

「やっと着いた、風の国〜！」

斜面を下り、平地になった地面にホッと安堵の息を吐きながら傍らに立つ看板を覗き込めば、<風の国>の文字。

両腕を上げて背伸びをしながら天を仰ぐと、空は茜色に染められていた。あと半刻もすれば完全に日も沈んで藍色へと移り変わるだろう。夜はすぐそこだ。

「この近くに村でもあれば良いんだけど……」

華蘭と二人してキヨロキヨロと周囲を見渡すが、民家どころか人の気配さえ見受けられない。

一晩の空腹感を胸にここで野宿することも検討するが、とりあえず日が完全に沈むまで歩くことにした。食料補充したいのは勿論な話、山中では水浴びでしか汗を流せなかったので、そろそろゆっくり湯舟に浸かりたいというのが率直な本音なのだ。口には出さないものの、同性である華蘭とて気持ちは同じだろう。

因みに、馨に引っ付きたがる漆黒の男についてはノーコメントだ。水浴びの際に何度押し問答があつたか……回想するだけで精神は疲労困憊してしまいそうになる。

「……やっぱり人気ないね」

日も暮れて、やはり野宿決定かと落胆したときだった。

「馨」

暇だからと、馨の砂色の髪を弄んでいた月刻から名を呼ばれる。ちらりと頭一つ高い相手の顔を見上げ、その視線を追ってみれば、微かながらも明かりらしきものが見えた。よくよく目を凝らせば照明こそ灯されておらずも、何軒か家らしき建築物が並んでいる。

「華蘭、あそこ！」

明かりが見えたことに二人は手を取り合って黄色い悲鳴を上げ、一目散に走り出した。

「見つけたの、俺なんですけどー」

「お礼の一つ言ってくれてもいいんじゃない？」と唇を尖らせながら、漆黒の妖魔も少女達の後を追う。

人が居を構えているらしきその方角へ近付いてみれば、案の定民家が幾つか軒を重ねていた。低い柵で囲われたそこはどうかやら集落のようだが、しかしその内カーテン越しに照明の光が窺えるのは、僅か三軒のみ。日も暮れて間もないというのに、人の気配はかなり薄い。

（留守の家が多いけど、どうしたんだろう？）

不可解に首を傾げつつも、一先ず近くの明かりが灯っている家に声をかけることにした。

「ごめんくださいーい」

トントントン、と三度のノックをしてみれば、間もなく家の住人らしき中年の女性が顔を覗かせた。一見人の良さそうな顔立ちではあるが、見覚えのない訪問者だからだろう。怪訝そうに眉間に皺を寄せられてしまう。

「夜分すみません。実は地の国からやって来たんですが、この辺に宿泊できる場所ってありませんか？」

「あらあら。時期が悪かったわね。一応この村にも宿はあるんだけど、ここ暫くは閉めてるのよ」

殊勝な態度で訊ねたことに加え、背後にいる月刻の美顔が視界に入ったのだろう。女性は頬を赤らめながらにこやかに答えてくれた。

（現世と変わらず、聖域せいじくのおばさんも美形の男を前にすると態度変わるんだなあ）

さり気なく鬢髪を逆の手で耳の後ろに掛けようとする仕草に苦笑しかけるが、それを堪えて疑問に思ったことを口にする。

「時期って……？」

「ほら、もうすぐ首都で開かれる式典。あなた達もそれを見に地の国から来たんでしょう？実質あと一週間ちよつと日はあるけど、お祭りの準備とか人手が足りないからって、村の殆どの人が借り出されてるのよ」

「男手が減って畑仕事が大変だわ」と徐に溜息を吐く女性に相槌を打ちながら、髻も胸中で辟易する。

（ここから首都まで、まだまだ距離あるんですよ。こんな田舎にまで人員要請するなんて、どれだけ盛大なこと仕出かすつもりよ）

つまり式典には想像を超える人が集まるということ。目的の五十嵐姉弟を見つけるのはかなり骨が折れるかもしれない。

しかし今重要視するべき点は首都にて行われる式典ではなく、今晚の宿泊手段。

「あの……差し出がましいんですけど、泊めていただくことってできませんか？」

極力眉尻を下げて困っている様子を心掛け、申し訳ない表情をつくって頼み込んでみる。現世では窮地に追い込まれば大概これでも切り切れたのだが、はたして聖域では通用するだろうか。

馨、華蘭、そして月刻の順に顔を一瞥した女性は最後に再び馨に目を留めたのだが、双眸がかち合った刹那、要望が適わないことを悟った。

「ごめんなさいね。うちはちょっと狭いから、三人も泊まれる余裕がなくて……」

「じゃあ彼女だけでもお願いできませんか？」

横に並んでいた金髪紅眼の少女を前に押し出し、女性にそっと硬貨を握らせる。

「え……こんなに？」

「馨……？」

驚愕する二者に背を向けて馨は歩き出した。女性の瞳に歓喜が宿ったのは見て取れたので、これで華蘭を邪険に扱う心配はないだろう。

「明日の朝迎えに行くから、ゆっくり休みなよ」

自分呼び止めようとする声に後ろ手で振り返しながら、馨は村の外れへと足を運んだ。梟や虫の鳴き声に耳を傾けつつ、大きな樹木に背を預けてズルズルとしゃがむ。

上空を仰げば星はなく、代わりに月が出ていた。こちらにやってきたときは違い欠けてはいるが、それでも眩いばかりの月明かりを地上にもたらしている。おかげで地面に転がる小石の色さえ判別できる。

そんな彼女の傍に近寄る男が一人。

「馨ってば、そんなに俺と二人きりになりたかったんだね。言ってくればあんな小娘、どこにでも飛ばしてやったのに。何なら殺して」

「勘違いも甚だしいっての。それに物騒なこと言わないで」

「え〜。あの小娘の所為で馨とのラブラブタイムが減っちゃったのは事実だし〜」

（ラブラブタイムって何?!……ってツッコミたいけど、それ口走ったら間違いなく話が脱線して、そのうえ変なことベラベラ言うに決まってるし）

「それに馨、さっきあの小娘しか泊めさせようとしなかったじゃん」
「妖魔のあんたに出すお金なんて一銭もないっての」

「何にせよ、今晚は久々に二人きりってことだよな。馨からこの状況をつくつてくれるなんて……馨って意外と大胆」

若い男女が夜、二人きりで寄り添っているこの状況。月刻と共に過ごす夜は不本意ながらこれまでもあったが、その漆黒の瞳に、あからさまに色欲をちらつかせたことなどはたしてあっただろうか。少なからずからかい混じりの色もあるように馨の目には映っているが、それ以上に前者の方が濃厚に露出している気がしてならない。

（……あれ?もしかして私、結構ヤバイ?）

咄嗟に月刻の口元に手を伸ばし唇を防ごうとするが、それより早く、彼は馨の両手首を掴んで片方の手だけで纏め上げた。

「待って!待って、待って、ストップ!」

「待たない」

これから何をされるか、短い付き合いながらも簡単に想像がついてしまい、精一杯首を横に背けるが、手首を掴まれた方とは逆の手で再び正面に向き直された。身を振るうにも、それ以上の力で封じ込められる。

黒耀石と見紛う双眸が静かに伏せられる。

（もう駄目……）

全身に力を入れた状態で馨もまた、固く瞼を閉じた。

月刻にされるキスを嫌がるのは、彼が妖魔だということは勿論ではあるがそれ以上に、キスだけで心が陥落してしまいそうになるからだ。唇を重ね、舌を絡ませて、無意識に深く深く交わろうとしてしまう。自分を相手に委ね、また相手を受け入れようとする。キスと

いう行為だけで脳が痺れ、快感に溺れ、そのまま堕ちてしまいそうになる。

堕ちた先にあるものとは絶望か、はたまた底無しの海か……どちらにしる禄なものではないだろう。

それでも、例えそうだと分かっているとしても、求めてしまいそうになる。そんな自身の一面が、馨は許せない。

「……………」

目を閉じて数秒、覚悟していた感触が一向に訪れない。さすがに訝しんで薄目でそっと、片方の瞼を持ち上げる。

すると飛び込んできたのは、してやったりと不敵に口角を吊り上げた男の顔。

(こいつ……！)

てつきり口付けされるとばかり思っていただけに、馨は眉間に皺を刻み、オッドアイの双眸を眇めて月刻を睨みつける。

対する漆黒の青年はというと、頬を紅潮させた彼女を見つめて形の良い薄い唇を開いた。

「元気出た？」

「は？」

「落ち込んでたでしょ。さっき」

柔和な笑顔でそのように告げられて茫然と瞠目する。

村の外れまで足を運んだのは、偏に人の目につかないようにする為だった。志雄からの忠告どおり、風の国での半妖批判は鳴りを潜めてきているらしいが、昔の風習とあってか、そう簡単に蟠りは消えないようだ。

先程馨を一瞥した中年女性の目には、一瞬ではあったが嫌悪が滲んでいた。

半妖ではない。けれどもその血を濃く受け継いでいるとあって、生まれながらにアシンメトリーを持つ馨は、この聖域に度々足を運んでいるときにも、幾度とあのような眼差しを向けられてきた。いや、今日はまだ軽度なもので、あからさまに舌打ちされたり、酷いとき

は石を投げられたりしたものだ。

だから今更だと思っていたのに

（久々にドキツとしちゃったただけなんだけど、へこんでるように見えたのかあ）

妖魔の血が流れている事実には、悲観したり、恨んだりした覚えは一度としてない。それは虚勢では決してなく、かつてそのことに悩む自分を慰めてくれる存在がいたからだ。

（あの子の代わりにこいつに慰められたのが、ちょっと腹立つけど）
「……心配してくれてありがとう」

照れ臭さが先立って視線を合わせるとは適わなかったが、少女は声を潜めながら礼を紡いだ。

そんな彼女の頭を撫でる月刻の表情が、普段のふざけた態度とは打って変わって非常に甘く、物柔らかであったことなど、馨は知らない。

広げていた新聞紙から顔を上げて時刻を確認すれば、短針は五、長針は十二を指していた。

猛暑の厳しい夏真つ只中とあって、窓の外から入ってくる日差しはまだ陰りを帯びていない。一步外に出れば瞬く間に熱気にやられるのは間違いないだろう。つくづく、従業員でもあり居候でもあるBとその親友に買い出しを頼んで良かったと、南雲は冷房の利いた店内で密かに笑む。

「B達が戻ったらちゃんと労りなよ。外、暑い上に日差しもキツイんだから」

カウンターの一番端のスツールに腰掛けていた魔女がノートパソコンから目を離さぬまま、嘆息混じりに呟く。長い付き合いとあってか、わざわざ顔を突き合わせずとも空気だけでこちらの表情を読めるらしい。

「最近仕事帰りにビールを一杯飲む客が多いから、早めにバーを開

「けようかと思っただよ。けど喫茶店（しじや）に客が残ってるんじゃない、まだ閉めねえよなあ」

意趣返しとばかりに揶揄するようにそう言っただけで、魔女は眼鏡の奥の黒目を眇めてむう、と顎に皺を寄せた。

事実、昼は地上で喫茶店、夜は地下でバーを開く“World cross”は大体十七時から十八時を目安に昼と夜の顔をシフトさせる。勿論、何年にも渡ってこの店の常連客である彼女がこれを知らないわけがない。魔女が外に出たがらない理由は至って簡単。

「……あたしが暑いのが苦手なの、総長知ってるでしょ？」

「追い出されなくなったら俺の心読むんじゃないの？」

南雲とてある程度魔女のことを知ってはいるつもりだが、それはあくまで表面上に過ぎない。

あくまで本人と関わりある者に限定されるが、視線の動き、身動き、醸し出す雰囲気……そういった類で彼女はこちらの心情をいとも簡単に察してしまう。普段は大して喜怒哀楽を明確にせず、良ければクール、悪くいえば赤の他人には微塵も興味を持たないくせに、困却しているのが身内と認められた相手ならば、一向に協力を惜しまない。

但しそれは、スプーンひと匙程度の助力。助言。

彼女は自分が深く介入することで他人の運命を歪めてしまうことを恐れている。それが刹那の時間だったり、ほんの僅かな屈折だとしても。

“魔女”とはそういった性（さが）なのだ、数年前酒に酔いながら愚痴を零していたのを思い出す。

「明日で盆も終わるか。早く涼しくなってくれりゃいいのにな」

「暑さもそうだけど、委員長には早く戻ってきてもらった方が良さそうかも」

「あ？委員長？」

店長である南雲よりも長く“World cross”に勤めている中学生は、現在実家に里帰りしている。家族への顔見せも勿論あ

るのだろうが、遠距離恋愛中の彼女との再会が一番の目的のようだった。写真さえ見せようとしないので委員長本人の語りでしか得られなかった情報ではあるが、随分と年上の、小柄で着物姿が良く似合う可愛い娘とのこと。

（俺からしてみれば、あいつ自身が都市伝説みたいな存在だからな。付き合ってる相手の正体が宇宙人だろうと幽霊だろうと、そんな驚かねえかも）

シガレットケースから嗜好している煙草、ピアノシモ・ペシエ・メンソール・ワンを一本取り出し、厚めの唇に啣えて火を点ける。肺の中に煙を押し込み、吐き出して仄かに香る桃の匂いを堪能し、それから疑問を口にした。

「委員長がどうかしたのか？」

「馨ちゃんの助けに委員長の助けが必要不可欠ってこと。このままだとあの子、聖域から現世に戻ってこれない」

唇から煙草を離し、「どういうことだ」と眉宇を顰めれば、魔女もまた、あまり思わしくない表情を浮かべていた。

「馨ちゃんが現世に戻れないように、聖幻鏡に細工が仕掛けられているみたい」

聖幻鏡というのが現世から聖域に行く為の、精現鏡というのが聖域から現世に戻る為の鏡だと、以前教えられた。

「どうしてそんな真似……っか、誰がだよ？」

「今あの子の傍にいる相手だろうね。それが協力者という妨害者なのか、妨害者という協力者なのか……あたしには何とも言えない」
頬杖を付いて溜息を吐きながら魔女は漆黒の瞳を細める。その瞳からは特に、話に挙げている相手を忌む様子も、また敬遠する雰囲気も見受けられない。ただ、厄介とだけ。

「わざわざ委員長の帰りを待たずとも、お前が何とかすればいいだろ」

「そうしてあげたいのは山々なんだけど……あたしはあくまで第三者。間接的な助けの、更に輪を掛けた助けならしてあげられる。で

も」

「不可侵という名の境界線を越えれば、運命さだめを捻じ曲げることになる。……前に言ってたよな」

「……分かってんじゃない」

開いていたノートパソコンを閉じてグラスの中のアイスコーヒーを啜る。氷が解けて水っぽくなっているだろうに、魔女はそれを気にすることなく嚥下した。

「で、その相手はどうして馨を帰したがないんだ？」

「総長はさ、嫌われてもいいから好きな相手を自分のテリトリーに置きたがる人の気持ちって分かる？」

「………は？」

「要約すれば独占欲。でもあたしに言わせてみればそんなの、ただ器量が狭いだけにしか思えない。相手の尊厳や自由を奪って自分の勝手を突き通そうなんていうのは馬鹿げてる。傲慢も甚だしい」

緩く首を振って再度嘆息を吐くと、仕事道具である機器を鞆の中に仕舞い始めた。窓から入る日差しがややオレンジがかったきたが、日の入りにはまだ早いだらう。それでも時刻が時刻なので、そろそろ帰るようだ。

名残惜しいが、南雲も店主としてバーの準備をしなくてはならない。

「……俺は絶対しねえけど、好きな奴を閉じ込めたくなる気持ち、分からねえでもない」

「うん。あたしもさ、批判はするけど否定するわけじゃないよ。でも……相手や周りの都合も撥ね退けて、一方的に自分勝手を振り撒くのが、あたし個人としてはムカつくだけ」

魔女としてではなく、杏子という個人して。

肩を竦めた魔女は立ち上がると、カウンターに代金を置いて扉へと向かった。

「それじゃ総長、委員長に今のこと伝えといてくれる？」

「おいおい。自分で伝えるよ。どうせ近いうちにまた来るんだろ？」

「分かんない。でも多分、あたしがまたここに来るより委員長が帰

ってくる方が早いと思うからさ」

そう言って最後の客は“World cross”を後にした。短くなつた煙草を灰皿に押し潰し、南雲は宙を見上げる。

魔女の忠告はかなりの確率で当たる。なので委員長も思いの外早く帰ってくるだろう。そして彼が帰ってくるまで、魔女はここに立ち寄るつもりはないということ。表向きはライトノベル作家なので、仕事の締切が迫っているのかもしれない。

(仕事っていえばBの奴、どこまで買い出し行つてんだ?)

肺に充満させていた煙を吹きかけるように吐き出して、南雲は表の看板をOPENからCLOSEに変えるべく、重い腰を上げた。

風の国（式）

昔、誰かが言った。

『我を忘れ暴走すれば、冷静になったときに恥を知る』と

「す、凄い……」

感嘆の溜息を零す華蘭の横で馨もまた、茫然と頷いた。

縦横無尽に行き交う人、人、人。摩天楼の如く高く聳え立つ建物。活気に溢れた呼び込みの声。華々しい広告看板。通行人を立ち止まらせるようなパフォーマンスを披露する旅芸人……。

全くの無人である砂の国や、人こそいるものの住宅も少なく、これといった目玉もない辺鄙な地の国とは正反対に、風の国の首都は大いに賑わっていた。強いて例えるなら現世の都会と似通った光景と言えなくもないが、それでも目を瞠り驚愕してしまうのは、猛烈な活気に圧倒されてしまったからだろう。

恐らく普段でさえ賑わいを見せている地であるのに、例の式典を目前に控えているからか、喧騒と紙一重に浮足立っているように映る。それは大いに、国民も、観光客も、この機会に自身の特技を売ろうとしている者も皆、笑顔で催しを楽しもうとしているからに違いない。

「じゃあここでお別れですな」

呆気にとられる馨達に呼びかけたのは、聖域各国を遊牧する雑技団一行だ。都心に向かっていった馨達と目的地が一緒ということで、休憩の度にビラ配りを手伝うことを条件にここまで運んでくれたのだ。おかげで予定よりだいぶ早く到着することができた。

「本当にありがとうございました」

頭を下げようとする馨と華蘭を留め、代わりに団員達は手を差し出す。

「こつちこそ、宣伝手伝つてくれてありがとう」

「絶対観に来てね」

「明日から開催するからね！忘れないでよ！」

世話になった者達と握手、ときに抱擁を交わしながら「是非観に行きます」と告げて、雑技団とは別離した。

馬車の中から手を振ってくる団員の幼子達に手を振り返しながら見送っていれば、いつの間にやら漆黒の妖魔がすぐ傍まで寄ってきていた。

「で、これからどうするの？」

耳にかかった吐息に肩を跳ね上げて振り返れば、思いの外間近に相手の面があった。眼前に広がる青年の美顔に、カツと頬に朱をはしらせる。

切れ長の漆黒の瞳に象牙の肌、高い鼻筋、薄い唇……相変わらずの美貌に思わず溜息を吐きたくなるが、相手の息が届くということは、こちらも喋るだけで伝わってしまうということ。さすがにそれは気恥ずかしく、慎重に、じりじりと後退する。

先日、妖魔の血が流れていることを理由に宿泊を拒否され、柄にもなく落ち込んでいた際に慰められたあの日から、月刻を目にする度に心がざわめくことが多くなった。これまでもふとした瞬間に動揺することはあったが、最近はその頻度が増長傾向にある。気配を感じているときもそうだが、ふとそれがなくなったときにさえ、頭の片隅で彼のことを考えている自分がいる。

(こいつは妖魔。こいつは妖魔。こいつは妖魔……！)

そんな己に言い聞かせるように相手の正体を胸中で何度も呟きながら、誓は平然を装うようにして咳払いをし、ぐるりと周囲を見渡した。

「宿を探したいところだけど、まずその宿泊費を下ろさないで……」

……てことで月刻、二手に別れよう」

「は？」

「私と華蘭はまず警吏団に行つて、華蘭に失踪届出てないか訊いて

くる。それからギルドに寄ってお金下ろしてくるから、月刻は宿見つけてきて」

「待って、待って！なら俺が馨と一緒に行って、こいつに宿見つけさせたらいいじゃん」

華蘭を指差す手をベシツと叩き下ろし、馨は月刻と正面から向き合う。妖魔というのは大概人間を軽侮する生き物だが、この妖魔もまた、馨以外の者を蔑ろにする傾向が強い。寧ろ馨にしか甘い顔を見せない。

（私に付き纏う理由、いつもはぐらかされるけど……手遅れになる前に訊き出さなきゃ、ね）

手遅れ、というのが何を指すのか、馨自身漠然としか見出せない。敵として以外の感情、例えば友情を持つてしまうことか。彼が予告もなく、忽然と自分から姿を消してしまうことか。油断させて寝首搔かれてしまうときか。はたまた

「馨？」

何でもないと言いつつ、再び相手を仰ぎ見る。

「記憶喪失の華蘭を一人にさせるわけにはいかないでしょ。ていうか、搜索されてるかもしれない本人を警吏団に連れて行かなくてどうすんの。だからってあんたと二人きりにさせるのはかなり不安だし。……月刻にしか頼めないの。駄目？」

若干顎を引き、半妖などと騒がれないよう対策として被っていたフードの裾から窺うようにして相手の顔を見上げれば、月刻の表情がピタリと固まった。意図して異性がたじろぐ仕種を試してみせたのだが、はたして妖魔にも通用するのか。これまでの経験上、現世の男相手には効果抜群だったのだが……漆黒の妖魔は彫刻の如く身動き一つしてくれない。

「え〜つと、月刻……？」

小首を傾げて違う角度から覗き込んだ瞬間、思いきり抱き着かれた。

「あ〜も〜！可愛い、可愛い、超可愛いっ」

「ぎゃー！離れるー！！」

ワタワタと抵抗しながら提示した条件を呑んでくれるのかと問えば「誓のお願いだから仕方ない」と、結局は了承してくれた。それは非常に助かったのだが……誓の胸の鼓動は全力疾走した後のように高鳴ったままだ。動揺しているのを知られたくない一心で赤くなつた顔を隠すように俯きつつ、口早に重要事項を喋る。

「じゃあ一時間後にその広場に！できるだけ安いところをお願い！無理そうならあんたの判断に任すから！」

「了解。……とりあえず言質は取ったからね」

ぼそりと呟かれた言葉を怪訝に感じながらも、相手の腕の力が緩んだ隙にそこから抜け出すと、華蘭の手を取り駆け足でその場を離れた。

人前で抱き着かれたことも然ることながら、思わず声を大にして抵抗したので、周囲から注目を浴びてしまっていた。端麗な容姿で不特定多数の視線の的になるのは慣れていたが、あのような瞠視のされ方は非常に気にくわない。鏡で確かめずとも羞恥、そして気恥ずかしさから耳まで赤らんでいるのが分かる。

賑わう人の波を抜け十数分、たいした距離でもなかったが、警吏団の所属する門を潜る頃には思いの外、体力を消耗していた。もしかすれば妖魔と闘う方がよほど楽かもしれない。隣りに佇む金髪紅眼の少女もぐつたりと脱力していた。

改めて建物の中を眺めれば、地の国とは違い、清潔感ある屋内は結構広い。今は式典が近いとあって警備に駆り出されている者が多いのか閑散としているが、普段は人の出入りが多いのだろう。窓口が複数に設けられている。

「こんにちは。ご用件はギルドと警吏、どちらでしょうか？」

（案内担当まで用意されているとか、まるで銀行か市役所みたい……って）

「あれ？ここって警吏団の施設だけじゃなくてギルドと兼用してるんですか？」

「はい。この国の警吏に関する職に就いている者は全員、妖魔封印

士、或いは妖魔殺戮士で、ギルドに所属しております」

どうやら内勤者も例外ではないらしく、案内担当を宛がわれているその女性職員はスーツの胸ポケットから証明手形を提示した。

「なら丁度良かった。私、地の国から来たんですけど、旅の途中で記憶喪失の彼女と逢ったんです。彼女がもし風の国の民でなくても、聖域の中で最も情報通のこの国の首都なら、例えばの場所で失踪届が出されてたとしても見つけてくれると思って……」

記憶喪失という件で疑わしげな目を向けられるが、不安そうに縋るような華蘭の目に嘘はないと判断したのだろう。女性は馨にロビーで待つよう指示して華蘭を別室へと連れて行った。

さほど時間はかからないと言われたが、何もせずただ待つのも暇なので、そのあいだに預けていたお金を引き出そうと別の職員に声をかける。

「本人確認の為、証明手形の提示と暗証番号、キーワードをお願いします」

パソコンのような機械が聖域にも普及していることに内心驚きながらも、さすがにキャッシュコーナーがないことに落胆しつつ、馨は唇を開いた。

「七、二、七、三、七、七。キーワードは……胤斐^{いんひ}」

どうやらこの国での華蘭の失踪届は出されておらず、他国に関しては三日ほど時間を要してしまつらしい。式典の警備等の準備もあって華蘭の保護にまで手が回らないということで、再び身柄を馨が預かることとなり、後日再び足を運ばせてもらうことを伝えて警吏団を後にした。

広場にて合流した月刻に案内され、辿り着いた建物の外観は民宿というよりはホテルに近く、祭りのシーズンとあってか宿泊代は少し値が張ったが、この周辺はどこも似たような感じだと月刻と従業員に後押しされ、腹は背に変えられず、とりあえず数日はここで世話

になることとなった。どれだけの出費が嵩むか心配ではあったが、夕食に舌鼓を打っているうちにいつの間にもやらそんな不安を忘れていた己に苦笑する。

（式典まであと二日かあ。ちゃんと五十嵐姉弟が見つかってくれれば良いけど……）

数週間ぶりの湯船を満喫し、現世にいた頃の癖でバスタオルに身を包んだまま浴室を出てみれば、正面のダブルベッドに異物が転がっていた。いや、異物というのは語弊がある。漆黒の髪と瞳を備えた美青年がニコニコとご機嫌な様子でこちらを眺めていたのだ。

「え、ちよ……何でここに居るわけ?!」

（ていうか、鍵閉めてたよね?!）

慌てて玄関の開閉部を確認するが、彼が入った後に再び鍵を閉められた可能性もあるので、どちらにしろこの行動は意味を成さない。

「嫌だなあ。言ってなかったっけ?俺もこの部屋で寝るよ。ここ、ダブルだし」

「はあ?!確かにダブルベッドだけど……!!」

疑問符を頭に浮かべたところでハッと気付く。思えば華蘭に宛がわれたのはこの下の階だ。てっきり宿泊客の人数上仕方なく部屋を離れざるを得ないのかと勝手に思い込んでいたが、シングルとダブルを意図的に一つずつ取ったのだとしたら……もはや確信犯だ。

「冗談じゃないっての!今すぐ出てって!」

「俺言っただじやん。言質取ったからねって」

月刻に宿泊先を探してもらった際に交わしたやり取りを脳裏で反芻してみれば確かに、なるべく安くければ何でも良い、というようなことを言った気がする。

「へ、部屋替えてもらおう」

「あの女をこっちに泊まらせるの?」

「じゃなくて、シングルに替えてもらおう!あんたが寝るスペースなんかはないような部屋に!」

「無駄だよ。俺がここに来たときには他はもう満室だったし。この

部屋キャンセルするにしたって、他の宿ももう空いてないだろうね」

(……………)

「仮に俺を追い出すにしても、ここは二人いないと泊まれないよ」

「じゃあ華蘭をこっちに……………」

「俺がそんなことさせると思う？」

ぐい、と腕を引かれて柔らかいものの上に押し倒された。そこがベツドだと悟ると同時に、現在の自分の格好を思い出し、これまでとは比べものにならないまでの羞恥心を煽られる。

(マジイ！これマジでヤバイって！)

風呂上がりでバスタオルを一枚巻いただけの姿。前をはだければ、隠せるものなど何もない。

「覚悟はいい？まあ、あろうとなかろうとやらせてもらっけどね」
(やるって何を?!)

足をバタつかせ、力の限り相手の肩を押し退けようとするが、素知らぬふりで両手を纏め上げられる。足も、軽く体重をかけられ動きを封じられた。

額に、首筋に、腋に、胸に、股下に、膝裏に、ジワリと汗が滲み出る。せつかくシャワーを浴びたのにと思わないでもなかったが、今はそんなことを悠長に考えている場合ではない。心臓が今にも飛び出さんとばかりに大きく、猛々しくビートを刻んでいる。

額に、頬に、こめかみに、鼻に、顎に、瞼に、そして唇に軽く、優しく口付けられる。その一つ一つでチュ……………と音を鳴らされる度、鼓膜を犯されているような感覚に陥る。現世でこれまでしてきたキスと比べればこんなこと、大したものではないはずなのに、何故か息苦しさを覚えた。まるで陸に上げられた魚にでもなった心地だ。熱い。喉がカラカラに乾いている。我慢できず、体内に蓄積された渦巻く何かを放出するかのよう唇を開いて吐息を漏らせば、その一瞬を狙ったかの如く深く唇を覆われた。

重なる唇。二人の間で奏でられる水音。交わる舌と舌。絡められて、なぞられて、舐られて……………正常な意識を保とうとする理性が快楽に

翻弄され、次第に蕩けてゆく。眇めたアシンメトリーの瞳で相手の双眸を見つめれば、髪と同じ漆黒のそれがニツ、と細まる。その光景に既視感を覚えるが、すぐに泡沫となり消え去ってしまった。

そしてついに、相手の長い指先がバスタオルに掛かる。洗ったばかりの肌に爪が触れた瞬間、一つ高鳴った鼓動と共に胸を突いた感情は……… 快楽。

だがしかし

「……………ピ……………イイ……………イイー！」

窓の外から聞こえていた音にハツとする。微かな、けれども甲高い何かの鳴き声。ここから距離があるのか、あまりの小ささに空耳かと疑うが、ふと薄く瞼を持ち上げて目の前の男を見遣れば、眉宇を顰めてカーテンの向こう側を睨み付けていた。今にも舌打ちしそうなその表情から、やはり気の所為ではなさそうだ。

（ホイッスルに似てたけど、多分違うよね？）

式典前のお祭り騒ぎ真っ只中とはいえ、何やら違和感を覚える。

「……………さ、続きしようか」

「月刻、さっきの音」

苛立った表情を消して何食わぬ顔でこちらに微笑む青年に待ったをかけようとしたとき、先程の音が今度は大きく、それも突風を引き連れて聞こえた。ガタガタと、割れんばかりに震える窓ガラスの音は、まさに台風接近時と酷似していた。

（雑技団の人は式典が終わるまで雨の心配はないって言ってたし、さっきの鳴き声だって……………）

じわじわと嫌な予感が胸を占め始めたそのとき、部屋のドアをノックされた。慌てているのか、けたたましい。

「お客様！妖魔が出現しましたので、すぐに避難してください！地下に塹壕がごさいます！」

「妖魔?!」

どうやら邪魔が入ったことで興を削がれたらしく、月刻はすんなり身を退いた。その彼から逃げるようにして入口へと向かうのだが、

背後から珍しく動揺した様子で名前を呼ばれるのを無視し、扉を開けた。

「妖魔は今どこにいるのっ?」

「え、あ……」

切羽詰まった心境の馨とは裏腹に、ドアの前で彼女の身の安全を目認する為に待っていたらしい従業員は、馨のあられない姿に頬を赤らめた。

「教えて!早くっ」

「よ、妖魔はこの付近の上空を巡回してます!」

視線をあちらこちらに逸らしながらも、チラチラと馨の胸元や脚に目を配らせながら、若いドアボーイは口早に返答した。

「ありがとう」

ドアボーイを押し退けて廊下に出ようとしたそのとき、後ろから伸びてきた手に肩を掴まれた。

「せつかくの目の保養をこれで見納めるのはひじょくに残念だけど、まずは着替えてからね」

唐突に言葉をかけられて咄嗟に意味を理解することは適わなかったが、振り返った月刻の視線の先を察知して……再び赤面した。

「きゃー……!」

(有り得ない!有り得ない!辛うじて素っ裸じゃなかったとはいえ、バスタオル一枚の格好を見られるなんて!それも二人も!)

見られたことによる羞恥心、加え己の迂闊さに心底腹を立てながら、今度こそきちんと服を着込んだ少女は駆け足で外を巡回する。

瓦礫と化した壁。崩れ落ちたトタン屋根。細切れとなった暖簾。嘆く女の涙声。悪態を吐く男の怒声。子どもの慟哭。明るく賑わっていた昼間が嘘のように、一帯は絶望で彩られている。

「ピイイイイイイイイイ!」

音のした方角を見遣れば、そこは夕方、月刻と待ち合わせた広場だ。

どうやら警吏団、もとい妖魔封印士や妖魔殺戮士らと応戦中らしく、近づくにつれ閃光弾や轟々とした金属音が飛び交っているのが目に耳に入ってくる。

催しものをするにはうつつつけの場所とあつて露店や機材の設置など雑然としていたが、この周辺は住宅や施設が立ち並び、他に広々とした空間はない。式典にあたりイベント会場の一つに挙げられていたのだろうが、妖魔が襲来しているこの状況では四の五の言っていられないとあつて、旋回する妖魔をここに呼び込んだらしい。

「オオオオオオオッ！」

紺の詰め襟に身を包んだ男が鈍器を振り回し、妖魔の胸部を殴打する。もがき苦しむ妖魔は必死に抵抗しようとするが、両翼をロープのようなもので巻き付けられ動きを封じられている。しかしそれも時間の問題かもしれない。根競べとばかりに綱引きの要領で左右に紐を引つ張っている警吏達の顔に、強い疲労が滲んでいた。いつ手を離す者がいてもおかしくない。

（剣士達が羽を切ろうとしてるけど、それより妖魔が飛び立つ方がきつと早い）

警吏団の援護をしようとして術を唱える為に口を開いた瞬間、背後から名を呼ばれた。

「華蘭?!」

「か、馨が飛び出したって……宿の人から聞いて……」
息も切れ切れにそう告げる少女の声は震えていた。

妖魔に対する恐怖も勿論だろうが、馨の後を追ってきたのは恐らく安否を心配したからだろう。記憶を失くした彼女にとって頼れるのは、今は馨しかいない。馨の背中を追うその胸中はきつと、気が気でなかったに違いない。

「私は大丈夫。だから華蘭は宿に戻つて。ここは危険
「危ないっ！」

誰かの叫びにハツとしたときにはもう、体が宙に浮いていた。声を上げるよりも先に背中から壁にぶつかり、ずるずると地面に膝を付

きながら激しく咳き込む。

「うう……」

呻き声を捉えそちらを見遣れば、金髪の少女が頭から血を流し倒れていた。先程まで開いていた紅眼は瞼に遮られている。どうやら気を失っているようだが、傷が疼くらしく、眉間に皺を寄せ苦悶の表情を浮かべていた。

「よくも……！」

（八つ裂きにしてやるっ）

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」

歯を剥き出して憤怒を露にした少女は痛みを忘れ、戦いの渦へと飛び込んでいった。

（そくだ、そくだ、そくだ。思い出した。漸く思い出せた……！）

傷口が頭部だけに出血が激しいが、大した怪我ではない。目に入る鮮血を手の甲で乱暴に拭いながら、彼女は上半身を起こし喧騒の方を見遣る。

砂色の髪を靡かせた美しい少女が怯むこともなく、鳥の妖魔の前に闘っていた。色違いの瞳に怒りを宿らせて奮闘するその姿は、まるで戦乙女^{フルキューレ}。思わず見惚れてしまう。

……そう、彼女が　　でなければ。

肩で息をしながら妖魔にとどめの一撃をくらわせた存在を視界に映しながら、彼女は皮肉気に、口元に弧を浮かべた。

だが、彼女は知らない。そんな自分の様子を、遠くから無表情ながらも、漆黒の双眸を眇めて見つめていた男がいたことなど……。

風の国（参）

昔、誰かが言った。

『どれだけ強く祈っていても、叶う願いなど所詮限られているのだ』
と

海に面し、山に囲まれた美船町^{みふねちやう}は過疎化が進んでいるわけではないが、還暦を過ぎた高齢者の割合が、実に人口の五分の二を占めている。海水浴に適したこの時期だけは人の気も盛んになり、活気が湧くものの、特別目玉となるようなメジャー施設はなく、かといってこれといった名産があるわけでもないの、夏を除いた季節は閑散としている。田舎と言ったらそれまでで、さぞかし若者は退屈しているだろうと思われがちだが、電車で三駅、車で十五分も走れば市街に出るので、案外そうでもないらしい。

だが、いくら長閑な片田舎とはいえ、そこに住む若者全員が温厚篤実というわけではない。

「あ、漸く行きましたよ、あいつら」

夜のコンビニエンスストアは昼と比べ人気なくなるが、そのぶん物騒な輩の出入りも目立つ。

隣りのカウンターに立っていたアルバイト店員の言葉に視線をはしらせれば、入口付近にたむろっていた人影はなくなっていた。ちらりと時計で確認すれば、約一時間。日が沈んだとはいえ、熱帯夜と連日騒がれるだけあって蒸し暑い夜が続いているのに、よくもそんなに外気に当たっていられるなと辟易する。いや、店内に入られても困るのだが。

「あいつらの所為で何人が客、きつと引き返してますよ。店長、いい加減あいつらに注意とかしたらどうですか？」

「嫌だよ、怖いし！耳はまあともかくとして、眉や鼻の穴にまでピ

アスしてるんだよ！服に隠れないところだつて入れ墨してるし！話しかけるだけで僕、間違ひなく殺されるよっ！瞬殺だよ！」

「大丈夫。俺が店長の骨、ちゃんと拾いますから」

無表情でグツと親指を立てる大学生アルバイトに、涙目になりながら「その前に警察呼んで」と抱き付いていたそのときだ。

「チイちゃん。よおそんな弱気でコンビニなんて開けたなあ」

ふと店内でかけられた第三者の声に、店長と店員は動きを止める。そして二人揃って振り返り驚愕の声を上げた。

「委員長！」

いつの間になっていたのか、黒縁眼鏡を掛けた中学生が、パンが陳列された棚の前で佇んでいた。旅行帰りなのか、傍らにやたら大きなキャリーバックを置いている。どうしても欲しい商品があるようで、珍しく難しい顔をして右から左、上から下へと何度も視線を往復させていた。

「なあ、もう十六日になったで。今日から発売なんやる？南高梅入り高菜キムチ辛子椎茸パン・ミルフィーユ仕立て」

どうやらお目当ての物が陳列されていないことに少々臍を曲げているようだ。むう、と頬を膨らます。子どもっぽい仕草だが、考えてみればまだ中学三年生で、顔立ちも童顔ということもあつてかあまり違和感がない。

「あ……川村君、出してくれる？」

「つか、あのパンてあまりの珍妙さにテレビやネットでも宣伝してなくて、販売店従業員以外には今日までオフレコじゃなかったですっけ？」

何で知ってるんだと訝しみながら奥の倉庫に引っ込んだ青年を見届けて、チイちゃんと呼ばれた店長は少年に向き直る。そういえば以前もこの時間帯に現れて、そのとき何かを言い忘れていた気がするのだが……思い出せない。それよりもは挨拶する方が先だ。

「久しぶりだね。実家に帰ってたのかい？」

「おお、のんびり羽伸ばして満喫してきたわ。ところでさっきまで

入口で不良がたむろつとつたらしいけど、今までそないなことなかつたんやろ？ やっぱ長期休暇入ると破目外したくなるんか？ 俺にはその考えよお理解できひんけど」

「勿論夏休みつていうのもあるんだろうけど……どうやら鬼滅怒キメツトがまたこの周辺で活動を再開したらしいよ」

「……マジで？」

鶯色の目を片方だけ眇め、委員長は頬を引き攣らせる。その顔は言外に「またかいな」と語っていた。

鬼滅怒はここ数年の内に構成された、中高生の不良グループだ。無免許運転、喫煙、飲酒、万引き、暴力、カツアゲ、器物破損などで警察の厄介になる者も少なくはなく、メンバーと活動地域は美船町外にまで及んでいるらしい。

今年の春頃まではこの町を拠点として行動していたらしいが、あまりの暴動の多さについて何者かが腰を上げて追い出したという噂が回り、事実ここ最近まで素行の悪そうな雰囲気纏った少年少女が固まっている姿さえ見なかったのだが……確信こそないものの、店長はその追い出した人物こそ委員長ではないかと睨んでいる。訊いたところではぐらかされるのは目に見えているので、敢えて訊かないが。

「それで連中がこの前話してたの聞いてちゃったんだけどさ、幹部のメンバーがちょっと変わったらしいよ。特攻隊長が中学生なんだって」

「凄いよね、と苦笑いする店長に委員長は半眼を閉じながら徐に肩を竦める。

「まあ凄いとは思っけど、決して褒められることやないやろ。因みにどんな奴か言いよったか？」

「え〜と……青頭とか言ってたなあ。あんなにピアスホール開けてマゾか、とか。あ、あとスピリット・タン……だっけ？ それがどうたらって」

宙に視線を彷徨わせながら高校生らしき不良少年達の愚痴を思い出

していたのだが、ふと目線を下げれば柵の前にいた少年は頭を抱え唸っていた。

「委員長？」

「あゝ……マジでか？」

その一言で、件の中学生が委員長と知り合いであることが察せられた。いや、寧ろ無駄に顔の広いこの少年のことだ、顔見知りでなかった場合の方が逆に驚いてしまいかもしれない。

倉庫から戻ったアルバイト青年から商品を受け取って惣菜パンを購入した彼は「貴重な情報おおきに」と言い残し、やや疲れた表情で店を去って行った。

ドアの開閉時に鳴る音を耳に入れながら彼の後姿を眺めていると、ふと川村がポツリと呟いた。

「そついや委員長が来たときってこの音鳴ってたっけ……？」

「それは僕も覚えてないけど……まあでも、委員長だし」

答えになっていない返答をして、商品補充の為アルバイト青年にカウンターを任せ、店長は倉庫へと向かった。委員長が発売日当日に買ってくる商品は、その日の内からマニアックな客にウケて良く売れるのだ。

倉庫の電気スイッチを入れて天井の蛍光灯が瞬いたときになって漸く、彼は自分が何を委員長に伝えようとしていたかを思い出した。

「……あ。零時過ぎてるのに中学生がこんな時間に出歩いちゃ駄目だよって注意するの、忘れてた」

ぶらぶらと、空中から垂れ下がるブランコに足を絡ませ、逆さ吊りになっている少年が満面の笑みを模りながら手を振っている。反対側からも同じように、こちらは少女が天井からぶら下がる取っ手を片手のみで掴み、逆の手で観客に投げキッスを送っていた。二人はおどけた表情で慌てふためいたり、今にも落下しそうな危なげな仕種を繰り返して、見ている者達の視線を釘付けに、緊張感を煽らせ

ている。

今か今かと固唾を呑んで見守っていたとき、ふと少女がこちらに向かってウインクをした。

(あ、跳ぶ)

馨が直感すると同時に、華美な衣装に身を包んだその少女は空中で一回転して、腕を伸ばし左右に揺られていた少年の手を掴んだ。

わっと沸き上がる会場。馨、そして横に座っていた華蘭も大きく拍手した。

空中ブランコをはじめ、ボールに乗って鼻からシャボン玉を出す象、火を噴くピエロ、力技を披露する青年団員、観客が一瞬目を離れた際に姿を消したバニーガール、司会を務めながらあっと驚く芸を仕掛ける団長など、雑技団のパフォーマーは驚きの目白押しだ。

(委員長がここにいたら大はしゃぎするだろうなあ。いや、もしかしたら何食わぬ顔であるの中に混ざってたかも)

そしてそのまま雑技団の一員としてやっていけないのではないかと、暫く会っていない親友の顔を思い浮かべる。

今頃現世は盆盛りだろうか。無事遠距離恋愛中の彼女と逢えていたら良いと思う。いや、それよりもまず、写真でも似顔絵でも何でも構わないので彼女を拜ませてもらえないだろうか。やはり物凄く気になる。

(ホント、いつ戻れるんだか……)

聖域と現世はさほど時差はなかったはずだが、一週間以上の間を置いて戻らなかったことなど初めてなので、正直なところかなり不安だった。さすがにまだ新学期は始まっていないだろうが、携帯電話の充電が切れてしまった今の状況では、現世の日時、時刻を確認する手段は失われている。

(何が何でも絶対に五十嵐姉弟を式典開催中に見つけ出す!)

新たに決意を固めながらも今は、目の前で行われている舞台を楽しむことにした。

ショーを観賞した後に挨拶に行こうと出向いたのだが、早速ファン

ができたようで、団員の休憩室には人だかりができていた。

「挨拶はまた今度にしようか。式典が終わっても暫くここに滞在するって言うてたし」

楽しげに微笑む華蘭を連れ、街中を練り歩く。

金髪紅眼の華蘭はともかく、双眸という顔のパーツの中で最も人から視点を向けられやすい位置にアシンメトリーを持つ髻は、街を出歩く際は常にフードを被っていた。やはり盛大なイベントが開かれるとあって街には各国の人間が集まっている。当然、半妖やその子孫で非対称の特徴を持つ人間を忌み嫌う国の者も。

「ねえ、あの人半妖じゃない？右の靴だけやたら大きいし」

「我慢しなよ。ここはうちの国じゃないんだからさ」

擦れ違った見知らぬ誰かの声にフードの前を少し引つ張り、より目元が隠れるようにする。

誰も彼もが見て見ぬふりをするわけではない。いつ、ここが自国であるように振る舞い間違った正義感を翳す者が現れるか知れない。厄介事に巻き込まれるのは御免だ。百歩譲って自分だけを咎めるならともかく、一緒にいる華蘭まで同様に扱われては可哀想だ。

「式典、予定通り開催されるみたいだね」

飲食店や雑貨店など様々な店に移りしながら、華蘭は感嘆混じりの嘆息を吐く。

妖魔に荒らされ一部の店は修復できなくなったようだが、予想より被害は抑えられたようで、式典を明日に控えているとあって、昨日以上に盛り上がりを見せている。特に式典に使われる場所は仰々しいまでの飾りがあしらわれていた。

（貴賓席はきつと前の方になるんだらうけど……）

多くの来場者を見込んでいるようで、会場はかなり広く造られている。はたして目的の姉弟はそうすんなり見付かってくれるだろうか。

「もし」

ふと声をかけられそちらを見遣れば、兵士らしき鎧に身を包んだ男が三人、警吏団員らしき者が二人立っていた。引き締まった表情で

こちらを眺める視線は鋭く、疚しいことをした覚えはないのに思わずたじろいでしまう。

（もしかして一昨日妖魔を倒したときに壊した物の被害請求？いや、でも、地の国は国負担だったし、経済的豊かなこの国がそんなセコいこと……）

「先日現れた妖魔を倒して下さった方ですね？」

（いいえ、違います……って言うて逃げてみいずれ捕まるよなあ）
何せ隣りにいる華蘭の手を引きながら男五人の目を掻い潜るのは些か骨が折れる。

「……はい」

身構えながら観念して首肯すれば、一斉に頭を下げられた。

「この度は我が国の危機を救ってくださりありがとうございます。女王陛下があなたに是非、御礼がしたいと申しております。どうぞあちらに」

被害請求の要求をされた際の言い訳を考えていただけに、まさか礼を、それも国のトップが直々したいのだと言われ、思わずキョトンとする。そして促されるまま示された方を見遣れば、一目で価値が高いと判別できる馬車が用意されていた。荷を引く馬の毛並みが大変よろしいのが遠目からでもよく分かる。

「さあ、どうぞ」

「はあ……」

自然と腰に回された手を振りほどいて連行拒否というのは、どうもできそうにない。

動揺する華蘭と二人、気が付けば女王陛下が住まう宮殿へと向かっていた。

『何で?! どうして?! どうしてだっ! どうして警がこの国に……聖域にいるんだ!』

宮殿に設置されている監視カメラ。そこを通して彼女は兵士に連れ

られ通路を歩く一人の人物を見つめる。

地味な枯茶色のローブに身を包み容姿を隠しているが、間違えるはずがない。恋い焦がれ、誰よりも、何よりも大切に、身を案じ、無事を祈っていた己の半身。

湧き上がる驚喜に目頭が熱くなり、しかし手放しに喜べない現状に震える唇を強く噛み締める。

逢いたい、逢いたい、逢いたい……！

逢って、話したい。

この嬉しさを、喜びを分かち合いたい！

『……駄目だ。戻れ、戻ってくれ、馨！現世で、あちらの世界で生きるんだ。ここにいちゃいけない……！』

頬を伝う涙を拭いもせず、嗚咽を噛み殺し、彼女は画面を睨み付け慟哭する……。

「ようこそ、我が宮へ。急にこのようなところに連れられ戸惑ったであろうが、どうしても直接礼を言いたくてのう」

壇上から見下ろす女は、それはそれは目を瞠るほどの美人だった。緩く波を打つ浅黄の長髪。薄縹の瞳。高い鼻筋。弧を描く少々厚めの唇に深紅のルージュは良く映える。さすがは国のトップというだけあって、衣装もきらびやかだ。

ただ、彼女の視線の先は馨の隣りに佇む金髪紅眼の少女へと向けられている。

（どう見ても私と華蘭、間違えられてるなあ）

面白いので暫く黙って第三者を装うつもりではあったが、困惑する華蘭のSOSを感じたらしく、兵士の一人が口を挟んだ。

「あの、女王陛下。金髪の女性はお連れの方で、妖魔を倒したのは隣りのローブの方です」

「……何じゃと？」

心なしかどこかウツトリと華蘭を眺めていた表情が一変。美女は胡

乱な眼差しで馨を見遣る。華蘭と比べて十センチほど背が高く、フードを被って地味な色のローブを纏っているからか、どうやら胡散臭い男と思われているらしい。

「そうか、そなたが。妖魔を倒してくれたこと、感謝する」

声のトーンがあらさまに落ちたことに馨は吹き出しかけるが、腹に力を入れてどうにか堪える。

（直接御礼言いたいって言ってくれたわりには、倒したのが華蘭じゃなくて残念そうだし。一体どんな人物が妖魔の相手したって聞いたのよ？）

「え〜と……どういたしまして」

ペコリと頭を下げてそう返答すれば、壇上から小さく息を呑む音が鼓膜に届いた。何だ、と目元が周囲から見えない程度まで顎を上げたとき、再び声をかけられる。

「そなた、フードを取って妾に顔を見せよ」

「あ……実は私、半妖の子どもで左右非対象の特徴がありました……」

「構わん。ここにいる者達はそのような些細なことなど気にはせん」馨の懸念をたやすく一蹴した女王を仰ぎ、暫し逡巡するものの、腹を括ってフードを剥いだ。

耳を撫る砂色の髪がシャンデリアの光で金に近い輝きを放つ。真っ直ぐに通った鼻筋や薄い唇、上向いた睫毛、理想的な曲線を描く頬に細い顎、そしてアシンメトリーの朱と藤の瞳が露になる。

既にその素顔を知る華蘭を除き、閲覧の間にいる者達は皆、馨の美貌に息を呑む。

「何と……！式典を明日に控えたときに何たる偶然……」

（？）

ボソツと呟かれた女王の言葉に小首を傾げる。

怪訝そうな馨の表情を察し、宮殿の主人はすぐさま笑みを浮かべた。取り繕った表情ではなく、華蘭が妖魔を倒した勇者だと勘違いして話しかけていたとき以上の満面の笑顔だ。

「そなた、名を何と申す？」

「馨、です。こっちは華蘭」

「そうか。……二人とも、明日の式典の為にこの国に立ち寄ったのじゃろう？よければ式典のほとぼりが収まるまでこの宮に泊まらぬか？妖魔を倒してくれた礼じゃ。式典も貴賓席で観るといい」

「マジで?!」

(やった! 貴賓席ならきつと五十嵐姉弟と同じだ。おまけに宿代浮いてこんな豪華なところに泊まれる)

パツと花が咲いたように驚喜する馨に、女王はますます笑みを深める。

「では客室へ案内しよう。馨は妾が連れて行く」

「馨、それじゃあ後で」

「あ、うん」

女中に連れられ接見の間を後にする華蘭に手を振っていれば、いつの間にか女王陛下が壇上から下りていた。ヒールを履いていることを差し引いても、馨以上の高身長だ。ドレスの上からでもスタイルの良さが窺える。

(これまで何人の男から求婚されたんだろ)などと下世話なことを考えていれば、長い指先に手を取られた。

「さあ、行こうかえ」

親指の腹で手の甲を擦られることに訝しく思いながらも、何故かご機嫌の彼女の背に続けば、聖域では初めて目にするエレベーターに乗せられた。大人三人しか乗れそうにないそこで雑談さえなくジツとしていれば、どうやら地下に向かっているのが体感で察せられた。扉を潜り抜けた瞬間に冷気に見舞われ、すぐさまローブの上から己の体を抱き締める。

(さむっ)

何事だと周囲を見渡せば、通路を除く一面が機械によって埋め尽くされている。耳を塞ぐほどではないが、かなりうるさい。休む間もなく起動しているようで、機械の側を通るとき、仄かに熱を感じた。

手を引く女王に強引に引つ張られないよう歩調を整えながら、高く積み上げられた機械部品の摩天楼に目をくれる。これほどの精密機器の量だ。この凍えるほどの冷気がなければ、想像を絶する暑さに違いない。

そして連れられたのは、映像の点されていない真っ黒の画面の前。テレビで例えるならば十五インチほどだろうか、決して大きいとはいえない。

ここでやっと、手を離された。

「インヒ。妾達がここへ来る様子は、そこから見ていたのじゃろう。出て参れ」

(インヒ……?)

ギルドで使用するキーワード。そして、心の片隅に常に刻んでいるその名に、馨は軽く目を瞪る。

ドクドクと静かに、けれども眩暈を覚えるほどの素早さで鼓動が高鳴る。掌は汗で湿り、喉が異様に渴いて仕方がない。

(嘘でしょ……だって……)

まさか、と否定する反面、そうであってほしいと胸が裂けそうなまでに震えた。

そして、点灯した画面に映し出されたのは

(い、んひ……)

癖のない砂色の髪。気の強さを印象付ける、やや吊り上がった柳眉。真っ直ぐの高い鼻筋。赤く薄い唇。何より目を惹くのは、左右非対象の

左は藤、右は朱というオッドアイ。

馨と瓜二つの顔をした彼女こそ、馨の半身……胤斐いんひだった。

風の国（肆）

昔、誰かが言った。

『人は成長を遂げる為、幾度と艱難辛苦の壁を乗り越えねばならぬのだ』と

（い、んひ……胤斐だっ！生きて……！）

じわじわと込み上げてくる喜び。今にも溢れ出そうなその衝動。じわじわと眼球に熱が滾る。わなわなと唇が震え、馨は堪らず胸の前で拳を握り締めた。欣喜雀躍とばかりに胸中荒れ狂う感動に、息苦しささえ愛おしく思えてしまう。

十年前に強制的に別たれた半身……もとい、魂の片割れ。持ち合わす肉体こそ一つであったものの、宿る個は二つで、物心ついたときには既に胤斐という人格は形成されていた。解離性同一障害といったものと異なり、彼女の人格が表面化することはなかったが、鏡や水面といった物体を反射させる道具を用いれば、そこに映る者こそ馨と瓜二つの姿ではあったものの、そこから語りかけてくる表情、口調、雰囲気といったものが紛れもなく、胤斐という馨とは明らかに異なる者であった。

そういった方法でしか彼女の存在を他者に知らしめることはできなかったが、朱色の瞳を通して視界に映った物や景色を、音を、匂いを、味を、感触を共有していた胤斐は、如何なるときにおいても表裏一体とばかりに馨と常に共にあった。勿論、五感だけではない。時に反発し、嗜めることもあったが、喜びを、怒りを、悲しみを、痛みを、愛おしさを……感情さえ分かち合っていた彼女達は誰よりも強い絆で結ばれていた。

……十年前の、聖域を離れるを得なくなった惨事さえなければ、窮地に追い立たされた馨を庇った胤斐の精神は、現世で馨が目覚め

たときにはもう、その存在が失われていた。その後、聖域を訪れても半身の気配は微塵も感じられず、それでも諦め悪く幾度と現世との間を行き通っていたのだが、聖域全土に足を運び、胤斐のことを気にかけていた祖母が首を横に振ったことで、望みがないことを思い知らされた。

だから絶望していた。肉体を離れ、魂だけとなってあの巨大な力を持つ妖魔に立ち向かえば、やはり生きていられるはずがなかったのだと

「い……」

名を紡ぎ、画面に駆け寄ろうと一歩足を踏み出した刹那、半身の少女は素早く唇に人差し指を押し当てて首を左右に振った。駄目だ、という仕草。こちらに来てはいけないと、言外に告げられる。

そんな彼女に意図が読めず怪訝に眉を顰めると、ふと横から声をかけられた。

「だいぶ驚いておるようじゃな。無理もない。妾も初めてお主の素顔を見たとき、胤斐が画面から抜け出したのだと勘違いしそうになったからな」

朗らかに笑う女王陛下は驚愕する響にはかり目を向けていたようで、どうやら先程の胤斐の所作には気付かなかっただらうしい。

(この人に私達の関係を知られたくなかった……?)

口止めしようとした理由は分からないが、響は胤斐に目配せし小さく頷く。黙っている方が得策というのなら、それに従うことにする。

「彼女の名は胤斐。この国の情報を取り纏める中核で、いずれ聖域全土の情報を牛耳る存在じゃ」

『牛耳るって……もつと他に言い方あるだろうが』

半眼閉じながら呆れたように腕を組む少女の声は、十年前に比べ幼さが削がれ、代わりに静謐を滲ませる大人びたものとなっていたが、男勝りな口調は相変わらずなようだ。

『どうも初めまして。ご紹介に与かりましたとおり、あたしはこの風の国のあらゆる機器と通じている、いわばマザーコンピューター

だ。それでもって明日の式典の目玉でもある。あたしの有能性を各国の御仁に知らしめて、聖域のありとあらゆる機械と繋ぐことが女王様の目的らしいぜ。ったく、これ以上あたしに負担かけさせるなつての。』

「そうつれないことを言うな。お主には色々期待してるんじや。お主が聖域の中心となって各方面で目を光らせてくれれば、どこでどんなことが起きていくかすぐに分かる。例えばお主が厭うておる妖魔、それだつて現れればすぐに居所が掴めるのじゃから」
厭うている妖魔。その言葉に小さく目を見開く。

（あいつ……やっぱり生きてるんだ……！）

『……ああ、そうだな』

臉を伏せて相槌を打つ半身の硬い表情に、馨は胸が締め付けられる思いがした。

胤斐が何故風の国で、しかもマザーコンピューターとして活動しているのかは分からない。けれども彼女は、馨が現世に逃げて悠々と安泰に暮らしていた十年間、聖域で敵を追っていたのだ。

地獄の業火に焼かれた故郷の惨事に紛れ、母を散々痛みつけた揚句、馨と胤斐の二人を別つたあの妖魔を

『ところで女王陛下、あなたの部下があなたの帰りを待つてるみたいだぜ。また業務ほつたらかしてんじやないのか？』

「放っておけ。妾はお主達とまだまだ話したい」

『ふざけんな。明日ボイコットするぞ。』

「全く……仕方がないの。では馨、そろそろ行くこうかえ」

肩を竦め背を向けた女王陛下を一瞥して胤斐を見遣れば、縋るような眼差しを返された。十年ぶりに再会した魂の片割れ。明日また会えるとはいえ、ここで踵を返すわけにはいかない。今後いつ、人目を気にせず彼女と対話できる機会があるか知れないのだから。

「あの、女王陛下。私、もうちょっとここにいていいですか？彼女……胤斐ともうちよつと話してみたいんです」

先を行っていた女王はキョトンとした顔で振り返り、再び馨の元に

戻ってくる。左右色違いの目をジッと見つめられ、その視線の中に猜疑がチラついていているのに気付き、自分が他国の間者ではないかと勘繰られていることを察した。

（私をここに連れてきたの、アンタでしょうが）

今更何なんだと鼻で一笑したい気持ちもグツと堪え、不信感を抱かせないよう柔らかい声色を努めて口を開いた。

「胤斐のこと、明日まで誰にも口外しませんし、機密事項を聞き出そうとか、そういうことは絶対しません。約束します。だから……」

『心配すんなよ。ここの機械は見ただけで造れるような代物じゃないし、あたしの口が堅いこと、あんたも充分承知だろ。話し相手、いつもあんたばっかであたしも退屈してたんだけ』

馨の懇願と、憎まれ口を叩きながら自分と同じ容姿をした少女を留まらせたいというマザーコンピューター。その二人に挟まれ風の国のトップに君臨する女は小さく息を吐いた。

「……可愛らしい女子二人の頼みとなれば聞かぬわけにはいかんか。馨、話が終われば地上に上がってまいれ。そこに使用人を待たせておく」

「ありがとうございます」

一礼して女王陛下が立ち去ったのを確認し、馨は改めて胤斐と向き合った。

目頭が熱くなり、眦からとめどなく大粒の涙が零れ落ちる。鼻を嚙り、嗚咽を堪えながら袖で顔を拭うが、緩んだ涙腺は締め方を忘れてしまったようで、いくら繰り返してもきりがない。

「胤斐……良かった。生きてたんだね」

『コラ、泣いたとき力いっぱい顔を擦るなって昔から言ってるだろ。……変わってないな、そういうところ』

「だって……」

充血した眼で画面を見上げれば、液晶の向こう側にいる半身も、自分と同じように泣いていた。こちらの所作を窺めさえするものの、やはり馨と同じくらい再会を喜んでいるのは明らかだった。その姿

を見て、彼女の搜索を諦めてしまった過去の自身を悔やみ、罵倒したくなる。過去に戻れるなら今すぐ蹴飛ばしてやりたい。

いや、それができるなら寧ろ、元凶となった妖魔を封じてしまう方が有意義だろう。

『ずっと無事を祈ってた。現世あっちで平和に暮らしてさえいてくれればそれだけでいいって……でも、ずっと逢いたかった。来てほしくな
いって思いながらも、ずっと逢いたかったんだ』

感極まり赤く色付いた頬に幾筋もの涙を滑らせて、胤斐もまた、馨と同じく顔を覆った。

暫く二人して泣きじゃくっていたのだが、落ち着きを取り戻し、先に口を割ったのは画面の向こうにいる少女だった。

『ところで、いつから聖域にいたんだ？お父さん達も一緒なのか？いや、それよりお母さんは無事なのか?!』

「ううん、私だけ」

十年前に現世へ渡ってから度々聖域に訪れていたこと。祖母の楓だけは聖域で妖魔封印士として活動していたこと。その楓が重傷を負って現世に帰化したこと。そして、聖幻鏡を持たず聖域にきてしまったこと……十年間の経緯を順を追って語る。

「それで、地の国で志雄に会ったの。覚えてる？大剣を武器にした隻腕の妖魔殺戮士。お祖母ちゃんの知り合いの」

『ああ。“隻腕の志雄”……ソルトだろ?』

志雄≡塩≡ソルト。

(そういえば胤斐はそう呼んでたっけ)

志雄と胤斐は直接会合したことはないが、胤斐は当時、馨の右目を通じて外界を眺めていた。どうせはぐらかされるだろうと敢えて誰にも訊ねはしなかったが、馨も胤斐も剣士が腕を失ったエピソードには何か秘密があるのではないかと、彼是二人で憶測を飛び交わせたのは懐かしい思い出だ。

「その志雄に、聖幻鏡と精現鏡を造った人の子孫にあたる姉弟が式典に参加するかもしれないって聞いたの。だから明日、絶対に二人

を見つけないと……」

拳を固めて意気込む馨に、胤斐は表情を曇らせる。

『馨。その姉弟ってまさか』

「馨、話し合いはそろそろ切り上げてはどうかえ？もうじき食事の時間じゃ」

部屋の天井にスピーカーが設置されているようで、女王陛下の声が降り注ぐ。あまり気にはしなかったが、かなりの時間が経過していたようだ。気付けばロープの下の肌が冷気で粟立ち、空腹感を覚えていた。

一方話を遮られた胤斐は眉宇を顰め、舌打ちする。

「……あまり長居すると怪しまれるし、そろそろ行くね。隙を見計らって、また来るから」

『馨っ』

踵を返そうとした途端、焦燥を含んだ声色で呼び止められた。

『あの女王にはくれぐれも気をつけてくれ』

真剣な表情でそう告げる胤斐に、馨は表情を引き締め大きく首肯する。

「うん。胤斐に聖域全土の情報を把握させて、自分は後ろでこのうと構えてよう、なんて考えてる人の腹が黒くないはずないしね。充分注意する」

『あ、いや、それもあるけど』

「じゃあ行くね」

軽く手を挙げて、馨は今度こそ画面の前から立ち去った。せつかく会えた胤斐の元から離れるのは実に後ろ髪を引かれる思いではあったが、寒さを自覚した途端に全身がかじかみ、震えが止まらなくなってきたのだ。

（次にここ来るときは厚着してこよ）

両手の指先に吐息を吐きかけながら、駆け足で地上へと繋がるエレベーターへ急いでいた少女は気付かなかった。

地下に残した魂の片割れが一番に危惧していたのは、少女が考えて

いたものとは異なることを。

半身が去った方角をジッと見つめていたのだが、やがて胤斐は背を向け瞼を閉じた。

胸に宿った温かな気持ち。充足感や安堵といった、そのような感情を味わうのは本当に久方ぶりだ。昂ぶる感情にまた、涙が頬を伝う。

『無事だった……馨も、皆も……』

祖母の楓は瀕死の状態だというが、治癒術に長けた父と看病を得意とした母が傍にいるのだからきつと大丈夫だと信じている。

家族の顔を思い出し頬を緩ませるがそれも一瞬、脳裏に苦痛に歪んだ母の顔を思い出す。劫火の炎に国一帯が恐慌状態に陥り、熱気に包まれる中、自分を

自分達二人を庇い、妖魔に半妖の象徴であるアシンメトリーを？ぎ取られた母。肩甲骨から生えた紅の片翼をいつもは折り畳み隠していたが、自分達がせがむと優しく微笑んで見せてくれた。……もうそれを見ることは適わないが、今でもあの美しい羽根は目に焼き付いている。

その体の一部を奪われて痛みにもがく母の傍ら、瞳に迫ってくる男の手に怯えていた馨を庇う為、胤斐は精神体で

生身を捨てて飛び出したのだ。

『できることならまた、馨の傍にずっといたいんだけどな……』

くしゃり、とほろ苦い笑みを零して胤斐は朱と藤の瞳を鋭く光らせる。視界に映る先にあるのは、コンピュータという名の檻。そこから抜け出す手段はきつと……誰にも分からない。

……そう、彼女をここに閉じ込めた妖魔以外は

スプリングの効いたベッドに思いきり飛び乗り、馨は目の前の枕を抱き締めた。

（胤斐が生きてること、お祖母ちゃん達に言ったら驚くだろうなあ。

胤斐がこっちにいるなら、私やっぱりこっちで暮らそうかな。どのみち一度、現世に戻らないと……。五十嵐姉弟、早く見つけられるといいな……)

ウトウトとそのようなことを考えていれば、いつの間にやら睡魔の手招きに吸い寄せられていた。雑技団の曲芸を見たこと、唐突に風の国の女王に招かれたこと、そして魂の片割れとの再会……。興奮もひとしお、はしゃいだ為か想像以上に疲労していたらしい。焚かれた香がやんわりと鼻腔を攪り、深い眠りへと誘ってくれた。

……どのくらい安眠の世界を漂っていただろうか。ふとベッドが沈む気配と同時に、瞼越しに陰りを感じた。すぐ傍で誰かが自分の様子を伺っている。

(月刻……?)

寝顔を覗き込まれるのが初めてでない所為か、或いは起き上がったまで批難するよりも睡魔に身を任せたい気が上回っているからか、目を覚まそうとは思わなかった。

けれどももまたしてもキスされては堪らないと、せめてもの抵抗で顎を引き、口元を掛け布団の中に隠す。しかしその甲斐もなく、そつと寝具を剥がされてしまった。

(あゝも)

鬱陶しいとばかりに枕に俯せようとしたのだが、それより先に両頬を固定されてしまった。

そこでふと気付く。月刻と同じく長い指先ではあるが、彼と比べ柔らかく、温もりを感じる。そして頬にかかる吐息に混じって仄かに人工的な甘い香り。

(これって何か香水とか化粧品みたいな……化粧品?)

驚いて勢いよく瞼を開くと同時に、唇を覆われた。そして視界に飛び込んだ相手の顔のアップ。

「んんんう~~~~?！」

驚愕に色違いの瞳を白黒させる馨とは対称に、深緑の髪を持つ美女は薄明かりに照らされた切れ長の瞳をニイと眇め、動揺を隠せない

少女の様子を愉しんでいるように見えた。その眼差しは獲物を視界に捕らえた猛禽類とどこか似ている。

咄嗟に歯を食いしばって舌の侵入を防げたのは幸いだらう。刹那の差で唇を柔く噛まれ、上下に割れたところから舌先を滑らせようとしてきたが、歯に阻まれたのが気に障ったようで、柳眉を顰められた。

相手の両肩を掴んで離れさせようと躍起になる傍ら、ふと脳裏に胤斐の言葉が蘇る。

（女王陛下に気をつけろって……まさかこのこと?!）

男には全く困らなさそうな容姿だというのに何を好き好んで……と思わないでもないが、他人の性癖をどうこういうつもりは、毛頭ない。現に寝込みを襲われたことにこそ驚きはしたが、だからといって嫌悪感は一切なかった。

しぶとくキスで舐られるが、頑なにNOな態度を貫き続けた結果、軍配は髻に上がった。

「……まったく、意外に強情じゃのう」

「女王陛下、これは一体どういうことでしょうか？」

剣呑な眼差しで視線を上げば、軽く肩を竦められる。悪びれた様子が一切窺えないのは、彼女が国の頂点に立っているという尊厳故か。「なに。妾は美しい女子と戯れるのが好きでの。胤斐が実体を持っていればと常々思っていたのじゃが……まさか瓜二つの顔をした者が現れるとは思わなんだわ。しかも胤斐と比べ、そなたは温厚そうじゃしな。どうじゃ、妖魔封印士など辞め、ここで妾の伽をする気はないかえ？勿論、これ以上とない贅沢を約束するぞ」

唇の両角を吊り上げ、艶美な笑みを携えて誘う美女を前に、髻はただポカンと口を開いて啞然とするばかり。告げられた要望が信じられず、己の耳を疑った。

（私、今何を聞いた？伽？私が？この人の？というか、やっぱりこの人レ……いや、それはいいんだけど、私にそれを求められても……）

「無理です。お断りします。切実に」

警戒心を露に真顔で宣言したこともあり、躊躇など微塵もないと悟ったのだろう。女王は再度肩を竦め、一応は諦めの言葉を口にする。「残念じゃ。優しくしてやるというに」

「いや、ホント、マジで私にそんな気ないですから」

「気がなくとも、意外にのめり込むかもしれないぞ？現に女の妾に接吻されても嫌悪感はないように見えるが？」

（そりゃあキスだけなら女の子としたことだってありますから）と胸中で呟くが、それを言っただけより強く口説かれても困るので「とにかく、あなたのお相手をする気は全くありません」ときっぱり断った。

誓にとつて唇だけ触れ合うキスも、一応は情事の範疇に含まれる。服の上からでも相手に触れ、体温を感じながら舌を絡ませればそこそこの充足感を得られるが、満足感を得るには相手の快楽を感じ、こちらの快楽も同じ分だけ相手に委ねたくなるような、相互の意思がなければまず無理だ。

先程のキスで察したが、女王は例え誓が腰砕けでも平然とした、自分の方が玄人であるといった余裕の態度を取り繕い、それを崩しはしないだろう。その時点でもはや却下だ。

「妾が懇意に頼んでおるといふのに、本当に強情じゃな。誰か好いておる者でもおるのかえ？」

好いている人物　その言葉に思わず息を呑む。親愛や友情といった意味合いでないことは勿論分かっていた。だからこそ、脳裏にたつた一人だけ思い浮かんだのだろう。

「……まあ、情事に事進まぬなら、妾は暇するかの。明日は早い。ゆっくり休め」

そう言い残し部屋を後にした女王を茫然と眺めて暫く、誓は小さく溜息を吐いた。

「早く休めって……起こしたのは誰の所為だったの」
再び上半身を倒して仰向けに寝転び、天井を見上げる。小さく点つた明かりの恩恵を受けて色付いた平面を仰ぎ見つつ、額に手の甲を

当てる。微かに熱っぽさを感じる体温は、動揺したからだろうか。
その理由は、同性の美女に夜這いされたからか、或いは彼女の問い
である男の顔が浮かんだ為か

「こういふときこそ委員長に相談したいのに……私の馬鹿」
精現鏡を携帯してこなかった自身に悪態を吐き、少女は色違いの瞳
を瞼の奥に隠して就寝体勢に入った。

風の国（伍）

昔、誰かが言った。

『思いもよらぬ結果というのは大概、歡喜、或いは絶望のどちらかである』と

もはや驚愕を越えて茫然としてしまう。

昨日下見に訪れた際にはそれらしきものはなかったはずなのに、いつの間にやら三階ほどの高さはあるうかという築城が建てられていた。とはいえ、さすがに中まで手が回らなかったらしく、屋内に入れば大型の昇降機に出迎えられ、すぐに最上階へと繋がる有様。外觀が豪勢で上質な材質を用いているだけに、まさに見かけ倒しと思えるが、どうやらエレベーターそのものが聖域ではそれほど普及していないらしく、大人数を一度に運ぶことができるその仕組みを、来賓客は挙って目を輝かせ賞賛していた。

バルコニーは三ヶ所あり、中央が女王と十人の衛兵、左右が貴賓席となつている。その中央バルコニーにて、女王に促されるまままひよっこり下を見下ろせば、人、人、人の波。人が溢れ返っている。どこかで“人がゴミのようだ”というフレーズを耳にしたことはあるが、まさしくこのことではないかと、思わず遠い目をしてしまう。風に煽られ解けそうになるフードを抑えながら、チラリと隣りに並ぶ国のトップである美女を一瞥すれば、深紅のルーージュを塗った唇に笑みを刷いていた。悠々とした表情から、こうして高い場所より民衆を見下ろす光景は見慣れたものなのだと察する。

（別に高所恐怖症つてわけじゃないけど、下にこんなにも人がいると思うと、ちよつと尻込みするなあ）

そう小さく溜息を吐いていると、息を切らした兵士が傍らに佇み、女王と馨に向かつて敬礼した。

「ご報告致します。宮殿内、その周辺のあらゆる場所を捜したのですが、やはり華蘭様はいらっしゃいません」

「たわけが。一人見つけられないとは何たる凡愚よ。おぬしら、それでもこの国の哨兵か」

「女王陛下、いいんです。時間が時間ですし……あの、お手数おかけしてすみませんでした」

「お役に立てず、本当に申し訳ありません」

冠を曲げる女王を宥め、兵士に低頭して詫びを入れれば、逆に深く頭を下げられてしまった。再度一礼して持ち場戻ろうとする兵士の背中に、ひっそり落胆の色が落ちていることに警もまた、申し訳ない気持ちになる。

今朝、忽然と姿を消した記憶喪失の少女。朝食の準備が調ったことを報せに侍女が部屋を訪れたときには、既にベッドは冷たかったらしい。それ以前に、寝具を使用した形跡がなかったのだとか。

それを聞いて、ありとあらゆる宮殿の者達に訊き回ったのだが、誰も彼女を見ていないと首を振る。式典の準備に忙しく他に目を向けられなかったらしいが、それでも誰の目にも留まらなかったというのはさすがに変だ。

（門の外には出て行ってないみたいだし、宮殿内にはいるんだろうけど……どこ行ったんだろ？）

宮殿に待機している兵、及び使用人達には華蘭を見つけ次第こちらに連れてきてもらうよう頼んでいるし、万一外に出ていたとしても、警吏団にも協力を要請している。勿論心配ではあるが、深く気を揉むほどでもないだろう。

くるりと後ろを向き、壁面に掲げられた巨大な液晶画面を仰ぎ見る。屋上から垂れ下がる、風の国の国旗が描かれた幕と幕の間に挟まれる形で張り付けられたそれは、今は何も映されず真っ黒の状態であるが、ここに胤斐を映し、民衆にマザーコンピューターの存在を大々的に知らしめるのだという。

因みにこの位置では貴賓席から見辛いということ、そちらには別

の画面が用意されている。

(……何か嫌だな)

これほどの人の前で注目を浴びるのだ。例え自分でないとしても、全く同じ姿形をした半身が曝される。気分としては、動物園のパンダ辺りが妥当だろうか。奇異、好奇、期待、利欲……様々な視線を想像し、まるで純水に多種の溶液を一滴ずつ落とされたような、どこか苦い心境になる。

しかし、それだけならまだ良い。自分と同じ容貌……アシンメトリの特徴を持つ。それはつまり、妖魔の血を引き継ぐ証。この国が徐々に半妖に対して寛大となりつつあるといっても、ここには八千種の人間が集結している。嫌悪や憎悪といった印象を抱く者も当然いるはずだ。

(まあ例え批難されたとしても、胤斐は私と違って頭も切れて肝も座ってるし、そんなこと百も承知なんだろうけど……それより)

「女王陛下。私、そろそろ貴賓席の方へ移動しますね」

「別にここで構わんぞ。すぐに席を用意しよう」

ニコリと一見、相手の気を緩ますような微笑みではあったが、薄縹の切れ長の瞳に昨晚目にした色欲の色が垣間見えた。今日が式典ということもあって、昨晚こそあっさり手を引いてくれたが、あくまで諦めるふりに徹しただけで、実際はそんなつもりなどないのかもしれない。

油断大敵と、思わず音を立てて息を呑む。

「いえ、そのつ、実は五十嵐姉弟にお会いしたくて！」

このような催しのある場ではあるが、誘惑を突っ撥ねた聲に対して昨日と変わらぬ態度をとる、面の皮が厚い女王のことだ。再び伽になれなどと口説かれては敵わないとつい、ここから離れたい理由を口走ってしまった。

とはいえ「この式典に大きく貢献した腕利きの技師の噂を耳にしたんです」などと適当な言い訳をすれば、深く追求されることはないだろうと即座に高を括ったのだが……何故か怪訝な顔をされてしま

う。

「あの二人なら出席せんぞ」

「はあ?!」

思いがけず目の前にいる美女に敬意を払うことなど忘れ、問い質す。「公の場を好まんらしくてな。整備士に後のことは任せて、一週間ほど前にこの国を出ていったぞ」

女王の発言にただただ茫然としてしまふ。信じたくないのは山々だが、嘘を吐いている様子もなく、彼女がそのような真似をする必要性もないだろう。

(マジで……………?)

動揺を隠せぬまま、わなわなと震える薄い唇をどうにか抉じ開けて疑問をぶつける。

「ち、因みにどこに行くかとか訊いてます……………?」

「雷の国に戻ると言っておったな。あ奴らの祖国じゃ」

(ちよっ……………冗談でしょ?!)

雷の国はここから国を二つ挟んだ更に先にある。一週間前にこの国の首都を出たというなら、今頃は隣国である花の国を抜けた辺りだろうか。花の国は国境に山があるわけでもなく、風の国の三分の一程度の領土しかないのです、さほど時間を取る旅にはならないはずだ。(今から雷の国に向かうとしても、着く頃には現世じゃきつと、九月になつてる……………)

これからどうすればいいのだと頭を抱える馨の横で、ふと女王が感嘆の声を上げた。

「おお!空から花吹雪とは……………誰かは知らぬが、見事な演出じゃ」

「ちよっとお手洗いに行つてきます……………」

花吹雪だろうが水飛沫だろうが、どうでもいい。呑気に式典に参加できるような気分ではないと、誰もが魅入ってしまう景色に馨だけが背を向け、よろよろと屋内に入る。

(どうしよう、どうしよう、マジでどうしよう?!というか、何でお母さん達来てくれないの?!まさか本気で忘れられてる?!それ

ともお祖母ちゃんが目を覚まして、修業のつもりでほったらかしにしていると？！いや、でも、いくらなんでも……）」

「こちらの世界で平穩に生きていくか、あちらで持て余している力を存分に発揮して戦いに身を任せるか、そろそろ選りなさい」

春、固い口調で問うた祖母の言葉。やっと現世に戻れると思っていた矢先に希望が遠退いてしまった今、その言葉が再び重く押し掛かる。

階の隅に設置された化粧室の個室でしゃがみ込み、暫くグルグルと考えていたが、このまま閉じ籠っているわけにもいかない。例え登校日までに現世に戻れずとも、一度はあちらの世界に帰って家族と今後の進路について話し合わなければならぬのだ。

現世にて安全で平穩な日々を、或いは聖域にて闘いと激動の日々を送るか

「……よし！」

ぴしやりと両頬を強く叩いて奮起する。そうと決まれば胤斐に状況を説明する為にまずは女王に一声かけておこうと、再び会場へと向かおうとしたときだった。

（……やけに静かなんですけど）

既に式典は開始しているはずだ。女王が拡声器を通して挨拶をし、続いてマザーコンピューター開発技術協力者達の話に続くと耳に挟んでいたのだが、何らかの理由で開催が遅れてしまったのだとしても、民衆のざわめきさえ聞こえてこないのは明らかにおかしい。

ざわり、と背筋が総毛立つ。上空から花びらが大量に舞い落ちてきたという、最高責任者さえ知り得なかったサプライズ。まさかという思いを胸に占めながら、馨は女王や近衛達のいる場へ戻った。

「な……！」

目の当たりにした場景に、思わず足を止めて絶句する。

崩れ落ちたかのように倒れている者。膝を折って虚ろな眼差しで宙を眺める者。瞳孔を開き、へらへら笑う者。明瞭を得ない言葉を呟いて仰向けになっている者

地上にたむろっていた民衆も見下ろしてみることが、正常な状態を保っている者など誰一人として見当たらない。

「女王陛下っ、女王陛下！」

常に毅然とした振る舞いをしていた風の国の最高責任者を揺さ振り起こそうと試みるが、一向に目覚める気配を見せない。薄っすら瞼を開いて意識があるようにこそ見えるが、やはり正気ではない。

「警っ！」

「っ！胤斐！」

壁の大型画面に自分と同じ顔をした少女が映る。険しいその表情から、事態の重要性がひしひしと伝わってくる。案の定、これは人間の成せる業でないと思った。

「胤斐、これは……」

「あたしが上空カメラに意識を向けたときには、もう何も映ってなか
か 危ないっ！」

「っ！」

半身の叫びで周囲に意識を飛ばし、すぐさま上半身を屈める。その刹那の差で何かは頭上を横切った。小さな悲鳴を上げ、横目で確認すれば、腕を広げてやっと抱えられそうという大きさの鋼球が見えた。そんなものが頭を直撃すれば、ひとたまりもない。

ぞつと背筋を震わせ、得物に連なった鎖の先を確かめる。そこには人型の魔物が宙に浮いていた。

「どうやらお前だけ無事なようだな」

太い手足に六つに割れた腹筋。一見、屈強な男に見えるが、背中に生えた翼と獣のような足先が人外の生物であると、明白に物語っていた。

（旧時代の妖魔……！）

そして直感する。月刻ほどではないが、かなり腕が立つ妖魔である
と。

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」

広げた掌から炎を生み出し敵に放つ。

「貴様、妖魔封印士か」

炎を避けて鋼球を投げ付けてくるが、それをかわして術を唱える。

「【灼熱の赤き炎よ、怒りの黄の雷よ、我に力を】！」

言葉を紡ぐだけで術が発動するとはいえ、威力、スピード、形状を想像し、集中しなければ、敵にダメージを与えることはできない。

その為、連撃というのは単一攻撃以上の精神力を消耗するが、妖魔の鋼球で判れた地面とそれをいとも簡単に放り投げる速さと力量から、長期戦は不利だと即座に推測する。

何より、この場には数え切れぬほどの人間が倒れている。迂闊に動くことさえまならない。

（どつちか避けてもどつちかに当たれば、怯んだ隙に休む間もなく攻撃して……）

戦闘の算段をし、それに備えて次の術を復唱しようとした瞬間、妖魔が唸り声を轟かせた。

「ぬううううん！」

響の推考を余所に、鋼球を投げやって電撃を弾いた妖魔はその反動で身を振り、そして目にも留まらぬ速度で回転し出した。巻き起こる突風で炎は消され、更に妖魔の真下にいた者数人が吹き飛ばされる。

上空で行われている騒動、そして怪我を負ったのだろう。何人かが目を覚まし、悲鳴を上げて広場から退避し始める。我先にと皆が皆一斉に駆け出した為、に氣絶している者を足蹴にしてそれで更に被害が拡大していく。

（どうしよう……防御できるのって風の術しかないのに……！）

庇護対象がいる場合、いつもならば風の術で防御壁を造るが、この国の妖魔相手にそれは通用しない。大抵の妖魔は生誕した地に留まる習性を持ち、その国の象徴である自然特性の攻撃を用いる。

（しかも風だけじゃなくて嵐、竜巻まで起こされたら……）

どうするべきか。焦りと逡巡で迷いが生じ、敵をその目に捉えているにも関わらず、民衆に意識を向けていた所為で反応が遅れてしま

った。

『馨!』

焦燥を含んだ半身の声にハツとする。手に巻き付けた鎖を用いて、妖魔がカーブの要領で鋼球を描き投げ付けていた。避けようと慌てて足を前に出そうとしたのだが、その先には女王が横たわっている。(ヤバツ!)

画面から『避ける!』と声上がるが、視界の端に妖魔が鎖を引く様子が見えた。かわしたら間違いなく女王に直撃する。しかももう、かわす間さえ残されていなかった。

左側から猛烈な衝撃。腱や神経の切れる感覚、骨が複雑に折れる音を体感する。二の腕、肘、そして脇腹に直撃し、バルコニーから勢いよく吹き飛ばされた。

今まで味わったことのない過激な痛みに眼球が熱く滾り、喉から号叫しかけるが、そんなことよりまず成さなければならぬのは、地面に叩きつけられるのを回避する手段だ。

「【囁く緑の風よ、我に力を】……!」

絞り出すような声で唱え、痛みで集中する余裕もなかった為に微風しか発生できず、大した勢いも殺せぬまま頭から落ちてしまう。それでも意識ははっきりし、軽い脳震盪と出血で済んだのは幸いといえよう。

「終わりだな、妖魔封印士」

襟首を掴まれて高く持ち上げられる。足が地面に着かない所為で喉が絞まり、息苦しさを喘ぐ。

『止めろっ! 馨を離せっ』

「煩い」

「やめて……!」

馨を掴み上げた手とは逆側の方で妖魔が得物を投げる。それは胤斐が映っていた画面を直撃し、映像は途端に消えてしまった。

(胤斐……っ)

マザーコンピューター本体は宮殿の地下にある。そこを襲われない

限り胤斐が安全なのは分かっていたが、画面を壊されたされた途端、馨は自分自身を攻撃されたかのように胸が軋んだ。同時に目の前が真っ赤に染まり、妖魔の腕に強く爪を立てる。

痛みを覚えたのか、馨の反抗に鼻白んだのか、はたまたその両方が、妖魔は乱暴に少女を振り払った。

咳き込む馨の前に静かに佇み、敵が一言、静かに宣告する。

「死ぬ」

己の無力を呪い、拳を握り、唇を噛み締めて硬く瞼を閉じる。

死を覚悟した、まさにその瞬間

「死ぬのはめえだ！」

前方を遮るように立つ妖魔の更に後方で声がしたのと同時に、空気を切る音が生じた。聞き覚えのある男声にハッと視界を開けば、大剣の切っ先が宙を薙いでいた。

「し……お……」

茫然とかの人物の名を呟けば、白髪混じりの老剣士は「ここを動くな」と言い残し、大きく後ろに跳んで馨から距離をとった。

「妖魔、まずは俺を殺してみろ！出来るもんならな！」

「次から次へと……。人間が大量に寝ているから何事かと思えば、妖魔を呼び出す為に何を回りとどいことを……。まあいい。望み通り、お前から殺してやる」

上空に羽ばたいたことで志雄の攻撃を回避したらしい妖魔は鎖を振り回し、勢いのままに妖魔殺戮士の方へと向かっていった。

浅く、けれども早く呼吸を切らして馨は戦闘を見守る。やはり何十年と妖魔を倒すことを生業としていただけあって、志雄の動きに澀みはない。身の丈近くある得物をいとも簡単に操るのはさすがだと感心する。

周囲、そして真上のバルコニーに視線を移す。

（広場に集まってる人達は皆逃げてる。残ってるのは女王陛下と来賓数十人、それに衛兵達。あの人達を逃がして、志雄の手助けして、あと胤斐のところに行かなきゃ……）

その為にはまず傷を治さなければならぬ。回復術を唱えようと右手で左腕に触れたそのとき、傍らで小石が転がる様子が目に映った。

「馨、大丈夫？」

耳馴染みとなつた少女の声音に睜り、顔を上げる。そこには案の定、今朝から姿を消していた華蘭の姿があつた。紅い双眸に馨の姿を捉え、小首を傾げている。

「華蘭、今までどこに……？ああ、でも、無事で良かった」

「馨、大丈夫？」

再び問い返されてそれに頷き、安心させるようによろよると立ち上がる。心配かけまいと、まずは立ち上がってそれから傷を回復させようと考えたのだ。

「そう……」

顎を引いて首肯し、金髪紅眼の少女は唇に薄く笑みを刷く。その様子が、どこかいつもと違う気がして彼女の名を呼び掛けながら俯いた顔を覗き込もうとしたときだった。

「馨、何やってんだ！」

「え？」

「それは残念」

抑揚のない、少女の凜とした声。

ドスッ……

志雄の怒声に馨が華蘭から意識が逸れたその刹那、腹に違和感を覚えた。

「そいつは妖魔だぞ！」

そう進む志雄の聲が、まるで何層ものベール越しに響いているかの如く、遠い。

せつかく立ち上がったというのに、膝の力が抜けて再び固い土の上に崩れ落ちる。左半身と同じ熱、そして痛みが広がる胴体に視点を落とせば、腹部から長い棒状の何かが突き刺さっていた。

「……………うそ……………」

茫然と、虚ろな意識で顔を仰ぐ。

己の朱と藤の瞳に投影されているのは先程から一向に笑みを崩さない、記憶喪失のはずの華蘭の姿だった。

風の国（陸）

昔、誰かが言った。

『復讐や報復を誓った者は、心に夜叉を宿すのだ』と

盆を過ぎて数日。八月も後半に差し掛かり、気温も日々最高値を更新している。おかげで蝉は御礼大合唱の有様だ。いい加減聞き飽きて辟易してしまう。三年以上十数年単位で土の中にて身を潜め、地上に出て一、二週間ほどで命を散らす生体だが、出来ることなら生涯の中で過ごしてほしい。賑やかなのは嫌いではないが、さすがにここまで煩いのは水に合わない。

それに加え、上り道を歩いている現状。暑さに堪えかねて先程から団扇を扇ぐ手を休められずにいる。比喻ではなく、本当に蒸発してしまいそうだ。眼鏡のパッドがずれて仕方がない。

目的地まで二百メートルを切っているはずなのに、距離が縮まっている気がしなかった。堪らず空を仰げば、レンズを通して視界に広がるは雲一つない晴天。目が痛くなりそうな蒼に、何やら大声で叫びたくなる。それが親友の帰還を邪魔する者に対する「馬鹿野郎」なのか、愛しの恋人に向けての「愛してる」なのかは定かではないが。

頭を垂れて深く息を吐き、再びサンダルを履いた足を前へ前へと動かす。どちらの絶叫したい気持ちも嘘偽りないが、今向かっているのは前者に大きく関わることだ。

自分が動かなければ、親友は一生こちらに戻ってこられない。……己が勤める店のマスターによれば、魔女はどのように語ったのだという。

漸く辿り着いた目的地にて“佐久間”と記された表札を一瞥。その下に設置されたインターホンに人差し指を添えて軽く押せば、家の

中からピンポンと微かに音が漏れて聞こえた。

佐久間家は国道沿いの丘の上に建っている。学校や駅からさほど離れているわけでもないが、周囲に民家はなく、ここから一番近くても往復十五分はかかってしまう。些か不便な立地だが、彼は決してこの地で暮らす家人達を厭ってはいなかった。

「はい」

物音混じりに明るい声を上げながら、数奇屋造りに良く合った玄関を開けて顔を出したのは、親友の母親。髪色や瞳の色こそ異なるが、娘の髻と顔立ちが酷似している。年の離れた姉妹と紹介されても違和感はないだろう。薬指のプラチナリングがなければ、数多の男が口説き文句を唱えたに違いない。

「こんにちはあ。ご無沙汰してます」

「あら、委員長。お久しぶり」

「髻います？ケータイに電話しても繋がらへんし、もうすぐ全校登校日やから、そろそろ宿題のことで焦つとるんちゃうかなと思て」さりげなく探りを入れれば案の定、伊代は表情を曇らせた。やはり未だ娘を連れ戻せていない状況下らしい。

「ごめんなさい。髻、今遠出して……」

どこに行っているかを訊けば返答を及するのは想像がつくので、とりあえず家に上がらせてもらう為、予め用意していた台詞を使うことにした。

「困ったわあ。実は夏休み前に髻に貸してたCD、従兄弟が聞きたい言うつとって、明日会うことになつとるんですよ。滅多に会えへん奴やから、今日のうちに返してもらいたかったんやけど……」

小さく嘆息して困惑した素振りを見せれば、それならばと家の中へ入るよう促される。

「どうぞ入って。悪いけど、髻の部屋から勝手に取ってくれる？」

「すみません。あ、よければ俺、留守番しますよ？」

「え？」

「回覧板、届けに行こうとしてたんちゃいます？」

ピンと立てた人差し指を示すは、下駄箱の上。そこにはランチヨンマットに敷かれた置物と一緒に回覧板と記された冊子が置かれていた。先程ドアが開く直前に何やら物音がしていたのを思い出し、恐らくそれを届けようとしていたときに自分が訪ねて来たのだろうと推測したのだ。

「うーん……それじゃ悪いけど、お願いできる？ちよつとバタバタしてて、中々お隣りに回せなかったのよ」

「任せてください。どうぞごゆっくり」

突っ掛けを履いて出て行った伊代の背に手を振り、その姿が見えなくなつたのを確認した後、委員長は家の中へと入った。

「聖幻鏡があるんは屋根裏やったな」

二階に上がって突き当たり右手が馨の部屋。こちらは何度か招待されたことがある。しかし以前邪魔したときにはなかったはずのものが視界に飛び込み、感嘆の息を吐いた。

佐久間家は二階建てだ。この更なる上の場となれば、屋根の裏側しかない。

「階段付けたんやな。梯子や脚立やったらここ、危ないもんなあ」
どうやら最近取り付けたらしく、真新しい印象を受ける。一段一段の足場も随分と安定していた。もしかすると馨が聖域に渡った後に設置されたのかもしれない。

屋根裏へと続く建具を開けて新たに床を踏む。窓も明かりもない場所ではあったが、正午を過ぎた時間帯とあってか、薄っすらではあるが光が漏れていた。とはいえ、どこにどんなものがあるか判別できるところではない。

しかし委員長は躊躇する素振り一つ見せず、しっかりとした足取りで姿見の前に佇んだ。

「これやな、聖幻鏡」

本来、鏡とは正面に現れたものをそのまま映し出す役割を持つ。しかし以前魔女から齎された情報によると、一風変わったこの鏡に関しては、ここから聖域に渡った者が滞在している国の情景を捉える

機能が備わっているのだという。

けれどもこの姿見には何も映っていない。この鏡と対となるアイテムを忘れたうつけな親友はおるか、眼鏡越しに鏡面を睨み付けている己の姿さえも。ただ真つ暗な世界が広がるのみだ。まるで暗闇を反射しているかのように……。

(ここが暗いからつてわけやなさそうやな)

手を伸ばし、鏡の表面に触れる。指先から広がる波紋。けれどもそれは上下左右均一に描いておらず、いびつな軌跡を残して、やがて消滅した。

「ははあ……これはこれは」

面白くなさそうに表情を顰めると、委員長は瞳を閉じて再び、今度は両の掌を押し付ける。

深呼吸三回ほどの僅かな一時。ゆっくりと瞼を開いて手を下ろす。すると一瞬にして鏡面の闇は晴れ渡り、聖域のとある国の様子を映し出した。そこでは祭りでもあるのか、道にはずらりと露店が立ち並び、やたら人で賑わっている。

テレビのチャンネルを変えるかのように場面が所々切り替わるが、そう都合良く親友の姿を見せてはくれないようだ。

それに軽く唇を尖らせて、次に掌を検分する。両の手の上で漂う黒い霧。それをまるで握り飯でも作るかの如く三角にむすび、そして口に運び飲み込んだ。

(性悪な細工しよつてからに。おかげでこれ消化し切るん四、五日かかりそうや。とはいえあいつに現状悟られて、またこないな真似されん為にも、警がこつち戻ってくるまでの間は下手に消すことできんしなあ……)

それまでに腹を下さないか、心配ではあるが大した問題ではない。

一先ずこれで悩みの種一つ、解決できた。

「ほな次、楓ばあちゃんやな」

後ろ髪を引かれる思いではあったが、踵を返して一階へと戻る。勝手に人様の家を歩き回るのは気が進まないが、これも佐久間家の為

だ。胸中で親友の家族に詫びを入れながら楓の部屋を目指す。

一つ一つ部屋を確かめたわけではないが、道行くまま、何となくといった足取りで廊下を歩き、辿り着いた角部屋、そこに年老いた妖魔封印士は眠っていた。

そよぐ風に髪を撫でられてそちらを仰げば、ベランダが開いている。ほのかに香る潮の匂い。柵で囲った庭の奥は崖となり、その向こうには海が広がっているらしい。

蝉の鳴き声が聞こえ、ジワリとした熱気も決して消えたわけではないのに、この空間だけ何故か、夏という概念から切り離されているような気分になる。いや、夏ではあるのだが、ここに辿り着くまでに味わわれた暑さによる不快感が鳴りを潜めたというべきか。音があるのに静寂感を覚えるのは、部屋の主が眠っているからだろうか。

気を取り直し、畳の上に胡座を掻いて横たわる病人の顔を覗き込む。

「傷の具合はどや？」

呼びかけてみるが反応はない。心なしか、眠っているにしては呼吸も浅い気がする。浅い傷こそ塞がったようだが、思いの外体力が失われているのか、意識が戻った様子は見られない。

想像の範囲内だったのか、委員長は腰に下げていたシザーバックから小瓶を取り出し、にんまりと笑みを浮かべた。

「じゃじゃーん！そんな楓はあちゃんに委員長からプレゼント！魔女さん特製の強力回復薬！」

楓の顎を掴み上を向かせて気道を開かせると、少年は瓶の蓋を弾き、強引に青みがかかった液体を老婆の喉へと流し入れた。すると見る見るうちに楓の表情が苦悶の表情に歪み出す。未だ目を瞑っている状態ではあるが、まるで苦いものを口にしたかの様子だ。

事実、過去に味見したことのある少年は薄ら笑いを浮かべて肩を竦める。

「味はともかく、効果は俺が保証するさかい。とりあえずこれで楓はあちゃんは大丈夫や！」

(さて、後俺にできるんは……馨の帰還を待つことやな)
ベランダの向こうに広がる空に目を移し、委員長は深く息を吸い込んだ。

熱く、苦々しい夏はまだまだ盛りをみせそうだ。

口の中に錆びた鉄の匂いが充満し、それが鼻から抜ける。加え、顎にどろりと濡れた感触。どうやら唇の端から血が一筋零れたようだ。ただただ茫然と、馨は目の前に佇む金髪紅眼の少女を見上げる。

「今まで迷惑かけてごめんね。私、漸く思い出せたの」

馨に怪我を負わせたことに何の頓着も見せず、婉然と笑みを刷きながら、少女は右手を掲げる。白い綺麗な掌だったそこは、先端が鋭く尖った新緑の蔦に変化していた。枝分かれしたものを網込ませたそれは、解けば柔なのかもしれないが、一本に固く連ならせればそこそこ強度を保つらしい。

少なくとも、人の肉体を貫ける程度には。

「改めまして。花の国の妖魔、華蘭よ」

先日まで困惑と不安を滲ませていた眼差しが、今では余裕と憎悪、そして嗜虐といった感情を綯い交ぜにして馨を射抜いている。

信じられない。その一心で満身創痍の妖魔封印士はゆるゆると首を振る。

何故。どうして。嘘に決まっている。信じられるわけがない

そんな思いがありありと表情に出ている。

脳裏を過ぎるは、地と風の国の国境となる山中。妖魔との戦闘の際、彼女はとても演技とは思えない様子で怯えていた。数日経過した今でも鮮明に覚えている。蒼褪めた顔。震える肩。怖い、と呟いたか細い声……。

「しつかりしろ、馨！……くそっ！」

離れた場所から志雄の声が届くが、相手をしている妖魔の相手です。一杯の様子だ。

「あの老剣士がいるのなら、あのお婆さんも一緒なのかな？」

「お婆さん……？」

「馨と同じ術を使う妖魔封印士」

ドクツ、と心臓が大きく脈打つ。婆と呼ばれる歳の妖魔封印士で、尚且つ馨と同じ……筒姫の血を受け継ぐ者しか扱えない術を操れるのは、一人しか該当しない。

「もう碌に声が出ないでしょ？このまま放っておいても死にそうだし、冥土の土産の子守歌代わりに話してあげる」

上空を仰ぎ深呼吸した後、華蘭は薄紅色の唇から静かに語り始めた。「私に施された筒姫の封印が解けたのは……三年くらい前かな。そのときにはもう、蓮華と梅樹はあの忌まわしい書物から解放されて、二人は花の国のほぼ全土を制圧してた。筒姫に封印される以前のように」

歌うように、唱えるように、慰撫するように……懐古して紡ぐその声色は温かみを宿している。けれども話す内容は、妖魔を敵視する人間にとって、断じて安易でないもの。

「私も、復活してからは愉しんだよ。梅樹が老若男女、色んな人間を惑わして、恍惚の表情をしたそいつらの首を、私や蓮華が刺したり刎ね殺した。別に私は殺し方に拘りなんてなかったけど、蓮華は勢いよく血が噴き出る方法、好きだったなあ。何か、一気に花が満開になったように見えるんだって」

妖魔同士の関係は希薄と考えていたが、紅い瞳を懐かしむように眺めて話すその表情は、人間のものとさして変わらない。人を髑り、餌や獲物として捉える本能しか持たない新時代の妖魔との、列記とした違い。

けれども華蘭は確かに言った。人の首を刺したり、刎ねたりしたと……残酷な方法で人間の命を弄んできたのだと。

「勿論これまでに、何人も封印士や殺戮士が私達の前に現れて邪魔してくれたけど、その度に返り討ちにしたよ。そう、あそこにいるおじさんとあのお婆さんさえ現れなかったら、私達はずっと、一

緒にいられたのに……」

華蘭の沈んだ声音に潜む悪意。ここまで聞けば自ずと真相を導き出せる。

花の国の情報を耳にした楓と志雄は、元凶である妖魔三人と対峙したのだらう。そして楓が蓮華、梅樹なる二人を封印した。

「私は命辛々であの場から逃げ出した。二人が隙を突いてくれなかったら、きつとやられてただらうけど……。でも、そのときに攻撃を受けて、そして二人がまた封印されるのを目の当たりにした。……妖魔が記憶喪失なんて滑稽な話だけ」

クスクスと笑ってはいるものの、紅い瞳は全くと言っていいほどに逸楽を含んでいない。けれども、だからといって仲間を再び封じられた怒りにのみ支配されているようには見えなかった。幾つもの感情が交錯し、溶け込み、反発した複雑な色。

それらが躊躇や痛惜、悲嘆といったものではないかと考えるのは、都合の良い解釈かもしれない。

「馨には感謝してる。本当よ。ただ……あなたが単なる無力な人間だったら……ううん、せめてあのお婆さんと同じ術を使う妖魔封印士でさえなかったら、あなたに手を下さなかったのに。憎む気持ちを、どうにか押し殺したのに……」

眦に光る涙を認めて、馨は合点がいったように胸中で嘆息した。

（ああ、そっか。華蘭が怯えてたのは妖魔にじゃなくて、術を使う私にだったんだ……）

怖い、と大粒の涙を零していた少女。そんな彼女を宥める為に震える背を撫でた自分。あときはまさか、このような事態になるなど予想だにしていなかった。まさに青天の霹靂。

助けた相手の正体が妖魔。人間の天敵。封印の対象。……だというのは、身動き一つできずにいるのはどういった見か。このままでは間違いなく殺されるというのに。

ギリツと歯を食いしばり、華蘭が右腕を振り上げる。先端を鋭くさせた、一度は馨の肉体を貫き、血に濡れたその凶器を。

「……さよなら」

悲痛に歪められた表情。そして声。

それらを目に、耳にして、フツと息が零れた。

（華蘭も、だったんだ……）

共に過ごしたのは、十日程度の僅かな時間。馨は華蘭に庇護欲や友情といった感情を抱き、華蘭もまた、馨に同じような想いを抱いた。……抱いている。記憶が蘇っても、薄れさえすれど、捨て切れなかったのだらう。いつ過去を思い出したのかは分からないが、恐らく葛藤したに違いない。

そして……その末に、馨を殺すことを決断した。

（私が抵抗できないのは、私の方が華蘭に傾倒してたからかな？……何れにせよ、これは私の弱さだ）

情を抱いた所為で手をかけられることに享受してしまう己を自嘲し、瞼を閉じようとした……まさにその瞬間

頬に何か飛び散った感触。皮膚を濡らして顎へと向かうそれに驚愕して瞠目すれば、視界に飛び込んできたのは……右腕を失った華蘭の姿。

「あ、ああ……あああああああああああああ

！」

「ぐおおおおおおおおああああああああつ

！」

左手で右肩を押さえ、激痛で悲鳴を上げる華蘭と同調するように、離れた場所で志雄と闘っていた風の国の妖魔が号叫する。咄嗟にそちらも確認すれば、胴体が大きく抉れていた。明らかに妖魔殺戮士の得物によるものとは違う。

「お前ら……よくも俺の馨をこんな目に遭わせてくれたなあ」

唐突に、真横に出現した存在。痛みを堪えながら首を仰げば、唇にのみ薄く笑みを刷いた月刻が佇んでいた。

「つ、き……！」

掠れた声で彼の名を呼ぼうとするが刹那、背筋がぞわっと粟立った。一見、普段と何ら変わらないように見える。しかし涼やかな表情ながらも、纏う気配は憤懣に包まれていた。

漆黒の妖魔から放出される怒りの感情。それに中てられ、馨も、妖魔二人も、熟練の戦士である志雄でさえも身動きが取れなくなる。

「お前ら、どうしてやるうか？ただ殺すだけなんて、そんな生易しいことじゃ済まさない。ミンチにして家畜の餌にしてやるうか？それとも妖魔の力と記憶を消し去って、代わりに変態の人間に飼われてる奴隷って設定でも植え付けてやるうか？ああ、わざわざ記憶を消さなくても力だけ除いて、鎖にでも繋いで慰み者に……って手もあるか。人間にも色んな嗜好の奴がいるし。女は勿論、一応は人型の雄に欲情するのだって、ね」

華蘭、そして馨の左半身に怪我を負わせた妖魔に視線を遣ってニイと口角を吊り上げる。

「最も屈辱的な死に方をさせてやるよ」

(本気だ……)

咄嗟に、彼のズボンの裾を掴む。

「止めても無駄だよ、馨。俺、本気で怒ってるんだから」
出会った頃から明るく、どこかふざけていた姿を見てきただけに、彼の発言は目を剥くものばかりだ。けれども、彼もまた妖魔。残忍、冷酷非道。暴虐……吐かれた言葉はまさしく、妖魔のイメージに当て嵌まるものばかり。

このままでは間違いなく、華蘭は残酷な殺され方をする。
それならばと、馨は胸が張り裂ける思いで術を紡いだ。

風の国（漆）

昔、誰かが言った。

『過去は上塗りできないが、未来を軌道修正させることは可能である』と

瞼を開くと、視界いっぱい青い空と白い雲が広がっていた。幾度と目にしたことのある見飽きた、けれども手を伸ばしても決して届かない景色。上空では風が強いのか、微々ではあるが薄雲の動く様子が確認できる。太陽の眩さには若干目を眇めてしまうものの、だからといって鋭い日差しというわけでもなく、寧ろ包み込むように照らす光は温かみを含んでいる。

深く息を吸い込んでみれば、様々な花の匂いが鼻孔を撥った。梔子花魁草、百合、月下美人、薔薇……。人の手で無惨に峯られ加工された偽物……。香水や匂い袋といったものとは異なる、天然の香り。しかし何故だろう。季節や種類を問わず綻ばせているそれらの匂いは、緋い交ぜとなって悪臭と化すことがない。まるで胸のささくれを宥めるかの如く優しく、個々のままの芳香を保ち、一帯に漂っている。

上半身を起こせば案の定、四季折々の花が咲いた場景の中に少女は組み込まれていた。

「華蘭」

呼ばれ、振り返る。すぐ傍に姉貴分の梅樹、そして自分の番いである蓮華が佇んでいた。

穏やかに微笑む男女の姿に、ホッと胸を撫で下ろす。そして、なんて酷い夢を見ていたのだろうと目頭に熱が籠る。

「どうしたの？変な顔して」

「うん……何か、嫌な夢見た」

「嫌な夢？」

身を屈めて心配そうに顔を覗き込んでくる梅樹の首に両腕を回し、甘えるように彼女の肩に額を押し付ける。そして、どのような内容であったかを語ろうとしたのだが……思い出せない。

耳を塞いで嘆きたくなるような、嘔吐した後の、喉の奥に酸味が広がるような、胸を掻き毟りたくなるような……あつてほしくない、嘘だと否定し、慟哭したくなるものであったという漠然、それでいて強烈な感情を抱いたことだけはハッキリと覚えている。

しかし何故だろう。反面、切なさや後悔、寂寥感に似た感情も確かに残っていた。

これで良かったのか、目を瞑ることだってできたのではないか。そう自問する己がいる。

（何か、大事なことを決断した夢だったと思うけど……思い出せない。でも、ここには蓮華も梅樹もいる。それで良い……）

ふと顔を上げれば、何よりも大切な主が穏やかな表情で微笑んでいた。

創造主である彼女、そして蓮華と梅樹。この三人の傍こそが自分の帰るべき場所なのだ、華蘭は安心と満足感に酔い痴れる。

仲間の体を抱き締める手に力を込めて、金髪紅眼の妖魔は静かに瞼を落とした。

「【誘う虹の幻影よ、我に力を】」

華蘭に刺されて空けられた腹部。そこから溢れ出す出血を少しでも留める為、患部を押さえていた血濡れの掌で彼女の脚を掴み、術を紡ぐ。

言葉通り、この術は幻を見せる効果がある。敵を怯ませたり、油断を作らせその隙に攻撃するといった状況で用いられる、所謂特殊効果だ。攻撃術が苦手な父親はこの手のモノを得意としていたが、逆に馨は不得手だった。

幻術を使用するのは実に数年ぶりだ。こんな機会さえなければ記憶の底に眠ったまま、埃を被っていたかもしれない。

ガクン、と華蘭の膝が崩れ落ちて咄嗟に細い肩を掴み支える。視点の定まらない眼球に、術の成功を確信した。

響に危害を加えた妖魔二人を非道な方法で殺すと宣告した月刻の言葉に嘘偽りないことを察し、気付けば術を放っていた。

この場にいる者達の中で最も強靱な力を持つのは彼だ。恐らく熟練の老剣士でも歯が立つまい。その青年妖魔が響の味方になると断言した以上、華蘭と羽翼を持つ妖魔が地獄を見ることは必須だった。幻術を唱えたのは、それならばと、せめてこれ以上悲痛な思いをさせたくないが故の潜在意識と思われる。

「響、もうジツとしてなよ。後は俺が片付けるからさあ」

「あつち、の妖魔、は……あんたに、任せるから……華蘭、には……手を……出さないで」

顎に向かってまた一筋、口角から血が零れる。呼吸がし難い。舌にどろりとした感触が纏わり付き、錆びた鉄のような臭いが鼻から抜ける。息を吸って吐くという、普段当たり前に行っていることさえ、今はしんどくて堪らなかった。

月刻の言つとおり、できることなら意識をシャットダウンしたい。視界に広がる光景に唖という蓋をして、忘却という名のゴミ箱に記憶を遺棄してしまいたい。痛い思いも、悲しい思いも、全てなかったことにできればどんなに楽だろうと強く思う。

（どうして聖域に来ちゃったんだろうなあ……）

これまでに何度、そう自嘲しただろうか。楓の言葉に耳を傾けなければ、もう少し落ち着きがあれば、精現鏡の存在を忘れていなければ……正義感が強く薄情な性格をしていないなどと言うつもりは更々ないが、こちらの世界に訪れてから後悔は底を尽きない。

「あつちにいる妖魔、殺戮士のおじさんが倒しちゃったけど？」

振り返る気力もなく視線だけ動かせば、志雄が妖魔の肢体に剣を振り下ろしていた。赤い血を迸りながら敵が後ろ向きに転倒する。先

程まで互角に見えたが、どうやら月刻の脅威に中てられ敵は存分に力を発揮できなくなったようだ。

「さ、馨。そこどいて」

月刻に背を向けたまま緩慢に首を横に振り、華蘭の体を抱き締める。するとピクリと腕の中で少女が反応を見せた。

苦手な系統の術の上、あまり集中できていない状態だった所為か、効果が薄れてきているのかもしれない。このままでは幻覚が解けるのも時間の問題だ。

「あんだ……が、華蘭に、手を……かける、くらいなら……わ、たしが……」

あまり力が入らない。それでも出来る限り強く腕の中の少女を掻き抱き、術を紡ぐ。

「【冷却の瑠璃の氷よ、我に力を】……！」

掌が触れていた背中から、見る見るうちに華蘭の体が凍り始める。背中、腰、肩、脚、首、爪先……そして顔。馨の頬に当たっていた金色の髪が、パチンと爆ぜて氷漬けになる。

腕の中で眠る少女から、馨は腕を離せずにいた。少しでも衝撃を与えてしまえば、華蘭の体は粉々に砕け散ってしまう。この聖域のどこかに存在する旧時代、“筒姫”が残した書に封印されてしまう。

ギリツと強く唇を噛み締めて慟哭したい衝動に堪える。叫べば、咆哮すれば、空気の振動だけで壊れ消えてしまう。

刹那の時間さえ、惜しい。少しでも、一瞬でもいいから長く、華蘭の傍に居たかった。

しかし無情にも、左右非対称の色を持つ瞳から涙が零れ落ちる。瞼から溢れ、頬を伝った雫は、凍った華蘭の肩に当たり、弾んだ。

それが別離の合図となり、馨の腕の中の妖魔は音もなく……姿を消した。

「あ……あ、ああ……あああああああああああああああ
あああ……！」

顔を覆い、前髪を鷲掴みにし、大粒の涙を止め処なく飛び散らしな

がら、馨は張り裂けんばかりに号哭した。

眼前に幾つものパネルを起動させる。そこに映るは逃げ惑う民衆であつたり、妖魔の出現など全く知らない殷賑とした光景であつたり、はたまた郊外の静謐な森であつたり……数え切れぬばかりの画面を展開させるが、その何れにも、胤斐が最も確認したい映像は該当しなかつた。

式典に招かれた来賓よりも、喧騒の中心から逃亡する、或いは騒動に気付かず祭りに興じる者達よりも、自分を管理する立場にあるこの国のトップである女性よりも、彼女が誰より優先したいのは半身である少女だ。

最後に画面を通して目撃したのは、馨が敵の得物によつて左半身を強打され、宙に投げ出された光景。それを目の当たりにした瞬間、背筋が凍つた。風の術で落ちた衝撃を緩和した様子ではあつたが、首を絞められてもがく半身を案じた直後に、敵の攻撃により状況確認する手段を断たれてしまった。

主に馨の状況を見ていた巨大画面のみならず、いつのまにやら来賓用にと置いていたものまでもが使えなくなつていたのは大きな痛手だ。おかげでその後、馨がどうなつたのかは分からない。

（くそっ！どうしてもっと他にカメラを設置しなかつたんだ！）

不審者がうろつく可能性もあるので監視カメラをもつと増やせと再三女王に訴えていたのだが、設備の人手が足りないことに加え、警吏も兵士も腕が立つので心配いらないとあしらわれたのだ。

ところがどうだ。民衆の避難優先とばかりに彼らは武器を持たない者達に紛れ逃げてしまつたではないか。

しかし妖魔の被害に遭う心配のない場所にいる胤斐とて、それは同じだった。どれだけ外に出て馨の傍にいたいと願つても、彼女はその術すべを持たない。

だからこそ、一刻も早く魂の片割れの無事を確認したかつた。

「くそっ！」

苛立ちが頂点に達し、拳をパネルに叩き付けたそのときだ。

「やあ。随分ムカついてるみたいだね」

唐突に飛び込んできた男の声にハッと顔を仰ぐ。どこから聞こえてきたのかと振り返れば、女王の宮殿地下であるメインスペースからだ。ここの画面から胤斐に話しかけてきた者といえば、女王に五十嵐姉弟、メンテナンス作業者、そして馨。けれども映っている者はその誰にも該当しない。

だがしかし、聞き覚えがないわけでは決してなかった。

「お前……月刻っ！」

オッドアイを見開き戦慄する胤斐とは対称に、漆黒の青年は満面の笑みを浮かべて呑気に手を振っていた。声や表情といった外面だけを見れば友好的と受け止められるかもしれないが、彼女は知っている。画面の向こうにいる男が人間の天敵である妖魔であり、しかも単に旧時代のそれではない、広大な力を携えていることに加え、実に狡猾な性質であるということ。

「覚えててくれて何よりだよ」

『どうしてお前がここに？！……まさか十年前みたいにまた馨に付き纏ってるのか？！』

「付き纏うって言い方、ストーカーみたいでやだなあ。否定しないけど」

柔らかな微笑みから一転、ニヤニヤとまるで気に入らない者を甚振るかのように、クツクツと喉を鳴らしながら嗤い出す。自分以外の何もかもが玩具であると言わんばかりに自信に満ち溢れた、けれども何の感情も浮かんでいない、凍てついた漆黒の瞳。唇にだけ笑みを模った無表情。

媒体越しでも伝わってくる相手との力量の差に背筋を震わせながらも、胤斐は身を強張らせつつ口を開く。

『そんな……だって馨、お前のことなんて一言も言わなかった』

「残念ながら、十年前の俺に関する記憶は忘れてるみたいなんだよ

ね。あのクソ野郎も厄介な置き土産してくれたって、そりやあ大いにムカついたけどさあ……今の素直じゃない馨も、あれはあれで可愛いよね。おまけにこの十年で良い体に育ってくれちゃって。未来の旦那としては、もうちょつと胸が豊満になってくれたら嬉しいところだけど、それは今後の俺の手腕によるのかな？」

酷薄な笑顔を表情に張り付けて現在の半身との関係を饒舌に語ってくれたはいいが、聞き流して良い内容では決してなかった。寧ろ半身の貞操の危機だ。

一瞬前まで相手の不機嫌を垣間見せる不穏な雰囲気押し潰されそうになっていたのを忘れ、かの妖魔封印士と瓜二つの姿をしたマザーコンピューターは咆えた。

『オイ、コラ、ふざけんなっ！誰が誰の未来の旦那だ！しかもお前、やっぱり馨をそんな風に見てたのか?!』

「湯上りバスタオル一枚つて、すんごい色っぽかったなあ」

『お前もう喋るな！馨が穢れる!』

「ギャー！」と絶叫しながら髪を振り乱す胤斐を美青年は嘲笑っていたが、次の刹那には軽快な気配を一掃させ先程の無表情に戻ってしまった。

その意識変化を察して胤斐も肩を強張らせる。

「……馨の怪我は治したけど、精神の方が衰弱してる」

『馨は無事なんだな?!それで、一体何があったんだ?!』

「それは追々本人から聞けばいいよ。あーあ！弱ってる馨を慰めて籠絡しようって魂胆だったのに、想像以上に参ってて俺を拒否しようとするんだもん。まあ、それだけ俺に裏切られたくないって防衛反応なんだろうけど」

唇を尖らせ不本意だと仏頂面しながらも、馨との距離感が徐々に詰められているのを実感しているのか、月刻の声はどこか弾んでいる。「この女王様には内緒で、宮殿の空き部屋で勝手に休ませてもらうんだけど、引き籠もっちゃってんだよね。仕方ないから志雄っておじさんにも転移してもらって協力要請したけど全く駄目。だ

「かーら、君にお願いしようと思って」

『あたしだつてここから離れられるなら、すぐに馨の元に駆けつける！でも……見ての通りだ。十年前、魂だけとなったあたしはあいつに、このサイバースペースの世界に隔離されてしまった。ここから抜け出そうと何度も試したけど、あいつの呪いは解けるどころか、弱まってさえくれない……！』

固く瞼を閉じ、ギリツと齒軋りしつつ己の無力さを痛感する。

悔しさと焦燥が緋い交ぜとなった胸中。叶うなら、すぐにでも半身が抱いている苦しみを取り除いてやりたい。不安で震えているならば腕を回し、その背を撫でたい。堪え切れず涙を流しているならば拭きたい。嗚咽を零しているのなら、喜んで胸を貸そう。

(一人で全部抱え込む……)

今の自分には、それを伝えることさえままならない。

誰よりも近くにいて、守つてやりたいと願うのに、適わない。もどかしくて、もどかしくて……想う相手に何一つしてやれない？弱な自分が腹立たしい。

『常に馨の傍にいられるのなら、悪魔にだつて魂を売り渡すのに……！』

「悪魔でOKなら、悪魔にだつて売り渡せるよね？」

『……は？』

ポカンと口を開いて画面越しに男の顔を見遣れば、ニヤリと口角を吊り上げて不敵に微笑んでいた。

「あいつの呪い、俺なら解除できるって言ってるんだけど？」

『う、嘘言え！そりやお前もそこその実力者なんだろうが、あたし覚えてるぞつ。お前、十年前にあいつに何かの呪いかけられてたじゃないか！』

「うう……それ言われると耳が痛い。……確かに、あいつにしてやられた所為でついこのあいだまで不自由の身だったけど、もう全快してるよ。そもそも実力はあんま変わらないんだつて」

動揺を隠せない胤斐の発言に、月刻も少なからず狼狽した様子では

あつたが、彼がパチンと指を鳴らした途端、電腦空間の中でしか自由には動けない少女は己の意識が遠ざかっていくのを感じた。

(う、そ……何で……?)

魂を隔離されて十年、それ以来の感覚だ。

自分の身に何が起こっているのか把握できないまま、胤斐は昏倒した。

「馨」

シートとスプリングが軋む感触に、少女は身を強張らせる。再び月刻がベッドに乗り上がってきたのだろう。

自らの手で華蘭を封印した現実を受け入れられず、気付けば見覚えのない一室にいた馨は、涙腺を緩ませたままベッドの中に潜り込んだ。いつの間にか骨折や腹に空いた穴も塞がっていたが、それを治し、そして自分を人目のない場所に転移したのが月刻の仕業と悟れば、シクシクと胸が痛む。勿論感謝の念が芽生えないわけではなかったが、それ以上に苦心の気持ちを上回るのだ。

(月刻もきつと、いなくなる……)

彼は妖魔だ。何れ華蘭と同じように封印しなければならぬ日があるかもしれない。いや、自分でなくとも、他の妖魔封印士や殺戮士の手にかげられるかもしれないし、最悪の場合……彼の手により縊り殺される運命というのも、視野に入れておかねばならなかった。これからも月刻が力を貸してくれるとは限らない。それならばいっそのこと、ここで関係を別っておきたかった。

これ以上、情が移る前に……。

「優しくしないで。放っておいて。もうこれ以上、私の中に入ってこないで……」

二重の掛け布団に包まれているというのもあるが、慟哭した所為で喉が哽れてしまっている。上手く発音できた自信はないが、拒否していることは伝わったはずだ。

「俺は未来永劫、馨の味方だよ。その証拠ってわけじゃないけど、馨に今最も必要な奴を連れてきた」

(私に必要な奴……?)

逢いたい者なら大勢いる。この聖域とは異なる世界にいる父親、母親、祖母、親友、馴染みの喫茶店のマスター、店員、常連客……。様々な顔ぶれがまるで走馬灯の如く脳裏に思い浮かぶ。

しかしこの場に連れてこれるといふ必要な者が誰なのか、見当もつかない。先程志雄に散々慰められたが、妖魔封印士らしからぬ心構えであると最終的には批難され、ますますここから出辛くなってしまう。なので彼だとは思えない。

「馨、ほんのちよつとでいいから隙間空けてくれない？魂だけの状態で放っておくとこの子、本当に死ぬよ？」

魂だけの状態。そして死。その二つのキーワードでハツとする。

「胤斐?!」

勢い良く布団を弾き身を起こした瞬間、自分と瓜二つの半透明の体が飛び込んできた。

『馨……!』

耳元で自分の名を囁いた半身は馨が抱き返せば溶け込むようにその姿を消した。

「胤斐?胤斐??!」

「大丈夫。鏡、見てごらん」

壁に掛けられた姿見を指す男に言われるがまま、そちらに近付く。ふとその傍らに意識を失くした志雄が視界に入ったが、そちらに気を取られた刹那、鏡の中の自分が違う動きをした。

『馨』

頭の中で自分と同じ声音

だが、違う声がある。

「い、んひ……」

鏡面に両手を付いた半身が頬に涙を滑らせて笑っていた。

「胤斐……これ、夢じゃないよね？」

『ああ。夢じゃない……。あの頃みたいに、あたしは馨と一緒にい

るんだ』

胤斐の掌に自身のそれをピタリと重ね、熱を持たない滑らかな平面に額を付ける。

『馨。あたしはお前の半身だ。お前の抱えてる気持ち、あたしにも半分分けてくれ』

「うん……」

鏡を隔てて同じ顔が二つ。似たような表情ながらも別人の二人は、愛おしさで喜び、そして苦しみをたどどしく、不器用に……時間をかけて少しずつ分かち合った。

風の国（捌）

昔、誰かが言った。

『秘密や謎といったものは、必ずしも人の手で創られるとは限らない』と

「ほら、これでいいか？」

「ありがと」

差し出された、現世で例えるならタコスとよく似た食べ物を受け取り、老剣士に礼を言う。一口啜え咀嚼すれば、トルティーヤ風の生地塗られたピリツとしたソースの辛さと野菜の甘みが見事なコンビネーションを醸し出し、食が進む。肉より野菜や魚、甘味より辛味を好む饗としては、機会があればまた食べてみたいと思う一品だ。

『胤斐、これ何て食べ物？』

『ネッツア。それは中が野菜だから栄養価はさほど高くないが、移動しながら手軽に食べれるから、庶民には人気だ。発祥は火の国と聞いたことがあるな』

現世で例えるならハンバーガーだろうか。胤斐の口振りからして、どうやら聖域の至るところで売られている商品のようだ。

瞳が隠れるよう俯き加減で噛み砕きながら志雄と二人、脇道を歩く。フードの裾から覗ける視界で周囲を見渡せば、一般人に混じり警吏や巡回兵士らしき者達の姿が目立った。止むを得なく彼らの横を通る際は志雄がさり気なく間に入り、饗の姿が見えないよう死角としての役目を買ってくれている。

首都を離れ今日で五日が経過した。噂によれば、幸い式典の惨事で死者こそ出なかったものの、逃げる際に混乱が生じ、怪我人は数百人に上るらしい。そんな場所で妖魔と対峙した饗は、今やこの国の首都……否、風の国全土で噂的となっていた。

二度に渡って妖魔の襲撃から救った英雄。……そしてその反面、金髪紅眼の妖魔をこの地に招き入れた疫病神として。

(完全にお尋ね者扱いされてるなあ……)

現場から日に日に遠くへ離れているというのに、今や国のあらゆる場所に馨の似顔絵が貼り出されていた。

(砂色の長髪。右・朱、左・薄紫の非対称の目。長身瘦躯の女性。

この人物を見かけた者は速やかに警吏団に報告せよ……か)

壁に貼られた紙を見上げていれば、脳裏で溜息を吐く声が出た。

『これを見る度、絵師の腕の低さに嘆きたくなるな』

特徴こそ捉えているが、お世辞を並べたところで似ても似つかない。馨も内心では苦笑を禁じ得なかった。

『監視カメラの映像から私の写真使われると思ってたけど、とりあえず大丈夫そうだね』

『……あの妖魔のおかげとはいえ、素直に礼を言うのは癪だがな』

現在馨は、漆黒の妖魔と別行動を取っている。別れる際に口にした彼の発言を信用するならば、どんな手段を用いているかは不明だが、馨の為に奔走する……とのこと。

胤斐を再び馨の肉体に戻すという事象をやったのけた月刻は、実に面倒臭そうに告げたのだ。

「馨の存在を忘れさせるのは正直、この国ごと吹っ飛ばすのが一番楽だけど、それは嫌なんですよ？だからって騒ぎを目撃した人間全員の脳を弄って、一部の記憶だけ消すのはさすがの俺でも骨が折れる……っ！か、メンドイし。とりあえず馨はおじさんと一緒に適当に逃げててくれる？搜索する奴ら、きつとマザーコンピューターに馨の画像提供してもらおうとするだろうけど、胤斐はもういないわけだしさ。同じタイミングで姿を消した馨が変な風に疑われない為にも、俺は適当に醜い妖魔に化けて、地下の機械ぶっ壊してくるよ」後から絶対追いつくから。

煩わしさを全面に出しつつも、そう言い残した月刻の声色は柔らかなものだった。

出逢って間もなく気絶した自分を地の国へ運んでくれたこと。山賊の襲撃から助けてくれたこと。胤斐を再びこの体に戻してくれたこと……他にも何度か、彼には救いの手を差し伸べてもらった。

本来なら敵対すべき種族ではあるが、協力してくれるのは正直なところ、嬉しい。……だからこそ、怖い。

花の国の妖魔だと、失った記憶を蘇らせ告白した少女。別離してしまった半身を取り戻せたことで華蘭を封印したシヨックを紛らわせることができたが、今回のようなことでん返しが再び起こらないとは限らない。

これ以上あの青年妖魔との関係を縮めてしまつたら……いざというとき、彼に攻撃できるだろうか。心を痛めずにいられるだろうか。辛気臭くなった胸の内を追い払うように、わざと明るい声を出して前を歩く同業者の袖を引いた。

「塩。あとどれくらいかかるの？」

「塩じゃねえ！志雄だつ！つたく……もう、すぐそこだ。良いか悪いかははともかく、あそこにいきや何らかの情報は手に入る」

呼び方を揶揄すれば相変わらず食らい付いてくる妖魔殺戮士を胤斐と内面でほくそ笑み、志雄に続いて細い裏路地に入る。

常に風がそよぐ湿度の低い国であるにも拘わらず、踏み締めた土はやや湿り気を帯びていた。建物と建物の間の道とあって日が照らない所為もあるのだろうが、この路地に漂う雰囲気は違和感を覚える。既視感、と差し換えていい。

「馨？」

「どうした？」

立ち止まり、茫然と目を瞠る少女に怪訝そうな声が飛ぶ。しかし返事はできない。どう答えて良いか分かり兼ねるからだ。

ヒュツと息を呑み、馨は唐突に駆け出した。この場所を知っている。そう直感したのだ。後方と内面から自分を名を叫ぶ音が聞こえたが、構わず突き進む。

こじんまりとした店が軒を連ねる路も、掲げられた看板も、吊り下

げられた提灯にも、どこかしら漂ってくる食べ物の匂いにも、覚えはない。しかし各々の店の配置、道幅、靴底で踏み躪る土の感触、そしてこの不可思議な雰囲気は知っている。感覚が記憶している。

「ハッ……ハッ……ハッ……」

短く息を切らしてとある店の前にて立ち止まる。煉瓦造りの古びたビルで、二、三階が住居らしきその建物の一階は、喫茶店になっていた。しかしまだ日没前だというのにCLOSEの看板がドアノブに吊され、営業終了を示唆している。

「……」

ふと視線を落とせば、人一人通る幅しかない地下へと続く階段があった。誘われるようにそちらへ近付けば、下った突き当たりで右方向を示した矢印が暖色系の光を放ちながら点滅し、曲った先に店があることを訴えていた。矢印の上にも何か照明があるようだが修理中らしく、布が掛けられている。恐らく店名だろう。

壁伝いに一段一段ゆっくり足を踏み出して、厳格な印象を齎す門扉を開ける。馬蹄形のノッカーを引いて重い建具を潜れば、その先は四畳ほどの何も無い空間だったが、正面にまた一つ、今度は現代的な造りをした扉が構えていた。グツとドアハンドルを握り、押す。落とされた照明に飛び交う原色の光。読解不能のヒップホップ調の音楽。入り交じる香水と紫煙の香り。甲高い口笛。

何事かと肩を強張らせ身構えるが、正面を仰ぎ納得。天井から垂直に刺さったポールが設置されたステージ。その上で金髪の女性が踊っていた。この店ではポールダンスを見世物として催しているらしい。

「……あれ？ちよつ、あの人……?!」

豊満とは言い難いものの、理想的な形をした胸元。括れた腰。引き締まった臀部。ショートパンツの裾から伸びた鍛えられた太腿。細い足首の下は靴を履かず、裸足のまま。体の動きに合わせて跳躍する長い金色の髪。

ステージから距離があることに加え、スポットライトがあらゆる角

度から点滅するように照らされている為に核心は持てないが、知り合いと酷似している。

「馨っ！」

名を呼ばれ、振り向いた途端に頭上をバシんと叩かれた。唐突の衝撃に瞬きを繰り返し、ハツとして首を動かせば、まずハリセンを握った手が視界に飛び込む。そして辿るように視点を上にずらし、相手が誰であるかを知り、思わず目を剥いた。

「委員長っ?!」

服装こそ学生服でなく、この店の制服だろうバーテン服に身を包んでいたが、彼の特徴といえる黒縁眼鏡に鼻から頬にかけて散らばった雀斑、そして前髪の左半分のみ他と色違いに伸びた髪。現世にいるはずの親友が、慥然とした面持ちで馨を睨んでいた。

(どうしてここに?!)

そう口にする間もなく、今度は後ろから肩を掴まれ、そちらに上半身が傾く。

「っ、月刻……」

相手の胸板に後頭部を預けて顎を持ち上げてみれば、漆黒の妖魔が剣呑な眼差しを委員長に注いでいた。醸し出る忿懣の雰囲気、意識を向けられていない馨でさえ居心地悪く身じろぎしたというのに、対する親友はやれやれといった表情で肩を竦めるだけ。さすがは委員長というべきか。

「おい。入口に固まるな。客が入れねえだろ」

声が飛んだ前方右側を仰げばカウンターの奥にて、またしても見知った顔の男が煙草を啜って佇んでいた。

月刻に腕を引かれ委員長と脇に寄れば、タイミング良く扉が開き、そこから老剣士が顔を覗かせる。

「おい馨、勝手にウロチョロするな。まあ“World cross”に辿りついてたのは幸いか」

「“World cross”?!」

(やっぱり!)

「知ってる店なのかな？」

困惑した胤斐の声。自分を間に挟んで睨み合う親友と妖魔。鼻を伸ばしてステージ上のショーガールに見とれる妖魔殺戮士。

現世にあるはずの、昼は喫茶店、夜はバーへと変貌する店。それが何故聖域に存在するのか……戸惑いを隠せない。

「委員長。だからそこに固まられると邪魔だっつもの。少し早えが、休憩やるから説明してやれ」

うるたえる馨をさすがに不憫と感じたのか、溜息混じりに紫煙を吐き出した南雲が、二本の指の間に挟んだ紙筒でテーブル席を指し示す。

有無を言わさぬ三白眼に学生アルバイトはむうと唇を尖らせるが、異論はないのだろう、先頭立ってステージとカウンターから一番離れた場所、カジノスペースのスツールに座らされた。

「さて、何から話そか」

思案顔でボード越しに対面した少年はトランプを持ち出して、鮮やかな手捌きでカードを切る。淀みない動きはまるでプロさながらと言わんばかりで、如何にも慣れた手付きや立ち姿から、カジノを取り仕切るディーラーは、実は彼女なのかもしれないと憶測する。

「……ホントにあんた、委員長なの？」

「ドッペルゲンガーちゃうで。俺は俺やし、さっき会ったんはマスター、あそこで踊るとんはBさんや」

「Bさんが踊っていると、初めて見た……」

首だけ振り返り、アクロバティックな技を披露している女性従業員に感嘆の息を漏らす。腰を振り、ポールに脚を絡ませて、誘うように観客に流し目を送る表情は、昼間喫茶店で見かけるときとは打って変わって妖艶だ。

彼女が夜、ポールダンサーとして活躍しているのは親友を通じて聞き及んでいたが、場所がバーである為、こうして観る機会など暫く訪れないと思っていたのだが……。

「ねえ、現世に存在する店がどうして聖域に在るの？」

Bのダンスを名残惜しみながら再び委員長を見遣れば、小さく肩を竦められる。

「この店の名前は？」

「World crose”……？」

「何でそんな自信なさ気やねん」

「だって、階段のところ、店名隠れてたし」

「ああ、あれ。こないだ阿呆な酔っ払いが壊しよってな。まあそれは置いて、ここは名のとおり、色んな世界と交わるんや。現世、聖域……他にも色々な」

『そんな馬鹿な』

一笑する胤斐。譬にしか聞こえないはずなのに、親友はその声を耳にしたかの如く手の中のカードから視線を外し、真っ直ぐに目の前に座る少女の顔を仰ぐ。

「嘘ちやうで」

茶目つ気にニイと白い歯を見せて笑みを浮かべながらも真剣な眼差しを向けてくる委員長に、譬は背筋を伸ばす。まさか、自分にしか聞こえるはずのない半身の声明を耳にしたかのタイミング。同じように感じたのだろう、胤斐の息を呑む気配がした。

「現に志雄のおっちゃんや楓婆ちゃんとも知り合いやし、俺」

「……マジで？」

半信半疑で右隣りに座る老剣士を見遣れば、ステージをチラチラ気にしながらも神妙に頷いた。

彼が委員長と顔見知りなら、楓ともそうである可能性は充分有り得る。佐久間家に親友を招いたことは幾度かあるが、妖魔を封じる為聖域で過ごすことが専ら多かった祖母と鉢合わせたことはこれまでになかった。それは間違いない。

「何て出鱈目なの、この店……」

「それ言うなら、現世と聖域を行き来しとる譬こそそうやる」

(違いない)

苦笑いしたそのとき、ある考えが強い衝撃を受けたかのように唐突

に閃いた。

「あのさ！ここが色んな世界と繋がるなら、ここから現世に帰れる？」

テーブルに両手を付いて勢いよく立ち上がった所為か、はたまた発言にか、視界の隅で月刻が珍しく双眸を睜ったのを捉えたが、気にせずバーテン服の親友に詰め掛ける。

沸き上がる希望に胸を膨らませるが、けれども委員長は眉尻を下げて力無く首を横に振った。

「残念やけど、無理や。客は入ったところと同じ世界にしか出られない」

「そんな……」

期待が大きかっただけに、絶望も大きい。試しに委員長と連なって外へ出たとしても、現世には帰れないだろう。漠然とした直感、しかし確固たる事実。

委員長は嘘をつかない。例えそれが、理不尽で現実味のない、不都合な真実なのだとしても。

「まあ安心せえや。楓婆ちゃんももうじき回復するやろうし、迎えるもすぐや」

「お祖母ちゃん、起きたの?!」

「魔女さんの薬を飲ませたからな。それに邪魔なもんは俺が取り除いたし」

「邪魔なもん？」

首を傾げて問うが、親友は薄く笑みを刷くだけで何も答えはしなかった。詳しく問いたださそうとしたところで、相手は譬より数段上手の話術を駆使する。はぐらかされるのが才手だ。

「ところで譬、ここは何を営む店や？」

「何って……バーでしょ」

「そうや。やから、未成年は立ち入り禁止」

「ちょ……せつかく会えたのに出てけつての？未成年をとやかく言うなら、委員長やBさんだつてそうでしょ!」

「従業員は別。志雄さん、ポールダンスも終わりやし、馨連れてお帰りいただけます?」

「……仕方ない。宿場に馨を置いてから出直すとするか」

促す口調ながらも否を言わせぬ意思を嗅ぎ取ったようで、やれやれといった面持ちで志雄は馨の腕を取ると、出入口の方へと歩き出す。当然馨は抵抗するが、力の上で屈強な肉体を持つ剣士には勿論敵うはずもない。

「ほな馨、また明日学校でな」

「は?」

ダンスが終演を迎えるらしく、盛り上がる音楽と歓声の所為であまりよく聞き取れなかったが、親友は不可解なことを口にした気がする。

(もしかして明日が登校日? いやその前に、どうやって現世に帰れつてのよっ?)

階段を上り外へ出るが、案の定そこは親友と歩き慣れた裏路地ではない。

よほどバーへ戻りたいのだろう、馨の腕を引く志雄の足取りは競歩並みだ。足早な上にあちこち角を曲がった所為で、地上に出てさほど時間は経っていないはずなのに、ここまでの道順が既に分からない。対する志雄は歩き慣れているのか、足取りに迷いはなかった。

もはや“World cross”へ行くには、彼が自分を置いて再びあの店に行こうとするのを尾行するしか手はなさそうだ。

(委員長長め……!)

帰ったら覚えてろ、と毒吐いたそのときだ。

「馨!」

焦燥と安堵が緋い交ぜとなった、男声。刹那、足が止まる。その声音が酷く懐かしく、誰のものかと悟った瞬間、目頭が熱くなった。振り返れば、息を切らした中年の男が立っていた。この周辺のどこに召喚したかは知れないが、ひたすら走り続けてきたのだろう。こみかみに滲む汗が脇に建つ酒場のライトに反射している。

「お父さん……」

「良かった！ 譬、無事なんだな」

勢いよくこちらに駆け出した父親に、そのまま力いっぱい抱擁される。頬骨がぐりぐりと肩口に押され痛みを覚えたが、そんなこと、この感動には勝らない。

「久しぶりだな、健統」

「お久しぶりです、志雄さん。あなたが譬を守ってくれてたんですね」

「俺もなんだが、寧ろ……」

誰かを捜す素振りを見せる壮年の剣士に譬もふと、漆黒の妖魔の姿を脳裏を掠める。

（あれ？ 月刻……？）

そういえば先程から見ていない。思い返してみれば、自分達と一緒に彼が“World cross”から出てきた記憶がなかった。

もしかすると未だあの場に留まっているのかもしれない。

「迎えに来るの、遅くなってごめん。よく分からないが聖幻鏡に変な力が働いてたんだ」

「変な力？」

「ああ。ありとあらゆる方法を使って、それでもどうにもならなかったんだが……それが今日になって、急になくなってたんだ。もしかしたら母さんの意識が影響してたのかもな」

「そうだ、お祖母ちゃん！ お父さん、お祖母ちゃんは？！」

父の二の腕を掴んで早く言えと促せば、ほんのり眉と目尻を下げて泣き笑いと表現するにふさわしい面持ちになった。

「もう大丈夫。順調に回復に向かっている」

力強く頷く父の手が自分の頭を撫でる。その温かさに、そして祖母が無事であることに、譬は顔を覆って喜びに涙した。

ポールダンスが終了し、カジノスペースに集まってくる客を言葉巧

みに追い返した委員長は、鋭い眼差しでこちらを睨んでくる漆黒の青年の前にカードを配る。

「……お前、一体何者？」

唸るように低い声。疑念と警戒、そして憤懣を滲ませた声色。並大抵の人間ならば声に含まれた感情を嗅ぎ取って慄きそうなものではあったが、ボード越しに佇む少年は臆することなく平然と月刻を見据えている。寧ろ鶯色の瞳には若干の呆れと、同じくらい感嘆の色も滲んでいた。

「何って、真正正銘の人間や。それ以上でも以下でもない」

「ただの人間が俺の力を難なく呑み込めるはずないだろうが」

「ああ、俺が食ったって分かるんや」

これ見よがしにと腹を撫でる少年に、月刻は眉間に寄っていた皺を更に深くさせる。

聖域から現世に帰る手段を馨が持っていなかったとはいえ、何れ彼女を迎えに訪れるだろう家族を来させない為に聖幻鏡に施していた力。いつそれが解かれたかは分からないが、消滅したのはつい先程……そう、月刻がここで委員長を見たまさにそのときだった。

妖魔の中でも特に力のある自分の施しを解除させ、尚且つそれを今まで悟らせず消化するなど、唯の人間ができるわけがないのだ。

警戒心を露にした美青年を前に、バーテン服を纏った少年は身構えることなく笑顔を模った。

「なあ、ちよつとしたゲームせえへん？君が勝ったら、今後一切、俺は君の邪魔はせん。けど俺が勝ったら」

現世・？（壱）

昔、誰かが言った。

『痛みと生は直結している』と

右手に握っていたシャープペンシルを置いて、上半身を大きく反る。背骨の鳴る音に顔を顰めつつ、親指と人差し指で目頭を揉みながらゆっくりと息を吐き出す。肩が重く、目の奥がズンと重い。半ば開いた唇から幽体や魂といった類が飛び出てしまいそうだ。比喻にしては随分的を得ている気がして、思わず自嘲する。

とにかく、そのくらい心身共に疲れ切っていた。

漸く現れた父親の迎えで現世に戻った馨は楓の安否を確認し、それから順を追って聖域での出来事を家族に説明した。波瀾万丈の旅路に保護者三人は胸を打たれた様子ではあったが唯一、胤斐を再び取り戻したことに關しては大いに喜んでくれた。

そして全てを語り明かしたところで現世での日にちを確認し……血の気が引いた。

「助けて委員長くっ！」

「無理」

夜中、バーでの作業を終えたばかりであろう彼は疲労困憊といった声でその一言だけ告げると、あっさり通話を断ってしまった。その後幾度とケータイをかけ直したのだが、電源を切ってしまったようで再び繋がることはなかった。

自業自得と承知しながらも親友に理不尽な悪態を吐きつつ馨は結局、徹夜で長期休暇の課題に取り組んだ。

実際には後十日ほど夏休みは残っているのだが、中学三年生という言わば受験生の立場とあって、最高学年のみ全校登校日から通常授業が始まる。つまりは一刻の猶予もなかったのだ。

「眠い。疲れた。もういい……」

日が昇るまでは自室にて机と向かい合っていたが、ベットの誘惑に耐え兼ねて日の出と共に学校へ場所を移した。さすがにまだ校門を開錠してないかと危惧したが、幸いにも運動部が朝練で登校していたので、それは杞憂で済む。

そして午前七時。図書室にてようやくと最後に残っていた読書感想文を終わらせた。もはや感想というよりあらすじをなぞっただけの文章だが、悠長に本を読み直す時間などあるはずもなかったのだし、国語の担当教諭には申し訳ないがこらで手を打ってもらいたい。

「私、頑張った……。ちよー頑張った……」

誰でも構わないので「お疲れ様」の一言が欲しかったが、生憎この一室には自分の他には誰もおらず、内面にいる半身は眠っていた。

疲労が溜まり、脳は非常に睡眠欲を欲している。おまけに食事も昨日ネツツアを口にして以降、栄養サポートを謳うゼリー飲料を一口二口嚥下しただけだ。いつ腹の虫が唸ってもおかしくない。しかしそれ以上の欲求が胸の内に渦巻いていた。

(無茶苦茶眠いしお腹も空いたけど……まず口が寂しい)

胃を満たしたいというわけではなく……率直に言えば快樂が欲しい。

「キス、したいなあ……」

「じゃあ俺とします?」

背後でドアの開く音と同時に届いた言葉。眠気眼で振り返れば、とある男子生徒が茶目っ気に双眸を眇め笑みを浮かべていた。名前は覚えていないが、バスケットボール部に所属する一学年後輩だと記憶している。体操着に着替えていない肌は薄っすら日焼けしており、室内の部活動ではあるが走り込みか、或いは休暇中海水浴にでも行っていたのかもしれない。

だからか、開いた唇から覗く歯が目を惹いた。無意識に喉が鳴る。

「宿題、終わりました?」

馴れ馴れしい口振りに若干辟易するものの、垂れた眦に軽薄な印象を齎せる吊り上がり気味の口角、成長に伴い丸みを削いだ頬、全体

的に軟派な雰囲気を纏っている彼の容貌にはしっくりときた。

「まあね。そっちは朝練なんじゃないの？」

「朝練より先輩優先したんですから褒めてくださいよ」

「よく言う」

白い歯を映しては隠す唇。薄くはなく、どちらかといえばやや厚みがあるそれは“World cross”のマスターのように色気を感じさせるものでもないが、重なったときの弾力感に少々期待してしまう。

（前したときはどんなだったっけ？）

覚えてないということは大したわけでもなかったのかもしいが、口寂しい……飢えていると言い換えても構わない今の状況なら、それはもう二の次だ。

馨の視点がどこで留まっているか察したのでろう。袖から伸びた長い腕が少女の頬へと向かい、大きな掌で軽く顎を上げられる。

しなやかな腕の筋肉を一瞥して再び少年の顔を仰げば、瞼を落として頬に睫毛の陰影を落としていた。このような仕草をされれば、これから成される行動は想像に難くない。

しかし馨は一切の抵抗は見せず、唇に降り注がれる感触を享受した。

図書室の鍵を返却して階段へと足を運べば、丁度踊り場で下から上ってくる親友と遭遇した。前髪の半分を除いた黒髪が外からの日差しを浴びて艶やかに光り、プラスチックを嵌め込んだ眼鏡がきらりと反射する。

昨夜……もとい本日に入ったばかりの数時間前は疲労の様子を隠さない声色であったので、さぞかしお疲れだろうと想像していたのだが……だからといって不機嫌というわけではなさそうだ。しかし良いわけでもない。強いて言うなら両方だろうか。まるで好物と嫌いな物を一緒に口に含んだかの如く複雑な面持ちをしている。

「おはようさん。宿題終わったか？」

「おはようさん、じゃないわよ！宿題手伝ってって、メールも電話もしたのに〜！」

「宿題は自分の力でやってこそ身に付くんやで。それに予め夏休み前に取り組んどったから、言うほどでもなかったやろ」

確かに、例年ならば最後の最後に全て纏めて追い込むような形で、しかもやはり委員長の手を借りて漸く終わらせていたので、今回はまだマシだろう。それもこれも魔女の忠告と……彼女のいる場所まで導いてくれる委員長のおかげ、と言えなくもない。

（魔女さんには今度会ったときにお礼言うとして……）

「やっぱり委員長にありがとうって言うのは何か癩」

「何でやねん」

半眼を閉じて呆れた様子で肩を竦める彼と並んで階段を上る。

「……委員長。色々訊きたいことあるんだけど」

「やるな。やけど場所が場所や、放課後まで待ち。それに……実は昨日、伝え忘れとったことがあんねん」

「伝え忘れてたこと？」

チラリと隣りの様子を仰げば、随分と苦々しい表情をしていた。

自分がこちらに戻って来れたことを喜んでくれている……それを好物を口にしたかのようにとするとすれば、逆の嫌いな物というのは、今から言うことに当たるらしい。

「何？……あ、もしかして月刻のこと？私がお父さんと逢えたとき傍にいなかったし、もしかして“World cross”にいた？」

「あ〜……うん、まああいつのことはちよい置いてこ。そうやのうて……ああ、ここまで来たら実際見た方が早いな」

疑問符を頭の上に浮かべる響を余所に、委員長は自分達の教室である三年三組のドアを開ける。じきにSHRが始まるとはいえ廊下で雑談する生徒が多かった為に気付かなかったが、扉の向こうの一室は葬式場かと疑いたくなるまでに静まり返っていた。

（え、何？この物々しい雰囲気）

クラスメイトの大半が、やや俯き加減で自席に着いていた。立ち上がっている者もいるが誰一人として歩を進めてはいない。そして皆が皆、窓際から離れていることに気付く。原因を探ろうと前から後ろへ視線を流し、窓際後列、一番後ろの席に座っている人物を視界に捉え、馨は軽く目を瞠った。

（な……んで？）

驚愕する自分の真横から「悪い」と謝られ、親友が彼の登校を予期していたことを悟り、じろりと睨み付ける。

（停学が解けた？でも、そんなの関係なしに今まで休んでたじゃん……）

久々に見る彼の人物の顔付きは、最後に目にしたときよりもだいぶ変わっていた。それも悪い方へ。

一度、固く瞼を閉じて鼻で大きく深呼吸する。耳殻がどくどくと脈打っているのを感じ、微かに己の指先が震えているのを自覚した。どのみち馨の席は彼の右隣りだ。嫌が応でも顔を合わさなければならぬ。

普段は大して大きくもない嘆息の音が、静謐なこの場では大層に響く。耳聡く聞き取った彼がこちらを振り向き、ニイと群青色の眼を眇めた。

「よ。久しぶり」

「……久しぶり」

鞆を置いて席に着くと同時に話し掛けられる。サツと室内を一瞥すれば、やや固い表情の委員長以外こちらを窺っている者はいなかったが、誰もが自分達の会話に耳を傾けているのは明らかだ。

辟易するアシンメトリーの瞳とは対称に、群青の瞳の少年は愉しそくに眦を緩める。

「それだけ？もっと他に言うことねえの？」

「随分痛々しい顔になったね」

「……お前は暫く見ないうちに可愛いげなくなったな」

最後に彼を見たのは三年生に上がってすぐだったろうか。四月の時

点ではまだ耳だけで収まっていたというのに、今となつては眉に鼻唇、更には舌先にまで無機物が煌めいていた。それらが皮膚や肉を貫通しているのかと思えば、自然と胸の奥が冷える。

彼がこのような嗜好にはしる前は、ピアスを単なるアクセサリーとしか捉えず、もしかすれば譬自身、数年後にでも一つ二つ耳に小さな穴を空けるかもしれないという予感があつた。しかし、もはや肉体改造としか考えられない姿を……それも見ず知らずでない相手が見るからに痛々しい風姿を曝すようになってからはそんな気など一気に失せてしまった。

おまけに治癒してもらつたとはいえ腹に穴を空けられたのはつい先日のこと、もう自分自身は勿論、他人であつても痛ましいのを目にするのは御免だと思つていたのに。

「あんたに可愛く思われなくても結構よ。私達もう、単なる同級生でしょうが」

ざわりと、周囲がさざめき合うのが聞こえる。しかしそれを無視して二人は会話を続ける。

「俺は納得してない」

「現に私が別れを切り出して数ヶ月、顔を合わすどころか連絡さえ取り合つてなかつたでしょ？」

納得できていないのなら、どうして連絡してこなかったのかと言外に告げる。しかし問うたところで彼が不登校中何をしていたかなど、その見て呉れが語っているようなものだ。

「私はもう、あんたのことなんて好きじゃない」

冷やかな声色でそう告げた譬は、振り切るようにして以前交際していた少年から視点を離して鞆の中の整理を始めた。

清水悟しみず せいと付き合い始めたのは二年前、梅雨が明けて間もなくの頃だった。晴天のち入道雲が現れる日々が続いていただけに、朝から夕方まで濃厚な灰色の雲一色に染められた、目にするだけで鬱然とし

てしまう天気であつたのを覚えている。

入学当初から一際目立つ容貌をしていた馨は異性から呼び出される
ことが多かった。その日もまた、了承していないにも拘わらず下駄
箱にメモだけ残されるといふ一方的な呼び出しをくらつて、毎度の
お断りを成し遂げたのだが、運悪く忘れ物をしてしまい再び教室に
戻る破目になつた。明るいとはいえ時間が時間、既に室内は誰もい
ないと思われたが唯一人、日誌を提出し忘れていたということ。日
直の悟が残されていた。

当時は互いに挨拶程度の間柄であつたが、虫の居所が悪かつたこと
に加え人気がないことを幸いに、気付けば馨は鬱憤を晴らすように
悟に現状を語つていた。

入学してからこれまでにとれだけの者から告白を受けたか。告白し
てきた者を好いていた女子生徒からの陰湿なやつかみ。根も葉もな
い噂が囁かれていること……。

告白されることを鼻に掛けていると捉えていたのか、それとも密や
かに行われる妬みに同情したのか、当時の彼の心境は窺え知れない。
だが傍から見れば適当に相槌を打っているように見えたので、馨と
て悟が真面目に聞いてくれなくても構わないスタンスだつた。

だからこそ、揶揄でしかない提案……もとい戯言であつた。

「毎度毎度、呼び出されては告白されて……正直ウンザリしてるん
だよ。ねえ、良かったら隠れ蓑になつてよ」

周囲の目を欺く、ただそれだけの為に偽りの恋人関係を築く。

他愛のない……寧ろ悟にとっては失礼に当たる理由だ。仮に馨がそ
のようなことを頼まれれば、素気無く断つただらう。馬鹿にするな
と罵倒されてもおかしくはなかつた。それでなくとも単純に驚いた
り、鼻で笑つたり、とにかく一蹴されるのは間違いないと予測して
いた。本当に、単なる冗談だつたのだ。

そのように考えていただけに……肯定されたときはさすがに我を忘
れ、啞然とした。

「そんな驚くことないだろ。こつちも単なる暇潰しだからさ」

以後、悟と二人きりで過ごす時間が増えた。登校、休み時間、下校、休日……四六時中常に一緒というわけではなかったが、悟の隣りは安らぎを与えてくれた。そしていつしか、馨は本気で悟に恋心を抱き始めていた。見ず知らずの相手から告白される機会が減ったことに安堵を覚えるよりも、悟を想って胸を焦がすことの方が次第に増えていったのだ。

そしてそれはもしかすれば、少年とて同じだったかもしれない。

初夏の教室でのやりとりから二ヶ月。若干熱気が残る乾いた息吹を感じ始めた晩夏、馨は彼の唇の感触を知った。……ファーストキスだった。

言葉で示さずとも思いが通じ合ったと、馨は歓喜を露にした。そんな幸せそうな少女に異性の親友は苦言を呈したが、それでも結局は胸を撫で下ろした様子だった。

そうして自分の感情ばかりに先走っていた所為なのかもしれない。

少年の変化を見逃してしまったのは……。

「悟！」

進路指導室に呼び出されたという悟と入れ違いになってあちこち探し回っていたのだが、彼を見つけたときにはもう、太陽が西の彼方へと姿を消そうとしていた。

「悟、何で最近学校に来ないの？メールだって返信が遅いとき多いし、それにさっき指導室に呼ばれたって……」

「最近忙しいんだよ。あと呼ばれたのはこれの所為」

振り返った悟が細くしなやかな指先で示したのは、自身の耳朵。そこには髪と同じ浅葱色の石が付けられていた。

「マグネットピアス？」

「まさか。ちゃんと穴空けたんだぜ？初めてだし、すっげー痛かったけど……」

杞憂であってほしいと願う馨の願いを一蹴し、悟は淡々と語る。しかも薄っすら笑みを浮かべていることからして、先程教諭から受けたであろう叱責は全く堪えていないのが窺える。それどころか増長

するのではないかと危惧した。

「危ないことしてるんじゃないよね……？」

「大丈夫、大丈夫」

まるで他愛ない悪戯が成功したかのような明るい表情。……それが、馨が最後に見た、悟の無邪気な笑顔だった。

それからというものの、少年はますます学校から足を遠退いてしまった。馨が連絡しようとしても無視をしたり、素っ気ない答えしか返さない状況が続く。

先生に呼び出されたとき、誹謗中傷された当てつけに休んでいる。親の借金返済の為に年齢を偽って働いている。ガラの悪い連中と付き合い始めた。頭がおかしくなって入院した。佐久間馨にふられて引き籠もっている……勿論これに関しては全力を持って否定した。良くない噂ばかりが耳に入ってくる。何度か自宅を訪ねたりしたが、本人どころか家族さえ出てはくれなかった。

そうして月日が流れ、いつしか馨は悟と別れたということになっていた。気付けば、再び告白される日々を過ごしていた。

「だったら佐久間、記念にキスしても良いか？」

「は？」

「それで佐久間のこと、諦めようと思うんだ」

(訳分かんない……)

どうして「だったら」で、何故「それで」なのか理解できない。しかしこのときの馨は自暴自棄になっていた。

悟へと向かっているはずであるベクトルの長さ、強度、密度……それらが正しいものであったのか、もはや断言できない心境に陥っていた。

「……………良いですよ」

それが意識してだったのか、はたまたそうでなかったのかは定かではない。けれども気付けば付き合ってもいない相手から口付けされていた。

唇の柔らかさ。舌先でなぞられる輪郭。頬にかかる生温かい鼻息。

与えられるものはお世辞にも気持ちの良いものではなかったが、けれども興奮したのは事実だった。

茫然とした思考の中でふと、砂が靴底で擦れる音が届いた。目線だけでまずはそちらを見遣り、そして第三者が誰であるか認識すると自分に傾いていた男子生徒の体を突き飛ばす。

「悟……！」

狼狽する少女に彼氏である少年は眉根に皺を寄せただけだった。けれども彼の不機嫌な雰囲気に加え、奇抜な容姿に圧された様子の男子生徒は「別れたんじゃないのかよ」と漏らして急ぎ足で去って行った。

「……浮気？」

ポツリと呟かれた一言にみっともなく肩が大きく跳ね上がる。視線をそらしたいのは山々ではあったが、それは悟の現状を知ることから逃げるということ。

ここが学校であるというのに、彼は私服姿だった。それも明らかに普通の中学生から逸脱した服装。装飾品もグローブにネックレス、指輪、ウォレットチェーン……そしてピアス。ここが田舎ということもあるのだろうが、随分と粗暴に思えた。

何より髻に向ける眼差し。穏やかであったはずの群青の瞳は、いつしか荒々しさと禍々しさを縋い交ぜにしたかの如く汚濁な色を滲ませるようになっていた。

（もう、無理だ……）

清水悟が何をどうしたいのか、これからどうしていききたいのか……理解できない。

「もう、分かんない」

目頭が熱い。指先が冷え、喉が引き攣った音を鳴らしながら嗚咽を上げる。胸が震え、腹の底から得体の知れない感情がせり上がってきた。きそつだ。緩々と砂色の髪を揺らしながら小さく首を横に振る。

「悟、私きつともう……悟のこと、好きじゃない」

別れよう。

震える声帯でそう呟いて、馨は駆け足でその場から立ち去った。
それは中学二年の初夏を目前とした、二人が付き合い始めてから一
年が経過しようとする、一月前のことだった。

現世・？（貳）

昔、誰かが言った。

『生の上を歩く限り、他愛なかるうが酷であるうが、誰しもが嘘を吐く』と

スナックと居酒屋ばかりが立ち並ぶビルの谷間にひっそりと、けれども確かに存在する建築物。意識しなければ視界に入らないような裏通りに店を構えているにも拘らず、その路を歩き進めればふと足を止めてしまう。……そんな存在感が、この建物には在った。

二、三階が住居スペースとなっていてであろう喫茶店。赤い煉瓦壁は所々に罅が入り、埃や雨水で黒ずんでいることもあり、その外観はお世辞にも華美とは言い難い。しかし扉を開く合図に鼓膜を撥るウィンドチャイムの音、テーブル席三つにカウンター席が十というこじんまりとした空間、コーヒー或いは軽食の味、店員が身に付けるエプロンの色、店主が吐き出す紫煙に混じる仄かな桃の香り……何かしら心に、脳裏に留まるのだ。

強烈な印象ではないものの、どこか記憶に残る雰囲気。まさに知る人ぞ知る隠れ家的名店。

“World cross”に一度でも足を踏み入れたことがある者なら、大概この場所を候補の一つと挙げるに違いない。

そしてそれは、喫茶店としてではなく、夜のバーの顔しか知らない者として同じだろう。

「どないしたん？」

目的地の前で立ち止まり、ここまで歩いてきた道程を振り返っていた響に訝しげな声が飛ぶ。

「ん……建物の大きさや店名こそ違えど、軒連なってる系列が系列だからかな？聖域でここを見つけた時と周囲の面影がよく似てる」

聖域で“World cross”を発見したときは焦燥感に駆られていたからか、近辺の店舗の名前など全く記憶になかったが、やはり今視界に映るとおり、客に酒を提供する夜の店ばかりだったように思う。事実、志雄に手を引かれてバーを後にしたときはそこから酔っ払いの笑い声が聞こえ、アルコール臭が鼻腔を掠めていたのをおぼろげながらも覚えていた。

「まあなあ。前の店長曰く、慎ましくひっそりと……が、この境界のコンセプトらしいからな」

扉の取っ手を引いて店内に足を踏み入れる親友。たまたま彼の口元を眺めていた為、その唇が微かに言葉を模ったのを確かに目撃したのだが、頭上に取り付けられたウィンドチャイムの所為で声までは聞き取れなかった。

しかし脳裏で唇の動きを反芻してみる。

(……表向き?)

そう呟いた気がする。だが、真意を問おうとした矢先に「いらっしやいませ」という挨拶に遮られてしまった。

振り向いて、まず網膜に焼き付いたのは金色の髪。思わず息を呑みかけたが、脳裏を過った金髪紅眼の少女とは異なり奥二重の黒い瞳をしているのを認め、肩の力を抜く。

髻ほどの背丈はないが、成人女性の平均を越す身長。スキニ デニムを履いた太股は引き締まり、痣を作った腕も体重を支えることがしよつちゆうだからか、筋肉が付いているのがよく分かる。昨晩は遠目ながらもアイプチで二重にし、濃いメイクを施していたのが確認できたので、今の見慣れた薄いメイクは妙にあどけなく映った。

それでもやはり初対面のとときと比べ色気が増したように思えるのは、艶美な雰囲気醸し出すダンス姿を目の当たりにしたからだろうか。

「うあゝ！何かBさんと話すの、すっごい久々な気がする」

キヤアと黄色い声を上げて女性従業員に駆け寄れば、彼女もまたテンションを上げて髻の手を握ってきた。

「こうして会うのって一ヶ月ぶりだもんね。委員長に聞いたよ。昨

日のボクのシヨ、見てくれたんでしょ？」

「でもちよつとしか見れなかった……。また今度見せてっ」

「あかん。未成年の出入り禁止」

せがむ馨に、私服に着替えた委員長が容赦なく横槍を入れる。たまに彼は変なところで厳しい。

「マスター！」

「俺は別に構わねえけど」

苦言を呈する親友に臍を曲げて彼の雇い主に訴えれば、そこから了承こそ得られたものの、隣りに立つ親友はやはり良い顔をしなかった。先日言われたとおり未成年だからと言われたらそれまでだが、さすがに酒を出されても飲む気はないし、店としても自分に酒を勧める真似はしないだろう。何故委員長だけがここまで拒絶の意を示すかが分からない。

南雲にしてもBにしても、馨がバーに出入りしたいと訴えているにも拘わらず咎める気がなさそうだけに、反発したくなる気持ちがありますます強くなる。

むうと顰め面を浮かべていると、前方から薄く笑う気配を感じた。

「聖域だろうと現世だろうと、馨ちゃんが目立つんだって。夜中にこの辺うるついでたら補導されたり酔っ払いに絡まれたり……。委員長はそういうのが心配なんだよ」

委員長やBの影に隠れて見えなかったが、カウンターを挟んだマスターの正面には黒いシャツにジーンズというラフな格好をした魔女が頬杖を付いた状態でこちらを眺めていた。感情の起伏が周囲より浅い所為か分かり難いものの、眇めた双眸からは馨の帰還を喜んでいる色が窺えた。

「魔女さん！えつと……。色々心配かけました」

「いやいや。無事で何より。でも、複雑な顔してるね」

指摘され、思わずたじろぐ。

夏休み前に長期休暇課題を速やかに終わらせるよう勧めていたことといい、魔女は、馨が現世に戻りたくとも戻れなくなる状況を前も

って悟っていた節がある。仮に全て見通していたのなら、何故予め忠告してくれなかったのだと責めたかった。聞き及んでいたら精現鏡の持ち忘れを防げたことは勿論、旅路に時間を割くこともなかったであろうし、記憶喪失の妖魔に情を抱くこともしなかったろう。だがしかし、そのような境遇を得たからこそ、失ったと思われていた半身を取り戻せたのもまた事実。

批難と感謝。……どちらも、紛れも無い本心だ。

正反対の感情を述べることに暫し言い悩んでいれば、大丈夫とばかりに掌を上げて制された。

「……あたしの予感はいくまで予測でしかないから、真実になるとは言い切れない。そしてそれをあからさまに示唆してしまうと、進むべき未来が捻じ曲げられる危険性がある」

諦念、後悔、そして微かな義憤……それらが入り交じった不器用な笑みを魔女は模った。百パーセントに近い確率であったとしても、推測の域に留まる限りは絶対に自ら動かない……動けないと彼女は言外に語る。彼女が信念を曲げようとしなのは頑なな性格故か、魔女としての役割か、はたまた生い立ちが関係しているのか。

「ホントにごめん。多分としか言えないけど、これから馨ちゃんはどうなるか、だいたい読める。でもあたし自身は直接馨ちゃんを助けられないから、委員長を通して遠回りな言い方でしか補助できない」

申し訳なさそうに、けれども固い決意を漆黒の瞳に宿して魔女は宣言した。

月刻と同じ色ではあるが、眼鏡の向こうにある目元は小さくて切れ長、そして奥深い闇を抱えている。

それに触れたい気持ちと避けたい気持ちとが緋い交ぜとなる。

委員長は、この“World cross”という店は様々な世界と繋がっていると云っていた。もしかすれば魔女は、現世でも聖域でもない、ここにいる皆と異なる世界の出生なのかもしれない。

彼女だけでなく、南雲もBも、あまつ親友さえも……。

「ああ、俺は現世生まれの現世育ちやで」

「ちよ……人の思考読まないでよ！」

「顔に書いてあるつちゅーねん」

唸り、朱に染まった頬に両手を沿えた髻を一瞥した店主が唇から紙筒を離し、溜息と共に紫煙を吐き出す。

「ま、何れにせよこの店に関わる人や事柄には謎が多いとだけ覚えとけ。ここでは秘密や力量なんてただの飾りでしかねえんだからな」（それってつまり……裸の王様ってこと？）

現世と聖域という二つの世界を行き来する自分を“普通”と思ったことなど一度としてないが、どうやらそれ以上があるようだ。

もはや“普通”がどの状態を示すかが分からなくなってくる。“普通”でなく“異常”のカテゴリーに足を突っ込むのは些か気が滅入るが、その原因は何が起因しているのか。

血筋。出生。生い立ち。能力。容貌。対人関係。“World c r o s s”……今更それを議論しても、所詮机上の空論、愚の骨頂でしかないことを、髻は自ずと肌で感じていた。

巖の上に腰掛けて漣の音に耳を傾ける。サーファーも学校帰りの子どもも犬の散歩をする老人さえいなくなった、静かな浜辺。海の向こうへ溶けようとする夕日は辛うじて姿を残しているので、今はまだ周囲を見渡せる明るさではあるが、あと半刻もすると光の残骸さえ海の藻屑と帰ってしまう。

手首に巻いたデジタル時計を一瞥。夏でなければ、とつくに夜空というキャンパスに星が地図を描いている時間だ。

門限がないとはいえ、さすがに日が暮れた後に帰宅すれば両親、それに意識が戻ったばかりの祖母はあまり良い顔をしないだろう。こちらの世界に帰れなかった自分を案じていた家族に、またしても心配をかけさせるのはさすがに忍びなかったが、導き出さねばならぬ問題にそろそろ決着を付けねばならないこともまた、事実だった。

楓が目を覚ました今……もしかすれば今夜にでも、再度問い質される恐れがある。考える時間はいくらでもあったのだから。

「こちらの世界で平穩に生きていくか、あちらで持て余している力を存分に発揮して戦いに身を任せるか、そろそろ選りなさい」

今回聖域に渡った事象に限らず、これまでも何度か妖魔を封印してきた。怪我を負ったこともあるが、あくまで戦闘中、或いは戦闘後に術を唱えてすぐ回復できる程度のものだった。

だから知らなかった。声が出せなくなるほどの痛み、恐怖、事態。そして体に付けられたものに限らず、脳に、心に刻まれた息苦しさを感じるまでの悲しみ……。

「無知って怖いなあ」

明るく口に出したつもりであったのに、吐き出されたものは随分と意気消沈としていた。

以前両親に相談した際は、誓の意思を尊重するという到底アドバイスとは言えぬものだった。

ならば戻ってきた半身ならどう答えるか。

『胤斐』

内面にいる片割れを呼ぶが、返事はない。誓がこちらの世界に戻ったのを見届け眠りに就いて以降、そのまま。きつと心労から解き放たれた安堵で気が緩んだのだろう。それに徐々にこの体に戻ったのだから、順応するのに時間がかかるのかもしれない。何せ十年の時を経ている。加えて聖域から現世という異なる世界に移したことも起因しているのかもしれない。

しかし胤斐に訊かずとも、誓の無事を祈っていたという彼女は十中八九、こちらの世界で生きていくことを強く勧めるだろう。誓が妖魔と戦闘し、重傷を負う瞬間を目撃したのなら尚更のこと。

仮にあの怪我を負ったのが自分でなく半身であつたら……想像するだけで胸が凍る。自分が死ねば、今は胤斐さえ死に追いやつてしま

ならばこのまま現世で暮らしていけばいいのだ。傷を、苦しみを負うことなど決して好まないのだから。あの世界には“隻腕の志雄”や“楓壊”など妖魔殺戮士、封印士がいる。

（あゝでも……地の国にしても風の国にしても不甲斐ないのが結構いたような……）

例え実戦経験が少なくとも、自分の方が実力も威勢も上だと判断できる場面には幾つも遭遇した。命は大事だが、抵抗する手段もない民間人と一緒になって逃走する……そんな彼らに民を守れるとは、どうしても思えない。

特別正義感が強い自覚などないのに、学生と妖魔封印士の選択で揺れるほどに、聖域は妖魔に脅かされている。あの世界が妖魔の支配下に置かれるのは、もはや時間の問題だ。

「……駄目だ。やっぱりこれは私が自分で決断しないと」
立てた膝の間に顔を埋め、そう呟いたときだった。

「そうそう。いつまでも俺達は子どもじゃいられないからなあ」
唐突に聞こえてきた声にハッと振り返る。ゆつくりとした足取りで砂を踏みながら男が五人、こちらに近付いてきていた。どれも知らない顔ばかりだが、唯一覚えのある真ん中の位置にいた彼だけは、薄く笑みを浮かべて髻のアシメトリーの瞳をジッと見つめていた。

「悟……」

久々に登校した清水悟は以前に増してより一層学生らしからぬ姿に様変わりしたとあって、朝のHR時に現れた担任に叱責されるがまま、生徒指導室送りとなった。それ以降教室に戻らず終いなので、鞆も持たないままサボタージュしたのだと予測していたが、案の定らしい。眉や耳、唇、更には舌にまで空けたピアスはそのままだったが、制服からプリントシャツにジーンズという私服に着替えていた。

「悩んでるなら俺達が相談にのるぜ？」

ニヤニヤと下卑た笑みを口元に浮かべる男達に眉を顰めて髻は巖から下りた。

「帰る。そこ退いて」

歩道に上る階段は彼らの向こうだ。逸る足を諫めながら平然を装って通り過ぎようとしたが、左端にいた男が立ち塞がる。

「退いてって言ったの、聞こえなかった？」

「いいじゃねえか。俺達と遊ぼうぜ」

「どうせ暇してたんだろ？」

背後から腕を掴まれ、あつという間に囲まれる。

（マジイ……）

腕を振って力付くで剥がしに掛かるものの、いくら髻が彼らと拮抗する背丈であろうが、男女には筋力の差がある。爪が食い込みそうなほど力を入れられて堪らず呻く。助けを呼ぼうにも夕食時だからか誰も通りかかる気配はない。

彷徨う髻の視線を察したのだろう。悟が嘲りを含ませた笑みを浮かべた。

「あんま人の彼女に変な真似すんなよ」

「悟さんの彼女に手え上げるわけないじゃないスカあ」

「でも彼女、目茶苦茶美人ツスね」。しかも何か良い匂いするし……

……

腕を拘束していた男が鼻を鳴らせながら顔を近付けてきたので咄嗟に彼の足を踏む。思いの外強く踏んでしまったようで耳を塞ぎたくなる絶叫を上げられたが、力を緩ませることに成功し、一目散に逃げ出した。

「あ、コラ！待てっ」

（待てと言われて待つ馬鹿がどこにいるのよ！）

速力に自信がないわけではなかったが、如何せんこちらは走るのに不向きのローファーだ。ビーチサンダルやスニーカーと比べれば砂に足を取られやすい。しかも仮に歩道に出られたとしても追い付かれるのは必然。

（このままじゃマジで捕まる……！）

縮まる後方の足音に戦慄し……風に消されてしまうほど小さな声を

出した。

「【揺るがす茶の大地よ、我に力を】」

足裏に伝わる振動とズボツという底が抜けた音。

「うおお？」

「うわああっ！」

さりげなく振り返れば、追いかけてきていた男達の下半身は砂の中に埋まっていた。どうやらうまく落とし穴に嵌めることに成功したらしい。

密かにグツと拳を握ったときにふと、視線を感じた。慌てふためく男達よりも更に後方……悟が真つ直ぐに自分を見つめていた。馨が走り去ったあの場所から動かぬまま、砂に腰から下の自由を奪われた仲間の状態に驚愕するわけでもなく、再会した今朝から浮かべていた、あの譏笑の表情で……。

そんな彼に、以前彼と交際していた少女は背筋を震わせる。

（ あれは一体、誰？）

今の彼は、かつて自分が好きだった頃の彼ではない。

感情の起伏があまり見られない、まるで人間に似せて創られた人形を見ているかのようで、馨は砂地を蹴って浜辺を後にした。

夕日が沈みかけて間もない、茜から鉄紺に変化する刹那の空を切り取ったかのような色合いをした空間。黄昏時と捉えるか逢魔が時と見做すか……この国を征する王が彼である限り、誰もが後者だと認めるだろう。長い足を組んで玉座に腰掛け、頬杖を掻いている姿は見事に様になっていた。そんな彼が形の良い眼を眇めて虚空を眺める。

「何を見てらっしゃるの？兄様」

傍らから柔らかな女声がかかり、ゆっくりとした動作でそちらを見遣る。

黒に見紛う紺の髪に榛の眼。隙のない曲線を描いた顎のラインにた

おやかな肢体。性別と瞳の色の違いはあれど、顔の造形と纏う雰囲気からして、まさしく彼女は男と血縁関係を匂わせた。

肩に掛かるか掛からないかという長さの髪を白魚の如く滑らかな手の甲で払いながら、青年は唇に弧を描く。

「彼女だよ。こうして見ると、乳臭かったガキが随分と女らしく成長したもんだ」

「ああ……そういえば聖域から現世という世界に戻ったのでしたね。それで、彼女は今何を？」

「昔の彼氏とご対面中。思ったよりも冷静だったな」

「心が既に別の殿方へ向いているのでは？」

不意を付かれたかのように玉座に座る王は切れ長の榛色の目を瞬かせる。何を言われたか一瞬理解出来なかったようで、己を納得させるように小さく頷いてからやや厚みのある唇を開いた。

「あれから十年だから、年は十四、五といったところか」

「妖魔としてでなく人間として育ち、四分の三流れる血は人間。そして丁度今は思春期と呼ばれる時期の模様。男を雄として見ているもおかしくないかと」

「……もしお前の仮説が正しけりゃ、あの子どもが惹かれてるのはあいつだと？」

男の脳裏に浮かぶは、漆黒の髪と瞳を持ち合わせた美しい青年。十年前に隙をみて痛手を負わせたまではよかったが、さすがは自分と同じ立場に君臨する者、一筋縄ではいかなかったようだ。しかも、想像していたよりも早い段階で戻ってきた。

険を含んだ眼差しは何の力も持たない人であれば、背筋を凍らせていただろう。しかし付き合いの長い相手は大仰に肩を竦めるだけだ。「つい先日再会して、例え当時記憶がなかったとしても、あの方は兄様に匹敵する美しさをお持ちですから。惹かれない方が無理な話でしょう」

クスクスと笑いながら語る妹に男は眉間に薄っすら皺を寄せて嘆息する。

「例えあいつに惚れてたとしても、全ては俺の手の内だ。……由羅、お前も彼女を近くで見てもみたくないか？」

両の口角を吊り上げて、ニヤリと微笑む夕刻の王。彼の意図を讀んで女妖魔は表情を強張らせたが瞬時にそれを消し、深く頭を下げた。「御意」

直ぐさま姿を消した由羅から再び虚空に目線を遣って、彼は薄く笑う。軽薄な顔で見つめる先にいるのは砂色の髪をした右に朱、左に藤の異なる色をした瞳を持つ少女。

「お前が俺の手に堕ちてくるのが楽しみだ、馨」
クツクツと喉を鳴らす男がいる空間は茜と藍が入り交じる色を保ったまま、彼の影を長く伸ばしていた。

現世・？（参）

昔、誰かが言った。

『従順な捨て駒を得たいのならば、賢明な判断ができなくなるほど心を魅了すれば良い』と

悟の得体の知れない雰囲気に怯みながら帰路に着き、結局のところ現世と聖域、どちらを選択するか考えが纏まっていなことに気付いたのは、まさに一日の終わり……就寝する直前だった。

帰宅直後に夕食時、食後のリビングでの談話、入浴後と、祖母と顔を合わせる機会は何度かあったが、結局その日に質問が飛んでくることはなかった。更にいえば今朝も起床から登校直前の間、いつ楓が問うてくるかと肝を冷やしていたのだが、特に何も言われていない。

まだ決意を固めるまでの猶予期間内とされているのか、或いは今回の件で罪悪感でも与えてしまったのか。

後者のように考えてしまわされているのなら、違つと伝えなければならぬ。あれは譬の自業自得であつて、妖魔の襲来に瀕死さながらこちらの世界へ逃れた楓に罪などないのだ。けれども下手なことを口走れば早急に決断を要求される恐れがある。

決意一つにここまで時間をかけてしまうのは非常に申し訳なく思うが、これは今後の人生、そして生命に深く関わる。……浅慮に出していい答えでは絶対にならないのだから。

（単純に忘れてくれてたらいいんだけど）

頬杖を付いて窓辺に顔を向ける。本来なら、視線の先には昨日夕方ぶりに会合した少年が座っていないなければならないのだが、ポツンと佇む机と椅子は使用者不在となっている。

朝のSHRに担任は何も言わなかったが、どうやら校則違反で一週

間の停学処分が決定したらしい。馨の知る限りこれで四回目だ。これまで停学が明けても登校しない日もあったので、内申はかなり響くだろう。今はまだ義務教育であるとはいえ、これからどうするのだと、思わず嘆息を漏らす。

（……って、私と言える立場じゃないか）

馨とてお世辞にも良い成績とは言えない。寧ろ学年順位を考慮すれば下から数えた方が早いのだ。

しかも、今後もしも聖域で活動するならば、余計に勉強する気など起きなかつたりする。

（とにかく、今からでも真面目に勉強しよ）

入学出来そうな高校の範囲は限られてくるが、悩んでいるからといつてもいつまでも手を拱いているわけにはいかない。

よし、と教科書類を机上に置いたところで頭上から聞き慣れた声が降ってきた。

「次は移動教室やで。しかも地理やのうて理科Bや」

気合いを入れたところで指摘。愛想笑いで赤面をごまかしながら改めて机の中から教材を取り出し、委員長と並んで理科室へと向かう。昼休みとあつて他の教室は勿論、廊下や校庭にもブレザーや体操着姿の生徒が行き交っていたが、三年生と部活動で登校している生徒しかいない為、夏休み期間中とあつて人気は控えめだ。三つある校舎の中でも特にその傾向が顕著なのが特別棟で、その一室である理科室へは渡り廊下を経由しなければならぬ。

「あ……」

親友との雑談に興じながら建物と建物を繋ぐその経路を歩いていれば、前方から小さな声が届く。対向してやってきたのは三人の女生徒で、内二人に覚えはなかったが、真ん中を歩く小柄の少女だけは記憶にあった。

「どうも、お久しぶりい。委員長、それに……ビッチさん」

肩に掛かる柔らかかそうな牡丹色の髪を思わせぶりに払いながら、かの少女は嫣然と微笑む。しかし穏やかかそうな表情を繕いながらも馨

を見つめる瞳は実に冷やかなものだった。

学年でいえば馨達より一つ年下にあたる毒島遊亜（いすじま ゆあ）は、校内で馨と二分する優れた容貌の持ち主だ。ウエーブがかかった艶やかな髪。勝気な印象を与えるやや眦が吊り上がった大きな瞳。馨とは対称的な低身長、加えて華奢な肢体。異性に人気があると言われれば納得のいく見目をしていた。

本人もそれを自覚し、鼻が高いのだろう。だからこそ、自分と同等の優れた容姿を持つと見做される馨と遭遇する度、何かしら皮肉めいたことを口走る。

「部活の先輩に聞いたんですけどお、ビッチさんってこのあいだの期末で赤点取ったって本当ですかあ？」

この学校の赤点は三十点以下を指し、一教科でもそれを取れば担任からの説教に加えて科目担当教員の監視の下、約二週間という長い期間をかけて補習授業と追試が決行される。部活動に精を出している者は当然練習を休まざるを得なくなり、例え帰宅部だったとしても日が暮れるまで学校に取り残されるとあって、いくら普段の授業態度が悪かろうと、誰も彼もが赤点を取らぬよう試験前は躍りになって勉強し、放課後の拘束を回避するのだ。なのでその事態を避けられなかった者は例えあからさまでなくとも、影では愚者と見下される。

ニンマリと両頬を上げて嘲笑する遊亜に同調する形で、左右に立つ少女達がクスクスと笑う。いくら見た目が周囲と比べ抜き出ていようと、頭脳がこれでは……と言わんばかりだ。

馨の学力が実際のどの程度のものか推測し、それを臆すことなく指摘してくる下級生に、委員長は隣りに立つ馨にだけ聞こえるほどの小さな息を吐く。その溜息が年上を敬わず不躰な態度を取る少女達に對してか、年下に揶揄される成績である親友へ向けられたものなのか……恐らく両方であろうが、馨としては割合として前者の方が多分であつてほしかった。

遊亜の質問に明確な答えを返さず、当の本人は肩を竦めるだけに留

める。結論から言えば放課後を潰されたのは事実であるが、補習授業を受けたのは二週間でなく、たったの一日、それも三十分にも満たない時間だ。

「あ……一応親友の名誉の為に言うつくけど、君らが思てるほど、こいつ成績悪ないで」

「ええ〜？」

「あはは、委員長つてばやっさしい〜」

親友を庇っている。委員長の態度をそのように捉えたらしい彼女達は、クスクスと可憐の皮を被った冷嘲を零す。

しかし三人の表情が凍ったのはまさに次の瞬間。

「百八人中三十九位。……少なくとも去年の一学期の時点、馨はこないだ受けた君ら三人の順位より上やったで。そうやる？二学年、百五人中の七十五位に四十八位に六十位さん？」

一瞬何を言われたか分からない様子でキョトンとしていたが、委員長が口にした順位が何であるか思い当たったのか、サア……と三人が血の気の引いた表情となる。馨の昨年一学期の成績を引き合いに出されたことからして、このあいだの期末試験での彼女達の順位らしい。誰がどの順位かは定かではないが、どうやら例外なく当たっているようだ。

（さすがは委員長。何で知ってるんだらう）

当人に問い質しても納得できる回答が得られないのは分かりきっているのに、敢えて胸中に留めておく。

たじろぐ少女達だったが、すぐさま予鈴が鳴ってあからさまにホッとした様子を見せた。

「ま、まあビッチさんの去年の成績なんてどうでもいいですけどお、先生を誘惑して補習授業や追試を免除してもらうなんて卑怯だと思えますよお」

「……………」

「じゃあ私達、もう行きますねえ」

平然を取り繕いながらそそくさと去って行く下級生。暫し三人の背

を見送っていたが、気を取り直して再び馨と委員長は理科室を目指して歩き始めた。

「言えばよかったやん。赤点取ったって誤解されたんは単に先生の採点ミスが原因やったって。しかもわざわざ放課後まで残ったんは解答用紙の返却が六時間目で、見直しの後に先生に言いに行く時間がなかったからやん」

「年下相手に言い訳がましいことしたくなかったし、それに私の成績が悪いのも事実だしね。……それより、補習授業と追試なかった理由が先生を誘惑って……そっちの方が驚いた」

（ああ、でも……ビッチに関する噂の対象に教師も含まれていたっけ）

相手が男であれば見境なしに誘惑してキスをする。男子生徒だけでなく教師や保護者、女子にまで餌食になった者がいるらしい。……娼婦、^{ビッチ}佐久間馨に関する噂。

「それにしても、取り巻き二人はまあともかくとして、毒島の面面向かって批難してくるあれには毎度のこと度肝抜くわ。よっぽど馨のことが目の上のタンコブなんやろなあ」

やれやれと、今度は上を向いて大きな溜息を吐き出す委員長。そんな彼を、やや目を剥いて馨は凝視する。

「……ん？何や？」

「いや、委員長でも知らないことってあるんだなあ」と

「俺は仙人か」

「あはは。……でも可愛いよ、遊亜」

「まあ外見は確かに可愛いんやろうけど……うん？」

立ち止まり、ゆっくりと瞬きして首を傾げる親友に構わず、砂色の髪の少女はスタスタと歩を進める。委員長に背を向けた彼女はこっそり、口角を吊り上げた。

「馨……お前、まさか……」

黒縁眼鏡の奥で半眼を閉じて、開いた口が塞がらないと言わんばかりの顔をしている。わざわざ振り返り確認せずとも、そんな表情を

しているのが容易に想像できた。
存分に呆れを含んだ溜息が投げかけられたが、馨は理科室の扉を開ける音で聞こえないふりをした。

予てから佐久間馨という一つ年上の先輩の噂は耳にしていた。日に当たると金糸に見紛う砂色の髪。整った柳眉に高い鼻梁。薄い唇。細い肩。スラリとした長い手足。そして何よりも目を惹くという、朱と藤のアーモンド形のオッドアイ。

どうせ周囲が針小棒大に誇張しているだけだと、当時は歯牙にも掛けていなかったのだが、初めて彼女の存在を目の当たりにしたとき、比喻でなく、奥底から胸が震えた。

背筋を正し颯爽と、歩調に合わせてスカートの裾を揺らしながら真っ直ぐに前を見据えた姿は、これまで目にしてきたどんな者達よりも輝いて映った。足早に歩いてきたようで、その光景はほんの僅かな時間で幕を閉じてしまったが、それでも遊亜の足を止めて網膜に心に存在を焼き付けるには充分過ぎた。

メディアに出るような者達は別として、これまで容姿に関して誰にも負けない自信があったのだが、嫉妬に胸を焦がしたのはほんの一瞬、代わりに自分を一目で魅了した彼女に憧憬を抱いた。

だからといって、そう簡単に馨を褒め称えるのはこれまで培ってきた負けん気が強い性格が許さず、加えて彼女より自分の方が優れていると口にする友人達の言葉もあって、自尊心が焚きつけられた。そのような経緯もあり、いざ面面向かって擦れ違う機会ができたときは、本心は喜びで胸が溢れそうになっていたが、実際は憎まれ口を叩くことしかできず、帰宅後激しく後悔する日が多かった。

（仲良くなりしたい。アドレス知りたい。話したい。休日には一緒に遊びに行きたい。同じ物見て笑いたい。……馨先輩の隣り、歩きたいなあ）

彼女と行動することが比較的多い恋人、そして親友という異性を遠

目で羨む日が続いた。

交友関係を持ちたい気持ちが昂ぶりつつあったそんなある日、遊亜は目撃する。

「う……ふ、うん……ふぁ……………」

放課後、人気のなくなつた教室で口付けを交わす馨。対峙しているのは恋人である清水悟でも、ましてや親友の委員長ですらない男子生徒だった。

わなわなと震える唇を覆うように口元に掌を当て、その場を駆け去る。上靴の足音で第三者に見られたと気付かれた恐れがあるが、さすがにそれが遊亜であることは知られていないはずだ。寧ろそんなことよりもまず、シヨックだった。憧れていた先輩が学校で濃厚なキスシーンを繰り広げていたのは勿論のこと、何より相手が恋人でもない男であつたという事実が。

優婉な淑女を思い描いていたつもりはなかつたが、遊亜の膨らませていた佐久間馨像は音を立てて崩れ去つた。

(裏切られた……)

勝手に憧れを募らせていたとはいえ、自分を失望させた代償は高い。可愛さ余つて憎さ百倍とはまさにこのことか。馨についての悪質な情報を流せば、それが火種となつて噂は瞬く間に全校に囁かれるようになった。

“佐久間馨は、相手が男であれば見境なしに誘惑してキスをするピッチ”なのだ

この噂に懲りて少しは自重するかと思われたが、悟と別れたらしいその後も、馨は誰彼構わず男子生徒とのキスに興じていた。部活動の合間を縫つて校舎内に入りその光景を目撃する度、遊亜の心に負つた傷がじくじくと痛みを訴える。

ドアの隙間から情熱的な口付けを交わす姿を目撃し、眼光を鋭くさせて歯軋りを零していたそんなあるとき、相手に意識を向けていたはずの馨がこちらを向き、アシンメトリーの瞳とかち合った。

(ヤバイ……!)

凝視していたのがバレたと、遊亜は慌てて踵を返そうとしたのだが、動揺する少女に何を思ったか馨は、まるで挑発するかのように双眸を眇めて薄く笑った。そしてあるうことかより深く、舌を交わらせ始めたのだ。

カツと頬に熱がはしった。顔だけでなく、首筋まで熱い。冷たく震える手で胸の上を押さえれば、ドクドクと鼓動は激越を叫び、耳殻で感じる脈拍もその速さに同調している。

見せつけている。察し、遊亜は逃げ出した。平常心を失ったまま部活動に引き返したのだが、当然集中力を欠かした状態ではミスが続き、結果早退を促された。

（馨先輩、まだいるのかな……？）

ふと気になり制服に着替えて再び校舎に戻る。半信半疑ではあったが、遊亜が先程の教室に足を進めれば、馨は未だそこに留まっていた。どうやら相手をしていた男子生徒は帰ったようで、いるのは馨一人だ。

行儀悪く机に腰掛け、腕を後ろ伸ばして肢体を支えている。茜色に染まった窓の向こうを眺めているだけの何気ないポーズではあったが、昼間と時間帯が異なる所為か、夕日の斜光を浴びた顔が美しく思えた。

「そこに突っ立ってないで入ってきたら？」

どうやら遊亜の存在に気付いていたようで、彼女は首だけをこちらに向けて微笑んだ。

初めて、自分一人だけに向けられたコケティッシュな笑顔。魅せられないはずがない。芳香を放つ蜜に誘われた蝶のような心地で教室に足を踏み入れ、ゆっくりと歩を進める。

艶めかしい長い脚を徐に組み、上半身を前に傾けて膝に頬杖を付いた状態で馨が自分を仰ぎ見ている。二人きりの教室で、予てから深く接触したいと試みていた相手が、今は自分だけをそのオッドアイに映している。胸が高鳴り、芳醇な酒を飲んだかの如く陶醉した気持ちになる。

そんな遊亜の心境を察したのか、馨はクスツと笑みを零して誘うようにして指先を伸ばしてきた。

「おいで」

誘惑の音が鼓膜を弄び、脳に深く甘い霧をかける。

重ねた唇の柔らかさ。下唇を柔く噛む歯。拙いこちらの舌を翻弄するように絡めてくる相手のそれ。耳朵を撫る、どちらのものか判別つかない唾液による水音。

与えられる快感に、遊亜は成す術もなく陥落した……。

二人の少女の唇を繋ぐ銀糸。それがプツリと切れたのと同時に馨は吐息を零した。椅子に座った自分に覆い被さっていた一歳後輩の少女を仰げば、夏休み前に比べ日焼けした頬を紅潮させ、呼吸を整えている。トロンと眼に快樂の色を滲ませていることから満足している様子が窺える。

甘えるように縋り付いてくる遊亜の背を撫でていれば、彼女は馨の肩に顔を預けて上目遣いで見上げてきた。

「先輩、どうして夏休み、一度も学校に来てくれなかつたんですかあ？」

「どうしても外せない用事が重なっちゃってね」

（聖域っていう別世界から戻れなくなつたから……なんて言えないもんなあ）

苦笑混じりに返事をすれば、小柄な少女は唇を尖らせながらもとりあえず口を閉ざす。

部活は三年間無所属であつたとはいえ、今は受験生という立場。夏休みの間だけ塾に通っていたのかもしれない……などといった考えが頭の中で巡っているのかもしれない。

「先輩……」

「んー？」

「いつになつたら遊亜一人だけを見てくれるんですかあ？」

普段憎まれ口を叩いてくるのとは打って変わって、二人きりになると甘えてくるのが可愛いらしく、いつもの癖で柔らかい牡丹色の髪を撫でていたのだが、思わずその手を止めてしまう。

「バスケット部の中山君。テニス部の新倉先輩。サッカー部の保谷先輩に宮前君。野球部の鶴野先輩、石巻先輩、吉野君。一年の井上君、佐川君……この人達み〜んな、先輩とキスした人ですよ」

さすがに同級生は覚えているが、挙げられた名の半数は知らない者だ。けれども顔や名前を記憶していないとはいえ、これまで相手にした彼らの服装の中には確かに今挙げられた部活のユニフォームを着た者、二学年の青、一学年の赤の上履きを履いていた者もいた気がする。

しかしどうにも解せない。馨はキスをする相手を特に選ばないが代わりに、互いに恋愛感情を持たない割り切った戯れだと捉えること、この行為を他言無用とすることを条件としている。

彼らが口を滑らせたと考えられなくもないが、それにしては目の前にいる少女は人数を知り過ぎていた。

「遊亜……どうしてその人達のこと知ってるの？」

背筋に冷たい汗を流す馨の心情を思考した様子もなく、遊亜はわざとらしく頬を膨らませた。

「だってえ、遊亜の大好きな先輩のことですよ。先輩のこと、ずっと見てますから。……でも先輩、そろそろ遊亜のことだけを見てください。先輩見てたら分かりますよ。先輩、遊亜とするキスが一番気持ち良さそうにしてますもん」

擦り寄ってくる遊亜の両肩を掴んで距離をとる。二の腕に鳥肌が立っているのが嫌でも自覚した。

（ヤバイ！この子マジだっ）

「ゆ、ゆ、遊亜っ！部活抜け出してきたんでしょ？私ももう帰るかっ！」

慌てふためきながらも忘れず机上の鞆を掴むと、馨は「アディオス！」と言い残し一目散に去っていった。

驚愕の色を隠さなかったアシンメトリーの瞳を思い返し、嘆息を吐く。想いを口にすれば驚かれることは想定内であったので仕方がないと納得しつつも、胸中ではやはりもやもやした気持ちが渦巻いていた。

(だって……先輩にも遊亜と同じ気持ちでいてほしかったんだもん) 憧憬を突き抜け、いつの間にか恋愛感情を移入するまでとなっていた心情。独占欲と差し替えてもいいような、生温さを剥いだ本心。邪魔者を全て追い払い、自分しか求めてほしくない……そう願うようになっていた。

「先輩……馨先輩……馨……馨、馨、馨、馨、馨」
「彼女が欲しい？」

(?!)

唐突に響いた女の声。俯いていた顔を上げれば夕日が山の向こうへ沈もうとしている以外、何ら変哲もない見慣れた教室の風景だった。
『佐久間馨、彼女が欲しい？』

慰撫するように、優しく囁くように、透き通った声。誰もいないはずなのに聞こえてくるそれに訝しみながらも、しかし遊亜は自然と頷いた。

「……欲しい」
『なら』

夕焼け色に染まっていた教室が、一瞬にして精彩を欠いて闇へと塗り替わる。その光景に息を呑んだ刹那、遊亜は意識を失った。

重くなった瞼が閉じる直前、唇を三日月に模った女を見た気がした……。

現世・？（肆）

昔、誰かが言った。

『愛と執着、それらは連結した感情である』と

「あれ？」

放課後、委員会の召集で教室を離れざるを得なくなった親友の代わりに、担任から任された雑用をこなしていた馨は、思わず首を傾げた。

束ねたプリントを揃えて角をホチキスで留めるといふ地味な作業。単調なことは嫌いではないが、さすがにそれを百部余り作らなければならなくなると次第に飽きてくる。九月の下旬に行われる体育祭に関する資料だったので休憩がてら、一足早く確認しておこうと内容を眺めていたのだが、そこでふと気付いたことがあった。

（月宮榊の名前がない……？）

双眸を覆い隠すほど伸ばされた長い前髪が印象的な、馨よりも更に長身の少年。初めて会合したのは今から二月ほど前とあって、交わってきたキスの相手の中では比較的新しい相手だが、他の不特定多数の者達と異なり口数が少なく、どこかミステリアスな雰囲気があった。前髪から垣間見える黒目に肉欲が滲むのが行為に慣れ親しんだ自分よりも遅いとあって、最初こそ業を煮やしたものだが、三度、四度と逢瀬を重ねていくうち、巧妙な口付けにこちらの方が翻弄されてしまい、いつしか反発心は鳴りを潜めるようになっていた。身長や風格からてつきり同級生だと信じ込んでいたが、思い返してみれば、これまで放課後にしか顔を見合わせた記憶がない。

見過ごしたかともう一度、今度は指でなぞりながら確認する。それでもやはり見当たらない。念の為に他学年の名簿にも目を通したが、どこにも名前は載ってなかった。

「おう、佐久間。捗ってるか？」

スライド式のドアを開けて顔を覗かせたのは、三年三組の担任兼体育教師だ。

各学年に三組ずつ、一学年につき百人ほどしか在籍しない小さな中学校なので、週に二、三回しかない専門教科となると、教師は一人で全校生徒を受け持つことになる。体育も例外ではなかったはずだ。「先生、この夏休みに転校した生徒っている？」

「ああ、一年の女子が一人な。ちゃんとそこは修正してるぞ」

「いや、女子じゃなくて男子なんだけど」

「男子？男子で転校した奴なんて聞いてないぞ。名前は？」

「月宮榊。クラスは分かんないけど多分三年で、身長は私より十センチくらい高くて、前髪が長い、大人しい感じの……」

身振り手振りで説明するが、教師は怪訝な表情を晴らさないままで眉根を顰めて頭の中で生徒の名と顔を思い出そうとしているようだが、最終的には首を横に振った。

「いや、月宮榊なんて生徒、この学校にはいないぞ。そもそも身長からして、佐久間より背の高い男子なんて数えるほどしかないからな」

「残りのまとめ、頼んだぞ」と言い残し担任は去って行ったが、応じて再び作業を始めるには集中力が散漫してしまっている。固い結び目が幾つもできた絡まった糸を、右往左往しながら解かなくてはならなくなつたような心境だ。

（月宮榊が存在しない……？）

幽霊や白昼夢にしては、脳裏に深くこびり付いている。

接触したのは指を折って数える程度で、端から見れば目立つ容姿では決してなかったが、肩や腰に伸ばされた細く長い指先、薄い唇の柔らかさ、頬を擽る吐息、長い前髪の奥から見据える漆黒の瞳……それらの印象は強く脳に刻まれていた。

彼の面立ちを懸命に思い返していたところふと、既視感を覚える。

（あれ？何か……）

何かしら引つ掛かる。その正体を追求しようと思いを巡らせかけたそのとき、再び教室の扉が開かれた。

「悪い、遅なつた。あとどんくらい残つとる？」

慌ただしく馨の前の席に座り、机上のプリント枚数を目測した委員長は「思たより残つとるわ」と溜息混じりにぼやいた。

「せつかく手伝つてあげてるのに、その言い草はないんじゃない？」

「アハハツ！冗談やつて。感謝、感謝」

ホチキスを片手に作業を始めた親友に続いて、馨も端に寄せられた紙へと手を伸ばし、束ねていく。

暫し互いに口を閉ざしていたが、話題がないのならと、先程から気掛かりになつていた少年について訊いてみる。無駄に顔の広い委員長のことだ。在校生のみならず卒業生、拳句の果てに小学校や高校の生徒まで把握していそうだ。

「委員長、月宮榊つて分かるよね？」

一学期の終業式の下校時、僅かな時間ではあつたが彼のことを話題に上げたのを覚えている。あのとき委員会召集をかけられた委員長を待つ暇潰しに、榊との逢瀬に浸っていた。だから「今まで月君と一緒にあつたんか？」という問いに「ご名答」と頷いた。

「さあ？誰やそいつ？」

質問から返答までにさほどタイムラグはなかつた。即答というには早過ぎず、逡巡したにしては早い間。

嘘を吐いているようには到底見えない。しかし違和感が首を擡げるのは当然のこと。間違いなく、夏休み前まで委員長は榊の存在を知つていたのだから。

（一体どういうこと？）

名簿に載っていない、教師も顔の広い親友さえ存在を否定する一人の少年。

手を止め、改めて前に座る親友を仰ぐが、如何わしい様子は窺えない。長年学級委員長という役職を務めていただけあつて、慣れた手付きで澱みなくリズムカルにプリントを纏めていく。

真意を見出そうとする疑心暗鬼な馨の視線を感じたのか、作業の手を止め、眼鏡のブリッジを押し上げながら委員長は鳶色の双眸を向けてきた。

「そもそもこの美船町に月宮って姓はないで」

互いに冗談を言ったりする間柄だが、誤魔化したりすることは滅多にない。謎の多い相手であるだけに嘘を吐くのは上手そうではあるが、自分にそんなことをする必要が思い浮かばない。

本当に知らないのか、或いは何かを知っていて敢えて馨に秘密にしているのか。

(見た感じ、ファイフティファイフティ……かな?)

目線を下に向ければ、いつの間にか纏めなければならぬ高は激減していた。仕事に集中しているからだろうが、のらりくらりと欺くのが得意な親友のことだ、知っていようがそうでなかるうが、これ以上何も語る気はないのだろう。

嘆息し、この話はもう終わりとはかりに作業を再開させた委員長に倣い、馨もパチンとホチキスを留める。彼から月宮榊について訊き出せないなら、他に情報をくれそうな場所に赴けばいいだけのこと。客数の少ない“World cross”ではあるが、あそこには委員長とは別に、各方面で情報に富んだ魔女がいる。

なので、ここは一旦大人しく素直に引き下がろうと親友の答えを嚙下しかけたのだが……ふと気付いた。

「……あのさ、委員長」

「何や?」

「私、月宮榊がこの町に住んでる住人かどうかなんて訊いてないよ?」

最後の一部に手を伸ばしていた少年の動きがピタリと止まる。

「ホントに知らなかったら「芸能人や著名人か?」とか「何かの本の登場人物か?」辺りが妥当なんじゃない?」

動揺したのはほんの瞬き一度の間だけ。唇を引き締めて、彼は改めてプリントを手に取り、重ね、束ね、ホチキスで留める。これで作

業は終了した。

馨が静かに見守る中、親友は腰を前にずらして深く背を倒すと、大仰に溜息を吐きながら天井を仰いだ。

「あ……迂闊やった」

「じゃあ月宮榊はやっぱり」

「存在せん」

きっぱり否定を口にされて思わず鼻白む。

「嘘ちやうて。まあ正しくは、この学校の生徒やと皆が騙されとつたと云うべきか」

「は？何それ？」

どういう意味だと問いかけようとした矢先、閉まっていた扉が再三開かれた。タイミングの悪さに、鼻に皺を寄せながら振り返れば、そこに立っていたのはクラスメイトではなく一人の小柄な少女。牡丹色の髪をした彼女を目にした瞬間、馨は反射的に身構えてしまった。

（ああ、でも今は委員長がいるし大丈夫か）

二人きりの情事とは異なり、ピッチ呼ばわりの非難が飛んでくるはずと推測する。けれどもそんな馨の考えとは裏腹に、愛らしい笑顔を浮かべた少女の眼差しには陶酔の色が滲んでいた。

「こんにちは、先輩」

甘さを含んだ声。上気した頬。媚びるような眼差し。誘惑するかのように微かに舌を覗かせて滑らせる舌。……その様子はまさしく、日常では見せない、馨の前でだけ現す一面。

「……ヤバイ」

ボソツと呟かれた親友の言葉に気を取られ、意識がそちらに向いた刹那、少女は一気に距離を縮めてきた。

「先輩」

「馨、避けえ！」

珍しく緊迫した表情でこちらに腕を伸ばす委員長よりも早く、遊亜が強引に唇を馨のそこにぶつけてくる。まさか第三者がいる目前で

事に及んでこようとは思いません、あまりに唐突過ぎて反応が遅れた。目を白黒させて硬直するものの、濡れた舌を絡められ、唾液に混じって何か別の味を感じさせられれば、さすがに我に返る。

「ちょ、遊亜っ！いきなり何を……」

力任せに自分よりも小さな体を突き飛ばし、浅く息を切らせて手の甲で唇を拭う。翻弄される暇のない僅かな時間であったとはいえ、隙を与えてしまったことにたじろぐ。

「何って、いつもしてることじゃないですかあ。もう遊亜、限界なんです。先輩が欲しくて堪らないんです。遊亜以外の人とキスしてほしくない。……ううん、先輩の綺麗な目に映るのは遊亜だけいいんです」

うつとりとした表情で萌黄の瞳を爛々と輝かせながら語る後輩に、背筋を凍らせる。半袖ブラウスの下で二の腕が泡立つのを自覚する。冷房のない、窓からそよ風しか涼しくなる手段が見つからない暑い教室であるはずなのに、とても冷えて感じた。

「どないするよ？今の毒島、まともやないで」

「私だってあんなヤンデレだなんて知ってたら関わらなかつたわよ」

「いや、そーやのうて」

小声で親友と相談していたそのとき、遊亜が双眸を眇めて委員長へと振り返った。

「だからあ、親友ってだけで傍にいる委員長とか、未だに彼氏面してる清水先輩とか……邪魔なんですよっ」

突如少女が腕を上げ、それを振り落とした刹那、黒い電気のようなものが委員長へと襲い掛かった。

「なっ?!」

「うおおっ!!」

響は左へ、委員長は右へ跳んでそれをかわす。その際少年はちゃっかりと、作り終えたばかりの資料を抱えていた。

「さすが委員長……」

ぬかりない親友に賞賛の言葉を送りつつも、関心は遊亜の放った得

体の知れない攻撃にあった。注意深く床を見遣れば、薄っすら焦げた跡がはしりパチパチと静電気のような音を立てている。スタンガンの一種かと訝しむが、そのようなものを隠し持っている節はない。「ちよつと……これどんな手品よ？」

「あほお。手品なわけあるかい」

「そうなんですすよねえ。手品じゃなくて、とある人の力なんです」少女を纏うようにパチパチと音を弾きながら、暗い色の電光が見え隠れする。まるで彼女自身が放電体にもなっているかのようだ。特殊効果を生む装置も見当たらないのにどのようにしてこのような演出ができるのか、皆目見当も付かない。

（まあ私の術にしたってどんなタネや仕掛けがあるか、なんて聞かれたら困るけどさ）

胸中で自嘲していたそのとき、ある一つの憶測が脳裏に閃く。まさか、と思いつながらも気付けば言葉が口から滑り落ちていた。

「妖魔……？」

瞬間、息苦しい圧迫感が教室の中に充満した。その中心にいるのは間違いなく遊亜で、馨は堪らず少女から距離を置こうと身じろぎする。また委員長も険しい表情をつくって眼鏡のブリッジを押し上げた。

「……馨、体の具合はどんな感じや？」

「体？」

何を言っているのかと怪訝に親友の顔を仰ぐ。こちらを窺うことなく、探るように険しい視線を後輩に向けたままの状態で訊ねた親友の声は、いつになく緊張感を含んでいる。しかし実際は、そういう雰囲気醸し出して腹の内では余裕なのでは……と疑う気も捨て切れない。何せ様々な世界と交流のある男だ。現世以外の武勇伝の一つや二つ、語り継がれていても不思議じゃない。

「今は何もないかもしれんけど、仕掛けられたで」

「仕掛けられたって……？」

「とりあえず用心しとき。んじゃ悪いけど、俺はドロップアウトす

るわ」

「は?!」

両手の資料を持ち直して、逆の足を使い左の上履きを脱いだその瞬間、委員長の周辺で煙幕が生じた。

(どうして煙幕がつ?!)

どうやって上履きからそのような現象が起きたのかが理解できず狼狽するものの、風通しを良くする為に窓を開けていたおかげで、室内の見通しが悪くなったのはほんの数秒だけだった。

けれどもそんな僅かな時間だったにも拘わらず、黒縁眼鏡の少年は姿を消していた。ちゃっかり左足の上履きもなくなっている。

(あいつ!一人だけトンスラしやがった!)

「やっと二人きりになれましたね、先輩」

(私はなりたくなかった!)

どうして自分も連れていつてくれなかったのかと親友に恨みを募らせるが、パチツと爆ぜた音で再び疑問視していたことを思い出す。

「遊亜、その変な電気みたいなのは一体どうしたわけ?」

自分のように異界の出生というわけでも、親族に特殊な能力者がいるわけでも、ましてやどこかの世界に召喚されたわけでもないだろう。しかし目の前で起こっている不可思議な現象。ここは現世であるが、少なからず納得できる要因があるとすれば、少女が妖魔と接触したとしか考えられない。

(けど、一体どうやって……?)

新時代の、それどころか力があると恐れられる旧時代の妖魔を以てしても、他の世界に渡るのは不可能だ。できれば今頃、現世は異形に蹂躪されている。想像するだけで肝が冷えるので、そのような事態は嘘でも勘弁願いたいところだ。

小首を傾げコケティッシュに笑みを浮かべながら少女は淡々と答える。

「由羅って名前以外は知りません。でもこれらの力があれば、先輩を絶対落とせる……そう言っていました」

(由羅……？雷の国の妖魔？いや、それよりも)

「これらの力つて、まさかそのパチパチ以外にもあるわけ？」

嫌な予感が沸き上がってきている所為か、心臓が早鐘を打っている。拳の中で汗がじんわり滲み出てきてしまつのはもはや仕方のないこと。

視線を鋭くした馨の心情など意にも返さない様子で、遊亜はまずまず口角を吊り上げた。

「やだなあ、先輩。忘れたんですかあ？」

おもむろに真つ直ぐに立てた人差し指で自身の柔らかな唇を押し示す。

「さっきのディーブキスで先輩の喉に流しちゃいました。そろそろ効き目、出てきたんじゃないですか？」

まさか、と先程から高ぶっている胸の上を鷲掴みにしたその瞬間、膝の力が抜けて床に座り込んだ。

(な、に……？)

茫然と己の状態に驚愕しつつ慌てて立ち上がるうと奮闘するが、力めば力むほど体力が消耗していくのが分かる。加えて息切れに、尋常でない脈動、熱に魘れているのかと思わしき体温の上昇。

「もしかして先輩、媚薬つて始めてでしたあ？」

「び……！」

何のこともないとばかりに言い切った後輩に、さすがのビッチと囁かれている少女も目を剥いた。不特定の相手にキスはしても、さすがに媚薬まで持ち出したことはない。それ以上の行為をするのはさすがに危険であり、疎ましく、軽率な行動は宜しくないと自制心が働くからだ。

さすがに自分が認め、心を許し、愛おしいと想う相手以外とそのような行為は行いたくはない。

「……先輩、凄く綺麗で、可愛くて、色っばい」

涙で潤んだ朱と藤のオッドアイ。紅潮した頬。力を無くし崩れた姿勢。端正な容姿の少女が懸命に平常心を保とうとしている、そこか

ら醸し出される雰囲気は淫靡で、艶かしさを纏い、誘発しているよ
うな気を齎せる。

「先輩……」

興奮した遊亜がゆっくりこちらへと腕を伸ばす。電気の音が激しく
高鳴り、目に見えて威力が増していく。

「先輩、遊亜と一緒にいてくれますよね？」

「私は……あなたの運命の相手じゃないよ」

「運命の相手でもそうじゃなくても、どっちでもいいです。嫌だっ
て言っても、力付くで連れていきますから」

バチツと音を爆せて電光が響へと迫っていく。

「【怒りの黄の雷よ、我に力を】……！」

どうにか腕を持ち上げようと試みるが、うまくいかない。しかも集
中力が欠けている所為でいとも簡単に弾かれる程度のものしか放て
なかった。

（ヤバイ……！）

死ぬことはないだろうが気絶は免れないと硬く目を瞑る。訪れるだ
ろう感電に身を強張らせるのだが……衝撃がこない。

しかし代わりに前方から聞き覚えのある男声が降ってきた。

「俺の髻に手を出すなんて、何なの君？ふざけてんの？」

開いた瞼に飛び込んだ光景は、漆黑。一目で男性と判別できる長身
瘦躯の肢体。真っ直ぐに伸びた背筋に癖のない、濡れたような艶の
ある後頭部。漆黑の髪と衣服と裏腹に白い首筋と長い指。

その姿は間違いなく、先日まで共に旅をしていた異世界の魔物

「つ……き、こく……？」

「失礼しました」

担任でもある体育教師に出来たばかりの資料を渡し、職員室を後に
する。廊下には既に人気はない。三年生の殆どは帰路に着き、一部

生徒は一階の図書室を使用しているのだろう。随分と静かだ。

「ああ、漸く来よつたな」

天井を見上げて委員長はやれやれと言わんばかりの表情でそう呟く。「全く……世話のかかる奴や。何でもつと早うに出てこんかつたんや、あいつ」

警のいる三年三組のある上へと続く階段ではなく、少年は下駄箱のある一階へと足を向ける。階段を降りながらブツブツと呟く様子は、端から見れば訝しむ要素があるものの、それを注意する者はいない。「……まさか、ヒーローよろしくピンチの瞬間謀つとつたとか？」
難儀なことを。

呆れて溜息を零す委員長は下駄箱から運動靴を取り出すと、乱暴に履き始めた。

現世・？ (伍)

昔、誰かが言った。

『揺るぎない忠誠は朴直の傍ら、時に悲痛も孕むのだ』と

「俺の馨になーんてことしてくれちゃってんだろっね、このガキ」
不遜で横柄な態度を露に、後輩の少女と対峙する漆黒の男。甘さを排除したテノールは実に不機嫌そうであるが、腕を組んでしなやかに背筋を伸ばし堂々と佇むその様からは、揺るぎない自信と余裕を窺わせる。

こちらに振り向かない為、視認こそできないが、自分を守るようにして佇む青年は間違いなく、先日まで異界にて共に行動していた妖魔だ。

「何で月刻が……?!」

実際には彼までという表現が正しいのだろう。彼を隔てた向こう側にいる遊亜は先程“由羅”と名乗る者と接触し、鉄紺の電撃と情欲を促進させる能力を得たと語っていた。供与か賦与かは知れないが、月刻と同属である異世界の魔物が関与している可能性は極めて高い。妖魔が世界を渡れるなど、聞いたことがなかった。もしかすると、長年天敵と攻防戦を繰り返してきた楓や志雄といった、その面の玄人達でさえ知らなかったことなのかもしれない。

聖域にしか生息しない、他の世界に渡る術のないモノだと思い込んでいただけに、馨はただただ目を丸くするばかりだ。

驚愕のあまり言葉を失った馨を背に、月刻はクツクツと喉を鳴らして微笑した。

「馨のピンチに駆け付けられないわけじゃないじゃん。しーかーも、俺の馨を奪おうとしてるみたいだし？勘弁してほしいよね〜」

緩く首を振りながら綽々と物申す青年妖魔。対峙している少女を小

物と見做し、侮辱しているのは明らかだ。

突然の出現者に驚き、しかもそれが都雅な風貌な青年であっただけに暫し茫然と見惚れていたようではあったが、自尊心の高い少女のこと、当然己に投げかけられた嘲弄など許せるはずもなく、眉尻を上げて威嚇する。

「どこの誰か知らないけど、先輩は遊亜のですっ!」

(いや、どっちのでもないっての!)

強いていうならば、今は眠りに就いている男勝りな半身を挙げるのが、正解に当たらずとも遠からずといったところか。けれども口にすれば、青年からは文句が、後輩にはしつこく誰何されるのが想像に難くないので黙っておく。

「とにかく、遊亜と先輩の邪魔しないでっ」

月刻の影から顔を出して窺えば、鉄紺の電光を体中に進らせた遊亜が月刻に向かつて腕を伸ばし、攻撃するところだった。

「遊亜っ……!」

「その程度の力で俺に立ちはだからうなんて、笑わせる」

クツと喉を鳴らした彼は放たれた電気に容易く触れ、いとも簡単に弾いた。まるで小蠅を追い払うかの仕草だ。

「こっの……!」

派手に音を立てて次々に攻撃を仕掛けてくる少女に対して、漆黒の妖魔は涼し気な様子で向かってくるものを打ち消していく。如何なる手法か知れないやり方、しかも悠然な面持ちで放電を相殺しているのだから、遊亜の激昂もますます高まるばかりだ。あまりに他愛なく弾かれるので、派手に見えるだけで実際は大した力ではないのかも知れないと、少女自身疑っているのかもしれない。攻撃にブレが出始めている。

けれども幾度と妖魔と死闘を繰り返してきた馨からしてみれば、月刻の張る目に見えない壁がなければほぼ即死だろう攻撃を、後輩の少女は仕掛けてきていた。焦っているのだろう、今の少女の目には哀願していた自分よりも、敵の青年の方が強く映っているようだ。

浅く速い呼吸を繰り返しながら馨は戦闘場景をアシンメトリーの瞳で追う。遊亜によつて齎された媚薬効果の所為ではつきりとしなない視界であるが、全く見えないわけではない。

「随分と扇情的だね」

頭上から降り懸かる樂觀的な声に、思わずギロリと睨み上げる。しかし床に座り込んでいるとあつてそんな視線も所詮、上目遣いにしかないのだが、当の彼女は気付かない。

額に張り付く湿った前髪。淡く色付いた頬。半ば開いた薄い唇から覗く赤い舌。首筋を伝う玉の汗。膝を付いて仰ぐ姿態。そして潤みを帯びた朱と藤の瞳。今にも情欲に呑み込まれかねない表情と雰囲気を醸し出しながらも必死に理性を繋ぎとめようとしているのが窺え、それが一層、扇情的に見えてしまっている。

「……マジで色っぽいんだけど。あのさ、もつと雰囲気出す為にちよつと脱いでみない？」

「誰が脱ぐか！」

「先輩から離れてよ！この変態っ」

憤怒の叫びと共に一際大きなものがこちらへ向かってくる。さすがの馨も身を強張らせたのだが、眼前の男は嘆息一つ落としただけだ。

「あーもう、うざりたい」

眉間に皺を寄せながら再び月刻が遊亜を睨んだその瞬間、少女を纏っていた鉄紺の電流が霧散した。

漆黒の青年を睥睨していた瞳孔が揺らぎ、糸が切れたように膝を付いて遊亜は倒れる。

「遊亜?!」

ふらついた状態ながらも慌てて立ち上がるうとした馨を制した月刻は双眸を鋭くさせ、気絶した少女を見据えている。先程までのふざけた態度とは一転、真一文字に唇を引き締め、やがて静かに言葉を紡いだ。

「……いつまでそのガキに憑依してる気だよ？由羅」

(?!)

青年の硬い声にハツと遊亜の方を見遣れば、俯せに倒れた少女の背から暗い色の靄が浮かび上がる。先程まで彼女の体を纏うように爆ぜていた電光と同じ色のそれは、見る見るうちに人の姿を形成し、やがて一人の女の姿へと変貌を遂げた。

「お久しゅうございます、月刻様」

黒に似通った紺の髪に、肢体が美しく見えるようデザインされた青藍のワンピース。暗い色を置きながらも華やかな印象を持たせるのは、肌理細やかな白い肌と形の良い榛の瞳が際立つからだろう。そして内面から滲み出る優雅な雰囲気。風の国の女王と似た気品を感じさせるが、あちらを剛と例えるならば、こちらは柔といったところか。そして、たおやかな容姿に見合う上品な声音。堅苦しい言葉遣いながらも落ち着きを払った響きは、警戒心を緩ませる穏やかさを含んでいた。

しかしそんな魅惑的な声遣いに懐柔されることなく、男は無言を貫く。

「昔と相違なき麗しきお顔に妖力……まさしく妖王に相応しき風格さすが我が兄と分かつ身」

「挨拶も御託もどうでもいい。由羅、お前がここに居るのはあいつの命令か？」

静かに、けれども冷淡に言葉を吐く月刻の横顔に馨は息を呑む。これまでに見たことがないほど真剣で、鋭利で、冷徹……下手に声をかければ即座に縊られそうな気配を醸し出している。

しかし由羅と呼ばれた女は嫣然と微笑むだけだ。

「はい。兄はその娘を所望しております故に」

「俺のだって分かつてる上で……に決まってるか。あのクソ野郎」
忌ま忌ましげに鼻に皺を寄せながら毒吐く月刻。反対に由羅は先程から唇に弧を描いたまま笑みを崩さない。見るからに実体ではないその姿はまるで陽炎ようであり、美しい顔立ちをしている所為で幻想的ともいえる酩酊を生む。

しかしその一寸の隙もない笑顔は、馨にはまるで造形の整った人形

のようにしか思えなかった。

「……いくら妖王の手で創られた一番のお気に入りとはいえ、お前に世界を跨げるほどの力なんてなかったはずだ。それにその体……まさかマジであいつのくだらない余興の為に自決する気か？」

（自決って……自殺ってことよね？）

やはり世界を歩き来する行為というのは生半可な能力で行えることではないらしい。

（だったら何であの妖魔、わざわざ現世に来て私と接触したの？）

しかも口ぶりど、遊亜を介していた行動からして、ある程度自分がどのような人物であるか調べ上げていた様子だ。ならばついこの間まで自分が聖域で活動していたことさえ知っていてもおかしくない。（コンタクトが図れない場所にこの由羅って妖魔がいた？それとも接触しようとした矢先に私がこっちに戻った……？）

どちらにしる謎が多い。何せ月刻曰く、彼女は何者かの命令を受けていたようであり、その由羅の言葉によれば、かの人物が誓を望んでいるという。

「兄様の命令は絶対です。私はあの方に創られた、あの方の為に存在する妖魔ですから」

「けど失敗した。良い感じに淫奔になった誓をあいつの前に差し出すつもりだったんだろ？今の誓、物凄く美味しそうだし」

（美味しそうってどういう意味?!）

新時代の妖魔よろしく人を食す魔物であるのか、或いは性的なことを示唆するのか。

（どっちもごめんなんですけど……）

ブルツと背を震わせつつ、蕩揺とした意識の中で誓は二人の会話に耳を傾ける。

「兄様は面食いで、快楽が好きな方ですから。彼女は見るからに上玉ですしね。それも妖魔封印士で、尚且つあの憎き筒姫の子孫」

言外に鬨りがいのある獲物と言われ、思わず顔を顰める。分かっただけはいたが、妖魔にとって人間は食料、はたまた勝手の良い玩具でし

かない。対抗する手段として一部の者しか持ち合わせないのだ。傍らに佇む長身の男を見遣る。先程戯事を口走りながら馨の様子を窺う為に僅かながら移動したので、横顔が窺える。

出会ったときから甘い言葉を囁き、こちらがどんなに拒否しても気にするそぶり一つせず近寄ってきた。ときに貞操の危機に晒されたが、それでも馨との接点を絶とうとせず、また馨も、そんな彼に懐柔されつつあった。

なので、こうして妖魔が人間を蔑ろにする行動や発言をした場合、不安が胸を締め付ける。いくら月刻が自分の味方だと囁いても彼の正体が妖魔である以上、信用の枠内に迎え入れることはできない。どうしても、金髪紅眼の妖魔を抱き締めて封印した事象を思い出してしまう。

困惑に揺れる馨の視線を感じ取ったらしく、首だけ振り返った月刻は双眸を眇め、柔らかく微笑みながら少女の前にしゃがんだ。

「も」。ずつと言ってるじゃん。俺は馨を裏切らないって。妖魔だろうが人間だろうが、馨の前に立ちほだかる奴は俺の敵」

「不安になるなら、その度に言い続けるよ」　そう囁いた彼は長い指先で少女の頬を撫で、掌でそつと包み込むと端正な顔を近づけた。

漆黒の瞳が徐々に閉じられるのに合わせて、馨も朱と淡い紫の瞳を瞼の裏に隠す。唇が重なったのはその刹那だ。

この数日の間、遊亜だけでなく何人かの生徒と口付けを交わしてきた。己と相手の唾液を混じり合わせ、舌を絡め、甘い吐息を吐いて酸素を求める。それである程度の快楽を得られていたはずなのに、最近は何物足りなくなっていた。

しかし何故か、今は満たされている。ただ唇を重ねただけのソフトな触れ合い。舌の侵入も、唾液が混ざることもない、ここ最近とは打って変わって軽い行為。

顔がほてる。胸が沸騰寸前に熱く、先程以上に思考が上手く回らない。心臓が皮膚を突き破りそうなほど速いビートを刻み、涙腺が緩

む。

(ヤバイ。こいつ、妖魔なのに……)

これまでも彼とキスを交わしてきたことはあれど、今は振り切ろうと思えばできるはずだ。寧ろ気持ちが良いと、自然に月刻の首に腕を回してしまおう。

上唇を、下唇を啄められてリップ音が鳴る。羞恥心が込み上げてくるものの、それはほんの僅かで、もっとこの時間を長く保ちたいと願う己がいることに馨は痴れる。

「……うん、ふ……はあ……」

唇の感触がなくなり薄く瞼を開けば、黒耀石の如く瞳を眇めて、満足げに男は笑みを浮かべていた。息一つ乱れていない様子に思わず眉根を顰めてしまおう。

(ディープキスでもないのに息を乱すなんて……)

不甲斐なさに落ち込むが、そこでふと既視感が脳裏を掠める。

(こんな風に思ったの、確か前にもあった気がする)

「馨、エロい気分はもうなくなった？」

「エロ……ッ！」

サラッとそのような発言をされて絶句するものの、己の状態を検分して驚愕する。

異常なまでの動悸は収まり、浅く速かった呼吸は鳴りを潜め、頬に手を当てればほとぼりもなくなっていた。至って普通の状態に戻っている。

(まさか、あの症状を消す為に……?)

「媚薬効果を消したのはさすがですが、それでも接吻する必要はなかったのでは？」

「っ……！月刻！」

「だってしたかったんだもん」

赤面し、噛み付かんばかりに胸倉を掴んで揺さ振る馨に、月刻は悪びれる素振りすら見せない。

第三者に見られたことは、気絶し横たわる後輩で経験済みなのでさ

ほど羞恥心はないのだが、妖魔相手に恍惚してしまった己を目撃されたことが居た堪れない。

「……筒姫の子孫」

そう呼ばれて振り返れば、由羅が真つ直ぐとした眼差しで馨を見据えていた。

「兄様は必ずあなたを手に入れましょう。せいぜい数少ない現世での日々を享受することですね」

フツと微笑を携えながら吐息を漏らした女はその言葉を最後に、姿を眩ませた。まるで空気に溶け込むように鉄紺の靄が霧散する。

「あの妖魔……」

数少ない現世での日々。それはつまり、近々彼女の言った兄なる妖魔が接触してくるということを目指す。自分が聖域に渡るにしても、今回のように現世に滞在していたとしても、関係なく

「じゃ、由羅はもういないことだし、俺は御暇しようかな」

明るい男の声を耳にし、自然と眉間の皺が寄った自覚があった。苛立ち、嫌悪、焦燥、そして微かな恐怖……様々な負の感情が緋い交ぜとなり、非常に不快な感情に胸が締め付けられる。

歯軋りしたいのを堪え、馨はニコリと笑顔を浮かべると甘えるように手を伸ばした。

「起こして？」

意識して上目遣いで見つめれば、彼は嬉々として要望に応え腕を引いてくれた。そして立ち上がったその瞬間、少女は勢いよく青年の胸倉を掴んで顔を引き寄せる。逃げられないようにする為だ。

馨の乱暴な扱いに月刻は軽く目を瞠ったが、すぐさま黒い瞳を柔らかく緩めて唇に弧を描く。その素顔は、人間はおるか同胞さえ認める美貌だ。面食いな者ならずと観賞していても飽きることなどないかもしれない。

「わああ。馨ってば熱烈〜！こんなことしなくても俺を引き留めたのならそう言ってくれればいいのに〜。あ、それともいつてらっしやいのキス？」

「ふ・ぎ・け・ん・な。何もかも洗い浚い説明してもらおうよ。あんたがここにいる理由、遊亜に何したか、あの由羅って妖魔やその兄って奴のことかも」

「あはは。俺がここにいるのは馨のピンチを救う為に決まってるじゃないか。今までだってそうだったでしょ？」

「今までは聖域にいたからでしょうが！何で聖域の妖魔が現世にまで関与できるのよ?!……まさかとは思うけど、妖魔も精現鏡持つてんの？」

力任せに揺さぶる馨を宥める為に軽く彼女の背を叩きながらも、やんわりと逆の手は腰を撫でてる。そんな不節操な手の甲を容赦なく抓りながら、馨は早く言えと促す。

「馨が知らないのも無理ないよ。世界を渡り歩くくらい力のある妖魔なんて、ほんの一握りしかないからね。並みの妖魔はそんなのまず無理で、やれば肉体が壊れるのなんて当たり前、自殺行為と一緒だよ」

肉体が壊れる、つまり精神だけの存在になるということ。例えるならば胤斐と同じような状態になったというべきか。だから遊亜という媒体に憑依していた。

「あの由羅って妖魔は死んだの？」

「うん。馬鹿だよー、あいつ。いくら命令に従ったからって命まで懸けるなんて。まあそんな性格に形成されてた所為ってのもあるんだろうけど」

命令を下した者が誰なのかは自ずと見当が付く。由羅が兄と呼んでいた者であろう。

けれどもここでまた新たに疑問が一つ増えた。

「妖魔が妖魔に性格形成の暗示をかけた？」

「昔は人間を玩具にするのに飽きた奴が、弱い妖魔相手にそういうことしたりもしてたけど、由羅は自然に生まれた妖魔じゃなくて、あいつが兄と慕ってた奴によって創造された妖魔だよ。数百年前は由羅みたいなのが幾つかいたけど……俺が知る限りじゃ、あいつが

最後の疑似兄弟配下じゃなかったかな？何せ絡鎖らくさは自分の欲求を満たす為なら、手塩にかけて創ったものだろうが、喜んで犠牲にするからね」

絡鎖……その名を耳にした瞬間、ズキツと頭に痛みがはしる。堪らず頭を抱えかけるが指先が頭皮を掠めたときにはもう、気のせいとばかりに頭痛は引いてしまった。

「……大丈夫？」

盛大に顔を顰めてしまったようで、心配に声を曇らせた月刻が顔を覗きこんでくるが、首を振って何でもないと意思表示する。

「性質悪そう、そいつ」

「俺もあいつ嫌い」

厭うというよりも嫌悪に近い表情から、本気で相手を嫌っているのが窺える。月刻の本気がどの程度かは知れないが、こうして他の世界に渡つても実体を保ち冗談も口にするくらいだ。かなりの実力者と見受けられる。そんな彼が手を焼いているのだから、相手が相当の力を持っているのは想像に難くない。

俯き加減に思案し出した馨を見て何を思ったか、月刻は後頭部を掻きながら深く息を吐き出した。

「あと、遊亜だっけ？あのガキは気絶させただけだよ。それから……あゝ、ここまで喋っちゃったんだから、もう潔く吐いちゃうか。

あの得体の知れない眼鏡との約束なんて、ホントは守るつもりなかったんだけど」

得体の知れない眼鏡と聞いて、自然と異性の親友が脳裏に浮かんだ。けれども強ち外れではない気がする。風の国で委員長と再会した際には月刻もあの場に姿を現し、そして自分が“World cross”を後にしたときは、月刻は一緒に出てこなかった。

「馨」

名を呼ばれ、いつの間にか俯いていた顔を上げて思わず目を剥いた。先程あった位置より些か低くなった身長。若干幼さを帯びた頬。鼻もやや低くなり、そして切れ長の瞳を覆うほどに伸びた前髪。

「月宮、神……」
相手はまさしく、遊曲の襲撃を受ける直前まで気掛かりとなっていた存在だった。

現世・？（陸）

昔、誰かが言った。

『隠し事は、吐露するまでの時間が長ければ長いほど、相手に強い衝撃を与えてしまうことだってある』と

それは先日、新米妖魔封印士の少女が老練の同業者に腕を引かれ“World cross”を後にするときのことだった。

二人が店を退出したのは、ポールダンスショーが間もなく終焉を迎えようとしていた頃。彼らと共に入店した漆黒の美青年も、当然彼らのすぐ傍に着座していたのだが、男女と一緒にスツールから腰を上げることはなかった。

理由は、皆から委員長と呼ばれている中学生の存在。

常日頃意識している少女から離れ難い気持ちでいたのは事実だが、その衝動を押し殺してでもテーブルを隔てた正面に佇む少年に問い詰めねばならないことは、できれば彼女の耳には入れたくない類のものであったからだ。

染色しているのかはたまた地毛であるのか、前髪の約半分の面積が瞳と同じ鳶色、しかし他は黒という少々変わった髪。さほど高くない身長に、中肉中背の体躯。ウエリントンフレームの黒縁眼鏡を掛け、鼻から頬に沿っては雀斑が広がっている。加えて頬にまだ丸みが残っている所為もあってか、年の割には童顔という印象も受ける。一見、何の変哲もない無害そうな少年ではあるが、月刻は強い警戒心を抱いていた。

月刻が入店した直後に感じた気配……それは紛れもなく、彼自身の妖力。けれどもこのような店に細工した記憶など全くなく、しかし覚えのあるその力は先日、筒姫の子孫が現世から聖域に渡る為に使用する聖幻鏡と呼ばれる物質に施したもの。仕掛けた本人としては

大して巧妙でも広大な力でも何でもなかったが、それでも並大抵のことでは到底解けるはずのない代物だ。

例えどれだけ名高い能力を持つ妖魔封印士、殺戮士に於いても、せいぜい百年程度しか生きられない人間には解除など到底不可能

そう、漆黒の妖魔は高を括っていた。

どれだけ待てども助けがこないと絶望すれば、愛おしい少女が心の抛り所として自分を選ぶのは必然。志雄をはじめとする、今後再会するかもしれない昔の知人も多少は彼女にとって精神的な助力となり得ってしまうだろうが、身も心も許すのは自分以外にあり得ない彼女がどんな窮地に追い込まれようが、真っ先に手を差し出すのは自分なのだから。

……否、窮地などと危ない目に遭わせたりしない。邪魔なものを全て霧消させ、柔らかい木綿に包むようにして彼女を愛していく。馨には自分さえいればそれでいい。

それなのに、障害になると判断して少女の家族が聖域に來れないよう張ったはずの仕掛けが、何故かディーラー服に身を包んだ少年の腹から感じられたのだ。しかも注意深く探ってみようものなら、時刻が気配を察したと同時に消滅したという、まるで図ったような夕イミング。気のせいかとも思ったが、微かな残滓を嗅ぎ取り、やはり疑念が正しかったことを確信する。

(何でこいつの腹に……?!)

馨の親友ということもあり、彼の存在は以前から認知していた。だが、今日まで一度として顔を合わせたことなどなく、それどころかこの少年が自分を知っていることなどあるはずもないのだ。

何故なら、現世あちこの世界において月宮榊つきみやまに関する情報は、馨が聖域せいぎの領域

に渡ったのを機に、彼女を除いた全ての者に対し消去したのだから十年の時を経て発見したかの少女は美しく、愛らしく、それでいて蠱惑的な雰囲気を持ち合わせるほど妖艶な女に成長していた。そんな彼女に近付きたく、けれども元の姿のまま接触するには少なからず警戒される恐れがあったので、姿を変えて出現し、そして少しずつ

つ毒を盛るかのように、情事めいた遊びに興じるようになった。

そして偶然か……はたまた運命であったのか、二つの世界を行き来する為の手段である物質を忘れ、こちらの世界に渡った少女。頻繁に血など流れることのない凡庸な世界にて温室育ちの生活をしていただけに、さぞかし久々に目にする妖魔相手に竦み、脅えるだろうと見越していたのだが、意外なことに果敢に敵と応戦し見事、封印に成功した。

身内が重傷を負ったことに対する怒りか、もしくは自身が生命の危機に晒された故の本能か。砂色の長い髪を乱し、朱と藤の左右色違いの瞳に強い感情を滾らせて闘うその姿は、かつて自分を封印した筒姫を彷彿させないこともなかったが……何れにしろ、ますます彼女が欲しくなった。

漸く聖域に帰ってきた彼女を再びあちらの世界に帰らせるなど言語道断。意識を失くした祖母の介抱に追われる両親が、少女が帰る手段を持たずに聖域に渡ったことを思い出すのも時間の問題……故に月刻は誓を現世に連れ戻らせない為の仕掛けを施した。

新時代の妖魔は勿論、旧時代のそれにしても早々解除できないものであったはずだ。無論、無力な人間が取り除けるわけなど有り得ない。それどころか大して時間もかけず、解いた事実をこれまで自分に隠し通していたなど……。

「委員長、クラップスお願い」

「あかん、あかん。また後でな」

シヨーを見終え一先ず感嘆に浸り終えた団体がカジノスペースへとやってくるが、ディーラーはすげなく追い払う。ゲームに参加できないことに苛立つ中年男や月刻の美貌に頬を染めつつも素直に引き返す女性達に手を振る少年を、月刻は双眸を鋭くして睨み付ける。

「……お前、一体何者？」

「何って、真正正銘の人間や。それ以上でも以下でもない」

「ただの人間が俺の力を難なく呑み込めるはずないだろうが」

「さっすが。やっぱ俺が食ったって分かるんや」

案の定、自分の邪魔をしたのは委員長と呼ばれる、成人にも満ていないこの少年の仕業であるようだ。傍から見れば無害な、けれども実際は腹の中が知れない相手に、月刻はますます神経を尖らせる。

「なあ、ちよつとしたゲームせえへん？君が勝つたら、今後一切、俺は君の邪魔はせん。けど俺が勝つたら、俺の頼み聞いてくへんかな？」

テーブルの上に配られたカードを一瞥。裏向きに配られたカードが四枚ずつ、間に表にされたカードが四枚。そして山札。

「知つとる？カシノ」

カシノ　手札のカードと、それと同じ数字ランクの場札を取っていき、一ゲーム終了時に獲得したカードに応じて得点が与えられる。

先に二十一点に達した方が勝者となる、二人でプレイするトランプゲームだ。

「カードにリトル・カシノ、エースが一つ……」

「五点で計二十点やな。俺はビック・カシノにスピード、エースが三つ、それにスイープも一つ。七点で丁度二十一点。……俺の勝ちや」

カシノテーブルを挟んで正面の位置に腰掛けた青年は、切れ長の双眸を眇め、腑に落ちないと言わんばかりに表を向けられたトランプを鋭く睨み付けている。

黒曜石の如く神秘的且つ煌びやか、そして深長な印象を抱かせる瞳に浮かぶは憤り、焦燥、追悔……様々な感情が紛紜しているのが空気を通して伝わってくる。数十分前までは親友を独占しようと、こちらの言動や動きに警戒しながらも甘い偏愛の視線で少女を見つめていたというのに思いの外、情緒のベクトルが極端なものだと、ディーラーの少年は胸の内にて嘆息を零す。

「トランプに何もイカサマしてへんのは確認済みやろ」

カシノは一ゲームごとにディーラーを交代する。カードに陥穽を張

る回数とて幾度かあったが、インチキなどすれば人外である彼のこ
と、バレル確率は高い。寧ろ証拠こそないとはいえ、逆に月刻の方
が己の持つ力を駆使してこちらの手札や積み山を透視するという不
正行為を働いていたのは分かっていた。

だからこそ、動揺を隠し切れないのも無理はない。

「約束通り、俺の要望に応えてもらおやないか」

「……何が望みだよ？」

ギリツと齒軋りの音を立て、妖魔がますます眼光を鋭く尖らせる。

（おお、怖あ。美形が怒ると迫力あるなあ）

怯む様子もなく、寧ろ余裕綽々とはかりに少年はテーブル上のカー
ドを纏め、ケースに仕舞う。そして「ふう……」と一息吐いた後に
表情を引き締め、相手を見据え宣告した。

「月宮榊として前々から近付いてたこと、ちゃんと馨に言いや」

「お前……」

漆黒の瞳を若干見開いて驚愕する月刻に、かの少女の親友は鳶色の
双眸を眇めた。

髪色こそ同じであるが、月宮榊の前髪は眼を覆い隠すまでに長く、
鼻梁もさほど高くはなかった。自分や馨より長身であったのは確か
だが、それでもせいぜい五センチ程度。今のような八頭身ではない。
それに成長期らしく精悍さを帯び始めた、やや丸みが残った頬のラ
インからは十代の面影が感じ取れていたのに対して、黒衣の男は既
に精錬された輪郭をしている。

目の前にいる青年と、件の少年……当然異なる背丈、面立ち、雰囲気
をしているというのに、自称ただの人間と名乗る中学生は、あっ
さりとして正体を見破った。

見て呉れだけは凡庸、だがそれだけではない……そう判断したのだ
ろう。月刻が妖力を露にして威嚇する。

しかし次の瞬間、“World cross”は店内全域に殺伐と
した空気に包まれた。十数人といった客の殆どが一斉に立ち上がり、
漆黒の妖魔を睨み付ける。一部着席したまま様子を窺う者にしても、

険しい表情を浮かべていた。

「ああ、堪忍な。心配せんかて何もあらへんから」

殺気立つ客の中には血に飢えた凶暴性を秘めている者もいる。彼らが下手に暴走しないようヘラリと周囲に笑顔を振り撒けば、唐突に胸倉を掴まれた。気管が狭まって、苦しみの余り小さく咳が漏れる。それでも、批難するよりまずは伝えておきたかった。

「……俺は馨の味方や。やから、あんたの邪魔をする気はないんよ」

「じゃあ腹に収めてた俺の妖力についてはどう説明するわけ？親友のお前の目から見たら、俺と馨は不釣り合いって？」

「月君が馨の為にすることが、必ずしも馨の願いやないつちゆうことや。あのままやったら馨は一生、聖域に留まったままやった。大好きな女に、家族や友達に会えへん悲しみを一生背負わせる気か？」
「代わりに俺がいるんだよ？それで充分でしょ」

「相手の全てを求めるくせに自分は秘密を曝さんなんて、フェアやないやろ」

黒縁眼鏡の奥にある鳶色の瞳が、そのとき初めて剣呑な光を帯びた。脅嚇する為ではない、かの少女の幸せと安泰を、親友として真摯に願っている……そう、眼差しで強く、懸命に訴える。

「……俺が月宮榊であったことに、馨がショックを受けるとしても？」

「言えや。それで馨が離れても自業自得やろ。つか、自分の全部を暴露しても受け止めてもらえるまで、食らい付くくらいの根性出してみい。そやないと、何してでもお前と馨の仲、引き裂くで」

胸倉を掴まれているというのに怖じ気づくこともなく、それどころかニヤリと不敵に笑う様子に興を削がれたらしく、月刻はあっさり
と委員長を開放した。

「馨に伝えるのが、お前の望み？」

「そや。簡単やろ？」

「……………」

不安と懐疑、加え少々の不服を緋い交ぜにした表情を浮かべ、漆黒

の妖魔は姿を消した。

息苦しさから解放されて堪らず咳き込む。襟に手を伸ばせば蝶ネクタイが歪んでいた。

「委員長、大丈夫？」

殺気を沈めて再び着席し出す客の波を潜り抜け近付いてきたのは、眼鏡を掛けた通称、魔女と呼ばれる女性。左手で持つのは彼女が愛飲しているライチベースのカクテルであったが、右手には別の飲み物がある。どうやら先程の騒動でわざわざ南雲が作ってくれたらしい。

「月君……ちゃんと馨に言うやるか？」

件の少女がいない場で話したからこそ知れた、漆黒の妖魔の本性。気まぐれで、持ち合わせる膨大な妖力故か己の力を過信している節があり、そして馨を除く人間に対してはやはり他の旧時代の同属同様、蔑にする傾向が強い。

但し……佐久間馨に対する執着だけは、確かだ。

「さあ？ゲームとはいえ、人間に負けたことで自尊心に傷が付いたのは確かだと思うし。その腹癒せに言わない可能性も無きにしも非ず……かもね」

魔女の、どちらかといえば否定的な台詞に溜息を吐き、茶色の液体の入ったグラスを受け取って喉に流し込む。勢いよく嚥下する自身に、案外喉が渴いていた事実を自覚する。

しかし次の瞬間、委員長は思い切り吐き出した。

「うおっ！」

「委員長、きつたな〜い！」

たまたまこちらを眺めていたらしい客の笑いが耳に届くが、正直それどころじゃない。頭がクラクラする。さして大きくもない双眸を見開いて背中を擦ってくる魔女に飲み物を返し、そして蚊の鳴くような小さい声で言った。

「これ……ウーロンハイや」

「んなっ……総長ーっ！」

グルグル、グルグル……目が回る。思考が定まらない。胃の中が沸々と熱くなつて気持ちが悪い。

魔女の怒声を最後に、委員長は気を失った。

「馨……」

遠目では判別できないだろうが、今は互いに間近な距離にいるからだろう、長い前髪の奥で月宮榊　否、月刻の漆黒の瞳が大きく見開かれたのがはつきりと見えた。驚愕に息を呑んだその様子に、どうかしたのかと問いかけようとしたのだが、まるで喉の奥に何かが張り付いているかの如く、上手く言葉が出てこない。

「ごめん、馨。まさかそんなにショック受けるなんて……」

オロオロと動揺を隠さない男に内心首を傾げたが、月刻の長い指先が自分の頬に触れたのをきっかけに、馨は己の状態を察知する。

（私、泣いてるの……？）

それを認識した刹那、涙囊が熱く滾り、目頭と眦からポロポロと透明な雫が頬を伝っているのを感じ取った。

「う、あ、ちよっ……馨、泣かないでっ」

「泣いてない！」

泣き姿を見せるのはこれが初めてではないが、隠れる場所もないところでこのような事象を目の当たりにされれば、意地でも気丈に振る舞わなければと気が張り詰める。何せ相手は異性で、しかも妖魔だ。そうでなくとも誰であれ、弱っている姿を見られるのは矜持が傷付く。

（私、月刻に良いように弄ばれてたんだ……）

胸が締め付けられているように痛い。涙が溢れる両目は溶けそうなまでに熱いのに、反対に心は凍えそうなほど冷たく感じる。もしも胸中の感情を目の前に翳すことができるのなら、まさに赤く血濡らしいそうだ。

「……無防備に快樂に溺れる姿は見物だった？」

「馨……？」

「まんまと騙されたっ！私がこんな風に取り乱すのが見たくて、わざわざ人間の振りしてたんでしょ？！妖魔にとって人間は玩具だもんね？！しかも私は昔あんたを封印した“筒姫”の子孫だし？現世に妖魔はいないって安心しきってて、さぞかし面白可笑しく見えたでしょうね！」

視界が赤い。頭が軋みそうな、偏頭痛とよく似た痛みが脳を刺激する。鼻息を荒くして、唾が飛ぶほど速い口調で言葉をまくし立てる姿は、傍から見れば醜悪であるうことは自覚していた。

だからといって止まらない。どす黒い怒りが胸の内を壮絶なスピードで駆け巡り、忿懣を増長させていく。

「聞いてよ、馨っ。俺は」

「【灼熱の赤き炎よ、我に力を】！」

目の前にある長身を思いきり突き飛ばすと同時に術を紡ぐ。集中力に欠けた状態ではあったが、頭に血が昇るほどの怒り故か、感情そのままを反映したかの如く巨大な炎が出現し、月刻と衝突した。

勢いと比例した騒音と煙幕、地響き……ここが現世で、しかも学び舎であることなど今の馨には頭がない。

「……何で避けないのよ？」

白煙の中に影が混じっているのを見つけたと同時に、嗅覚が捉えたのは……焦げた肉の臭い。焼肉の香ばしさとは全く違う、どちらかといえば革製品が多られたような鼻を顰めたくなるほどの癖の強い香り。

「あんたほどの妖魔なら、至近距離からでも避けるなり打ち消すなり、どうにかできるでしょ？一体何のつもりよ?!」

晴れた煙の向こうに佇む月刻の体は、胸元を中心に焼き爛れていた。漆黒の衣服は勿論のこと、白い皮膚に覆われていた筋肉や脂肪は剥き出しになり、血液で赤黒く染まっている。被害の酷い部分となると、骨まで見えていた。

「……まさか、ここまでショック受けるなんて思ってなかったなあ」

一度視界に入れれば誰もが顔を顰めなくなるまでの重傷を負っているにも関わらず、その声は痛みに呻く様子もなく、代わりに暗く自嘲めいた色を含んでいた。

平然としている様に馨は文句を言おうと唇を開くが、沈んだ雰囲気纏い出した妖魔に思わず口をつぐむ。

「……漸く馨を見つけたとき、月宮榊としてじゃなくて、月刻として姿を見せたかったよ。でも、母親があんな目に遭ってるのを目の当たりにしたんだから、絶対妖魔を憎んでるって直感した」

母である伊代が味わわされた苦痛。それを承知している口調に眉を顰める。

「……お母さんのこと、知ってるの？」

「あるとき俺も一緒にいたんだよ」

「嘘っ！あそこにいた妖魔はあんたじゃない！」

「うん。あんな悪趣味なこと、俺はしないよ。……覚えてないなら、寂しいけど、無理に思い出す必要ないから」

どこか諦念したように力なく首を振る青年を訝しむが、壮絶な記憶は十年経った今でも鮮明に思い出せる。しかし目の前の彼が嘘を言っているようにも見えない。

(昔のことだからやっぱり思い違いをしてる……？それとも……)

「妖魔として馨の前に出たら、問答無用で攻撃されると思ったんだよ。だから、まずは人間の姿で近づくことにしたんだ。それで機会を窺ってた」

「機会？」

「馨が聖域に戻ったのを機に、ホントの俺の姿で馨の前に姿を現そうって。それで馨をずっと聖域に留めようとした」

腕を伸ばし、頬に触れてこようとしてくる手を、馨は無意識に叩き落した。己のそんな行動に馨は思わず目を瞠ったが、月刻は小さく苦笑を零しただけだ。

「な……んで？」

「うん？」

「どうして私に構うの？私を聖域に戻して……何がしたいの？」

「好きな人に自分だけを求めてほしい。……愛ってそういうものでしょ」

今度は強引に腕を取られ、引かれる。離してほしいと声を上げる前に、額に落とされた柔らかい感触。

「傷付けてごめんね」

小さく囁かれた言葉に、馨はまた一粒、藤色の瞳から雫を零した。

現世・？（漆）

昔、誰かが言った。

『互いに気兼ねなく付き合えるのならば、性など関係なく友愛は築ける』と

夏休みももうすぐ終わりを迎えるとはいえ、春の郡大会で優勝を飾ったこともあり、美船中学校女子バトミントン部は早朝八時から夕方五時までという、長い練習時間を設けられていた。それに加えて老朽化が進み、ドアや窓が些か開き難くなっている体育館の空気は蒸し風呂よろしく熱気に包まれ、しかもその日は男女バスケット部も共同でコートを使用していることもあって、人口密度は普段以上に高かった。

聞くところによれば、そんな状態の場所にも拘わらず、自分はあまり水分を取っていなかったらしい。代わりに外へ涼みに行くところと行って体育館を出たのはいいが、あまりにも帰りが遅いということとで心配した顧問の指示により一年部員が校内を搜索したところ、何故か第一資料室で発見されたらしい。体育館を後にした記憶はあれど、それ以後の足取りはあやふやで、どうしてあのような場所に行ったのか未だ思い出せない。ともかく、運び込まれた一室の主である保健医からは、脱水症状と精神的な疲労という診断が下された。木に竹を接いだような違和感こそあるが、大して具合が悪かったわけでもないの、翌日遊亜はいつもどおりに部活動の為に登校した。「毒島、気絶したって聞いたけど大丈夫なのか？」

「無理しないでね」

「平気だよお。ありがと〜」

同級生、後輩、稀に先輩や教師に、擦れ違い様に声を掛けられて貼り付けた笑顔で対応する。

顔見知りでもないのに声をかけられるのは、自分が気に掛けられるような人物であるからだ、遊亜は内心ほくそ笑む。褒められたり、心配されたり、手を差し伸べられたりするのには実に気持ちが良い。容姿というのは存分に武器になるのだと、つくづく実感する。

「遊亜ちゃん、人気者だね」

「でもホントに体には気をつけてね。先生も凹んでたよ」

「うん、ごめんねえ。心配してくれてありがとう」

比較的仲の良い友人二人に囲まれて廊下を進んでいると、前方から歩いてくる人影があった。

すらり高い長身に見合う、背筋を伸ばした歩き方。窓から斜に差し込む朝日を浴びて艶やかに輝くストレートの髪。歩に合わせて動くしなやかな手足。

対向してくるこちらの動きに気付いたのだろう。中庭を向いていた朱と藤の色違いの双眸が遊亜達三人の姿を捉えた。……いや、正確には遊亜一人を。

瞳がかち合った刹那、遊亜の鼓動は大きく高鳴った。何故か、胸を鷲掴みにして泣き叫びたくなるような衝動を覚えるが、こんなところで醜態を晒すわけにはいかない。

どうにか平然を取り繕って足を前へと踏み出す。

先に視線を逸らしたのは、先輩である彼女の方だった。そのまま一切こちらを意識する様子もなく、無言で自分達の横を素通りし、距離を広げていく。

キュ、キュ、とリノリウムの床の上を歩く相手の足音が小さくなるにつれて、何故か目頭が熱く滾った。

「澄ました顔して嫌な感じ」

「ホント！何か調子に乗ってるよね、あの先輩」

両脇から悪態を吐くクラスメイトの言葉に反応して肩が跳ね上がる。思わず開いた唇から、何かしらの言葉が零れかけたものの、それよりも早く、耳に届いた声があった。

「バイバイ、遊亜」

ハツと後方を振り返るが、そこには誰の姿もなかった。既に、かの先輩の足音さえ残っていない。周囲を見渡すものの、自分達三人以外に人の気配は感じられなかった。

空耳の可能性も過ぎるが、頭以上に心がそれを否定する。

微かに耳に残った高めのトーンは、若い女性のものだった。聞き覚えがある気もするが、思い浮かぶ顔がない。

けれども何故か、その声に、言葉に、胸が痛み疼いた。心に穴が空いたような、大切なものをなくしたような、寂寥感……喪失感。

無意識に、萌黄色の瞳から涙が溢れ出た。一度零れたら、まるで枷が外れたかのようにとめどなく透明な雫が頬を伝ってゆく。

「え？遊亜ちゃん?!」

「大丈夫?! やっぱ具合悪いの?!」

左右から問い質してくる友人の言葉にただただ首を横に振る。胸が詰まっって声が出ない。

何故こんなにも苦しくて辛く、悲しいのか……今の遊亜には、その答えを持つ術は持ち合わせていなかった。

危険性を配慮して、校舎の屋上は終日施錠されている。貯水タンクの点検や体育祭で国旗を掲揚するのにも出入りすることも勿論あるが、基本的には一部の教職員と業者以外は立ち入り禁止だ。故に、当然管理も徹底されていると聞き及んでいたのだが……。

(間に委員長挟めば、それも無に帰す……って?)

初めて立ち入ったその場所は空が近いとあって、地上から見上げるよりも心なしか蒼く見えた。しかしそのぶん太陽との距離が近いとあって、じわじわと熱気に充てられていく。何故か設置されているビーチパラソルの日陰にいたとしても。

「……委員長。私、どこからツツコンでいいのか分かんない」

親友が立入禁止場所に踏み入り慣れていることについてか。デッキチェアにテーブル、ビーチパラソルに卓上扇風機と、日差しと熱気

を回避する最低限の設備がここに揃っていることについてか。……
はたまた彼の弁当についてか。

「些細なことに気い使ってたら、将来ハゲるで」

「あんたにとつては些細でも、私にとつてはそうじゃないの！」

逡巡した末に馨がピシッと指差したのは、委員長の弁当箱……改め重箱。大食漢と言われるほどよく食べるわけではなかったはずだが、それはいいとして、問題は中身だった。

「何で中身、三段とも日の丸なの？」

敷き詰めた白米の真ん中に梅干しが一つ。それが三つとなれば気にしないわけがない。

「おかずは？何でごはんだけ？」

「んなムキにならんでもちゃんとおるって」

箸で一掴みした白米。白い粒が固まる丁度真ん中の位置に、別のものが見える。

「ほうれん草？」

(何でごはんの間におかず?)

他にも玉子や鮭、キンピラなど出てきているので、全く栄養を考えていないわけでないみたいだが、それでも無駄に凝っている感は否めない。しかも残念な方向に。

温い風に当てられながら委員長と二人、他愛ない話をしていたが、食べ終えて一服したところで話が切り替わった。

「毒島に記憶操作したん？」

馨と二分する人気を誇る一つ下の美少女が昨日運ばれたという噂は、三年の教室まで流れてきた。怪我を負っていないのは確認済みだったが、やはり昨日の今日ということで気にかかり、さりげなく先程廊下ですれ違ったのだが、顔色も良く、特別変わった様子は見受けられなかった。

目が合った瞬間、大きく睜った萌黄色の瞳。二人きりでなかったというのに、いつものように罵倒されることはなく、代わりに驚愕の面持ちであったものの、ただそれだけだ。異なるのは、先日までの

自分にひたすら向けてくる恋情めいた色が、欠片も宿っていないかっ
たということだけ。

「やったのは月刻だよ。前頭葉とか海馬とか、そこらへんよく分か
らないけど、脳に刻まれた記憶を弄るなんて真似、私にはできない
からね」

幻術は自分と接触した痕跡を残してこそ成立する。勿論それでも構
わなかったが、由羅という妖魔の存在をどう誤魔化せばいいのが
ネックとなった。

馨としては唯一その点のみが悩みの種であったが、傍にいた別の妖
魔はそれだけに留まらなかったようだ。馨に言い寄る少女を気に食
わなかった彼は、由羅に関する記憶と共に馨と交わされた放課後の
日々を丸ごと消去した。

「後遺症に残るようなへマだけはちゃんと避けてくれたようだけど

……」

ムスツと唇を尖らせる少女の顔を眺めて、親友は器用に片方の眉だ
け吊り上げる。

「意外やな。ちゃんと月君のこと認めとるんや」

「誰が！人間を装って近付いてきて、私を聖域から戻れなくなるよ
う仕向けた奴、信用できるはずないでしょっ」

「ほんまにそう思つとるんなら毒島の件、何が何でも自分の手で片
付けるはずや。自分の手に余るなら俺に電話するなり、俺を介して
魔女さんに協力を要請するなり……そやる？」

窘めるように言われ、反論しようと思身乗り出すもののそれ以上言
葉が出ることはなかった。

妖魔は人間の敵。事実、人に比べ多大な力を持つ異形達は長年に渡
って多くの無力な聖域の民を弄び、凌辱し、血を啜り、四肢を屠り、
殺生の末路へ導いてきた。ここ数年のうちに誕生した新時代のもの
にしても、旧時代に属する理性を持つといわれるものにして……
殺戮本能を放棄することはまずない。

それは、美しい貌を持つ漆黒の男にしても同じ。どれだけ自分に対

して協力的な態度を示していても、残忍な一面を持っているのは知っている。自分が妖魔を封じようとしても止めることはなく、それどころか瀕死の自分を助ける為に動き、同属を脅かし、昨日に至っては旧知の間柄であった者の死を眉一つ動かすことなく黙視していた。

今、口でどのように取り繕うとしても、彼が自分の前に敵として姿を見せる日が来ることを、少女は疑って止まない。けれども、それでもとまるで藁にも縊ろうとばかりに信じようとしている己がいることを、馨は自覚している。

「私、ホントに馬鹿だよ。いつか痛い目見るって、頭じゃ分かってる……ううん、表面だけ分かった振りしてる」

(救いようのない馬鹿だ)

立てた両膝の間に顔をうずくめる小さな後頭部を、雀斑の少年が優しく撫でる。

「……昨日、月君に毒島の記憶を操作してもらって、それからどないしたん？」

「暫く顔も見たくないから消えてって言った。……遊亜を背負ってそのまま教室を出たから、あいつがそれからどうしたのかまでは知らない」

ただ、散らかった教室の後始末をしてくれたのは間違いない。今朝教室に来てみれば、クラスメイトが普段と変わらず机と椅子を使っていた。遊亜が床に付けた電撃痕さえ残っていなかった。よくよく思い出してみれば昨日、攻撃術を使用したにも関わらず騒ぎにならなかったのは、月刻が何らかの仕掛けを施してしてくれたからだろう。

「そうか……」

月刻に炎の術をぶつけたことを思い出す。罪悪感からか胸に小さな痛みを覚えるが、頭を振って否定する。

(大丈夫。あいつ、平気な顔してたし。……寧ろ、力の差を見せつけられた)

生温い風がそよぎ、二人の髪と制服を揺らす。微かに湿った空気は梅雨の時期ほどではないものの、雨を予期させる要素を含んでいる。空は瞬きを繰り返したくなるほどの蒼さだが、山間から覗く雲は随分と立体的で、それは数時間後頭上一面を覆い、地に無情なまでの雫を落とすだろう。

「馨。仮に幸せと不幸せに重さがあつて、それらを天秤に掛けても、絶対に平等にはならん。きっと大抵の奴は不幸せの方が重いって考えるやるな。人はポジティブよりもネガティブなことの方が記憶に残りやすい言つし」

(……………?)

委員長が何を伝えたいのか、のろのろと顔を上げて耳を傾ければ、鳶色の双眸がニイと細く狭まった。

「やけど第三者から見れば逆の奴だつて意外におるもんやで。逆転の発想で、不幸をバネに強くなる奴はとことん強うなる。傷付きたくないから言つて立ち止まったらそこまでや。それを切欠に別の道に目覚める奴もおるやるけど、それは過去を乗り越えるとはまた違う。例え時が昇華の働きしたとしても、痕は間違ひなく残る」

「……………ごめん。委員長が何言いたいのがよく分かんない」

「ん……………じゃあこれだけ覚えとき」

挫折を恐れるな。

三日月に唇を歪めた親友はくしゃくしゃと、今度は荒つぱく馨の髪に手を当てた。

馨はといつと暫しの間ポカンと口を開いていたが、乱される頭部の状態に気付き悲鳴を上げ、委員長の手から逃れる為に上半身を傾けたり向かつてくる手をかわしたりと、非難の声を叫びながらじゃれあいに興じた。

案の定午後の授業に入ってまもなくすれば、空は厚い雲に覆われ、授業が終わり放課の時間になるとバケツをひっくり返した勢いの雨

が降り出した。水分を含んでぬかるんだ地面は瞬く間に水たまりを作り、下駄箱から正門までの短い距離に幾つもの傘の花が開く。雨粒がコンクリートの壁や窓を叩き、近くの田んぼに生息する蛙が恵みとばかりに喝采の鳴き声を鳴らす。この時期恒例の光景とBGMだ。

（まさかこんな日に傘忘れるなんてなあ……）

ふと脳裏を過るのは、母親や、たまにこちらの世界に帰っていた祖母の言いつけを無視して傘を忘れ、放課後になって夕立に辛酸を嘗めさせられた幼き日のこと。今まさにその時分と同じ目に遭っている。

その頃の経験を活かして折り畳み傘を持ち歩くように心掛けていたはずだが、鞆の中にもロッカーの中にも入っていない。最後にいつ使ったかを思い返してみれば先月、終業式の二、三日前に訪れた台風で骨が折れてしまった記憶が蘇る。

（そうだった……委員長に傘選び手伝ってもらおうとか考えてて、そのままだ）

ガクツと肩を落とし、携帯電話のフラップを開けてアドレス帳を操作する。

灰というより、ほぼ黒の積乱雲。刹那の電光からすぐさま唸り轟く雷鳴。雨足は徐々に強さを増して、一向に弱まる気配を見せない。半刻ほどで止むこともあれば、日が暮れても降り続けるときだってあるのだが……今回は後者の可能性が極めて高い。

「電話しても出ないしなあ」

佐久間家の家電に掛けてみるが、無機質なコール音が繰り返されるだけ。時間的に父親は仕事、母親は買い物、もしくは聖域に渡り回復薬の仕入れ、祖母の楓に至ってはまだ一人で起き上がれる状態ではない。

警が傘を持ち合わせていないことに気付くのはいつになることか。

（お母さんもお祖母ちゃんもケータイ持ってないしあ。お父さんの会社のだから、むやみに掛けてくるなって釘刺されてるし）

周囲を見渡せば既に人気はなくなっていた。先程まで外の様子を懸念しながら受験勉強に励んでいた同級生がちらほらいたのだが、防音の利いた図書室や視聴覚室に場所を移したか、濡れ鼠覚悟で帰宅することにしたらしい。再び窓の外を見遣れば、頭上に鞆を掲げた男子生徒が一目散に駆けていく姿が捉えられた。

（あらら。明日までに制服乾くのかねえ？）

かくいう馨とて、濡れて帰るといふ選択肢を省いているわけではない。辛うじてまだ外は明るいが、太陽が厚い雲に覆われているぶん、周囲が暗くなるのがいつもより早いのは必然。

さてどうするかと嘆息した次の瞬間、廊下に点っていた蛍光灯が一斉に光を失った。窓越しに隣りの校舎に視線を向ければ、そちらの一階から四階も消えている。

「停電？」

盆を過ぎたこともあり、日に日に日没は早くなってきたが、まだ時刻は十六時半を回ったばかりとあって、周囲を見渡せる程度の明るさはとりあえず残っている。けれども厚い雲に太陽が覆われている状態がこれ以上続けば、例え夕暮れ前であろうと暮夜さながらの景色一帯になるのは想像に難くない。

無人の廊下に唯一人佇んでいる心細さが、照明がなくなったことで一段と胸に圧しかかってくる。

「私も図書室辺りで待機しようかな……」

明かりが点かなくとも、一人きりではなくなる。

そうと決まれば長居は無用だ。教室の中に置き去りにしている鞆を取ってこようと扉の窪みに指を差し入れ横にスライドするのだが……ガラツという音と共に背後の雷光を感じ取って、ふと疑念が頭を擡げた。

（そういえば停電したとき、直前に雷の音ってしたっけ？）

扉を開き切って足を一步前に出そうとしたそのとき、馨の体は硬直した。

馨の席は開けた後方のドアから真っ直ぐ突き当たったところの一つ

手前の席になる。そして隣り、窓際一番後席の主はここ数日欠席、もとい停学処分を下されていたはずだ。勿論停学が解けていない今日もそこは空席のままであった。

「さ、とる……?!」

「よお。また傘忘れたのか？」

また、という言葉で脳裏を過ぎつたのは、彼と交際していた時期の一幕。折り畳み傘を持っていたにも拘わらず忘れてた振りをして悟の傘に入れてもらい、二人肩を寄せ合いながら帰った雨の日のこと。家の軒下まで送ってくれた彼の背中に「また明日」と手を振ったとき、初めて悟の左肩が濡れているのに気付いた。右側を歩いて自分が濡れないよう配慮してくれたのは一目瞭然で、申し訳なく思う以上に胸がときめいたのを思い出す。

しかし今の二人の関係は、あの頃と異なり著しく破綻している。キユツと唇を噛み締めて、あれは過去の日の出来事だと言い聞かせる。「てつきり委員長にでも予備の傘借りて、帰ったかと思ってたけどな」

「委員長は……用事があるからって先に帰ったよ」

中学生のアルバイトは当然禁止されている。言葉を濁してそう答えただが、強ち嘘でもない。

余程楽しみにしていたのだろう、以前働いていた店員が顔を見せるということ、こちらが声をかける際も与えず一目散に帰ってしまった。

「それより……停学まだ解けてないんでしょ？そもそもいつ来たの？」

先程まで教室前の廊下に佇んでいたが、悟がやって来たことなど微塵も気が付かなかった。教室から出て行く生徒は何人か目撃したが、逆に入る者はいなかったはずだ。

訝しむ聲に、悟は片方の口角だけ上げて嘲笑的な表情を模る。

「さて問題。ここはどこだと思う？」

「は？どこって……教室でしょうが。美船中学校の三年三組」

一体何を言っているのだと言外に告げる少女に、群青色の瞳を眇めながら少年は徐に手を掲げ、パチンと指を鳴らした。刹那、彼の背後に広がっていた土砂降りの雨景色が一変する。

陰鬱な厚みのあった雲は橙に染まった朧雲に。雨粒が消えて、代わりに眩い夕焼けの日差しが窓から差し込んでくる。灰色一面に覆われていた空は茜色から鉄紺に塗り替わろうとする夕暮れ時へと変化した。

（何がどうなって……?!）

指鳴らし一つで光景が一変するといった事態。ここはマジックショーの会場でなくただの中学校だ。そして自分の前に姿を見せた悟とて、素行の悪い恰好をした単なる中学生でしかない。

何かが変だと、警鐘を鳴らす本能に従い彼に背を向けて廊下に出ようとしたそのとき、顔に衝撃がはしりよるめいた。どうやら誰かとぶつかったらしい。

「いったあゝ！」

「おっと！そんなに慌てるとコケるぜ、お嬢さん」

痛みで顔を覆っていた手の奥で目を見開いて後方に跳んで声の方へ睨み付ける。

そこには制服を着ていない、明らかに学校関係者とは程遠い格好をした男達が複数、出入り口を塞ぐようにして立ちはだかっていた。

現世・？（捌）

昔、誰かが言った。

『人は失敗をすると素直に非を認めるより、状況の所為にする傾向がある』と

閉じていた双眸を開くよりも早く、瞼の奥で意識が浮上する。

最初に感知した五感は触覚。両手首に冷たく硬い無機質の触覚があった。同時に、痛みを帯びた弱い痺れがはしる。どうやら腕をほぼ真上に吊るされているらしい。決して短くはない時間、この状態で放置されていたようで、慣れない正座の後に立ち上がったような違和感が、肩と腕に現在進行形で浸透している。

次に不快感を覚えたのは腹部。こちらには痛覚しかなかった。強い衝撃を与えられたのは確実で、胃が圧迫されたのか、微かに喉の奥が苦い。胃液がせり上がっていたのは間違いなく、けれども口腔内や口元の渴き具合からして、幸いにも嘔吐する事態は避けられたようだ。

（何にせよ、気持ち悪い……）

場所こそどこか知り得ないが、膝を着いて平面に座っているおかげで下半身は楽だった。それでもやはり腕を上げられ拘束されているのは辛い。

そもそも何故このような目に合っているのか……気を失う前に何があったか、誓は思い出そうと懸命に思考を巡らせる。

まず脳裏に浮かんだのは、六時間目の授業を終えた直後に慌てて教室を去った親友の背中。けたたましい雨音と蛙の鳴き声。廊下の窓越しに見える、徐々に増えていく校門へ一直線に向かう傘の花。その間を潜り抜けて疾駆する黒い学生服。……そして停電。

（あ……）

蘇る、どこか幼さを残しつつも変声期を終えた少年の言葉。

「さて問題。ここはどこだと思う？」

動揺する自分を見据えながら彼が指を鳴らした次の瞬間、変化した窓の外の光景。校内の池や近くの田んぼから雨鳴きしていた数多の蛙は合唱を止め、土砂降りの雨がいつもの夕焼け空へガラリと様変わりする。

指鳴らしただけという、万華鏡の如くあまりに突飛で唐突過ぎる出来事にたじろぎ、本能の赴くまま慌てて立ち去ろうとすれば、後方に立っていた誰かとぶつかり

（そうだ……私あの後、思い切りお腹殴られて……！）

ヒュツと息を呑みながら瞼を開けばそこは、意識を失う前にいたはずの見慣れた教室ではなくなっていた。

煤や土埃で汚れた、罅の入ったりノリウムの床。年季を感じさせる色の剥げた漆喰の壁。タツセルで纏められた黄ばんだカーテンの裾を揺り動かすは割れた窓ガラスの隙間から侵入する風の仕業で、その向こうには錆びた鉄格子が嵌められている。

このような廃墟らしき建物に覚えはないものの、茜から鉄紺に移り変わる頃合いの空が望めることから、気絶して大して時間が経過していないことを推測させる。恐らく学校からさほど離れた場所ではないはずだ。

（これは、まさかの拉致監禁？）

自分を襲った男達の目的は不明だが、元彼が関係しているのは想像に難くない。数日前にも彼は若い、けれども見るからに中学生でない男達を伴って姿を現した。

モヒカン、コーンロー、スキンヘッド、アフロなど、あまりに個性的な髪形。必要以上に肌を曝け出したり、挑発的な英単語や柄をプリントした、派手な服装。耳以外の箇所にも開けたピアス。極太のブレスレットや華美な首飾り。露出した肌に刻まれた、和やトライバルといったデザインのタトゥー。野蛮な恰好に驕傲で野放図な振る舞いをする彼らを、誰もが不良と見做すだろう。

彼らが何者であるかは心当たりがある。読みが当たりなら、強ちその評価は間違いいではない。

鬼滅^{キメツ} 美船町やその周辺に住まう、素行の悪い若者達の集団。

悟がその暴走族に入り、中学生ながらも幹部にまで上り詰めたというのは委員長から聞き及んでいた。さすがに最初耳にしたときは信じ難かったがそれでも、年上の不良達が彼に従順な態度をとる光景を目の当たりにし、実際にこうして暴力を振るわれれば、もはや疑い様がない。

そもそも彼は自分をこのような場所に連れてきて、何がしたいのか。

(腕痛い……)

一体どこから繋がれているのか……視認しようと頭を上げてみれば、頭上一面が夕焼け空で覆われていた。

(は……?!)

視界に映る情景に目を瞬かせる。まず手首は手錠によって動きを封じられた。これは想像の範囲内でそれほど驚きはしなかったが、問題はその後だ。左右の手首が通った二つの輪の間に鎖が巻かれ、上から繋がれていたのだが……それがどこから続いているものなのかが分からない。どれだけ鋭く睨み上げても、ただただ日が沈む直前の空が広がっているだけ。

「な、に……これ……?」

茫然と、上履きのままだった足で立ち上がり、鎖を引いてみる。しかし固定されているかのようにびくともしない。揺さぶっても、体重を掛けてぶら下がっても、ジャラジャラと音が鳴るだけで変化はない。

「どうなってるのよ、これっ?!」

見慣れない場所。得体の知れない拘束の仕方。身動きできない状況。把握できない事態に動揺し、焦燥は募るばかり。そしてそれは怒りへと転化し、冷静さを欠かせてしまう。

「【囁く緑の風よ、我に力を】!」

鼓膜を揺るがすのは窓の隙間から入る微風だけで、他に聞こえてくるものはない。大勢で押しかけてきたにも関わらず、人気がないというだけで早々と誰もいないと結論付けた馨は苛立ちのまま術を紡いだ。

両手で鎖を握り締め、掌から生み出された風で断ち切ろうと試みれば、それに呼応するように頭上で唸るような音が上がる。けれども金属が傷付けられる様子こそあるものの、ポロポロと些細な屑が零れ落ちるだけで、一向に切断する様子が見られない。

「……?!【囁く緑の風よ、我に力を】っ!」
再度術を唱えるが、やはり大した効果は与えられない。

「【冷却の瑠璃の氷よ、我に力を】!」
風の力が通用しないならばと、今度は氷の術を用いるが、それでも期待に反し鎖が凍り付くことはなかった。

(どうなってるの……?!)
術が発動していないわけではない。集中力に左右され威力に変化こそあれど、それでも言葉を紡げば術はほぼ確実に具現する。殆ど効果を得られない事態など初めてだ。

『胤斐!』
自分一人ではどうにもできないと、馨は自身の内側に眠っている片割れを呼び掛ける。

十年ぶりにネットワークの世界から肉体に魂を戻したことに加え、聖域と異なる世界に環境が移ったこともあってか、思いの外胤斐の現世への精神順応は手こずっているようだ。今日で彼女が眠りに就き丸四日が経過するが、一度とて目覚める兆しは見られない。アレルギーの如く適応できない性質であるのか、はたまたこれまでのストレスが解消された反動で休息も兼ねた就寝であるのか。

再び馨と共に生きていけることを喜んでこそくれたが、もしかすればこの世界での生活は、半身に負担を掛けているのかもしれない。ギリツと齒軋りして再び鎖で繋がれた手首を振るう。

胸に突き募る焦燥と衝動と不甲斐なさ。このような状況というのに

……或いはだからこそか、現世と聖域、どちらを選択すべきかという迷いが脳裏を過ぎり、無性に泣き出したくなった。

「抵抗はもう終わりかよ？」

頭上より降り懸かった男声にハッと顔を上げる。体を捻りそちらを見遣れば、群青色の瞳をした少年が一つ上の階から突き出た鉄骨に腰掛けこちらを見下ろしていた。ハーフパンツを履いた足を組んで肘を掛け、そこに頬杖を着いて薄く笑みを刷いている。

かの少年の、耳だけでなく眉や舌にまで穴を空けるのはファッションなのかもしれないが、馨としてみればマゾヒストの行為としか考えられない。

「悟……」

先程まで確かに誰もいなかった。ここから一步たりとも動いていないが、床の汚れ具合や所々に張られている蜘蛛の巣を見る限り、この家は相当古い。いくら床が木製のものに比べて硬く頑丈なりノリウムとはいえ、物音を立てずに座るのは難しいはずだ。例え音を立っていたとしても、神経が高ぶっていた馨が声をかけられるまで気付かないわけがない。

「よお。結構そそられる恰好だな。女子中学生の拘禁姿」

「ばつ、馬鹿なこと言っていないでこれ解きなさいよ！」

羞恥心を煽る台詞を吐かれて思わず頬に熱が籠る。傍から見れば、そう思われても仕方がないのかもしれない。まるで如何わしい、猥褻DVDにでも映っているようなシーンではないか。当事者としては実に居た堪れない。

威嚇するように声を張り上げて鎖に繋がれた手錠の解除を訴えるのだが、悟は笑みを深めるばかり。

双眸を眇めて片方の口角だけ吊り上げた、軽薄な印象を抱かせる笑顔。付き合っていた頃とはまるで違う顔付きに、馨の胸中は苦しくなる。

「……あなた、一体何がしたいの？気絶させて、拘束して……私に何を求めてんの？別れを切り出したのは私だけど、私を突き放した

のは悟の方じゃない！」

先日、彼は別れたつもりはないと告げた。けれども彼が耳にピアスをし始めたあのときから、二人の歯車は狂い出し、遂には噛み合わなくさえなってしまった。修正しようと、馨としてはできる限り奮闘したのだが、それでも彼女に背を向ける態度をとったのは、紛れもなく悟の方だ。

なのに、今頃になって再び接触を図ってくるのは如何なる見か。自分をこのような方法で捕えてまでして……。

（それだけじゃない。術を使っても壊れない拘束具なんて、現世にあるわけない）

戦場から離れれば戦闘の勘が鈍るといっことは聞いたことがあるが、それでも集中力さえ欠かさなければ術の威力が激減することはない。しかも先日まで聖域にて異世界の異形と死闘を繰り返してきた身だ。技に磨きこそかかれど低落しているわけなどないと自負している。

ならばこの事態はどう捉えるべきか。先程悟は「抵抗はもう終わりか」と訊ねた。その台詞はつまり、馨が目覚め、拘束具相手に悪戦苦闘する一部始終を観察していたということ。

（大して効果なかったけど……術、三回も使った）

その様子も見られてたと考えるのが妥当だ。しかし少年の群青の瞳には驚愕も恐怖も一切なかった。まるで凡庸な人間にはない能力を馨には使える、その事実を知っていたかのよう……。

「悟、あんたもなの？」

ヒヤリと、冷たい汗が背筋を伝う。

「何が？」

無意識か、はたまた意図して気付いていない振りをしているのか、悟の声色に変化はない。

「あんたも……あんたまで妖魔に魅入られたのかって訊いてんのよ！」

前に進もうと足を出す、一歩がせいぜい限界で、どこから下りているか知れない鎖によって進行を阻まれる。煩わしそうに馨は両手

を振るうが、ガチャガチャと耳障りな音を立てるだけで緩む気配はない。

苛立たしげに双眸を眇めて睨み上げる少女に対して、くしゃりと浅葱色の髪を掻き上げながら悟は軽く息を吐いた。

「……そうだ、と言っただら？」

「……………」

「彼此二年近く前か。あの頃から、俺は呪の国の王の傀儡だ」

悠然と足を組み代えて手を後ろに置きながら胸を反らす少年。彼から視線を逸らさぬまま、馨は胸中で疑念を膨らませる。

（呪の国？）

聖域にそのような国はない。もしくは馨が知らないだけで、仮名として呼ばれている国なのかもしれないが、何れにしる名称からして碌な印象しか抱けそうにない。

それよりも気にかかることがあった。

「悟……二年前って……」

「俺達が付き合い始めて一、二ヶ月経った頃だな。そのときからお前、あの人を目をつけられてたんだぜ」

全然気付いてなかっただろう。そう問われ脳裏では是を唱えるが、馨はただただ瞠目し息を呑むことしかできない。嘘だと、否定したい気持ちが湧き起こるものの、悟、そしてかの呪の国の王たる者がそのような虚偽をする理由は見出せない。

「で、でも！ だったら何でそいつ自ら私の前に姿を見せなかったわけ？」

当時、祖母や父親から既に術を教わっていたとはいえ、今以上に未熟であったのだから、このように回りくどい捕え方などする必要はなかったはずだ。

「さあな。俺もあんまよく分かんねえけど、気まぐれだったり、凝った演出が好きなんじゃねえの？ ただ悪趣味なのは間違いないな。

…… ああでも、二年前は今ほど力がなかったみたいだぜ？ だからお前の近くにいた俺を傀儡にしたらしいし。別に委員長でも良かった

んじゃねえかって思わないでもなかったけど……やっぱりあいつ、妖魔にも警戒されてんのかな？ いや、あの人のことだし、俺を墮落させる方が面白いって思ったんだろうな」

「……………」

自嘲気味に唇を歪ませた少年に違和感を覚える。まるで自身の非行行為に妖魔が一役噛んでいるような口振りだ。

まさか、と脳裏に浮かんだ推測に否定したい気持ちになりながら、戦慄く唇を開いて馨は訊いた。

「悟……あんたがピアス開けたり暴走族に入ったりしたのは、私の所為なの……………」

呪の国の王と名乗った者が自分に干渉しようとしたのは、筒姫の子孫だからであることは想像に難くない。その肩書きがなければ、馨は妖魔を封印する術も持たない、単に聖域から現世に渡っただけの子どもでもないのだから。

悟がこうして妖魔の傀儡となってしまうたのは、馨を陥れようとする駒に選ばれてしまったからに他ならない。

「どっから話せばいいものか……。知らなかっただろうけど、お前と付き合い始めてから俺、所謂虐めに遭うようになったんだよ」

「え……………」

「上履きに画鋲入れられたり、ノートに落書きや暴言書かれたり、擦れ違い様に足を踏み躪られたり。どいつもこいつも、器が小さいよな」

大したことでもないとばかりな口振りではあるが、それは彼が今でこそ暴走族の幹部という位置にいるからであって、当時は酷く傷付いていたに違いない。恋人同士になったあの頃の彼は、日直の仕事を真面目にこなし、他人に気遣いもできる優しい少年だったのだ。

だからこそ、彼は当時の馨に虐めに遭っている素振りなど決して気付けはしなかった。

……馨もまた、気付くことができなかった。

「まあ学校ではそれくらいだな」

「学校では？」

左右色違いの瞳を睜らせる馨の表情を眺めながら、悟は徐に肩を竦めてみせた。

「学校の外ではカツアゲ、金がなけりやサンドバツク。んで、家ではリストラされた親父がアル中の上にDV、お袋は不倫相手の家に入り浸りで碌に帰ってこない。……こんなことになったの、お前と付き合い始めてからだだったから、本気でお前のご疫病神じゃないかって疑ってたんだぜ？」

熱く滾った眼球から一筋、涙が零れる。喉の奥から嗚咽が漏れようとするが、馨は唇を噛み締めてそれを堪える。嘆くのは自分ではなく、本来彼であるべきなのだから。

「いい加減何もかもが嫌になって、自殺しようと思ったけど、その前にお前に別れを言っところかなって思ってたんだよ。お前の所為って思いながらも俺、結局お前のこと好きだったし。……丁度そんなときだよ、あの人が俺の前に姿見せたの」

後ろに着いていた両手の指を膝の上で交差させて、眉根を寄せながら悟は深く目を瞑る。

「馨の傷付く顔が見たいから、手始めに俺に絶望を味わわせて俺から別れを切り出すよう、不幸な目に遭うよう仕向けたんだと。勿論初めは信じてなかったし、別れ切り出そうとしたとはいえ、お前の彼氏としての矜持を守りたいって気持ちが強くなったから、お前に何も気付かせないよう努力はしたんだ。けど……悪い。俺には力不足だった」

額に手を当てて俯いてしまった悟の表情は、馨のいる場所からは窺い知れない。けれども先程まで平然としていたにも関わらず、悟の声は徐々に震えてきていたのは事実だ。

「ごめん……巻き込んでごめんね、悟……」

「どいつもこいつも服で隠れるようなとこばっか狙って、でもお前には絶対に知られたくなくて。それで俺……とうとう壊れちゃったみたいでさ、いつからか、痛みを感じるからこそ生きてるって思う

ようになってた。耳だけじゃなくて体の色んなところに穴開けて、他人殴つて、殴られて、悪い奴らとつるむようになって……手に取るように、自分がイカれてきてたのが分かったよ。そんな風に変わっちまった俺なんか、お前にふさわしくない。でもお前に別れを切り出す勇気がなかった」

……だから距離をとった。

遠目からでも判別できるくらいに、悟の肩は震えている。

そんな彼を抱き締めたいけれど、拘束されている響はその術を持たない。何より、彼をこのような目に遭わせたのは間接的ではあれど、己の所為なのだと、少女はただただ涙を流すことしかできなかった。

現世・？（玖）

昔、誰かが言った。

『救いとは、無碍にできない想いがあるからこそ行われるのだ』と
長い睫毛を伏せて、砂色の髪の少女が頬を濡らす。わなわなと震える唇を開き、堪え切れない嗚咽を零しながら、何度も何度も謝罪の言葉を繰り返す。鼻涙管が緩んでいるのか頻繁に鼻を吸り、頬を紅潮させているその表情は決して美しいとはいえないが、素顔が目鼻立ちの整った大人びた容貌であるからか、悲嘆に染まる彼女は、男にとつて非常に扇情的に映った。

「いいな、あの顔」

三日月に模った唇を舌舐めずりして呟かれた言葉は、嗜虐の色に満ちている。まるで目の前の獲物をどのようにして甚振ろうか思案する獣のように。

妖魔は生まれながらに人間を食料、特に理性を持つ旧時代のそれに関して、使い勝手の良い玩具と見做した本能を抱いている。

長きに渡る封印から解き放たれた、知性を持つ彼らは従僕、強制、脅迫、強姦、殺人、遺伝子変異など……興味本位に、暇潰しに、過去……そして今も尚、様々な手段を用いて無力な人間を嬲り、弄んできた。

旧時代の妖魔というだけで人間には人非人として認知されているが、必ずしもその全てが残虐な嗜好を持っているかどうかというのは……実のところ定かではない。残忍な思考を巡らせたことがあるか否かは、さすがに知れなかったものの、過去には人間と同じ目線に立つとうとする妖魔だったのだから。

どのみち、何百年にも渡って人を襲い続けている現状から、聖域の

民にとって妖魔という種族がこれ以上とない天敵であるのは紛れもない事実。

「普段のすました顔も魅力的だが、お前は感情を露にした方がより美しく映える。特に絶望と悲しみに染まった今の顔は最高だ」

陰惨、猛悪、暴虐、悪逆非道……言葉違わぬ無慈悲な行為を人間に限らず、同属にまで強いてきた呪の国の王、絡鎖。ほう、と恍惚混じりの吐息を漏らして、彼は満足げに口角を吊り上げる。

今にも日が沈もうとしている黄昏時……いや、嗜虐の王が支配するこの国では逢魔ヶ刻と呼ぶのが最も相応しいだろう。茜から鉄紺へと移り変わろうとしている、雲一つない空模様だが、この光景が時をもってこれ以上進むことはない。

クツクツと喉を鳴らしながら、絡鎖は長い指を上空へと伸ばす。

天には相も変らぬ景色が広がっているが、彼の榛の瞳には、別の世界にて大粒の涙を零す一人の少女が確かに映っていた。

歯車が噛み合わなくなってしまった理由は何であるか

少年が少女から距離を置いてしまったからか。それとも少女が少年の不幸に気付かなかったからか。はたまた少年が少女に語ろうとはしなかつたからか。少女が交際を持ち掛けた所為か。……二人が巡り会う運命にあった故か。

何れにしろ、異世界の出生で、且つその世界では女神と讃えられている者の子孫である少女と関わってしまったが為に、少年は異世界の魔に付け入られ、平穏とかけ離れた道を否が応にも進む破目となつてしまった。抗おうにも少年自身に跳ね退ける力はなく、当然他の人間に相談などしたところでどうこうできるわけもない。かといつて巻き込まれる要因となつた少女、譬にどのような能力があろうと渦中に飛び込ませたくない……そんな想いを振り切ることができず、結局悟は己を傷付ける選択を取ってしまった。

もしかすれば今まで遠ざかれていたのは、完全に妖魔の配下に成り

下がらないように配慮していたからではないか。ここ数日接触を凶
つてきていたのは、現世にも危険が迫っていると警告しようとして
いたのではないか。そして、こうして全てを語ったのは痛覚を求め
ているという肉体的な面では勿論のこと、精神的にも既に限界を感
じているからではないか。

都合の良い解釈かもしれない。けれども馨が知る清水悟という少年
は、本当に優しい恋人だったのだ。

「ごめん……ごめんなさい、悟……」

胸中いっばいに膨れ上がる懺悔。彼をこのような目に合わせた敵に
対する忿懣も当然あるが、それ以上に己の無力さと危機管理のなさ
を痛感する。もっと早く、悟の変化に気付いていれば……否、変化
の理由を追求していれば、このような事態にまで発展しなかったの
かもしれないというのに。

もし、という仮定を憶測したところで過去は変えられない。けれど
もそうしなければ、後悔に押し潰されてしまいそうだ。

「できることなら、もっと……ずっと、お前を自由にしてやりたか
つただけだな。でも、俺の体ももう限界らしいんだわ」

へらりと、今にも泣き出しそうな、明らかに無理矢理つくった笑顔
を馨に向けて、悟はシャツの裾をめくり腹部を露にする。

「それ……!」

絶句する馨の瞳に映ったのは、見るからに禍禍しい形をした入れ墨。
しかしそれが単にファッションで刻まれたものでないことは一目で
察せられた。蛇に酷似した、蠢くタトウーなどこの世にあるはずが
ない。そして肌の上に浮き出た色は鉄紺。先日、後輩の少女
に乗り移った妖魔の力の色だ。

「最初のうちは色も薄くて小さかったけど、時間が経つにつれてこ
んな風になっちまった。おまけにこれ、体内を傷付ける作用まであ
りやがる」

結構痛い、と苦笑いを浮かべるその表情はどこか諦めさえ滲んでい
た。自業自得だと、まるで断罪を大人しく受け入れようとする囚人

のようにも見えてしまう。

「悟が苦しむ必要なんてどこにもない！私が……私があんたを苦しめてる妖魔、倒すから！だからお願いっ、これ解いて！」

手錠に繋がれた手首を大きく揺さ振って金属音を鳴らす。

しかし悟は静かに首を振って否定するのみ。上階の割れた床の縁に腰掛けて立ち上がる様子はない。

「悟っ！」

「悪い。俺はあの男の傀儡なんだ。もうこれ以上、逆らうことは許されない」

笑みをつくろうとして失敗したようなその表情に息を呑む。よくよく注視すれば顔が悪い。汗の分泌量も焦っていた髻の比ではない。立ち上がることすら困難なのかもしれない。

カラン、とリノリウムの床に硬い何かの転がる音が響く。ハッとそちらを見遣れば、若い男女が十数人、虚ろな表情で佇んでいた。

鼻孔を膨らませ、口を半ば開き、肩の力をだらんと抜いた状態。それらにだけ重点視すれば、単にリラックスしているようにも見えないが、赤く充血した眼球に開き切った瞳孔……眼窩に埋め込まれた双眸が虚ろな様子からして、彼らが異常であることは一目瞭然。一番前方に立つ男の口の端からは粟立った涎が零れ落ち、濡れた顎を拭う仕草さえ見せない。

無言で立ち尽くす一同に、髻は身を強張らせる。

（ヤバイ……）

刃物や鈍器の類は手にしていない。身体的暴行を加えられるとしたら素手で行われるのだろうか、悟や遊亜といった、自分と縁のあった者を使って陥れようとしていることから、敵は精神的に傷付けてこようとしていると推測される。けれども全く手を出されないとは限らない。

親しくしていた元彼と後輩、二人を巻き込んだことは到底許せない。落し前は是非とも付けなければと思う。しかし現状は術も碌に使えない、暴言しか吐き出せない無力な様。

まさに万事休すだ。

「【誘う虹の幻影よ、我に力を】」

幻覚により正気を失わせているのなら、違つ幻を上書きさせて足止めさせようと目論んだのだが、既にかけてあるものの方が強力らしく、ぱたりと気絶したのは半数にも満たなかった。茫然と立ち止まる者、倒れる者に構わず、彼らはおぼつかない足取りで馨へと近付いていく。

（他に私が見える術……火、水、風、地、氷、雷……駄目だ。どれも主に攻撃ばつかで、補助系は癒しと幻覚しかレパートリーない）近くに転がっていた小石を踏みじり、遂に操られた若者達がぞろぞろと馨を囲むようにして立ちはだかった。

血走った、生気を失った眼球。荒い鼻息。だらしなく口の端から滴り落ちる涎。不健康な顔色。……実際目にしたことはないが、薬物中毒とはこんな風になつてしまつのではないかと、汗腺が開きドツと冷たい汗が湧き出る。

これからのような目に合わされるのか。どうすれば腕の拘束は解けるのか。なるべく自分を含め周囲に怪我を負わすことなくこの場を潜り抜けるには如何なる方法があるのか……焦燥ばかりが胸中を掻き回し、改善策が一考に浮かんでこない。

すると、正面に佇んだ二十歳前後の男が手を伸ばし、ブラウスの襟を掴んできた。

「……どこの誰か知らないけど、ごめんっ！」

上半身こそ腕を真上に上げられて不自由の身ではあるが、上履きを履いたままの自由であつた足を使い、力の限り男を蹴飛ばす。すると思いの外、名の知れぬ彼は勢いづいて吹っ飛んでしまった。

どうやら正気でない分、足元が疎かになっているらしい。後方に立っていた一部まで巻き添えになっている。

女性、それも成長期のまだ細い足であるが、脚力も充分武器になる。その事実には勢い付いて馨は縦横無尽に蹴りを繰り返す。

最初のうちこそそうして手当たり次第暴力で対応していたが、数が

多い。しかも体力がありそうな体軀をしている者に関しては、いくら蹴り倒しても起き上がってくる。

(ヤツバ……！こいつら蹴散らす前にバテそう)

右足を高く上げて力一杯相手の顎を爪先で蹴ったその瞬間、手首に鋭い痛みがはしった。乱暴に動き回っていたからである。手錠によつて皮膚が擦れ切れたらしい。

「痛っ！」

痛みに顔を歪めたそのとき、背後から肩を鷲掴みにされた。

(しまっ……！)

一瞬できた隙を逃すまいとばかりに肩だけでなく、駆使していた足腰、二の腕、制服の裾と、ありとあらゆる箇所を掴まれる。

「は、な……してっ！」

身を振り、数え切れない幾数もの手を振り払おうと懸命に身を振るが、押さえ付けられている所為で上手くいかない。しかもよろしくないことに、胸倉に近い部分を掴まれたこともあって、体を捻った際に釦が飛び散り、胸元が露になってしまった。

「きゃあ！」

普段は同年代の少年少女達より大人ぶった態度を取ることが多くとも、実際は思春期で多感な年頃。いくら意識が朦朧としている連中の前とはいえ、胸元を露にされれば羞恥が湧かないわけがない。しかも隠そうと思っても両手が使えないのだから益々焦燥は募るばかり。

「やめて、離して！どっか行ってよ！」

下着の上に薄手のキャミソールを着ていたのだが、裾を引かれ繊維が悲鳴を上げる。

(こっの……！)

羞恥と憤怒で頭に血が上る。唇を開き吐こうとした言葉は罵倒か、或いは人を対象に術を唱えかけたのか……。冷静さを欠かした警本人さえ、恐らく分からなかっただろう。焦燥感に駆られれば、それがもどかしさを覚える状況であるなら尚更、理性を失いがちになる

のだから。

しかしそんな彼女より一瞬早く行動を起こしたのは、妖魔の呪縛により体内を苛まれ、見物を余儀なくされていた少年だった。

群青の瞳に痛みの色を乗せて、疼く体に鞭を打ったのか、荒々しい呼吸を繰り返しながら、悟は馨の正面にいた男に鋭い蹴りを入れて遠くに吹き飛ばす。

「これ以上……馨に手エ出すな」

肩でする呼吸の合間という、如何にも苦しそうな面持ちと発言。顔はまるで白紙に近いほどに青褪め、こめかみからは大量の汗を流している。無理をしているのは一目瞭然だ。

「ちよっ……大丈夫なの?! 悟っ」

大きく目を瞪りながら訊ねる馨を無視して、少年は次々に不良を殴り沈めていく。だがしかし、体の内側から痛みが迸っているのだろう。外傷がないにも関わらず繰り返す拳や蹴りに勢いがなく、動きがぎこちない。

「……っ……っ!」

痛みに表情を歪める悟に、馨は力なく首を振る。

「やだ……もういい……。悟、もういいから、動かないで……」

「これくらいやんなきゃ、男が廃るだろ。……いや、もう廃ってるか。どんな理由であれ、お前を傷付けたのは事実」

肩で大きく息をしながら喋っていた次の瞬間、唐突に少年は左手を口に、右手を腹部に押し当てる。そして間もなく激しく咳き込んだ。「悟?! 悟、大丈夫?!」

膝を付いて四つん這いになる悟を避けるようにして、虚ろな顔をした大衆が再び近付いてくる。その光景に慄かないわけではなかったが、それ以上に自らを傀儡と言っていた少年が心配だった。

傍観する予定であったにも拘わらず、彼は地階に降りて馨に迫ってくる手を払う行動を取った。それは明らかに彼を裏で操っている妖魔が良しとしない行動であったはずだ。その証拠に悟の体を内側から蝕ませている。苦痛を……二年も前から味わわせている。

「【誘う虹の幻影よ、我に力を】！【誘う虹の幻影よ、我に力を】
！【誘う虹の幻影よ、我に力を】っ！」

叫ぶ。ただひたすらに。
念じ、唱える心など一切ない。ただ悟を苦しみから解放させなければという思いしかなかった。

だから、術の対象は悟に対してだ。このままでは間違いなく無理をして立ち上がり、響に暴行を働くであろう者達を蹴散らす為にまた無理をする。そんなこと、決してさせてはならない。妖魔との繋がりを解消できなくても、今は苦しみから解放できるはずだ。

けれども集中力が欠けている所為だろう。そして彼との間に人垣があることにより、幻術が届かない。

(やだ……やだ、やだ、やだ、やだ、やだ……！)

髪に、袖口に、襟首に、足に、スカートの裾に、ボウタイに、手が伸びてくる。

「響から……離れるよ」

ドカツ、という音と共に前方が刹那の間だけ開けた。そこから垣間見れたのは、モヒカン頭のタンクトップを着た男が横に倒れる姿と、少年の浅葱色の髪が揺れる光景。足元がふらついたらしく、すぐにその体はよろめく。

「悟っ！」

響の声に反応し、群青色の瞳とかち合う。正面を向いた彼の顔には、体だけに蠢いていたはずの蛇の文様が上り詰めていた。そして先程倒れたときの衝撃か、それ以前の苦痛によつてか、唇の端から赤い筋が顎に向かって零れ落ちていく。

そして次の瞬間、悟の口から大量の赤い液体が吐き出された。

「悟！」

「ゲホッ！ゲホッ……ゴフ……ッ」

辛うじて立ってこそのいるものの、背中を丸めて激しく咳き込んでいくことから、強い衝撃が内側から打ちつけられているのが窺える。これ以上無理をさせれば間違いなく命の危険に晒される。

いや、出血の具合からしてもう既に……。

(嫌だ……悟が、悟が死んじゃう……。誰か……)

「助けて……。誰かつ！誰でもいいつ、悟を……悟を助けて！」

少女の悲痛の叫びが空間に轟く。

その声に、言葉に反応したのは……少女の求めていた類のものでは決してなかった。

「ああ、内臓のどっかが潰れたか？」

何故なら、初めて聞くその男の艶やかな声は、ただ愉楽しか含んでいなかったのだから。

どうやら一仕事終えたらしく、Enterキーを押してパソコンの電源を落とした魔女は商売道具である機器を鞆の中に仕舞うと、珍しく深く息を吐いた。左右の指を交差させた手を額に押しつけて俯いた姿からは疲労が窺える。仕事か、はたまた私生活か、何かしらが上手く運んでいないのかもしれない。

「随分疲れてるじゃねえか。無理して今日ここに来る必要、なかったんじゃねえのか？」

「まさか。折角N君が顔見せに来てくれたんだし。しかもEとSもどこで情報嗅ぎつけたのか。……どう？普段はショー以外じゃ物静かなバーが、こうして賑やかなになるのは？」

「煩くて仕方ねえよ」

南雲がそう悪態を吐いているとテーブル席から酒の要求が入る。話題に上がった元“World cross”の従業員達が座る一角だ。そこを中心に今日の店内は賑わっている。集まった客が当時の彼らを知る常連ばかりというのもあるかもしれない。

「こうして楽しく笑って愉快に過ごしている傍らで、苦難な状況に遭っている子達もいる」

唐突に呟かれた、陰鬱な色を滲ませた台詞。シェーカーを振る手を鈍らせることなく、チラリとスツール席に腰掛けた女性を見遣れば、

彼女の眼鏡の奥にある黒い双眸は一人の従業員に向けられていた。

「委員長が知ればきつと糾弾される事態を、あたしは知ってる。今、警ちゃんの身に起こってる。……でも言えない」

それは、己が魔女であるから。理由はその一言に尽きる。己が自ずと歩む運命以外に介入すれば、その者や関係者の運命まで歪ませることとなる。……魔女にはそれだけの影響力がある。

「困窮者を救える力も邪魔者を排除する力もあるのに、自分の領域でしか発揮できないなんて、本当に不甲斐ない。予測しているのに干渉できないなんて……あたし、何で魔女やってんだろうねえ」
乾いた笑いを零しながら全く面白くなさそうに笑みを模る女性に、南雲はただ黙って双眸を眺めるだけだ。

彼は知っている。杏子は決して口を割らないが、彼女が魔女としての運命を辿らなくてはならなくなったのは、自分の所為だと

「魔女さん、Nさん達スネとるで。店長ばつか構つとるから」

元従業員仲間にせがまれたのだろう。若干辟易した表情で委員長が魔女を呼びに来る。

「マスターばつかズル〜イ〜！」

「店長のエツチ〜！」

「ああん?!」

酔っ払って顔を赤く染めたNとSの軽口に乗せられて、南雲が持ち前の三白眼をより一層鋭くさせる。元暴走族総長とあり、日頃酔っ払いの相手をしていることもあってか、今でもその鋭い眼光は健在だ。

「……委員長、ごめんね」

「は?いや、別にあの人らの相手するんも仕事の一環やし、魔女さんが気にすることなんて何もあらへんで」

首を傾げ怪訝な面持ちをする関西弁の少年に、魔女は曖昧な微笑を返すのみ。

そんな彼女の複雑な表情の理由を知るのは……カウンターを隔てた向こう側にいる南雲だけだった。

現世・？（拾）

昔、誰かが言った。

『決意を固めることは、力を持つことと同意である』と

下駄箱、机の中、教科書、ノート、文房具……あらゆるところに暴言を刻まれた。人気のない場所で罵られた。金を雀り取られた。服を着れば隠れてしまふ、肌が露出していない箇所を中心に暴力を振るわれた。

徐々にエスカレートする虐め、恐喝、リンチ、家庭内暴力……本当に気が狂いそうな日々であったと少年は思い返す。

切欠は、美少女と謳われた彼女との交際が引き金であったが、不幸の要因はそれだけに留まらなかった。

佐久間馨と付き合っていることを鼻に掛けているから。目つきが気に入らない。ストレスの発散。金がなくなったからカンパしてくれ。お前が生まれてきた所為で。自分を傷付けてくる者達の言いは自己中心的な発言ばかりで、他にも色々言われた覚えがあるが、悟るとってはどれもこれも吐き気を催すほどくだらない戯言にしか聞こえなかった。

（何で……何で俺がこんな目に……?!）
繰り返される理不尽。抑圧。危機。反抗すれば今まで以上に痛めつけられる。

周囲が自分の異変に気付かないのは愚鈍さ故か、或いは普段通りを努めようとした少年の演技力か。

助けを呼ぼうとした。恋人を糾弾しようとしたこともあった。しかし、自分が何らかの行動に移すことで荒波立つのを恐れた。朗らかに笑う彼女が表情を曇らせ、心を痛めさせてしまふのが怖かった。

（我慢すれば、耐え抜けば、いつかきつと……）

報われる。

そう信じて止まなかったが、頻繁に、間を置かずに傷付けられる事象が増えて、やがて少年は心身ともに立ち直れなくなるまでに衰弱していった。

震える手で刃物を持ち、その矛先を何処に向けるべきか。自分を痛めつけた者達か、弱い自身か、もしくは愛おしい彼女か

狂気の宿った瞳の奥に笑顔の少女が思い浮かんだ刹那、悟は慟哭した。

「この状況から逸脱したいか？」

唐突に耳朶を打つ、悦楽を含んだ男のテノール。

「な、に……?!」

「お前が受けている没義道な状態は全て、俺が仕組んだこと。お前の女を不幸に陥れる為、お前には駒になってもらおうと思ってな。

お前に与えられた選択肢は二つ。このまま彼女の近くで非道な仕打ちを受け続けるか。もしくは俺の命じるまでの間、女と距離を置くか」

何処かしらから聞こえてきた声に、馨へと迫っていた幾数もの手が急に力を失くしてぶらりと垂れ下がる。瞳孔の開き切った、視点の定まっていない双眸をした若者集団が、肩の力を抜いて茫洋な様相で立ち尽くす姿というのは、ただただ不気味でしかないが、先程までのゾンビ紛いな行動を起こされるよりは比較的よろしい状況といえよう。

目前まで迫っていた、指輪を嵌めた女の指先が下ろされる。ゴテゴテとネイルアートが施された長い爪。それが本物がネイルチップかは定かでないが、眼球を刺られる寸前まで近付いていたというのに、まるで他人事のようにしか感じられないのは、俯せに倒れた少年のことしか頭がないからだろう。

「悟！返事してよつ、悟！」

茫然と佇む人々の間から垣間見える彼の体は、ピクリとも反応しない。馨の位置からは投げ出されたように伸ばされた右足と右手しか確認できないが、ゾツとしてしまふ光景が視界に映り出される。

（あれつて……血？）

背筋に冷たい汗が伝う。

指が内側にやや丸まっているが為に視認し難くはあるが、皮膚の色とはどこか異なる。強いて例えるなら、黒に近い赤。濡れているように見えるそれがべつとりと、まるで覆うようにして掌を禍々しく染め上げている。

だが、立ち位置を変えればもしかすれば、そのような印象を抱いてしまふ陰影を落としているだけなのかもしれない。……そうであつてほしい。単なる見間違ひ、杞憂であつてほしいと切に願う。

内臓のどこかを負傷したなんてことは、性質の悪い虚言だと

「生きてるか？俺の操り人形。お前にはもう少し働いてもらわなくちやいけないんだからな」

クツクツと喉を鳴らし、愉快とばかりに喜色を含んだ言葉。このような緊張感に張り詰めた事態でなければ聞き惚れてもおかしくない、艶のあるテノール。張りのある響きから二十代と憶測し、ふと漆黒の髪と瞳を持つ見目美しい妖魔を思い描いたが……彼ではない。

口調や声色が相違していることも理由にはなる。だがそれ以上に……

…根拠などありはしないが、月刻ではないと、馨は強い確信を抱いていた。

「出てきなさいよ、妖魔！私を陥れるのが目的なら、悟は関係ないでしょ？！」

姿を見せずに音声のみをこの空間に飛ばしている様子から、相手は別の場所より馨の様子を監視していると推測する。どこからこの現状を見ているか定かでないが、天井のない、茜から鉄紺へと移り変わるうとしていた夕焼けの虚空を強く睨み据えながら、見えない相手の喉に噛み付かんとばかりに吼える。

歯を剥き出して憤怒の感情を露にしている姿が気に入ったのか、男は上機嫌に答えた。

「大いに関係あるさ。この十年、深い絶望と悲しみに包まれたお前を見るのが俺の生きがいだっただからな。その為なら、他人の犠牲なんて取るに足らないことだ。人間も、妖魔も」

(……………!)

以前から目を付けられていたという台詞に戦慄を覚えるが、ふと疑問が首を擡げる。

十年前といえば当時五歳。幼き頃の自分を知り、不幸な目に味わわさせたいと考えていたとして、こうして聖域から現世に介入する力を持ち合わせていたのなら、どうしても前から実行しなかったのか。

妖魔が残酷な生き物であることは常々承知している。けれども彼らは思い立ったが吉日とばかりに即、行動に移す。旧時代の妖魔全てを古書に封印した筒姫の子孫……恨まれる理由など、それで十分だろう。

「……………声を聞けば思い出すかと思ったんだけどな。記憶が錯乱しているのか、もしくはお前にとって生まれ故郷と母親の翼は大したことじゃなかったのか」

「な、に……………」

まるで心臓を素手で掴まれたかの如き心地。重い圧迫感。喉の奥が異様に渴き、口腔内で舌が張り付く。二の腕が粟立ち、脈拍がより一層高鳴りを上げる。

窓の外に広がる業火の炎。逃げ惑う人々。徐々に高まる熱気。燃え盛る炎を背景に姿を現した若い男。男から庇うように自分を抱き締めた母親。汗を掻いた額に前髪を張り付かせ、必死に子を守ろうとする母親の背に、笑みを刷いた男は手を伸ばし

限界まで見開いたアシンメトリーの瞳の裏側で蘇る、過去の記憶。

脳内で広がる悪夢のような惨劇に、思わず息を呑む。

「まさか……………あのときの……………」

戦慄く唇から吐かれた言葉は空気に溶け込みそうなほどか細かった。けれども一瞬の驚愕の後に変化した表情には敵意、憤怒、憎悪、怨毒……それら負の感情が緋い交ぜとなり、強い殺意の華を咲かせる。（こいつが……こいつが！こいつがっ！）

「姿を見せる、妖魔！」

「そうしたいのは山々だが、それよりも面白いことを思い付いた。だからそれを実行することにしよう」

刹那、馨を包囲していた若者達がぞろぞろと脇に退き、一筋の道を作る。その先にいたのは一人の少年。先程まで幾度と呼び掛けても反応一つなかったというのに、今は微動ださえせず静かに佇んでいる。ただ、背中を見せているので顔色は窺えない。

「悟……？」

名を呼ぶが、返事はない。振り返らない悟の後頭部から視線を下げて掌を凝視すれば、案の定赤く濡れそぼっていた。やや黒みがかつた赤。間違いなく重傷を負っているはずだ。

「悟……アンタ、とても立てる状態じゃ」

吐血したのだから明らかに無事であるはずがないと危惧した矢先、彼が振り返る。

額やこめかみから止め処なく流れる、尋常でない量の汗。出血の跡が残った口元。……それだけならば想像の範囲内だ。だが、頬にはしる蛇のような鉄紺の模様、そして何より目を引いたのは、本来は群青色であったはずの瞳。それが腹や頬の模様と同じ鉄紺に変化していた。

「悟に何したの?!」

叫ぶ馨に未だ姿を見せない妖魔はクツクツと喉を鳴らして笑うだけ。

「う……ぎ、い……」

明瞭を得ない言葉を発した次の瞬間、悟は馨の目の前まで移動していた。握られた拳が脇腹を刺激する。

「いつ……!!」

痛いと思鳴を上げるより先に第二打、第三打と攻撃される。まるで

サンドバックだ。手錠で両手を拘束されているが為に逃げることもままならず、殴られる動きに合わせて体は右へ左へ揺れ動く。虚ろな表情の若者達に囲まれ、タトゥー紛いな文様を体に施された少年よって少女が一方的に殴られるという光景。……傍から見ればリンチそのもの。強ち間違いないが、誰一人として望んでやっていることではない。

残虐非道な嗜好を持つ、巨大な力を持った一人の妖魔の手によって躍らされているだけなのだから。

脇腹、鎖骨、鳩尾、左肩、下腹部……殴るばかりなので、上半身を中心に傷を負っていく。足での攻撃と首から上に手を出されていないのは、そのように命じられているからだろ。妖魔がどのような意図でそうしているかは知れないが、ろくでもない考えを持っているのは確かだ。

残忍な笑みを唇に携えながら母親の片翼を奪った者が、まっとうであるはずがないのだから。

「うう……っあ、ぐ……！」

新たに腹部へ一発。口内を切ってしまったようで、錆びた鉄のような臭いと味が舌に浸透し鼻へと抜ける。

僅かに髻を上回る背丈である悟の体格は、中肉中背。筋肉質でもないのに自分がやるより打撃が重いと推測するのは、やはり男女としての力量の差に外ならない。

まともに顔を合わさなくなつて、約一年。髻とて著しく肉体の成長を遂げ、今も尚進行中であるが、彼もまた例外ではないらしい。

（いつの間に、こんなに力強くなったんだろ。背だつて、付き合いはじめた頃は私より三センチは低かったのに……）

胸に込み上げてくるのは、過去を振り返つての懐古か、はたまた後悔か。

（悟がこんな目に遭つたのは、全部私の所為だ）

痛い。悲しい。辛い。そして、切ない。……心も、体も。

術を使って反撃しようなどと、露にも思わない……思えない。これ

は甘んじて受けなければならぬ罰だ。この一撃、一撃が、悟がこの約二年間に味わわされた苦痛と言っても過言ではない。

……そう馨は信じて止まらなかった。

「……か……お………」

(え……?)

そのときふと、スピリットタンを実現する為に舌に大きな穴を開けた悟の唇から声が漏れた。拳を振るう度に小さな音が零れていたが、不鮮明でこそあるものの、違和感が首を擡げたのだ。……気の所為でなければ、悟は馨の名を呼ぼうとしている。

「さ、とる……?」

都合の良い空耳かもしれない。けれども痛みに顔を顰めるような攻撃を受けつつも、少女は必死に零れ落ちる言葉を聞き拾おうと耳を傾ける。

「俺……止め……。か、る……せき、に……かんじ……な、い……」

俺を止める。馨が責任を感じることはない。

本当にそう、悟が言おうとしたのかどうかは定かではない。だが妖魔に意識を支配されながらも己の言葉を語ろうとしたことはほぼ間違いないだろう。少年は、自分の思考を犯そうとする異分子に必死に対抗しようとしている。その力を、馨に求めている。

けれども悟が望む方法を、馨は持ち合わせていなかった。手錠が外れないことを抜きにしても、彼を救う方法が思いつかない。この悪夢を回避する術が、分からない。

視点の定まらない鉄紺に変色した瞳。頬の文様。皮が剥けた指の背。そんな彼の眦から赤い涙が伝ったのを目にし、馨は瞠目すると同時に強く唇を噛み締める。

己の無力さを痛感するのは、これで何度目のことか。

(誰か……誰か……!)

楓、伊代、健統、志雄、委員長……様々な顔が脳裏を錯綜し、最後に浮かんだ男の顔に小さく息を呑む。

彼ならばこの状況から救ってくれるかもしれない。けれども自分は拒絶したのだ。憤り任せに感情をぶつけた。呼んでも現れない可能性は充分に有り得る。否、そちらの割合の方が断然に高い。

(でも……それでも……！)

選択肢はない。

「助けて、月刻っ！」

祈るように、縋るように、切実に、喉が張り裂けるような想いで救世主の出現を願う。

両手を強く握り締め、ギョツと目を瞑り叫びながら、悟から与えられる攻撃に備え身を固くする。……だがしかし、一向に次の傷みがやっつこない。

「……つたく。呼ぶの遅いよ、馨」

突き出された少年の手首を掴んで捻り上げ、馨の眼前に現れたのは、求めていた人物本人。まさか本当に助けてもらえるとは、と少女は朱紫の瞳を丸くする。

「助けが遅くなってごめんね。さすがの俺でも絡鎖が創った空間を見つけるのは難儀でさ。馨が呼んでくれなきゃ見つけるの、もっと遅れてたよ」

「うう……ぐいう、あ……」

掴まれた手を外そうと、悟が月刻の腕に爪を立てる。

暴れる少年を見遣り月刻は眉を顰めるが、それは痛みや他人に触れられている不快感というよりは、悟の精神が苛まれている状況においての意味合いが強いように、馨の目には映った。

目だけでなく、鼻からも血を流し、口の端からは赤色混じりの泡立った唾液が噴いている。悟の状態が刻一刻と悪化の傾向を辿っているのは、一目瞭然だ。頬の様子が蠢き、それが少年の苦痛を加速しているように見えてならない。

「お願い、月刻！悟を助けて」

「……」

少年の濁った鉄紺の瞳を見つめたまま、漆黒の妖魔は微動だにしない

い。眉間に皺をつくって熟考している様子ではあったが、静観している時間というのがますます焦燥感を駆り立てる。

「あんたしか頼れる人がいないのっ。私にできることなら何だつてする！内臓だろっがどこだろうが、好きに使っていいから！だからお願い……っ！」

左右の眦から大粒の涙を零し、出来得る限りに頭を下げて懇願する少女。歯を食いしばり、固く瞼を閉じていたこともあって、月刻から視線を外していた馨は、そのとき浮かべていた彼の表情など知る由もなかった。

「……これが精一杯だよ」

悟の手首を掴んでいるのとは逆の手で彼の額に触れ、小さくこぞくするとその刹那、少年は膝から崩れ落ち横たわった。身動きこそしなかったが、小さくうめき声を上げたことから最悪の事態は免れたと察する。

「悟！」

気絶した少年を一瞥することなく振り返った月刻の面差しには一切表情がなかった。馨が拘束されている鎖に静かに手を伸ばし、力任せに振るっても、術を駆使しても壊れなかったそれを、いとも簡単に断ち切る。

自由の身となつた馨は一目散に悟の元へと駆けて、上半身を起き上げながら、執拗に状態を検分する。

艶を失くしてパサついた髪。血色の悪く、肉の落ちた四肢。下瞼は色濃く黒ずんで、唇は薄皮が捲れ荒れていた。酷く衰弱した様子ではあったが、妖魔に服従していた証であった爬虫類紛いの鉄紺色の模様は消えている。痩せこけた頬に手を這わせれば、冷たいものの微かに伝わってくる低温。浅くはあるが、ちゃんと息もあった。

……生きている。

「月刻。悟は……」

「俺にできるのはここまでだよ。体の中が傷だらけの所為で栄養が全然足りてないから、生命を維持させるのが精一杯。さっきまで健

康そうに見えてただろうけど、実際はここまで弱り切ってた」

例え回復術を使っても今は、これ以上は望めないのだと、漆黒の妖魔は言外に告げる。

「もう一つ、大事なことを言い忘れてないか？」

唐突に降り注がれた男声に馨は殺気立つ。傍らに立つ月刻もまた、柳眉を顰めた。

「絡鎖……！」

「服従の印が全身に回ったところで人間の精神は崩壊するはずなんだが……しぶとい奴もいるもんだな。だからこそ人間は……玩具は面白くて飽きない」

人間は玩具。わざわざ言い直して自分の怒りを煽ろうとする妖魔に、馨はこれ以上とない負の感情が芽生えてくるのを自覚する。一人の人間の死は、妖魔にとつて……少なくとも絡鎖にとつては一つの玩具が壊れただけに過ぎないのだ。人間など、壊れたら次の玩具で遊ぶという、ただそれだけの価値。

(許せない……！)

ギリツと齒軋りして宙を見上げる馨の背中を、月刻がゆっくりと撫でる。

「落ち着いて。あいつはここにはいない」

「ククツ。そいつ、お前を助けたいが為になけなしの精神力で自分を殺すよう呼び掛けてたが、意識を失くした今じゃ、どうなったかな？」

楽しそうに喋る姿の見えない相手の言葉に、まるで水面に墨を落とされたように、じわじわと嫌な予感が広がっていく。

「ど、ういうこと？」

馨の質問に答えることなく、男はくつくつと喉を鳴らすだけ。首だけ振り返り月刻を見遣れば、どこかつまらなそうに嘆息を吐いていた。

「……………う……………あ……………」

膝の上に乗せた少年の頭部から呻き声が上がリ、すぐさまそちらに

振り向く。

「悟っ！大丈夫?!」

必死に名を呼び続ければ、次第に少年は重たそうに瞼を押し上げて
双眸を開いた。操られていたときとことなり、瞳の色も通常の群青
色に戻っている。

「悟……!」

アシンメトリーの瞳から歓喜の涙を零して、馨は両手で顔を覆う。
鼻涙管から落ちようとする鼻水を啜りながら嗚咽を上げていたが、
少年が漏らした第二声を耳にし、身を凍らせた。

「あー…… ああ、う、ゆひう、うお……うう……」

明瞭を得ない言葉。内臓に深手を負った際に零した血の跡を上塗り
するように、ダラダラと涎を垂らし、ゆらゆら体を揺らし始める。
その表情には喜怒哀楽なんの感情もなく、視点も一つに定まらず色
んな方角に彷徨う。

まるで精神が崩壊したように。

「言っただろ。全身に服従の印が回ったところでそいつの精神は崩
壊するんだ」

力なく両手を地面に落とし、馨は静かに悟を見下ろす。

あまりの驚愕に茫然とする少女。そんな彼女をどこかしらから見て
いるであろう妖魔は哄笑する。

茜色と鉄紺色が入り混じろうとしている空間の中に、笑声が響き渡
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1972n/>

盛夏妖艶

2011年11月7日08時11分発行